

平成 29 年～令和 3 年度
科学研究費補助金基盤研究 (C) 報告書

元留学生の留学評価と日本語学習との
関連に関する実証的研究

課題番号 17K02839

研究代表者 八若壽美子

研究分担者 池田 庸子

目 次

はじめに	1
第一章 研究の概要	3
1. 研究の背景	3
2. 研究の目的	4
3. 本研究の意義	5
4. 研究の概要	5
4.1. 研究方法	5
4.2. インタビュー協力者	6
第二章 日本在住の元非正規生の留学評価	8
1. 日本で英語教育に従事する元交換留学生の留学評価	8
1.1. インタビュー協力者Aさん (1) のライフストーリー	8
1.1.1. Aさんの略歴	8
1.1.2. Aさんの語り	8
1.2. インタビュー協力者Bさん (2) のライフストーリー	12
1.2.1. Bさんの略歴	12
1.2.2. Bさんの語り	12
1.3. 考察	15
2. 家族と日本で生活する元留学生の留学評価	16
2.1. インタビュー協力者Cさん (3) のライフストーリー	16
2.1.1. Cさんの略歴	16
2.1.2. Cさんの語り	17
2.2. インタビュー協力者Dさん (4) のライフストーリー	21
2.2.1. Dさんの略歴	21
2.2.2. Dさんの語り	21
2.3. インタビュー協力者Eさん (5) のライフストーリー	26
2.3.1. Eさんの略歴	26
2.3.2. Eさんの語り	26
2.4. インタビュー協力者Fさん (6) のライフストーリー	31
2.4.1. Fさんの略歴	31
2.4.2. Fさんの語り	31
2.5. 考察	34
3. 再来日して日本語学校で学ぶ元留学生の留学評価	36
3.1. インタビュー協力者Gさん (7) のライフストーリー	36
3.1.1. Gさんの略歴	36

3.1.2. Gさんの語り	36
3.2. 考察	39
第三章 海外在住の元非正規生の留学評価	41
1. タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価（1学期間留学の場合）	41
1.1. インタビュー協力者Aさん（8）のライフストーリー	41
1.1.1. Aさんの略歴	41
1.1.2. Aさんの語り	41
1.2. 調査協力者Bさん（9）のライフストーリー	44
1.2.1. Bさんの略歴	44
1.2.2. Bさんの語り	44
1.3. 調査協力者Cさん（10）のライフストーリー	47
1.3.1. Cさんの略歴	47
1.3.1. Cさんの語り	47
1.4. 考察	50
2. タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価（2学期間留学の場合）	50
2.1. インタビュー協力者Dさん（11）のライフストーリー	51
2.2. インタビュー協力者Eさん（12）のライフストーリー	55
2.3. インタビュー協力者Fさん（13）のライフストーリー	58
2.4. インタビュー協力者Gさん（14）のライフストーリー	61
2.5. 考察	63
3. インドネシアで働く元交換留学生の留学評価	65
3.1. インタビュー協力者Hさん（15）のライフストーリー	65
3.1.1. Hさんの略歴	65
3.1.2. Hさんの語り	65
3.2. インタビュー協力者Iさん（16）のライフストーリー	68
3.2.1. Iさんの略歴	68
3.2.2. Iさんの語り	68
3.3. インタビュー協力者Jさん（17）のライフストーリー	71
3.3.1. Jさんの略歴	71
3.3.2. Jさんの語り	71
3.4. 考察	74
4. ベトナムの企業で働く元交換留学生の留学評価	75
4.1. インタビュー協力者Kさん（18）のライフストーリー	75
4.2. インタビュー協力者Lさん（19）のライフストーリー	80
4.3. 考察	86
5. ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生の留学評価	88
5.1. 日本語非母語話者教師に関する先行研究	88
5.2. インタビュー協力者Mさん（20）のライフストーリー	89
5.2.1. Mさんの略歴	89

5.2.2. Mさんの語り	89
5.3. インタビュー協力者Nさん (21) のライフストーリー	98
5.3.1. Nさんの略歴	98
5.3.2. Nさんの語り	98
5.4. 考察	103
6. 求職中の元交換留学生の留学評価	105
6.1. インタビュー協力者Oさん (22) のライフストーリー	105
6.1.1. Oさんの略歴	105
6.1.2. Oさんの語り	106
6.2. 考察	114
7. タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価	114
7.1. インタビュー協力者Pさん (23) のライフストーリー	114
7.1.1. Pさんの略歴	114
7.1.2. Pさんの語り	115
7.2. 考察	117
8. 留学を中断せざるを得なかった元交換留学生の留学評価	117
8.1. インタビュー協力者Qさん (24) のライフストーリー	117
8.2. 考察	121
第四章 日本国内で活動する元正規留学生の留学評価	122
1. インタビュー協力者Aさん (25) の留学評価	122
1.1. Aさんの略歴	122
1.2. Aさんの語り	122
2. インタビュー協力者Bさん (26) の留学評価	125
2.1. Bさんの略歴	125
2.2. Bさんの語り	125
3. 考察	128
第五章 出身国の大学教員となった元正規留学生の留学評価	130
1. 修士・博士課程に留学したインドネシア人大学教員の留学評価	130
1.1. インドネシアの元留学生に関する先行研究	130
1.2. インタビュー協力者の略歴	131
1.3. インタビュー協力者のライフストーリー	131
1.3.1. Aさん (27) の語り	131
1.3.2. Bさん (28) の語り	135
1.3.3. Cさん (29) の語り	137
1.3.4. Dさん (30) の語り	139
1.4. 考察	141
2. 博士後期課程留学のインドネシア人大学教員の留学評価	142
2.1. インタビュー協力者Eさん (31) のライフストーリー	142

2.1.1. Eさんの略歴	142
2.1.2. Eさんの語り	143
2.2. インタビュー協力者Fさん（32）のライフストーリー	145
2.2.1. Fさんの略歴	145
2.2.2. Fさんの語り	145
2.3. インタビュー協力者Gさん（33）のライフストーリー	147
2.3.1. Gさんの略歴	147
2.3.2. Gさんの語り	147
2.4. インタビュー協力者Hさん（34）のライフストーリー	149
2.4.1. Hさんの略歴	149
2.4.2. Hさんの語り	149
2.5. 考察	153
3. 1990年代の留学経験者の留学評価	153
3.1. インビュー協力者Iさん（35）のライフストーリー	153
3.1.1. Iさんの略歴	153
3.1.2. Iさんの語り	153
3.2. 考察	157
第六章 日本語習得と留学評価との関連	159
1. 日本語専攻で卒業後日本関連企業で働く元交換留学生の場合	159
1.1. 分析結果	160
1.1.1. 結果図の概要	160
1.1.2. 結果図の説明	161
2. 博士課程修了で大学教員となった元留学生の場合	163
2.1. 分析結果	163
2.1.1. 結果図の概要	163
2.1.2. 結果図の説明	165
2.2. まとめ	167
2.2.1. 学修・研究面での評価	167
2.2.2. 日本語学習、日本語使用、人的交流と肯定的評価の関係	168
おわりに	169
引用文献	170
■ポスター発表：ポスター	172
■インタビュー項目	175

はじめに

本報告書は、平成 29 年～令和 3 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 17K02839 研究代表者：八若壽美子)「元留学生の留学評価と日本語学習との関連に関する実証的研究」の研究成果をまとめたものである。

本研究では、日本の地方大学への留学後 3～10 年を経た元留学生 35 名のライフストーリーから、個々の元留学生が留学経験をどのように捉え、留学がその後の人生にどのような影響を与えたかを描出した。さらに、日本での研究活動や人間関係構築に大きな役割を果たすことばの問題に着目し、留学時の日本語の習熟度や学習状況、使用状況、留学後の日本語保持などが留学評価やその後の人生にどのような影響を与えているかの解明を試みた。

研究期間中に表 1 のように論文 9 本、ポスター発表 3 件で研究成果を発表した。本報告書では、論文・ポスター発表の結果に一部加筆・修正し、インタビュー協力者を非正規生と正規生に分け、さらにそれぞれ日本在住者、海外在住者に分けて再構成して各協力者のライフストーリーを提示した。さらに、留学後の職業などでゆるやかにグループ化し、考察を加えた。また、未発表のインタビュー協力者 5 名のライフストーリーを加えた。

続いて、日本語専攻で大学卒業後出身国の日本関連企業で通訳・翻訳業務に携わる元交換留学生 9 名をとりあげ、留学評価と日本語学習との関連を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (木下 2003、以下 M-GTA) を用いて概念図化した。さらに、留学中の使用言語が英語で日本語学習歴がほとんどない博士後期課程の元留学生 4 名についても同様に概念図化を試みた。

最後に、以上の結果を踏まえて、個々の留学成果を豊かにするために大学における日本語教育や留学生教育はどうあるべきか、新たな方向性を提案する。

表 1 研究期間中の業績

	論 文	章・節*
1	八若壽美子 (2018)「インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る留学評価」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 1, 29-43.	3.3
2	池田庸子 (2018)「元留学生のライフストーリーにみる留学評価—研究者夫婦の場合」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 1, 45-55.	4.1
3	八若壽美子 (2019)「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—家族と日本で生活する元留学生の場合—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 2, 29-46.	2.2
4	池田庸子 (2019)「元日本留学生のライフストーリーにみる留学評価 —交換留学から英語教育の道へ—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 2, 47-58.	2.1
5	八若壽美子 (2020)「再来日した元交換留学生のライフストーリー—支援される側から支援する側へ—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 3, 29-43.	2.2
6	八若壽美子・小林英弘 (2021)「タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価—翻訳・通訳業務従事者の場合—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 4, 119-136.	3.2
7	八若壽美子・Susi Widiyanti (2021)「元留学生の日本留学評価—インドネシアの大学教員の場合—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 4, 137-153.	5.1
8	八若壽美子 (2022)「ベトナムの企業で働く元交換留学生の留学評価」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 5	3.4
9	八若壽美子 (2022)「ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生の留学評価」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 5	3.5

ポスター発表		
1	八若壽美子・池田庸子「元交換留学生のライフストーリーに見る日本留学の意義」ヴェネチア2018年日本語教育国際研究大会 (2018.8.4)	2.1, 3.3
2	八若壽美子・池田庸子・Widianti Susi「インドネシアの理系大学教員のライフストーリーに見る日本留学評価」JALT Study Abroad SIG Online Conference 2020 (2020.9.26 オンライン開催)	5.2 6.2
3	八若壽美子「タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価—留学期間による比較」2020年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 364-369. 日本語教育学会秋季大会 (2020.11.29 オンライン開催)	3.1, 3.2 6.1

* 本報告書で関連する章・節

ポスター発表のポスターは巻末に示した。

第一章 研究の概要

1. 研究の背景

教育のグローバル化が進む中、留学生受入の推進は重要な政策の一つである。受入体制の充実のため、留学生の生活及び意識に関する調査や支援体制の評価が行われている（八若・藤原 2013、八若 2014、2015）。また、留学経験が異文化観や言語観などに変容をもたらす大きなインパクトを持つことを明らかにされてきている（池田 2011、池田 2014、池田 2015a、2015b）。

しかし、これらは短期間の海外経験や留学中・留学直後の評価に関する研究である。留学時や留学終了時に下された評価は不変のものではなく、留学時の経験をどのように捉え、どのような意義を見出すかにより、過去への認識は変化するものである。そのため、留学経験の評価には、社会人となった元留学生の視点からの検証が不可欠であると考えた。

日本語教育においては、近年「個」への関心の高まりから、量的研究では見えない個々の経験や内的世界に光をあてるライフストーリー研究が注目され、日本語を学ぶことが留学生活やその後の人生においてどのような意義や影響を持つか、個々の語りを通時的、動態的に見ることによって、言語教育の意義を捉え直し、新たな方向性を示す提言がなされている（川上 2011、2014、三代 2011、2015、佐藤 2013、池田・八若 2016、2017）。ライフストーリーとは「個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）についての口述の物語」であり、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」（桜井 2012）である。

三代（2015）は日本語教育学としてのライフストーリー研究の意義を「人は、社会・文化の中でどのように日本語を学んでいるのか。日本語を学ぶことは、人にとってどのような意味があるのか」を探求することであると述べている。また、河路（2014）は「彼らの語りをきくことは、人が新しい言語を学ぶことの意味を考える手立てにもなる。言語教育の果たす役割や教師の仕事の意味を確認することもできる」とその意義を述べている。さらに、川上（2014）は日本語教育におけるライフストーリー研究に関して、それぞれの語りから何を感じとるか、さらには日本語教育へどのように還元していけるのかという視点が重要であると指摘している

佐藤（2013）は、元留学生のライフストーリーから、元留学生が留学中いくつかの転機を経て自信を得、日本での就職という自己実現を果たす過程を描き出し、その自己実現は日本語を学ぶ自己の変容に支えられていると結論づけている。池田・八若（2016）では、大学院修了後日本で働く元留学生 2 名の語りから、元留学生が留学中・留学終了後を通してコミュニティ参加への意思決定が主体的な学びへの転機となり、多様なコミュニティ内での人との関わりから日本語を学び続けている過程を描出し、日本語習得が現在の良好な人間関係構築や肯定的な留学評価に関連していることを指摘した。

このように、ライフストーリー研究は元留学生の将来に繋がる意思決定や自己実現の諸相など多様な実態を析出しているが、元留学生対象の研究はまだ少なく、その多くは日本に在住し長期間日本語環境に身を置く漢字圏出身の日本語上級者を対象としたものであった。

このような状況を踏まえ、池田・八若（2017）は非漢字圏出身で留学終了後出身国の大学教員として働く元留学生のライフストーリーの分析を試みた。研究分野が日本と密接に関わっている文系元留学生は日本滞在経験そのものや日本語習得にも研究上の意義を見出し、日本で就職した元留学生と同様に留学終了後も日本語力向上に努めていた。一方、研究での使用言語が英語の理系元留学生は、帰国後数年を経た調査時点で不自由のない日本語会話力を保持し、研究上の日本との関係を維持していた。4か月間の日本語研修終了後学習を継続しないという選択をし、漢字や専門的な日本語は分からない。しかし、日常の日本語使用が地域コミュニティへの参加を促し、多様な支援を受けやすくし、帰国後も日本に対する愛着を感じるなど、留学の肯定的評価に寄与していることが指摘され、日本語の留学評価への関与の仕方は日本語能力、日本語の学習や使用状況、ホスト国コミュニティとの関係などによって大きく異なることが示唆された。

近年、留学生受入拡大のため、英語で学位が取得できるコースや英語による授業の提供などが増え、日本語を学習しない留学生も増えてきている。また、日本語を学習したものの留学中・留学後に活用できず喪失してしまうものもある。さらに、留学プログラムは多様化の一途をたどり、留学期間、留学中の立場、卒業後の進路なども多岐を極めている。日本語教育の新たな方向性を探るためには、日本語学習経験のないものや日本語を保持しないものなども含む多様な元留学生の声に耳を傾け、個々の留学体験とその評価について丹念な解釈を積み重ねていく必要がある。

本研究は、池田・八若（2016、2017）のライフストーリー研究を発展的に推進したものである。調査対象を、大都市と比べると多言語サービスの受けにくい地方大学への留学から3～10年程度経過した元留学生とし、出身国、専門、留学目的、日本語学習歴など、異なる背景を持つ元留学生に拡大する。多様な元留学生のライフストーリーから個々の留学評価とその要因や影響を描出すると同時に、語られた留学評価と日本語習熟度や学習状況、使用状況、留学後の日本語保持状態との関連を解明することを目的とする。以上の結果を踏まえて、個々の留学成果を豊かにするために大学における日本語教育はどうあるべきか、また受入国である日本のコミュニティはどうあるべきかについて、新たな方向性を提案する。

2. 研究の目的

本研究では、以下のことを明らかにする。

■研究 1

- (1) 「対話的構築主義アプローチ」によって形成される調査対象者 35 名のライフストーリーを、「日本留学を経て今ある自分のアイデンティティワーク」として記述し、個々の留学評価との要因となる経験などを描出する。
- (2) 個々のライフストーリーの語りから、日本語習熟度、日本語の学習状況、使用状況、留学後の日本語保持状態への言及を抽出し、個々の留学評価との関連を考察し、提示する。

■研究 2

- (3) 留学後の日本語使用環境の観点から、日系企業などで通訳・翻訳業務に携わる日本語上級レベルの元交換留学生と、研究での使用言語が英語で日本語学習歴が少ない理系博士課程の元留学生の 2 群に分け、「解釈的客観主義アプローチ」によって、留学評価と日本語習得との関連を概念図にし、可視化する。

3. 本研究の意義

本研究の特色として以下の3点があげられる。

- ①日本留学後3～10年を経た元留学生の視点からの留学評価と日本語学習の関連を通時的、質的に検討した研究である。
- ②ライフストーリーという質的研究法により、量的研究や理論化の過程で見過ごされがちな個別の経験や評価を導き出し、提示できる。
- ③これまで元留学生対象の質的研究の多くは日本在住の漢字圏出身者が対象であったが、海外在住者、非漢字圏出身者など多様な背景を持つ元留学生に加え、日本語学習経験のない元留学生や現在日本語力を保持していない元留学生も分析対象とすることによって、「ホスト国の言語を学ぶ意義」を多角的に考察できる。

本研究の意義として次の点が挙げられる。まず、留学修了後の「人生」という長期的な視野に立って留学そのものの意義や影響を検証することができる。次に、社会人となった元留学生の視点から日本語学習、即ち「ホスト国の言語を学ぶ」意義と長期的な影響を検証し、準備的な性格が強い大学での日本語教育の実践に新たな方向性を示すことができる。これらは、日本語教育を含む留学生教育の改善に向けて具体的な方策を設計することに貢献するとともに、グローバル化の進む日本の地域コミュニティの在り方にも有効な提言ができるものである。

4. 研究の概要

4.1. 研究方法

研究1の目的を達成するため、留学修了後3～10年を経過した元留学生を対象として、ライフストーリー・インタビューを行った。インタビュー調査の依頼時に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話してもらいたい」という教示と大まかなインタビュー項目¹を伝え、インタビューでは調査者が必要に応じて質問を加えながら自由に話してもらった。

インタビューは調査協力者の承諾を得て録音し、文字化して分析データとした。インタビューの内容の中から、日本語習得、人的交流に関わる言及を中心に抽出し、時系列にまとめた。

ライフストーリーは調査協力者と調査者の相互行為を通じて形成されるという「対話的構築主義アプローチ」(桜井・小林 2005)の立場から、ライフストーリー・インタビューのデータ自体をライフストーリーとして解釈し、留学の評価とその背景、日本語学習に焦点をあてて考察した。

研究2に関しては、研究1で収集された語りの中から留学評価と日本語習得との関連に焦点をあて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下 2003、以下 M-GTA)を用いて分析した。M-GTAは特定の社会現象の相互作用とそのプロセスを分析するのに適しており、現場の状況に合わせた理論を形成できる分析法として近年幅広い分野の研究で用いられている。収集された語りの共通性にも着目し、「解釈的客観主義的アプローチ」を用いて、留学後の日本語使用環境の観点から日本語上級レベル(日本語専攻交換留学生)と日本語非保持/入門レベル(大学院博士課程修了者)の2群に分けて、留学評価と日本語学習との関連を概念図化した。

¹ 項目一覧は巻末

4.2. インタビュー協力者

元留学生で、卒業・修了後3～10年を経過し、国内外で社会人として活躍する35名をインタビューの対象とした。多様な個人日本語保持者と日本語非保持者に着目するため、大学院修了生、元交換留学生、元日本語・日本文化研修生などを対象とする。東南アジア（ベトナム、インドネシア、タイなど）、アメリカ、南アジア²出身者である。留学先となる日本の大学は9校だった。インタビューは2018年8月～2019年12月の期間に行った。

インタビューに十分に対応できる「日本語保持者」には日本語でインタビューを行った。「日本語非保持者」や日本語が十分ではない者に対しては、研究分担者及び研究代表者が英語で行った。非保持者は英語母語話者または英語で学位論文を執筆した者である。なお、インドネシアの日本語非保持者のインタビューにはインドネシア教育大学のWidianti Susi氏、タイの調査にはトゥラキットバンディット大学の小林英弘氏の研究協力を得た。

表1はインタビュー協力者についてまとめたものである。

表1 インタビュー協力者の概要

非正規生（調査時：日本国内在住）										
	協力者	出身	種類	奨学金	留学期間	専門	調査時の職業	日本語力 ^{*1}	章	節
1	A	北米	交換	無	約1年	日本語(副)	英語教師	中級前半	2	1.1
2	B	北米	交換	無	約1年	日本語(副)	英語教師	中級前半	2	1.2
3	C	インドネシア	交換	無	約1年	日本語	主婦	中級後半	2	2.1
4	D	東南アジア	日研生	有	約1年	日本語	主婦、翻訳・通訳	中級後半	2	2.2
5	E	インドネシア	交換	無	約1年	日本語	主婦	中級後半	2	2.3
6	F	タイ	交換	無	約1年	日本語	主婦、専門学校職員	中級後半	2	2.4
7	G	タイ	交換	無	約半年	日本語	日本語学校生	中級前半	2	3
非正規生（調査時：海外在住）										
8	A	タイ	交換	無	約半年	日本語	会社員（日系企業）	中級前半	3	1.1
9	B	タイ	交換	無	約半年	日本語	会社員（日系企業）	中級前半	3	1.2
10	C	タイ	交換	有	約半年	日本語	会社員（日系企業）	中級前半	3	1.3
11	D	タイ	交換	無	約1年	日本語	会社員（日系企業）	中級後半	3	2.1
12	E	タイ	交換	無	約1年	日本語	会社員（日系企業）	中級後半	3	2.2
13	F	タイ	交換	無	約1年	日本語	会社員（日系企業）	中級前半	3	2.3
14	G	タイ	交換	無	約1年	日本語	会社員（日系企業）	中級後半	3	2.4
15	H	インドネシア	交換	無	約1年	日本語	会社員（日系企業）	中級後半	3	3.1
16	I	インドネシア	交換	有	約1年	日本語	会社員（日系企業）	中級後半	3	3.2
17	J	インドネシア	交換	有	約1年	日本語	翻訳・通訳	上級	3	3.3
18	K	ベトナム	交換	有	約1年	日本語	会社員	上級	3	4.1
19	L	ベトナム	交換	無	約1年	日本語	会社員	上級	3	4.2
20	M	ベトナム	交換	有 ^{*2}	3年半	日本語	大学教員（日本語）	上級	3	5.1
21	N	ベトナム	交換	無	約1年	日本語	大学教員（日本語）	中級後半	3	5.2
22	O	タイ	交換	無	約1年	日本語	求職中	上級	3	6
23	P	タイ	交換	無	約1年	日本語	会社員（日系企業）	中級後半	3	7
24	Q	北米	交換	不明	約1年	日本語	アルバイト	中級後半	3	8

² インタビュー協力者が一人しかいない国は個人情報に配慮して、より広い地域で表示した。

正規生（調査時：日本国内在住）										
	協力者	出身	種類	奨学金	留学期間	専門	調査時の職業	日本語力	章	節
25	A	南アジア	博（後）	有	3年	農学	研究者	初級前半	4	1
26	B	南アジア	博（貫）	有	5年	農学	研究者	入門	4	1
正規生（調査時：海外在住）										
27	A	インドネシア	修・博	有	5年半	工学	大学教員	中級？	5	1.1
28	B	インドネシア	修・博	有	5年半	農学	大学教員	初級後半	5	1.2
29	C	インドネシア	修・博	有	6年	農学	大学教員	初級後半	5	1.3
30	D	インドネシア	修・博	有	5年半	農学	大学教員	初級前半	5	1.4
31	E	インドネシア	博	有	3年半	工学	大学教員	入門？	5	2.1
32	F	インドネシア	博	有	3年半	農学	大学教員	入門？	5	2.2
33	G	インドネシア	博	有	3年半	農学	大学教員	初級前半？	5	2.3
34	H	インドネシア	博	有	3年半	工学	大学教員	入門？	5	2.4
35	I	インドネシア	修	有	2年半	教育	大学教員	中級？	5	3

*1. 日本語能力は留学修了時。在籍日本語クラス及び取得 JLPT などによる。？は語りから推測。

*2. 二回の留学

第二章 日本在住の元非正規生の留学評価

日本留学を終えた元留学生の視点から留学成果が検証されつつあり、留学が専門性の深化、国際性の涵養、自己成長など人生にプラスの影響を与える経験として評価されていることが報告されている（佐藤 2013、田中 2014、池田・八若 2016、2017）。しかし、これまでの研究は正規留学生を対象としたものが多く、近年増加しつつある数週間から 1 年未満の短期留学の成果については、実施機関のプログラム検証（小山 2016、吉野 2017）としての報告はあるものの、量的研究、質的研究ともにまだ少ない。本章及び次章では、大学間協定などによる交換留学などの短期留学経験者にとって、留学がどのような意義を持つのか、どのように自身の留学経験を振り返り、評価するのかを検証する。

労働力不足の解消のため外国人雇用を拡大しつつある日本において、元留学生の就職も促進されている。本章では、日本在住の非正規生留学生の留学評価を取り上げる。各インタビュー協力者の略歴を示しその語りを「日本語学習及び留学のきっかけ」「留学中の生活」「人間関係」「留学生としての学修」「留学後」「留学を振り返って」の項目について具体的なエピソードを交えて提示した。紙幅の関係で、協力者の言葉をそのまま掲載する会話形式と引用を交えた要約の形式とを併用した。また、フィラーや言い間違いは省略し、最小限ではあるが理解に支障があると思われる間違いは修正した。個人や場所が特定される固有名詞は一般名詞や記号にした。

1. 日本で英語教育に従事する元交換留学生の留学評価

本節では、日本の地方大学で交換留学生として約 1 年間過ごし、母国の大学を卒業した後に日本に戻り英語教育に携わる北米出身の元交換留学生を対象にライフストーリー・インタビューを行い、その語りの中から、人生における留学の意義、留学生活における日本語学習と使用、留学終了後の日本語及び日本との関係を中心に検証する。

1.1. インタビュー協力者 A さん (1)³ のライフストーリー

1.1.1. A さんの略歴

協力者の A さんは北米出身で、交換留学生として約 1 年間日本の J1 大学で日本語などを学ぶ。交換留学終了後に帰国し母国の所属大学を卒業する。卒業後しばらくして交換留学生として住んだ α 市に戻り、英語講師として民間の英会話学校に勤めている。

1.1.2. A さんの語り

《留学以前》

A さんが日本に興味を持ち始めたきっかけはゲームだった。中高生のころ、最初は日本のゲームであることを知らずに、ただゲームをしていたが、そのゲームを日本の会社がつけていることを知

³ 節の見出しのみ前章表 1 のインタビュー協力者の番号を付した。

り、次第に日本を意識し始めたという。「どこの会社だろう、もっと同じ会社のゲームがやりたい、日本だって気がついて、じゃあ日本のゲームが好きなんだって気がついた。最初はゲーム、それで日本に繋がって、・・・日本に興味があるかもしれない、それで日本のことを調べて、面白いねって、僕にとって日本と僕の国は結構違うから面白い。」次第にゲームからアニメにも興味が広がってくる。「高校の時ぐらいアニメとか見始めて字幕と吹き替えどっちが好きっていう話になって、やっぱりみんな字幕。日本の声優さんがすごくて日本人はそんなに思っていないけど、声もありますけど言語的に全く違うから、これかっこいいね」と述べており、意味は分からないが字幕のアニメを見るようになり、全く未知の言語である日本語への興味を持つようになる。

*： 高校の時は日本語を勉強しようとはまでは思わなかったんですか。

A： そうですね。高校でスペイン語を2年間勉強して、大学1年生の時に何の授業をとるかっていう話になって、やっぱりスペイン語を続けたかったけど、(履修者が) いっぱいで、それで前から興味があったから日本語ちょっと面白そうだなと思って。

*： もしもスペイン語のクラスに入っていたら日本語は勉強してなかったんですね。

A： そう。それほんと毎日思ってた。その前に他の大学に行きたかった。音楽の。でもそれはちょっとお金がかかりすぎて、そっちは行けなかった。それがあってこの大学があってスペイン語に入れなくて、日本語を学んだって言う。面白いのは日本語を勉強したから留学できて、また音楽と繋がりができたから、もう本当に。

*： 大学で日本語を勉強したのは授業で勉強しただけですか。

A： そう。でも勉強としてみてなかったかな。そんなに好きだった。勉強というより趣味として勉強した。自分で面白くて。最初は「あいうえお」をこの週が終わったらこれ覚えてくださいって言われたけど、好きで、1日でこれはいけるかなって予習しようって思って気が付いたらもう半分ぐらい終わって。それを毎日一生懸命書きの練習をやって。

*： 何が面白かったんですか。

A： 違うから。友達に見せたら全くわからないからそれが面白い。他の人に見せてこれわかる？そしたらわかんない、そして教えてあげる。なんだろうね、そういう面白さを伝えたかったから、先生っていう仕事に興味を持ち始めたかな。新しい情報を伝えるのが面白いって気がついて。それから T 先生(母国の大学の日本語教員)の影響を受けて、T 先生は日本語の先生だけじゃなくて、先生として結構学びました。

出身大学の日本語の教員からも影響を受けたという。また大学間の交流として日本の大学生と英語と日本語を用いた交流を行っており、「趣味とか家族とか音楽とかゲームが好きとか・・・そういう話ことができました。で友達になって。友達に会いたい、日本語が使える、そして日本に行ける、いろんなポイントがあって、それで(日本に)行きたかった」と徐々に日本へ行くことに興味を持ったと話している。その教員らが中心となって行っている3週間の日本研修に参加し、地方都市に1週間滞在し、東京に2週間滞在する。3週間の研修で、一人で電車に乗ったり、日本人学生と交流したりしたことで、日本で生活する自信がついたという。帰国後、留学アドバイザーや日本語教員の支援を受けながら、交換留学に向けた準備を整え、翌年1年間の交換留学生として日本の大学で学ぶ。

《留学中の日本語習得》

来日直後は日本語が上手な留学生も多く、また交流のある日本人学生は英語や海外に興味がある

学生が中心だったため、日本語によるコミュニケーションに自信を持てなかったという。

*： 日本に来て、最初はどうでしたか。

A： 日本語を聞くのはできたけど話すのはまだまだ自信がなくて、最初の3ヶ月ぐらいは日本語を聞いて英語で話すという感じでした。

*： サークルは入っていましたか。

A： 国際交流サークル。楽しかった。楽しかったけど、やっぱり日本語を使わなくていいよって言われたから。日本人の学生が英語を学びたいとか留学生を困らせないためだったようなサークルだったから、話さなきゃっていう気持ちはなかった。

日本人学生との交流では、日本語を話す機会はさほど多くなかったようである。しかし、アジアからの留学生との交流でよく日本語を話したという。「他の留学生に手伝ってもらって、それで他の留学生だと英語は通じない、共通は日本語だから日本人じゃなくても簡単な日本語をお互いに使って、それで自信がついた。相手も頑張って日本語を勉強してるからお互いに頑張ろうっていう感じがよかった。」大学の国際寮には様々な国の学生が住んでおり、お互いに助け合って交流を深めている。英語圏からの留学生が少なく、共通の言語が日本語であったことがよかったようである。

Aさんの生活や人間関係が大きく変わるのが2学期目に吹奏楽部に入部してからである。Aさんは10月に来日し、1学期目の留学を終えた4月に部活動やサークル活動に新入生を勧誘するイベントがあり、そこでAさんは以前から興味があった吹奏楽部に入部することを決める。

A： 吹奏楽部の人に会って、それで勇気を持って、楽器がないんですけどって言って。・・・それで日本人の友達とここにちょっと行きたいんですけどと言ったらじゃあ一緒に行こうって。行ったらやっぱり音楽は言語みたいなものだからこれでいけるかなって思って。それで一緒にやっている人が留学生に興味がないと言うか音楽のために来ているから、それで英語できないから日本語をもっと勉強してもっと伸びて。

最初は練習だけの参加だったが、演奏会や最終的にはコンクールにも参加し、交友関係も吹奏楽部中心となる。

*： 吹奏楽部に入って変わった？

A： やっぱり個人として本当に日本語が上手になりたいならサークルに入った方がいい。普通の日本人って言ったらおかしいけど、外国に興味がない日本人と友達ができたら、それが本当に大切。

*： 外国人一人だったのに、部活動を続けられたのはどうしてですか。

A： 音楽に興味があって。最初は音楽の専攻やりたかったけどできなかったから。3年間吹奏楽をずっとやらなくて。日本に来て吹奏楽できるんだって。アメリカだと本当に音楽の専門じゃないと入れない・・・たぶん音楽教室に入れない。専門の人だけ。それで音楽が好きだったから、でも3年間ずっとやらなくて忘れちゃったやつを練習したいっていう気持ちで日本語と同じぐらいあったから。以前の友達との時間が少なくなってきたかなって。日本語の勉強してるか音楽の練習してる。

吹奏楽部入部後は授業以外は吹奏楽部の仲間と過ごすことが多くなる。Aさんは、先輩後輩の上

下関係のあるサークル内で、新入生ではあるが、実際の学年は上という複雑な位置であった。先輩には敬語を用いたり、年齢的には下の学生と同期生として遊びに行ったり、日本的な人間関係を客観的に観察しつつ、サークルコミュニティの中で交友を深めていたようである。

《留学後の生活》

9月に帰国し、その年の12月に卒業するが、その間母国の大学で日本語の授業の手伝いや日本人留学生のサポートなど積極的に日本語を用いて日本との関りを継続している。卒業後、母校の日本語教員の紹介で日本人の駐在家族の子供に英語を教える機会を得る。英語を教えることに関しては、日本留学中から興味があり、英語教育に関する授業を履修するなど、将来のキャリアとして考慮に入れていた。ただ、日本での英語教師は児童生徒を対象とすることが多いため、子供に対する教育に関しては、当初自信がなかったという。しかし、駐在家庭の子供に教える経験を経て「これ楽しい。やっぱり子供は好きかな」と思えるようになったという。日本での就職に関しては以下のように回答している。

*： いつ日本で就職しようと思ったんですか。

A： 留学の最後の半年で英語教育の授業を二つぐらいとって、それでいろんな大学の先生と繋がりができて、・・・それで楽しかったから、その時は英語の先生はどうかなと思って。だんだん興味があがってきて。それで英語の先生になろうかなって。

*： 就職活動はどうしたんですか。

A： ウェブサイトがあって、そのサイトは半分以上英語の先生だけど、いろんな仕事もある。・・・応募して面接に来てくださいと言われたけど、 ω 県（留学していた県）のほうに就職したい、それで1個、2個ぐらい見つけて、今の会社。

現在は交換留学していた α 市にある英会話学校で幼児から中学生を対象に英語を教えている。 α 市での就職を希望したのは吹奏楽部の仲間がいるためである。日本に戻って、大学の吹奏楽部には所属できないが、地域の吹奏楽団に入り、演奏活動を続けている。職場で中学生と話す際も、吹奏楽の話題が役に立っているという。「中学校だとみんな部活に入るから、吹奏楽やってる人と結構話が合って。一人の生徒がフルートをやりはじめたけど、お母さんも吹奏楽団入っていて僕の演奏を聞きに来てくれて。中学生から見るとその共通点があるから話しやすい。他の先生は先生だけど僕は話せる大人。」中学生との共通の話題があり、その保護者とも音楽を通じて交流があり、良好な関係を築けている。その一方で、「自分が勇気を出さないと友達を作れないっていう感じ、日本に住むと。・・・本当に仕事行って帰る。吹奏楽の仲間がないと多分無理かもしれない」と社会人になってから友人を作る難しさも感じている。

《日本留学を振り返って》

日本での勉強、生活、人間関係などに関して振り返ってもらった。

*： 振り返って日本留学の経験はどうでしたか。

A： よかった。自分で払うのが問題だったから親に助けてもらったけど、親のおかげでと言うか J1 大学のおかげで幸せっていう感じ。多分国でこういう生活はできない。こういう仕事は簡単に見つからない。他の大学に行ったらこういう友達は多分作れなくて、日本語も伸びてなくて、それでアメリカに帰って同じ年の人と同じぐらいに、大学卒業したのにバイトを二つ三つぐらいして。本当にやりたいことができるってそれが一番いいかな。J1 大に来てからいろんな繋がりができて、それに日本語も自然と上がって、やりたいことに

気づいて、それでまた戻ってきて、できるって言うのは珍しくて、びっくりした。

* : やればよかったことは？

A : やっぱりもっと早く吹奏楽をやればよかったかなって思う。半年だけでそんなにできるなら1年間どんだけできるかって。

* : 留学で印象に残っているエピソードは？

A : サークルに入って、全く外国に興味ない人に興味を持たせるって言うのが。今の中学生でも何で英語学ばないとといけないのって。いつも言われたら地図を見せて、これ日本でしょ、これ日本以外だよ、どっちの方が大きいって。やっぱり外国に興味ができるって言う影響ができたら本当によかった。日本人と話して、その留学生がこんなに上達できるんだって思ったら、じゃあ自分もどっか行ったらこんなにできるかもしれない。そうなったらそれがいいかな。

1.2. インタビュー協力者 B さん (2) のライフストーリー

1.2.1. B さんの略歴

協力者の B さんも A さんと同様に北米出身で、交換留学生として来日し、約1年間日本の J1 大学で日本語などを学び、その後帰国し所属大学を卒業する。卒業後しばらくして交換留学生として住んだ α 市に戻り、英語指導助手として公立の小学校と中学校に勤務している。

1.2.2. B さんの語り

《留学以前》

B さんが日本に漠然とした興味を持ったきっかけは日本のアニメだったという。子供のころドラゴンボールなどの日本のアニメを見て、日本アニメが好きになり、その興味は高校時代も変わらず日本文化や日本へと関心が広がっていった。

* : たくさんの子供たちが日本のアニメを知っていますか。

B : ドラゴンボールとかセーラームーンとか私の歳だとみんな知っています。

* : どうして日本に行きたいと思ったんですか。アニメが好きな人がみんな日本に行きたいと思うわけではないですよね。

B : たぶん高校生の時（ほかの人は）他の興味がある。でも私いつもずっと好きだったから日本の文化とか。日本に行きたいと思った。本当の理由は多分分からない。私のおじいさん、日本に来たから。戦争とビジネスで。

B さんの祖父の一人は戦争で日本にいいイメージを持っていなかったが、もう一人の祖父が 90 年代にビジネスで日本に来日して、B さんが 13 歳のころ、その祖父から「日本はきれいで、面白い建物とかある、行ってください。経験してください」と言われたという。アニメだけでなく祖父からのそういった言葉も影響しているかもしれないと述べている。日本への興味はあったが、日本語を勉強し始めたのは大学に入ってからだった。大学で日本語のクラスを受講する前に独学で学び始めたという。

* : どうやって勉強したんですか。

B : インターネットで日本語の教科書を買って自分で勉強して。インターネットで話して勉強しました。会話パートナー。その時にたくさん時間があったから毎日 3 時間ぐらい勉強

した。ひらがなとカタカナ自分で勉強した。

*： どうして自分で勉強しようと思ったんですか。

B： その時私の生活新しい趣味が欲しかったから。日本語面白かったから私勉強してみたい。だから自分で勉強した。その時にまだアニメを見ていたから、いつも日本語を聞いていたから。あまりわからない、でも勉強みたい。だから勉強した。あとは自分で勉強したら、楽しいです。

アニメで日本語を聞いている延長線上に日本語の語学学習があり、インターネットなどを利用しながら独学で学び始める。その後大学でも日本語の授業を履修し、本格的な勉強を始める。子供のころからの日本に行きたいという想いと、周囲に日本語を話す相手がいないため、日本に行って日本語を勉強したいという両方の想いから交換留学を決める。

《留学中の生活と日本語学習》

Bさんは日本での協定校を選ぶ際に、大学の評判を聞き、また東京のような大都市でない地方大学への留学を希望し、J1大学に留学を決める。

*： 留学する前に不安なことがありましたか。

B： ちょっと不安でした。でも留学した人を知ってる。その前にちょっと心配した。でも1か月後、5月は心配しなかった。みんな優しいから楽しかった。

*： 日本に来て、最初のころはどうでしたか。

B： 4月は大変だった。例えばシティホールとか全然わからなかった。私なんでいます？ 全然わからない。新しい友達まだいない。だからちょっと寂しい。でも4月の後で友達作ったからもっと楽しくなって、心配しなかった。

*： 4月に困ったことは何ですか。

B： たぶんお金とか料金。漢字読めないからどうしようその感じ。どこで払う。スーパーでこれは何ですか。多分初めてスーパーに行った時に塩を買いたかった。漢字が読めなかったから砂糖を買った。

来日当初は何が起きているか理解できず困ったことも多かったが、日本人や他の留学生の友達もできて、楽しくなったという。学生交流の場としては、国際寮が重要な社交の場になっていたようである、食事会やパーティーの場で他の国の留学生や日本人学生と友達になり、交流の輪が広がっていった。寮のことを「家族、ファミリー」と言い、良好なコミュニティが形成されていたようである。

留学中の日本語学習に関しては、自信が持てず積極的ではなかったと振り返っている。

*： 自分の日本語についてどう思っていましたか。

B： 留学して私の友達はもっと日本語が上手だった。・・・授業であまり質問を聞かなかった。

*： どうして聞かなかったんですか。

B： たぶん緊張して、心配したから。

*： 緊張したのはずっとですか。

B： それはずっとじゃなくて。上のレベルのクラスに入った時。初めての教科書だったから、難しかったから。緊張の気持ちがあった。

自分より日本語能力の高い学生と比較してしまい、授業で質問をしたり、日本語を話したりするときにも緊張していたようである。結局1年間の留学を通して、自身の日本語に自信を持つことはなかったという。

《留学後の生活》

日本での留学を終えて、数か月後に母国の大学を卒業する。その後はAさんと同様に日本人駐在員の子供に英語を教えるアルバイトを約1年間行う。ほぼ毎日日本人家庭を訪問し、子供に英語を教え、お母さんとは日本語で会話をしたという。帰国してから、日本人と話す機会を得たことがBさんにとっては重要な転機となる。

*： 国に帰ってから、もっと日本語を使ったんですか。

B： そうね、漢字書けない。でも話すのはもっと上手になった。まだ読めるもちろん。でも書くのはへた。

*： 日本語を話す自信がつかえましたか。それはいつですか。

B： 去年。家族とたくさん話したから。日本人の家族は優しいから「頑張って頑張って」。

Bさんは自身の性格を「静かな性格で、みんなとあまり話さない」と考えており、日本語を流暢に話す留学生が多数いる日本の環境よりも、アメリカで日本語話者が少なく、日本人家族と個人的にじっくり話す機会が持てたことが日本語を話す自信につながったという。

母国に帰って数カ月は、日本に戻ってきたい思いが強く、「ずっと悲しかった」という。「日本語大好きになったから、ここ(α市)はホームタウンだから、たくさん友達がいるから好き。その生活は大好きだから」とその時の気持ちを述べている。そして、留学時代の友人から都道府県単位で採用している英語指導助手のを知り、応募する。希望通り、かつて交換留学生として学んだα市で英語指導助手の仕事を得ることができ、現在も充実した日々を送っている。

*： 今の生活は楽しそうですね。子供たちはかわいい？

B： かわいい。子供のことを気に掛けるようになってきた。みんな知っているから。顔を覚えているから。(子供たちの)未来も気になる。

*： 中学生はどうですか？ 難しくない？

B： 生徒は優しい。本当に優しい学校。いい学校。3クラスある。たぶん生徒は300人ぐらい。あんまり大きくない、いいサイズ。みんな顔を知ってる。

*： 日本で働いて日本語はどうですか。

B： 私は生徒とあまり日本語を話さない。英語の先生だから。日本人の先生は日本語で話します。そして私の校長先生と教頭先生は関係いいです。教頭先生と校長先生は英語を話さないから、私はいつも日本語。例えば毎朝、学校の前で挨拶。私は英語を話す。でも生徒がいない時に一緒に日本語で話します。

日本語が話せることにより、生徒だけでなく、英語を話さない教員とも円滑なコミュニケーションが取れている。校長先生などと部活動の応援に行ったり、活動に参加したり、通常は英語指導助手が参加しない学校行事などにも参加しているという。

《留学を振り返って》

現在から過去の留学経験を振り返ってどう考えるか聞いた。

B： 本当によかった。私ラッキー。留学したから、たくさんチャンスがみつかりました。交換

留学生だったことは私の人生で最良の選択だったと思う。

* : やってよかったことは何ですか。

B : 留学。交換留学生だったから、たくさんの人に出会えた。

* : 仕事をするのに留学したことは役に立ちましたか。

B : そうです。留学経験はすごく役に立った。今中学生とかに、大学入った時に留学はいいです (と伝えている)。私が中学生の時にそのアドバイスはなかった。他の国に行くイメージはなかった。

* : それって大事ですね。中学の時に先生に留学したほうがいいよって言われたら、チャンスがあったら考えると思います。

B : 今から若い人に会った時に、大学生例えば、「留学して」「留学いい経験です」「絶対に」どこでも。おすすめては日本。日本人だったら、アメリカとかヨーロッパとかオーストラリアとか。

自分の留学経験を中学生に伝えて、生徒が大学生になったときに留学していい経験をしてきてほしいと折に触れて伝えている。また、Bさんが勤務する小学校や中学校には、Bさんが交換留学生として学んだ大学から学生がボランティアなどで来ることも多く、そこから人間関係が広がっている。

1.3. 考察

2人に共通する点としては、子供から高校時代にかけてゲームやアニメなどの日本のポップカルチャーに関心を持ったことが挙げられる。近藤・村中(2011)がポップカルチャーへの関心と日本語学習動機に関する関連を指摘するように、彼らもゲームやアニメをきっかけに日本に興味を持ち、次第にアニメキャラクターの話す日本語自体にも興味を持つようになっていく。しかしながら、実際に日本語学習を始めたのは、大学に入ってからであった。Aさんは大学の日本語担当教員の薦めで3週間の短期研修に参加して、J1大学を知り、長期の交換留学への参加を決める。また、BさんはJ1大学留学経験者の上級学生から情報を得ることで、特に不安もなく留学を決めることができたという。継続的な学生交流や最初のステップとしての短期留学が交換留学を決める重要な要素となっていることがわかる。

日本留学中は日本人学生だけでなく、他の国から来た留学生とも盛んに交流している。留学先で多様な国籍や文化背景を持つ友人が作れたことに意義を感じながらも、日本語能力の高い留学生や日本語を専攻として学んでいる学生などと自身を比較して、日本語を話すことに自信が持てなかったとも述べている。これはAさん、Bさん両方に共通していた。交換留学プログラムでは、学習歴や母語の異なる多様な学習者が同じプログラムで学んでいる。日本語のレベルや母語の影響などによる習得速度に差があることは当然であり、あまり問題視してこなかったが、学習者が抱くそういった感情にも配慮が必要であることが分かった。

友人関係では、外国に興味があり英語を話したいと考える日本人学生と交友関係が広がっている。多くの友人ができてよかったと考える半面、外国人だからではなく、共通の趣味でつながれる友人ができたことに満足感を覚えている。Aさんは吹奏楽部の仲間と自然に日本語で会話するようになり、日本語に自信が持てるようになり、Bさんは母国での家庭教師を通じて自信が持てるようになったと述べている。どちらの場合も、他の日本語学習者と比較することなく、日本語コミュニ

ティの中で必要とされる居場所を見つけているといえよう。留学生にとってコミュニティへの参加が非常に重要な役割を果たしているという報告がされているが（三好 2009、池田・八若 2017）、今回の調査でもコミュニティ参加の重要性が再確認された。

2人は帰国後日本人家族の子供に英語を教えるアルバイトをする。Aさんは留学中も英語教育関連の授業を履修するなど、キャリアとして英語教育を考えていたようである。Bさんは日本に戻りたいという強い思いがあり、日本での就職の可能性を模索する中で、アルバイトを通じて英語教育に興味を持つ。2人とも α 市に戻り、Aさんは民間の英語教師として、Bさんは公立小学校・中学校の英語指導助手として活躍している。2人は英語を教えるだけでなく、留学経験者として、外国語を学び異文化で生活することがどのような学びをもたらしてくれるか、そして人生においてどのような意義があるか生徒たちに伝えようとしている。それは彼らにとっても留学の意義を再確認する重要な機会となっている。Bさんが留学を「私の人生で最良の選択」というように、生徒たちにも留学という選択肢があることを示し、未知の世界があること伝えようとしている。

ライフストーリー研究において、日本語が話せることが日本人との交流に重要な役割を果たしていることが報告されているが（池田・八若 2016、2017、佐藤 2013、中山 2011、三代 2009）、2人も日本語によるコミュニケーションが図れており、職場や職場以外の日本人と良好な交友関係を築いている。交換留学の時と同じ α 市に戻って働いているため、学生時代に築いた人間関係や、特にAさんは音楽を通じたコミュニティで文字通り言葉を超えた付き合いができており、日本の生活における満足度は高い。その一方で、社会人になってから新たな友人ができにくいことに対し、母国の友人付き合いとの違いも感じている。学生として、現在は社会人として日本のコミュニティで生活していく中で、日本語能力に関する自己評価や人間関係も変化している。交換留学生として留学した時は、当然のことながら、日本語能力もさほど高くなく、自身の日本語能力に対する自己評価も高くなかった。しかし、それぞれ日本人コミュニティの中で必要とされる居場所を見つけ、それに伴い日本語にも自信が持てるようになり、十分なコミュニケーションがとれるまでに日本語も上達している。

元留学生が教室外の多様な日本語コミュニティの中でどのように成長し、それがどのような自己実現へとつながっているか留学生の総合的支援の立場から検討していく必要があるだろう。

2. 家族と日本で生活する元留学生の留学評価

本節では、日本語専攻で日本の地方大学に約1年間の短期留学し、出身国の大学卒業後配偶者の進学や仕事の関係、日本人との結婚などの理由で再来日して家族と共に日本で生活する4名の元留学生を取り上げる。結婚、出産、育児などで自らが描いた研究やキャリアを中断または縮小する選択をして、日本で家族と共に暮らす元留学生である。

2.1. インタビュー協力者Cさん(3)のライフストーリー

2.1.1. Cさんの略歴

協力者Cさんは、出身国の大学日本語学科3年修了時に同大学の交換留学生募集に応募し、選考を経て約1年間J1大学に留学した。留学終了後大学在学中に結婚し、日本で働く夫と生活するため大学卒業後來日し、約1年がたった。調査時の1か月後に出産予定であった。

2.1.2. Cさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

日本語に興味を持ったきっかけはアニメであった。アニメを通して敬語や女性語、男性語などいろいろな話し方がある日本語に興味を持った。高校で第二外国語として日本語を選択したが、日本語は難しい言語だと思われており、当時は3年間続けて勉強する学生は少なかった。出身国には日系企業も多く、日本語を学べば就職の可能性も広がるという母親の勧めもあり、出身地の大学の日本語学科に入学した。

留学した先輩の経験を聞き、自分自身も日本を実感したいと思うようになった。3年生になって「留学しなければ」というあせりもあり交換留学生募集に応募した。選考の結果J1大学に留学することになった。

《留学中の生活》

日本に来る前は、日本語が通じることがかなど不安と緊張があったが、分からないことは辞書で調べたり日本人に聞いたりして解決しながら、「実際にやればやれます」と徐々に自信を得ていった。

留学前は花火大会、お祭り、遊びなど日本で体験できることへの期待も多くあった。しかし、J1大学のあるα市は静かな地方都市で留学前の日本のイメージとは違い、留学当初は退屈に感じた。

実際のところ、奨学金が得られなかったため最大の不安は経済面で、出身国に比べて物価が高いこともあってアルバイトをしなければならず、期待したような生活は難しかった。授業にも順調に参加できるという期待があったが、時間的に勉強に集中できなかった。

C： 私一つしか選べなかったんですよ、その時は。どちらか、生活か、勉強か。で、私はやっぱり生活のほうが一番必要かなと思って。やっぱり集中できなかったんです。

*： 勉強に？

C： はい。人によって違いますけど、でも、私はそういうタイプです。

Cさんは先輩がアルバイトをしていた居酒屋でアルバイトをするが、大変なことも多かった。

C： 暇な時はすごい暇だし、お金も減らしますよね。ものすごいぎやかだったら、すごい疲れるし、仕事がお金がありますけど、やっぱりね、居酒屋は夜しか仕事がないので、次の日は大学に通って、眠い。ちょっと大変でした。で、店長は優しいですけど、でも留学生、外国人もやっぱり平等に扱うので、ちょっといろいろなカルチャーショックもありました。例えば、日本人は、人の前でしかるとか、注意するんですよ。(中略)ま、理由はたぶん他の人が同じ間違いをくりかえさないように、その人を叱る。でも、私の国の常識だったら、それはもう軽蔑される。

今は「日本の文化のほうがいいかな」と思うが、文化差に当初は驚いた。その居酒屋でのアルバイトをやめようと思ったこともあったが、J1大学のある地方都市ではモスリムとしての問題もあった。

C： 私、その時期、やっぱりその居酒屋を出ようかなと思ったら、他のバイト先に連絡してみたら、やっぱりイスラム教とか、ヒジャブを被った人、そんなに理解がないので、α市は。ちょっとね、困ります。

結局 C さんは留学期間を通して留学生の雇用に慣れている同店でアルバイトを続け、自信や達成感を得ていった。

C：日本で学んだことはやっぱり survive みたいな、人生の survive。日本語で何というの？

*：生き抜く？

C：生き抜くという知恵、もらいました。頑張ればやっぱり自分の目的、例えば遊ぶところ、ディズニーシーとか、自分のお金で行けるようになって、すごいうれしい。

勉強との両立は難しかったが、アルバイトを通して日本社会についても多くを学んだ。

*：日本の社会のことは実際に。

C：はい、今分かります。例えば、日本人と話す時のマナーとか、いろいろな地域の人に教えられたりします。日本の、仕事のこととか、環境とか、店長が教えたこと。

一方、期待外れだったことの一つは、日本人の友達を作るのに時間がかかったことだ。留学生同士は本音対本音で話せる友人がすぐできたが、日本人と同じような関係になるのには約半年はかかった。

《人間関係》

しかし、C さんは留学中に印象に残っていることとして、まず人間関係に関することをあげた。

第一は、いろいろな国から来た留学生と交流できたことである。留学生寮で共に生活する留学生の数人とすぐに打ち解けて、よく一緒に話したり行動を共にしたりした。今も SNS で連絡をとりあっている。

次に、アルバイト先の店長に日本での仕事について多くのことを教えられたことだ。

C：店長がやさしくて、日本人の仕事環境、仕事のマナーとか、今でもまだ残っています。例えば、私、料理をするたびに、必ず店長のやり方、店のやり方、今でもまだやっています。残っています。例えば、作業が終わった時に必ず清潔にする。

三番目は、大学周辺に住む地域の人々に大変お世話になったことである。最もお世話になった Z さんは出身国と交流のある先生から紹介された老婦人で、C さんはその家族や友人とも交流が持てた。

C：(Z さんは) いつも困った時、自分のお金がない時に、いつもおごったりします。ごちそうとか、で、人生相談も。そのほうがすごい助かりました。お米がなかったら、Z さんから、いただきました。すごいやさしいです。

*：そうですか。そういう人、ありがたいですね。

C：で、また Z さんの輪からいろいろ紹介してもらって。例えば、三味線のイベントとか、日本にある関係のプログラムとか、連れて行ってくださいます。ピクニックとかも。

さらに、日本人学生についても 6 カ月ぐらい過ぎると個人的なことも話せる友人がチューターをはじめとして数名でき、再来日時に再会するような関係が築けた。教員や同じ授業をとるクラスメートとの関係は問題はなかったが、主として授業だけの関係だった。

《留学生としての学修》

留学時の学修については、経済的な問題から生活に重点を置き、勉強に集中できない自分自身に

不満だった。

日本語のクラスは4レベルのうち最も上のクラスで難しかったが、ついていけた。日本人学生向けの日本語教育や異文化理解に関する専門科目はあまり考えず選択したこともあり、難しくてもよくわからなかった。

C： なので、それがやっぱり精神的にもね、影響があります。なんか自信がないなって、行きたくないなっていうあれもありますけど。

出身国と日本との教育の差も感じた。授業方法について日本の授業はよく計画されていて時間もぴったり終わった。国での教育方法をもっと改善しなければならぬと感じた。

日本語については、留学中に受けた日本語能力試験N2に合格できず、上達を実感できなかった。

上達を感じられたのは、帰国直前に出たスピーチコンテストで優勝した時だった。出身国との違いなど日本で感じたことをまとめた内容だったが、聞き手である日本人に伝わったと感じた。スピーチの練習でも数名の地域の人に添削してもらったり、発音などについてアドバイスをもらったりして、約2カ月間週3回くらい練習に付き合ってもらった。

《留学後から再来日まで》

留学終了後は出身国の大学で卒業に必要な授業を履修した。留学先で履修した科目に単位互換ができないものがあったり、留学先にはない科目があったためだ。婚約者が日本で働くことになったため、卒業を待たずに結婚した。その後教育実習を終え、卒業論文を提出して、留学終了後約1年半で卒業した。

専門分野の知識については帰国後のほうが得られたと感じている。3年次修了の留学時は研究について何も知らず無計画だったので、研究については先生から「留学で何を学んだか」と聞かれても答えられなかった。

C： 自分で自分の国で勉強しました、研究ってどんなことをするのか。その時もまた、自分の国だからもっと時間がありますよね。なので私、ゆっくりと研究論文とか、いろいろ読みましたけど、帰国後上達しました、逆に。時間がありますよね。バイトがない。

*： なるほど。専門的なことは国のほうがゆっくり勉強できた。

C： はい。はい。逆。その時先生からの授業も、論文指導も受けましたし、講義も受けましたし。なので、自分で習って、学んで、分かったこと、たくさんあります。

論文作成を通して日本語も上達したと感じている。

C： いろいろな先生に「留学したからあなたは日本語がもっと誰よりも上達しなきゃ」と期待されました。なので、私も頑張らなければ。それがきっかけです。

留学経験者に対する周囲の期待がきっかけとなり、帰国後さらに日本語の勉強に熱心に取り組むようになった。

《再来日後の生活》

卒業の2か月後、夫が働いている日本の地方大都市β市に来た。来日後は妊娠したこともあって、主婦として生活している。日本人との交流は夫の会社の人とはあるが、一般的な話をする程度である。アパートでの近所づきあいもあまりない。

C： 今も、主人の会社の友達も、日本人、いろいろなレベルの人がいらっしゃいますけど、今

も日本人はそんなに、私たちもそんなに

* : 深く関わることがない？

C : 関わることがない。私たちはやっぱり、二人のほうがいいかな。

現在最も交流があるのは夫の会社の外国人社員である。会社には同国人は夫以外に1名だが、ドイツ、タイなどからの外国人社員がいる。

C : やっぱり主人の友達とかはよく交流します。

* : 例えばどういう交流？

C : 食事会とか。例えば、イタリアのレストラン行ったり、スペインとかイタリアとか、いろいろなレストラン、いろいろな国のレストランとか、行ったりする。

* : ああ、なるほど。いろいろな国の人と。

C : それもなんか、なつかしいですね。留学のようにみんな交流してます。

また、大都市β市は地方都市α市と違って、留学生、技能実習生、介護士など多くの同国人がいるので安心である。

妊娠を期に「病院」という新たなコミュニケーションの場が加わった。外国人に対応してくれる病院を探すのは費用面のこともあって苦労したが、何とか見つけられた。

C : 先生との交流は順調です。いつもチェックする時には必ず主人が来て、で、三人で日本語話すのもちょっと大変なこと。また専門用語が出ますね。婦人科的なあれ。出ましたけど、自分も妊娠に関係ある言葉を暗記します。なので、もし先生が難しく説明したら、必ず主人が私とまたディスカッションしたり。意外と先生に私たちの日本語、通じてます。たまには、英語も話します。

病院はこれまでに外国人の出産に対応してきた実績があるので大丈夫だと思う。ただ、Cさんは具体的には語らなかったが、外国人ということで一人の看護師から差別を受けたという。

C : でもだいたい大丈夫です。みんなやさしい。今母親のクラスとかにも参加しなければならぬし、ちょっと緊張して。

今後、夫の仕事の関係で数年は日本にいる予定である。男の子なのでヒジャブなどの服装の問題がないため女の子ほどではないが、子育てにも不安がある。

C : 宗教と、食べ物、たぶん一番難しい。

* : 言葉。

C : ま、言葉ですね。みんながここに長く住むと日本語しか知らないなので、家でたぶん自国語とか地元の言葉とかも教えなければなりません。それも大変かもしれないです。

《留学を振り返って》

Cさんは留学経験を次のように評価している。

C : 全体的にはやっぱりさっきのように、私、勉強よりも社会のこと、日本の社会を学ぶことができました。勉強はたぶん45%くらい。日本の生活は55%くらい残っています。気持ち的には不満ですね。自分に不満でした。

* : 自分自身に。

C： なぜなら、専門的なこと、専門的な授業はそんなにマスターできなかったもので、ちょっと残念でした。

しかし、留学を通して日本での日常生活や日本人との接し方について分かるようになったことを評価している。

C： 最終的に、やっぱり日本を知るには、まず社会のことを学んだほうがいいと思います。勉強はいつでもできるんですけど。

日本で働く夫ともよく話すが、留学で学んだことや地域の人に教わったマナーなどを実際に適用すると「日本の常識が分かる人」だと言われることもある。留学で得た「survive」する「知恵」は失われず、現在の生活に活かされていると感じる。

再来日時には日本の大学院に進学したいという計画があった。今は出産、育児を中心に考えているが、将来的には育児が一段落したら奨学金を探して勉学に集中できる形で日本の大学院に進学したいと思う。そして国に帰ったら出身大学の日本語教育を発展させたいと思っている。

2.2. インタビュー協力者 D さん (4) のライフストーリー

2.2.1. D さんの略歴

協力者 D さんは、出身国の大学の日本語学科 1 年次修了時に選抜試験を受け、奨学金を得て大学に約 1 年間の留学をした。大学卒業時には結婚を考えていたので、就職せず自営業などをして、3 年後日本で働く夫との結婚を期に来日した。調査時には夫が働く東京で、7 歳と 1 歳 8 月の 2 児の育児をしながら、翻訳や通訳の仕事をしていた。留学終了後十数年が経過していた。

2.2.2. D さんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

D さんの父親が日本留学経験者だったため、子どもの頃から日本の本や絵本などが身近にあり、日本に興味があった。日本から来た父のお客さんとの接触経験から、「大きくなったら日本語や日本文化が勉強したい」と考えるようになった。

高校卒業時は国内情勢の影響で大学が閉鎖されていた時期ですぐに大学に進学できなかった。パソコンの専門学校に行ったり、ボランティアの先生が教える私塾で日本語を勉強したりしていた。大学が選べるようになって、大学で日本語を専攻することになった。日本語学科の一期生だった。1 年次に日本への短期留学の選抜試験があったが、日本語の既習歴のあった D さんは有利だった。面接や書類審査を経てたった一人の奨学生として選ばれ、地方都市 α 市にある J1 大学に 1 年間留学することになった。奨学生に選ばれたのは「宝くじに当たるみたいな感じ」だった。

《留学中の生活》

外国に行くのも、一人暮らしも初めてだった。大学で 1 年間教科書で勉強しただけの日本語だったので、留学前は不安だったが、期待も大きかった。

D： 自分がテレビとかで見てる日本が実際に見れることとか、そういうことで、すごいわくわくしてました。不安もありますが、すごいいっぱい楽しみにしてました。

実際に見た日本は、空気や道路もきれいで交通も便利だったが、出身国との違いも多く驚くこと

もあった。到着直後は留学生担当の教職員に暖かく迎えられ、「自分の親戚のところに行った」ように感じ、安堵した。日本語は教科書でしか勉強していなかったので、最初は早口や小さい声で話されると聞き取れず困ったが、「やればできる」と思って頑張った。

日常生活で困ることはあまりなかった。寮も立派で、居心地がよかった。

D： 寮で一緒に生活する友達もみんな優しいから、ほんとに楽しい一年間でした。寮の中でも、イベントをやったりして、ウェルカムパーティとか最初やって、すごい楽しかったです。ハロウィーンとか。そう、いろいろ自分の国の料理を作ってみんなで食べたりとかして、とてもいい思い出がいっぱいできました。

10月に来日したので慣れない寒さに苦労したが、父親の友人に炬燵をもらおうと、炬燵のない留学生の多くがDさんの部屋に来て過ごしたのもいい思い出である。

Dさんが留学した当時奨学金受給者はアルバイト禁止と言われていたので、アルバイトはしなかった。家族からも1年だけだから仕事よりもいろいろな体験をして帰るように言われていたので、父親の友人を訪ねたり、北海道、京都、名古屋などを旅行した。

思っていたことと違ったのは、J1大学にはDさんのような1年間の短期留学の留学生がいなかったことだ。

《留学生としての学修》

Dさんが留学した十数年前は、大学の受入体制もまだ十分ではなく、日本語の授業は学部留学生向けの上級と、大学院入学前予備教育としての初級しかなく、Dさんのレベルに合う日本語クラスは開講されていなかった。仕方なく上級の授業をとったが、日本滞在・日本語学習歴の長い学部留学生と一緒に勉強するのは大変だった。

D： 私はまだ初級なんですけど、上級や中級の人たちと一緒に混ざってやることになって、ちょっと大変でした。でも、大変というか、自分が追いつくようにやらなければと思って、一生懸命できるかぎりまた勉強して、帰る時にはそれなりに、日本語は身につくようになってきました。

また、人前で発表したり意見を言ったりする機会がない自国の教育システムとの違いにも戸惑った。

D： 最初は人の前に立つのも勇気がなくて、それにプラス、自分が書いた文章をみんなの前で言うというのは、すごい大変なことでした。恥ずかしかったです。あとは、パソコンですね。パソコンの使い方なんかも、私の国はそんなに発達してなかったので、向こうでもあんまり私はできなかった。ここに来てパソコンのことやったりしたんですが、それはすごい難しかったです。

日本人学生向けのクラスも聴講した。聴講だったため試験をうける必要がなかったので、プレッシャーはなかった。

D： 指導教員の先生の授業とかすごい楽しくて、あの時交流がいっぱいできましたし。

この授業のグループ活動で、Dさん自身がテーマとなって国の文化、食、服装などについていろいろ聞かれたりしたのも楽しかった。

1年間の留学を通して自分自身の日本語の上達も感じたが、留学は自分そのものが変わるような経験であった。

D：最初に比べれば、やっぱり、人の前でちゃんと話せるようになったし、大きい声で話せるようになって、自信をもって生活できるようになりました。新しい自分ができたみたいな感じになりました。

*：来る前と、日本語だけじゃなくて自身が変わったってことですね。

D：そうですね。全部変わらして、自分自身が。日本語もやっぱり最初の頃に比べたら、すごい聞き取りもできるようになって、普通のトーンで話しても少しわかるようになって、自分の方からもちゃんと少しはできるようになりました。

《人間関係》

別のプログラムであるが同国人2名と一緒に来日したことは心強かった。留学生や日本人学生との友人関係も良好だった。

D：友達の関係も、みんなは優しく、日本人の友達も優しいんですが、寮で一緒に生活する友達もみんな優しいから、ほんとに楽しい、一年間でした。

*：日本人の友達もけっこういました？

D：日本人の友達もいました、けっこう。私のところにも遊びに来たりして。でも、日本人よりは一緒に住んでる寮の友達とか、もっと会う機会が多かったです。一緒にどこか遊びに行ったりとか。

日本語の授業でも中国人留学生に漢字の勉強を手伝ってもらったりした。今も連絡を取り合う留学生仲間もいる。

留学生サポートのボランティアとして寮に毎週来ていたXさんにもお世話になった。

D：Xさんが毎週来たりして、分からなかったこととか、聞いたりして、あとXさんがいろいろなところに連れて行って、実際に教えたりしてました。

Xさんとは今でも年賀状のやり取りをしており、東京に引っ越した後Xさん宅で当時の留学生仲間が集まったりして交流が続いている。

また、近隣住民のVさんに花火大会に浴衣を着せてもらったり、二十歳になったDさんの成人式に着物を着せてもらったりしたことが最も印象深い思い出の一つになっている。Vさん夫妻とはよく連絡をとっており、α市を訪問すると今も暖かく迎えてくれる。

指導教員をはじめ教員との関係も良好だった。指導教員には授業外でもいろいろな所に連れて行ってもらったり、帰国前には国で習っていた竖琴の演奏会を開いてもらったりした。指導教員とは今でもDさんの自宅で会ったり、一緒に出身国にも行ったりするなどの繋がりがある。

《留学後から再来日まで》

留学後は出身大学の2年生に復学した。留学による日本語の上達と言う点では、留学しない学生と比べて発音がきれいで自然な話し方だと言われた。スピーチコンテストでも優勝した。3年後出身大学の日本語学科を卒業した。

日本語教師になりたいという気持ちもあったが、結婚を考えていたので就職はせず自営業に就いた。当時は出身国と日本との関係もそれほど盛んではなく、日本語学科を卒業してもツアーガイドなどしか就職の選択肢がなかったこともある。父の勧めもあって小さな酒屋やレストランを経営し

た。大学卒業の3年後に結婚し、日本の地方大都市β市で働く夫と生活するため来日した。

《再来日後の生活》

来日直後は特に何もしていなかったが、和食を学びたいという気持ちからほどなく日本料理店でアルバイトを始めた。日本での初めてのアルバイトだったが、システムになかなか慣れず苦勞した。

妊娠したため約1年でアルバイトをやめ、第一子を出産した。

リーマンショックの影響を受けて夫がβ市の会社をやめ、新たな仕事が見つかった東京へ引越した。そのまま専業主婦を続けることに不安を感じ、自分のできる仕事を探した。

D： 私もそのまま子育てとか主婦になるのが、ちょっと不安で。自分が勉強したこと、大学まで卒業できて、何も役に立たないのはちょっとつまらなくなって、不安で。それで、ある会社で面接することになりました。そこは、日本語翻訳とか通訳、出身国の言葉の先生、募集しているところ。もともと先生になりたかったので、日本人に自分の言葉教える先生もすごいと、考えてて。それでそういう会社に最初に登録して、面接も受かって、そこで日本人たちに国の言葉を教えることになりました。

*： そうですか。しばらく先生をしてたんですね。

D： それから、通訳もやったり、簡単なことから翻訳もやり始めたりしてて。私も自分が大学まで卒業して何もやらないと、自分の国のためにも日本にも何も役に立たない。自分が架け橋になりたかったから、自分の国のためにも何かできることはやりたいですね。それで、やっと就職できて、仕事できて、楽しかったです。

*： けっこうニーズもあるんですね。

D： そうですね。私がやり始めた頃からどんどん日本と国の関係もよくなって。前よりは政治も変わったりして、それから仕事もどんどん増えてきて。(中略)

*： 今も続けて。

D： 続けてやっています。翻訳とかはお家でもできる。通訳はあんまり、子どもが二人になってて。

預けられる時間帯なら、ちょっとだけ下の子にも一時保育、預けたりしてやっていますが。翻訳の仕事が多いですね。

福祉関係からアニメ、ビジネス関係など幅広い翻訳を手掛けている。

D： 勉強していても使わないと忘れてしまいますので。翻訳とかすることによってもっと字とか、漢字とかわかるようになって、すごい。だいたい見たらすぐわかるようになって。それはとてもいい仕事です。勉強にも繋がっているから。

この他、大使館などのイベントで声がかかれば竖琴の演奏などもやっている。

《日本での子育て》

第一子が5歳になる前に夫婦で今後のことをいろいろ考えた。出身国の情勢も変わり、日本にいた同国人も帰国して転職する人が増えた。国に帰ることも考え、母語と日本語の2言語で育てた子どもの発話が遅いのが心配だった。Dさん夫婦は子どものことを中心に考え、教育でより手厚い支援が受けられる日本を選んだ。子どもたちが自分で進路を決める大学進学くらいまでは日本にしようと考えている。

今は二人の子どもの子育て中心の生活だが、日本での子育てにも苦勞がある。

- D： 学生の時に比べたら、今は苦勞。全部が初めて初体験みたいなことで。(子どもの)先生たちと今でも面会していろいろ話して。あと、ママ友との付き合い。
- *： ママ友。けっこう難しいらしいですね。
- D： 幼稚園の時は、かなりひどいママとか会ったことがありまして。でも周りにも優しい方が多いから、あの方たちが守ってくれて助かったことが。
- *： 日本人同士でも難しいらしいから。
- D： そうですね。私は最初、区に住んでいて、息子が通っていたところは、外国人が珍しくて、息子しかいなかったの。でも外国人の私は少し日本語できるほうだったので、そんなにだったんですが。ママ友は日本人同士でも難しい。いいママもいれば、ちょっと。
- *： 合わない人もいる。
- D： でも、あの時からずっと付き合っただけで今でも姉妹みたいになっている方もいます。それで去年彼女と娘さんと女性ばかり、おばあちゃんと三人で私の国に。
- *： 行ったんですか。へえ。
- D： どこの国でもいい人、悪い人が。そういうのあるから、それは気にしないようにしています。

そして、日本での生活について次のように付け加えた。

- D： どんなことでも日本は基本があるから、慣れれば大丈夫なので。規則とかルールとか守れば、そんなに大変なことはないかなと思って。

《留学を振り返って》

Dさんは1年間の留学に非常に満足していると、振り返った。

- D： あの時若かったし。でも大冒険でしたね、私にとっては大冒険でした。いろいろなことが初体験ばかりで。でも、それがあって私は今のように自信を持って言えるようになったから、それが自分にとってはほんとに宝物のような体験でした。あとは、あの時周りの方々とか、先生方がすごく優しくしてたから、それがあって、心も強くなって、日本はもっと好きになって。東京はやっぱり全然違います。なんか付き合い方が違って。
- *： 最初はα市のほうがよかった。
- D： もし東京だったらそんなにいい印象があったかわからないですが。みんながすごいあったかいから、自分がどんなに不安があっても、そういうことがあるから、乗り越えられました。いろいろな苦勞を。今でもα市が大好きです。

留学前にもっと日本語ができればよりコミュニケーションがとれたかもしれないと思うこともある。

- D： ちょっとだけの日本語だけで、でもずいぶんコミュニケーションもできて、ずいぶん一年間楽しく過ごせたので、何よりもよかったと思っています。
- *： 留学中やっておけばよかったと思うようなことはありますか。
- D： 私は、かなり怖がり屋なので、自分のほうから声をかけたり、苦手なタイプで。なかなか友達が。恥ずかしがり屋だから。自分からもっと自分の方から挨拶して、コミュニケーションとってれば、もっと友達とかできたかなと思って。それだけ後悔しています。

日本で子育てをしながら翻訳などに携わっている現状にも満足している。

D： 自分ができること、海外にいながらでも国のためにとか、日本のためにとか、両国のためにやりたかったの、それが実現できて、今満足しています。

今後の希望は、子育てが一段落したら、大学などで勉強しもっと活躍できるようになりたいということである。

D： まだまだ日本語は難しいから、これからも勉強したいことがたくさんあるから、もっともっとできるようになりたいです。私は結婚することを選んだから。実はほんとは大学とかで続けて勉強したかったです。(中略) もしこの子たちはちょっと楽になったらまた自分が勉強したいなって。大学とかで。

2.3. インタビュー協力者Eさん (5) のライフストーリー

2.3.1. Eさんの略歴

協力者Eさんは、出身国の大学の日本語教育学科4年次に交換留学生として約1年間J1大学に留学した。出身国の大学卒業後、出身国の塾で約半年間日本語を教え、日本の大学院に留学する夫とともに来日した。来日後はδ市で主婦として生活する傍ら、科目等履修生として日本語や専門科目を勉強するほか、ボランティアでδ市在住の同国出身者に日本語を教えたり、その子どもの学習支援を行う活動をしたりしている。調査時の1か月後に出産予定であった。

2.3.2. Eさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

Eさんが日本語に興味を持ったきっかけは出身国で連日放送されていた漫画やアニメで、そこで描かれる風景や文化に関心を持った。高校で3年間日本語を学び、教師になりたいという希望があったため、出身地の大学の日本語教育学科に進学した。高校の時は日本語は英語に比べてやさしいと思っていたが、大学で勉強すればするほど難しく感じるようになり、教師になるのは難しいとさえ思うようになった。

しかし、日本が好きで「憧れ」であったため、行くチャンスがあれば行きたいと思っていた。J1大学への交換留学前にも1か月のインターンシップや約2週間の短期研修プログラムなどで来日しており、どの大学でもいいのでより長期の留学に挑戦してみたいという気持ちがあった。

交換留学の前年にJ1大学の学生と地域ボランティアがEさんの出身校を訪問しており、そこで友達となった学生と日本で「会いましょう」という「夢の話」が「交換留学」という形で叶うことになった。

《留学中の生活》

留学前は自分の日本語能力で生活できるか不安だった。また、奨学金がなかったため、アルバイトができるか、アルバイト代で生活できるかが心配だった。

来日経験もあったので、留学当初困ったことは経済面だけだった。自国とは格差があるためアルバイトは不可欠だった。アプリや電話でバイト先を探したが、イスラム教徒の女性が頭髪を隠すため着用するヒジャブを被っていることなど宗教上の問題もあってなかなか決まらず、結局先輩留学生が働いていた居酒屋でアルバイトをすることとなった。主として厨房での仕事であったが、それまで調理経験がなかったため店長から厳しく指導されながら徐々にシフトを増やし、留学終了時まで続けた。アルバイトを通して、自国とは異なる点も多く感じた。

E: 私も一回、自分の国でバイトしたことがあるんですよ、ホールで。大変なのは、やっぱり日本だと、バイトしながら同僚と話すとか、あまりよくない。そして、もし仕事がない時にも何かしてる。

*: ふりをする。

E: 盛り付けとかも。(中略) 盛り付けの時もきれいじゃないとダメ。

結果的にはこのアルバイト経験が日本社会や日本人との接触の仕方などを知る上でも、現在の主婦としての生活にもためになったと思う。

さらに、経済的な不安から日本語学校がEさんの出身校の学生を受け入れる短期プログラムの通訳・翻訳のアルバイトも引き受けた。自分の日本語能力を高めるためにいいという考えもあった。

アルバイトを通して感じたことは「自己管理の難しさ」である。

E: 私の考えが甘かったんですよ。なんとかなるかなって思ったんですけど、いや、難しいですね、バイトをしながら勉強するというのは。

アルバイトと勉学との両立は予想以上に難しかった。

《留学生としての学修》

留学生向けの「日本語」の授業はJ1大学では最も上級のクラスで難しかったが、ついていけた。チャレンジしたいという気持ちもあって、日本人向けの専門科目も面白そうなものを履修してみたが、専門用語が多くあり、聞き取れないことも何度もあった。授業の最後を書くコメントシートなど、日本人向けの授業をとったからこそ分かった違いもあった。また、思っていたのとは異なる光景にも遭遇した。

E: 最初に思っちゃったのは、日本人ってすごい勤勉で、まじめという偏見の気持ちがあったんですけど、実際に大学で授業をとったら、寝ている学生がいっぱいいて、びっくりしました。すごいショックで。自分の国で見たことない風景というか。

*: そうなんだ。

E: はい。たぶん自分の国で、それがあったら、すぐ怒られる。(中略)そして、国の学生と比べると、私の国の学生ってすごい積極的。

*: ああ、そうですね。はいはい。

E: でも、日本人の学生はたぶん恥ずかしがりやかもしれないので、意見をあんまり言わない。だから、私、意見言いたかったんですけど、

*: 遠慮したの？

E: そうそう。周りを見て。でも、手をあげなかった。

*: そうなんだ。

E: なんかえらそうに見えるかな、もし手をあげたら。

このように、周りを観察しつつ、自己の行動を調整することもあった。

日本語の上達は、専門科目で苦勞していたこともあり、自分ではあまり実感できなかった。日常会話と専門分野の学修で使われる日本語の差を感じた。

《人間関係》

来日前J1大学からの訪問団の学生と友達に短期間でなれたので、すぐ日本人の友達ができると

思っていた。

E： (訪問団の)みんなと仲良くできたので、日本人ってすぐ仲良くなれると思いきゃって、実際ちょっと距離を縮めるのは、人それぞれなんですけど、時間がかかる。

また、アルバイトで時間的な余裕がなかったこともあるが、宗教上のこともあって、友人たちと行動を共にできないこともあった。

E： 最初に思ったのは、宗教と文化。異文化はそんなに問題ないかなと思ったんですけど、実際に日本人の友達にどっかで誘われたりすると、いやあ飲み会行けないな、アルコールも飲めないな、あそこは遊べないなとか、お祈りの時間もありますし、それはちょっと残念で。

*： そうだね。一緒には遊べない。

E： 私もけっこうちょっと厳しいので、食べ物、肉とか。だから遠慮しちゃう。もし誘われたら、Eさん何食べるとか。メニューに載っていないことを必ず店員さんに聞かないと。だから、もし迷惑かけたらどうかと思って、あまり。

*： 誘われても。

E： だから、断るばかり。

特に、飲酒については嫌な思いもあった。

E： 若者だと、クリスマスとか、バレンタインとか、みんなよく飲むんじゃないですか。

*： そうそうそう。日本人の学生。

E： だから、私ちょっとそれが嫌で。

*： なるほど。そういうのがちょっといろいろな人と仲良くなるのに、障害だったかもしれないですね。

E： よっぽらってる人も一度も見なかったもので、J1 大に来て、すごくショックで、怖かったんですね。

多くの日本人の友人を作ることは難しかったが、チューターにも恵まれ、多くはないが良好な友人関係を築いていった。指導教員との関係も良く、履修した授業も面白かった。指導教員とチューターとともに遠出をすることもあった。チューターは帰国後友人とともにEさんの国に遊びに来るなど、現在も交友が続いている。

様々な国からの留学生とも寮生活やアルバイトなどを通して友達になった。特に、イスラム圏出身の学部留学生達にはハラル肉の購入に車で業務用スーパーに連れて行ってもらうなど、行動を共にすることが多かった。

また、J1 大学のある α 市の民間の人々にもお世話になった。特に、大学近隣に住む老婦人宅へはよく遊びに行き、ご馳走にもなった。

E： なんか辛い時に、その人たちに励ましてもらいました。なんか親代わりみたいな感じです。

また、出身国と交流がある J1 大学の元教員にもお世話になり、大きな影響を受けた。

E： 一週間に一回くらい、先生のおうちに行ったんですよ。で、そこでいろいろやって、勉強してて、いろいろ怒られまして。例えば、時間のこと。日本人は絶対遅刻しないとか。も

し来なかったら、連絡しないとだめ。日本人にとって常識のことを教えてくれました。

このように、多様な人々との関わりを持ち、様々な形で支えられながらの留学生活であった。しかし、期待とは異なる点も観察された。

E： 学部の事務ってちょっとですね。(中略)それは、期待はしてたんですよ、最初は。インターンシップの時、私、東京ディズニーランドでインターンシップしてたんです。おもてなしのこととか、学んだ。すごいですね、日本のおもてなしって。そのおもてなしじゃないって感じ。

所属学部の事務職員の対応は厳しく事務的に感じられ、期待とは違っていた。

《留学後から再来日まで》

帰国後卒業論文を提出して6か月後に卒業し、その年の12月に結婚した。結婚時には夫が奨学金を得て日本に留学することが決まっていた。翌4月に夫が来日し、5月にEさんも再来日した。卒業が決まった6月ごろから数か月、出身地の塾で約半年日本語を教えた。高校で教えるという選択もあったが、塾で子どもからお年寄りまで様々な人を教えるのは楽しく、面白かった。

E： 塾だったら、いろんなレベルが教えられますし、私、その時N2持っているのですが、N3からN5まで教えられます。プライベートのクラスも教えられますし。

塾のオーナーは日本人で、再来日後の市まで会いに来てくれたりした。時給も高校より高いので、帰国したらまたこの塾で教えたいという希望もある。

《再来日後の生活》

再来日後約半年の主婦としての生活はバイトもせず勉強もせず退屈だった。半年後に夫の在籍する大学の科目等履修生となり、日本語と専門科目の授業を履修した。1年ぐらい日本語は勉強していなかったため心配していたが、プレイスメントテストの結果最も上級のクラスになった。専門科目も以前より問題なく理解できたが、妊娠したため次の学期は継続しなかった。

また、夫が在籍する大学には多くの同国人とその家族がおり、主として同国人の主婦に対してボランティアで日本語を教えた。日本語ができない彼らは何かとEさんを頼ることが多く、その解決策として彼らが日本語を覚え、人を頼らず自分の力で動けるようにしたいと思ったからだ。

E： やっぱりみんな退屈ですよ。日本では近所の人とかも日本人なので、だれも知らないし、かわいそうですよ、ほんとに。ひきこもる主婦もいる。ストレスがたまって、結局帰国しちゃったみたいなの。

*： そっか。

E： 旦那さんは、理系の人は忙しいでしょ。

*： そ、忙しい。ずっと実験とか。

E： そうそう。だから、話す相手がなくて。ずっと友達といるのもね。

*： 同国人コミュニティーだったら、ちっちゃいから、それも気、遣うよね、なんとなく。

E： この機会(日本語教室)があったら、みんな仲良くできて、会話もできる。情報収集もできるし。

*： すばらしい。

E： 私も楽しい。幸せになれるから。

Eさんは一人一人のニーズに合わせて教材を作るなどの工夫をし、それが自分自身の宝物となっているという。出産が近づいたので日本語教室はやめたが、自分のブログで自作の日本語教材を公開している。

さらに、大学のプログラムで、先生に頼まれて、同国出身の子供たちに母語を教えたり、教科の学習支援を行ったりしている。これらの活動を通して、同国人から頼られる存在となった。

しかし、Eさんは交換留学で日本人との接触の仕方を学んだが、現在の状況は同国人との接触について逆カルチャーショックを受けている感覚だという。

E：日本人と付き合っ、だんだん、同国人と付き合うのが苦手になってくるんです。日本人はすごく気を遣うじゃないですか。私の国の人、逆にマイペースで自己中心とか。だから大変でした。

以上のように、再来日後は自分の日本語能力を活かし、同国人への支援する立場になり、頼られつつも自分自身の認識の変化も感じている。

《留学を振り返って》

最後に、交換留学をどう評価するかを聞いた。

E：すごい、私の人生で、一番大きい影響かな。

*：けっこうインパクトが。

E：インパクトがすごくあるんですね。私も日本に来る前に一番気づいたのは、私の性格、すごく悪かったんですが、自己中心で、思いやりもないし。だから、日本と接触して、留学して、どう説明するかな？ 私、イスラム教徒なんですけど、日本に来て、また、イスラム教徒になれるって感じ。なんか丸くなる。

*：はあ。ほんとうのイスラム教徒になる。

E：なった気がする。食べ物に関して、昔はそんなに意識はなかったんですけど、日本に来て、ハラルとか意識しましたね。人との接触とかも。日本人とだけじゃなく、いろんな人とか。日本人って人のことをすごく気にする。

*：そうかもしれない。

E：だからすごく気を遣う。それはいいことで。私はそれがないところだったんですよ。だから、学んですごくいい人間になれるかな。

留学中にやりたいことはやりきったという感じがある。

E：すべて感謝する。最初は奨学金があればよかったかなと思ったんですけど、奨学金をもらったら、たぶんはバイトしないかな。性格もまだそのままかもしれないです。

*：やっぱり苦労したから。

E：苦労したからこそ、勉強になる。新しい自分になれる。

*：苦労はお金を払ってでもやらないといけないってこと。

E：ですね。苦労なんですけど、逆に考えると、一番必要、私にとっては。

苦労もあったが、苦労したからこそ留学は「新しい自分」になるような大きな影響のある体験であった。

《将来の展望》

アルバイト経験が現在の生活に役にたっていると前述したが、逆に知っているからこそ「日本企業では働きたくない」という気持ちもある。結婚していなかったら働いたかもしれないが、子育てしながら働くことが日本ではシステムの的に難しいと感じるからだ。出身国では、どんな仕事であれ、職場に子供を連れて行ってもかまわないという環境がある。

これから数年は子育てが中心であろう。進学したいと思っていたが、それは大学の教員になりたかったからで、今その気持ちはあまり強くない。心待ちにしていた子どもができることが一番うれしいことなので、その後のことはまだわからないというのが現在の気持ちである。ただ、卒業後の経験から「教える」ことが好きだということはわかったので、チャンスがあれば日本語を教えたいと思っている。

2.4. インタビュー協力者Fさん（6）のライフストーリー

2.4.1. Fさんの略歴

協力者Fさんは、出身国の大学の日本語学科3年次に交換留学生として約1年間J1大学に留学した。帰国後出身国の大学で1年間勉強した後卒業した。卒業後に日本人との結婚が決まったため、出身国では就職せず、再来日までの約1年間自営業を営む実家の手伝いをしながら、日本語の個人教授などをした。来日前に現所属先である専門学校の仕事が婚約者の紹介で決まった。12月に結婚し、翌4月から専門学校での仕事を開始し、調査時には約1年が経過していた。

2.4.2. Fさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

高校では理系コースであったが、理系はあまり得意ではなく、科目としては英語が好きだった。英語は既にコミュニケーションがとれる程度にできたので、英語以外の言語を勉強したいと思い、大学では日本語を専攻することにした。また、出身国の給料は高くないが、日本語ができれば日系企業はベースが少し良いため、就職に有利だと考えた。

大学では日本語未修者向けのビジネス日本語学科に入った。自国での大学生活は勉強ばかりでつまらないと感じていたため、機会があれば外国で一度一人暮らしをしてみたいと思っていた。日本語を勉強していたので、日本で交換留学のできる大学の中から履修科目、寮などの条件を見て、J1大学に留学することにした。一緒に留学する同学科の友人もいたので安心感もあった。

《留学中の生活》

留学当初は慣れないこともいろいろあったが、自分にとっては習慣などは問題ではなく、困ったことはあまりなかった。たいていのことは便利な「テクノロジー」で解決できた。

留学前に考えていたことと違っていたのは自分自身の姿勢だった。留学前は、勉強を頑張ろうという気持ちだったのに、来日後やる気がなくなった。その理由はあくまで「個人的」な問題だとし、次のように述べている。

F： 留学して、毎日自分の生活、一人暮らししていますので、いろんなことを守らないと。時間も守らないと。

*： 初めての一人暮らし？

F： 責任、勉強の責任も守らなくてはなりません。でも、そんなによくできなかった。

*： できなかった。自分の生活の管理がうまくいかなかった。

しかし、留学生生活は楽しかった。留学生寮の近くの飲食店でアルバイトを見つけ、来日2か月後から働き始めた。自国では時給が安いのでアルバイト経験がなく、初めてのアルバイトだった。

F： 日本に来て、自分でバイトやってみて、よかったです。

アルバイトでは、材料の準備、掃除、注文、会計など全般をこなし、初めて得たアルバイト料に喜びを感じた。

F： 疲れましたが、お金もらった時、うれしかったです。

最初は大変で注文などを間違ったこともあったが、一回間違ったら「次は間違わないように」注意して徐々に慣れていった。店長との関係も良好で、現在も連絡を取り合っている。夫とは店長の紹介で知り合った。ここでのアルバイトを留学終了時まで続けた。

《留学生としての学修》

前述したように、留学前に持っていた「頑張ろう」という意欲は、来日後失われた。その要因は、先生でもなく、アルバイトの疲れでもなく、「自分の問題」であるという。初めての一人暮らしで、多くの責任が生じたが、うまく自己管理できず、遅刻や欠席をした。

F： 私は、留学の生活が終わって、留学した時のことを考えて、私は悪い学生だったと。

学習態度は自分でもよいとは言えなかったが、自身の日本語については、表現、漢字などは思ったほど上達しなかった反面、聞いたり話したりすることには上達を感じた。上達を一番実感したのは「発表」の時である。

F： 自分で全部考えて書いて、話して。最初は難しいな、できると思わなかったんですけど。

自分で全過程を主体的にやったことへの達成感が感じられた。

《人間関係》

自分自身の性格は明るくなく、人間関係をつくるのはあまり得意ではない。しかし、せっかく日本に来たのだから、友達もつくり、いろいろな活動に参加したいという気持ちはあった。

F： 自分が（精神的に快適だと感じる）comfort zone を出て、いろんな人に会って、話すのが、ちょっと怖い人がいます。

*： ちょっとエネルギーがいるってこと？

F： エネルギーです。でも、その人たちは自分のところだけにいたいと思うわけではなくて。簡単なことではないです。だから、エネルギーを使います。

*： 普通の人に比べて？

F： 態度、自分の態度を変えるのは大切だと思います。他の留学生は世界中から来ますから、自分の国だけではない。いろんな習慣、いろんな言語、自分の態度はとても大切だと思います。

人間関係を構築するのは得意ではなかったが、態度の変化のおかげか、期待以上に世界中からの友人ができた。また、留学生寮のチューターをはじめ、日本人の友人もできた。その理由の一つとして留学生寮のチューターがある。

F： J1 大の留学生を助けるシステムはとてもいいと思います。他の大学には、それはありません。

*： あ、そうですか。例えば、どんな？

F： チューターはいても、留学生と一緒に生活するわけではありません。勉強だけ。

*： 勉強を助けてくれるチューターはいるけど。

F： ここのチューターと一緒に暮らして、これはとてもよかったと思います。

勉強だけでなく生活を共にする友人たちと学園祭に一緒に行ったり、近隣に小旅行をしたりしたことが留学の思い出として印象に残っている。これらの友人とは今でも連絡を取り合っており、調査時の前月、東京で元留学生のパーティをし、チューターも含め約 30 名が集まったという。

地域の人との交流で印象に残っているのは、同国人の小学生 1 名の学習支援ボランティアをしたことである。小学校からの依頼を大学を通して受けたが、同国出身の交換留学生と手分けして約 6 か月間授業に参加して支援を行った。

F： 実は、自分がどういう、どのくらい助けられるかわかりませんでした。行って、その子に、何か問題があるか、生活とか、勉強のことだけでもいいですので、私といろんなことを話す、話せる。それだけでも、ちょっと安心したかな。それだけ。

その後この小学生とは会ってはいないが、大丈夫だったかどうか気にかかっている。

《留学後の生活》

留学終了後 1 年間出身大学で勉強して、卒業した。卒業後自国で就職活動はしたが、当時付き合い合っていた日本人から日本で出身国の留学生の多い専門学校がスタッフを募集しているという話があり、応募して就職が決まった。卒業後約 1 年は実家の自営業を手伝いながら、日本語に関心のある人に日本語を教えるアルバイトをした。結婚を機に来日し、翌 4 月から専門学校で働き始め、約 1 年が経過した。

専門学校の同国人留学生は寮生活をしており、生活や勉強、アルバイト、お金の使い方などいろいろな相談を受けている。その点で自身の留学経験は今の仕事に役に立っていると思う。

F： みんなだいたい、初めて海外に来ました。いろんなことに慣れていません。だから、何かあったら私に相談に来ます。

次年度はさらに同国人留学生約 20 人が日本語学校での準備を終え専門学校に入学してくる予定で、現在その準備をしている。

同僚は全員日本人なので、自分の日本語能力が現在問題だと感じている。

F： もし日本で仕事があったら、自分の日本語の能力、とても大切。今私はまだまだだと思います。

*： そうね。やっぱり会議とか、報告書とか書くのは。

F： 学生の時と働く時、全然違いますね。

*： そうですね。言葉も違うし。やっぱりそれは違うよね。

F： でも、先生たち、私の同僚にはその問題はわかっていますので、いろんなことを助けてくれます。安心してますけど、自分のこともわかっています。

*： 何が足りないかがわかっている。

F： はい。だから頑張らないといけない。

夫の仕事のこともあるので、当面は日本での生活だと思う。今の仕事は3、4年は続けたいと思っているが、将来のことはまだ何も決まっていない。自分自身の日本語能力の向上のことも考えて、大学院に進学したいという考えもある。

《留学を振り返って》

自分自身の日本留学についての評価を聞いた。

F： よくないことより、いいことのほうが多いと思います。よかった点は、自分の comfort zone、自分のやったことのないこと、したことないことをやってみること。それはよかったです。

よくない点は単位互換がうまくできず、卒業が1年遅れたことぐらいである。やればよかったと思うことは「やっぱり勉強」で、授業にきちんと出席することである。また、サークルにも入ってみたかった。

2.5. 考察

本節では、4名の語りから読み取れる留学の意義、再来日した現在の生活との関連、留学評価と日本語習得との関連について考察を加えたい。

日本語専攻の4名にとって、大学在学中に選抜されて実現した1年間の日本留学はまたとない貴重な機会であった。しかし、留学中の学習環境という点ではCさんもDさんも恵まれなかった。

十数年前に留学したDさんは短期留学生の受入体制が整っておらず、自分の日本語能力に合う授業が受けられなかった。奨学金が得られなかったCさんは経済的不安のためアルバイトに時間をさき、勉学に集中できなかった。Dさんは上級レベルの授業についていくのは大変だったが、帰国前には自分自身の上達を実感できた。一方、Cさんは勉学とアルバイトの両立が出来なかった自分自身に不満が残ったが、「留学経験者」への周りの期待から帰国後奮起して日本語を勉強したことがその後の上達に繋がった。

留学生活でEさん、Fさんがまず感じたことは「自己管理の難しさ」である。Eさんは「なんとかなる」という思いだったが、Cさんと同様にアルバイトと勉学を両立させるための自己管理の難しさを痛感している。Fさんは初めての一人暮らしで時間や規則などの自己管理が難しく、留学後学習意欲を失い、授業に遅刻や欠席をするようになる。

しかし、3名にとってアルバイトは大変でも、「してよかった」「最も役にたった」経験の一つとなった。Eさんにとってアルバイトは日本社会や日本人との接触の仕方などを知り、責任感を養い、主婦としての生活にも役立つ経験になった。Fさんにとっては、労働の対価という達成感を得る初めての経験であった。

全体として留学は「自己成長の場」であったと言える。Fさんは、性格的に人間関係構築が苦手であったが、「自分の comfort zone を出て、今までしたことをしたことないことをやってみる」ことによって、自分自身の姿勢を変え、多くの友人を得たことなどが肯定的な留学評価につながっている。Cさん、Eさんは、奨学金がなかったからこそ、アルバイトをし、その苦勞を通して、いやだった自分の性格が変わり、「思いやり」の気持ちを持てるようになった。Eさんにとって、留学は「新しい自分になる」ような体験で「すべてに感謝」しているという。Eさんがいう、留学が「新

しい自分になる」経験というのは八若（2019）のインタビュー協力者も同様の表現を使っている。1年間であっても、留学はそれまでの自分を変えるような大きなインパクトのある体験として評価されている。

4名はJ1大学留学中は現在のような形で再来日するとは考えていなかった。そして、再来日後Eさん、Fさんは日本在住の同国人の支援する立場になった。Fさんは仕事として留学生サポートをする立場になり、Eさんは自ら考え、日本語ができずに生活が制約される同国人に日本語を教え、その子どもたちの学習支援を行っている。これらの活動には、日本語能力と留学経験が十二分に活かされている。

また、4名は、大学での学修以外にアルバイトや地域コミュニティとの関わりを通して日本社会や日本文化について多くのことを学んでいる。1年間という限られた期間の留学では、日本での経験一つ一つが日本に対する理解を深めるものとして認識されていることが窺える。留学経験から得た日本社会への理解と知識は再来日後の生活にも役立てられている。

さらに、経済面や学修面での苦労、教育システムや宗教、生活習慣の違いなどの文化差を克服し、「やればできる」という自信や自己成長を感じたことも大きい。また、もっと学びたいという意欲と、自らが学んだことを出身国、日本、広く社会に還元したいという強い意志を持ち続けていることも確認できた。

日本人学生を対象としたものであるが、奥山（2017）は約1年間の留学体験の効用を質的に分析し、留学生活でのコミュニティ参加とそこでの活動や達成感が大きな意味を持ち、留学後も自信と人生に対する前向きな意欲となるとし、これが留学経験の最大の効用であると指摘している。

日本留学を通して自信を得、現在も学習意欲や向上心を持続し、新しい局面に前向きに挑んでいる4名にも同様の留学経験の効用が認められよう。

また、様々な困難を克服し達成感や自信を得ていく過程には様々なコミュニティの人々との良好な人間関係があった。一つは留学生寮で生活を共にした世界各国からの留学生である。4名は寮生活を最も楽しい思い出として語り、そこで得た友人関係を保持している。もう一つは、地域コミュニティの人々との交流と支援である。それぞれにキーとなる人物がいた。Cさんの場合はアルバイト先の店長と近隣住民Zさんである。店長からは日本で仕事をするにあたって多くのことを学んだ。Zさんからは勉学、生活双方の支援を受けただけでなく、Zさんを通して人との繋がりを広げられた。Dさんは近隣住民のV夫妻と寮のボランティアXさんから様々な支援を受けた。これらの人々は2名にとって留学中安心して身を置ける居場所としての機能を果たし、現在も続く関係となっている。

久野（2017）は、編入留学生のライフストーリーを大学から仕事へのトランジションという観点から分析し、留学生のキャリア教育を考える上で卒業後転職などに際して抱える問題を共有する複数の他者の存在や居場所の必要性を提言している。再来日後問題を共有できる者として夫や同国人コミュニティなどの存在も心強いが、留学中に築いた良好な人間関係が引き続き同様の機能を果たすとともに新たな日本人コミュニティとの関係構築に踏み出す礎となっていることも観察された。

4名が留学中に構築した人間関係は大学が提供した接触機会が必ずしもきっかけではなく、先輩の紹介や偶発的なものである。日本人との人間関係を構築する上で日本語力が寄与したことは4名の語りから窺えるが、良好な人間関係を4名が築けた要因や構築のプロセスは本研究では十分に描出できなかった。追調査によって明らかにし、留学生教育の一環として人間関係構築に有効な方策

を検討していく必要があるだろう。

留学終了後の人生は直線的ではなく、社会情勢などの外的要因によって方向転換を迫られることもあるだろう。4名のように自身が思い描いていたものとは異なる選択を迫られた時、それぞれがその時その時遭遇する課題に対して決断をし、自らの道を拓いていかなければならない。本研究において留学がそのための自信や自己肯定感を得る場であることが示唆されたが、それをどのようにライフコースを通じて維持し、発展させていくかも探る必要もあると考える。

労働力不足の解消のため外国人雇用を拡大しつつある日本において、元留学生の就職も促進されている。しかし、単なる労働力としてだけではなく、日本で生活する外国人がよりよく生活するための支援は必要であり、その支援の担い手として元留学生が重要な役割を果たしている点に着目するべきであろう。日本での生活経験があり、日本語ができる同国人ならではのサポートの可能性は大きい。

八若(2018)は、日本語専攻の学生について、日本・日本語の専門家として日本の良き理解者となるだけでなく、将来理解者となる日本語学習者を育てる人材となる可能性も持っており、交換留学プログラムはこのような人材を育てるきっかけをつくる場となるという点で意義深いプログラムだと述べている。また、本研究で示されたように、留学経験と日本語能力を自分自身はもちろんのこと、他者の日本での生活をよりよくするために活かせる人材になりうることは今後さらに着目するべき点であろう。

再来日という現在の生活は、4名ともに留学中には予想もしていないことであった。4名は来日後遭遇することにその場その場で考え、新たに選択・決定し、対応している。家族の状況によって、今後の予測はできない。本節での4名の語りは、これからの生活においても、これまでと同様にその時その時で考え、道を切り開いていくであろうことが感じられる語りであった。

3. 再来日して日本語学校で学ぶ元留学生の留学評価

3.1. インタビュー協力者 G さん (7) のライフストーリー

3.1.1. G さんの略歴

G さんは高校入学前に日本語学校で日本語学習を開始した。高校でも日本語を選択し、大学はビジネス日本語学科に入り、3年次終了時から1学期間 J1 大学に交換留学した。留学前に何度か来日経験があった。留学終了後大学を卒業し、イギリス留学の準備をした。イギリスの大学院で1年間マーケティングを学んだ。帰国後日本で働きたいという思いがあり、再び来日し日本語学校で学んでいる。

3.1.2. G さんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

日本のアニメが大好きで「アニメ、見る時に、自分でちゃんと理解したい」と思って、高校に入る前に日本語学校で日本語を少し勉強した。高校でも日本語の勉強を続け、大学のビジネス日本語学科に進学した。

タイの所属大学には日本の J1 大学との交換留学の制度があり、3年生の時大学から勧められ、「いいチャンス」だと思った。試験を受けて選ばれ、1学期間留学することになった。留学期間は大学が決めた。

留学前に何回か日本に旅行に来たことがあったが、初めての一人暮らしで日本での生活に不安が

あった。特に、自分の日本語が通じるか、会話には不安があった。同時に一番期待していたことも「日本人と自然に話せる」ということだった。将来の仕事のため日本語を上達させたいと思っていた。

《留学中の生活》

J1 大学のある町は旅行で訪れた東京や京都などとは雰囲気が違って、静かで勉強にはいい環境だと思った。日本での生活で困ったことはなかったが、やはり会話は心配だった。

G： タイで日本語を勉強しましたが、前は実際に日本語を使うのはあまりないので、

*： 日本語、使う機会があまりない。

G： ないので、初めて日常生活で日本語を使いました。なので、不安でした。

個人的な感想だが、J1 大学のある地方の人のしゃべり方は速いと思った。

アルバイトはしなかった。日本語クラスのクラスメートや留学生寮で生活する留学生の友達ができ、留学生寮で毎週日曜日に一緒に食事をするイベントなどが印象に残っている。

地域住民との交流イベントにも参加した。お正月に門松を一緒に作るという行事が楽しかった。地域の国際交流パーティを通して同世代の日本人の友達もできた。

《留学生としての学修》

日本語のクラスは少人数で、アメリカ人や韓国人など多国籍のクラスだった。勉強はそれほど大変ではなかった。

日本語の授業のほか、英語で開講されている日本文学のクラスなどの専門科目も履修した。久しぶりに英語を使ったという感じだったが、先生はとても優しく接してくれた。

留学を通して日本語は上達したと思うが、期待したほどにはならなかった。

G： 期待と比べると、ちょっとしかありません。もっと上手になりたいという感じがあります。

*： もっと上手になりたいという感じが残ったのね。

G： まだまだ足りてません、みたいな感じ。

1 学期間の留学は「中途半端な感じ」だと思う。

G： 6 か月くらいは、ちょっと短いです。

*： やっぱりちょっと短すぎる感がある。

G： できれば1 年間留学したいなと思いました。

《留学後から再来日まで》

単位互換ができたため、帰国後すぐに卒業できた。

「最近の仕事は英語が必要なので英語ができたほうがいい」という母親の勧めで、イギリスに留学することにした。イギリス留学に必要な IELTS のための準備をし、イギリスに渡ってから1 年間英語を勉強した後、大学院に入った。大学院ではマーケティングを勉強し、1 年間で修了した。

イギリスへの留学は、勉強はよかったと思うが、気候が合わなかった。

G： 寒いし、暗い。曇ってるし、個人的にはちょっといやです。なので、日本のほうがいいかなって。

イギリスから帰国後、日本で働きたいと思うようになった。

- G： また日本に来た理由は、実は日本で働きたい、という希望があります
 *： 日本で働きたいという希望がある。それはどうしてですか。
 G： 実はタイで、新しい環境、過ごしたいなと思って。

何か新しい挑戦がしてみたかった。タイではチャレンジがないと思ったし、タイより日本のほうが自分の性格に合っていると思ったからだ。日本、イギリスへの留学を経て、「日本が一番いい」と思った。

ずっと日本語を使っていなかったので日本語能力は低下していた。日本で働くためにはN2が必要だと思い、半年前に東京の日本語学校に入学した。

《二回目の日本留学》

日本語学校は1～12のレベルのクラスがあり、来日当初は4のレベルだったが、今は10のレベルのクラスにいる。11、12のレベルの人は就職したり進学したりして卒業したので、事実上一番上のクラスだ。クラスはアメリカや漢字圏の学生など多国籍のクラスで、コミュニケーションはほとんど日本語でとっている。

- G： 日本に来てからは、自分がすごく頑張っただけ日本語しゃべって。

タイ語を忘れるほどだ。

授業は1日4時間なので、週3～4回カフェでアルバイトをしている。先生が話す日本語と実際の日本語の違いにまず戸惑った。

- G： 実際に日本人としゃべると、学校で先生としゃべるのは全然違いますね。実際に使うと。

初めてのアルバイト経験で、最初は同僚とのコミュニケーションにも苦労した。

- G： 最初からバイトした時には、なかなか慣れませんでしたので、ちょっと苦労して。バイトの同僚の話する時には全然通じられませんでした。

聞かずにやって失敗することもよくあった。

- G： 失敗することが、けっこう多いじゃないですか。で、あとは、自分がわからないことがある時に、自分の意識でやりましたが、それは失敗しました。
 *： え、自分の意識で？ 自分のやり方
 G： やり方、自分で。失敗します。よく先輩、注意されました。わからないことがあったら、ちゃんと聞いてって、言います。

苦労も多いが、このアルバイト経験は日本で就職するために役に立つと思っている。

《将来の展望》

タイやイギリスより日本が自分に合っていると思う点は「ルール」である。

- G： それは大好きな点。
 *： なるほど。ある程度、予定が立てられやすい。
 G： ちゃんと予定どおり。一番大好き。あとは、バイトで働く時にも、日本人のやり方、働き方はちゃんとやりますので。それは仕事をちゃんとやるって、それは一番大好きです。
 *： で、なんか合ってるなど

G： 自分に合っています。

日本、イギリス、日本となかなかできない留学経験を持つGさんだが、今は働きたいという気持ちが強い。

G： (留学は) いい経験になりますけど、個人的にはちょっとやりすぎじゃないかな、留学しすぎじゃないかな。

*： でも、他の人ができないことだから、

G： 確かにそうですけど。でも、過去を振り返ったら、卒業してから一度仕事したい、経験のために仕事をしたいと思います。

*： そろそろ仕事をしたい。

G： 勉強、もういいです。

日本で働く友人から直接話を聞くことはないが、日本での仕事は大変そうに見える。しかし、せっかく日本に来たから、できるだけ日本で働きたいと思う。具体的にやりたい仕事はまだよくわからないが、日本語を活かせる仕事をしたい。

G： 今考えるのは、通訳になりたいですけど。でも、ちょっと気持ちが変わったみたいな感じで。今ではまだわからないんですけど、できるだけ日本語で

*： 日本語を使った

G： 仕事をしたい。そういう感じです。

母親は帰国するのを待っていると思うが、まだ自分の気持ちは話していない。就職が決まったら話そうと思っている。「チャレンジも大事」だと思う。

最後に、これから留学する後輩に対して以下のようなアドバイスを述べた。

G： ちょっと短いんですけど、せっかく日本に来ましたので、できるだけちゃんと日本語をたくさん使ってください。まちがうことは考えずにできるだけ使ったほうがいいです。ちょっと考えすぎだったら、自分の能力は上達しないので、できるだけ頑張って日本語を使ってください。

3.2. 考察

GさんはJ1大学に交換留学する前に何回か来日経験があったが、初めての一人暮らしであることや自身の日本語に不安があった。来日後留学生の友人もでき、寮で行われるイベントにもよく参加し、楽しい留学生活をおくった。アルバイトはしなかった。交換留学は大学の方針で1学期間だったが、短すぎると思った。日本語も上達したとは思いますが、期待ほどではなかった。

大学卒業後母親の勧めでイギリスの大学院でマーケティングの勉強をした。イギリスは悪くはなかったが気候が合わず、帰国後日本で就職したいと思うようになった。タイでは挑戦がないように思うし、規律がしっかりした日本が自分にも合っているように思った。

大学卒業後日本語学習から離れていたため、日本語能力は低下していた。そのため、日本語学校で再び日本語を学び直すことにした。授業が1日3～4時間なので、週に3回程度アルバイトをしている。Gさんにとっては初めての労働経験だ。アルバイトを始めた頃は同僚の話が分からなかったり、失敗も多かった。苦労は多いが、将来日本で就職したいという気持ちがあるので、就職

に役立つと思う。二回目の留学では、タイ語を忘れるくらい日本語を使って、自分自身も頑張っていると思う。両親にはまだ日本で就職したい気持ちは話してないが、実現させたいと思っている。

2回の日本留学とイギリス留学の経験を持つGさんは恵まれているが、まだ自分の進むべき道を見出させていない。2回目の日本留学は、将来日本で就職したいという目標があるため、これまで以上に頑張っている。初めてのアルバイトでは苦労はあるが、就職に向けて学ぶことは多くある。

Gさんが進むべき道を見出し、計画通り日本で就職して自立することを期待したい。

第三章 海外在住の元非正規生の留学評価

大学間交流協定などに基づく1年未満の短期留学制度は、留学生受入促進のため英語で開講するプログラムや1か月未満の超短期プログラムなど様々な形で展開され、その成果は実施機関のプログラム検証として報告されている（小山2016、吉野2017）。専攻が日本語の場合、大学卒業後日本語力を活かせる日系企業に勤めるといった元交換留学生は多い。本章では、日本語専攻で母国の日本企業などで働く元交換留学生のライフストーリーを取り上げ、短期の留学が人生においてどのような意義を持つのか、日本語習得、人的ネットワークに着目して検討したい。

1. タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価（1学期間留学の場合）

本節では、1学期間（約6か月）の交換留学経験者3名を取り上げる。3名の略歴を表1にまとめた。

表1 インタビュー協力者3名を略歴

調査協力者	Aさん	Bさん	Cさん
高校での日本語学習	3年	無	3年
大学での日本語学習	T大学ビジネス日本語科（タイ）		
交換留学（日本語学習）	J1大学（中級前半）		
卒業直後の進路	外資企業	日系企業	日系企業
転職	日系2回	日系2回	無
現職場での日本語使用	低	低	高
日本語能力試験	無	N3	N3

1.1. インタビュー協力者Aさん（8）のライフストーリー

1.1.1. Aさんの略歴

Aさんは中学の時ゆかたを着るイベントに参加したことをきっかけに日本語を学び始め、高校では選択科目として日本語を学習し、大学はビジネス日本語学科に進学した。4年生の時大学間協定校のJ1大学に1学期間交換留学した。帰国後インターンシップを経て半年後に4年で大学を卒業した。卒業後インターンシップ先であったホテルに就職し、8か月勤めた後、日本企業に転職した。同企業で2年間働いた後、現在働いている日本企業に転職し、約2年が経過した。

1.1.2. Aさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

Aさんは中学の時ゆかたを着る活動に参加したことをきっかけに、日本語に関心をもった。中学3年生の時、ひらがな程度であったが、日本語を学び始めた。高校では選択科目で日本語を選んで勉強し、大学はビジネス日本語学科に進学した。その間日本に「旅行に行きたい」という気持ちがずっとあった。

「日本で勉強したい」という気持ちから、4年次にJ1大学に1学期間留学した。初めて海外に行く機会だったので、チャレンジしたいという気持ちがあった。

留学前は、自分自身の日本語がまだうまくできず日本での勉強についていけるか心配だった。楽しみにしていたのはホームステイで、日本人の生活を味わうことだった。

《留学中の生活》

来日時まず困ったのは、留学生寮に到着したのが夕方だったため、翌日スタッフが来るまで部屋のガスも電気も使えなかったことだ。3月末で6度ぐらいだったのに、シャワーも水だった。布団も枕も翌日買うことになっていた。空腹だったので、その日は留学生寮のチューターにお湯を借りてラーメンを食べた。大変だったが、今となっては「おもしろい、笑ってしまう思い出」だ。

来日前に思っていた日本との違いはあまり感じなかったが、初めて見るものも多く、自分が新しいことを知っていくのが「面白い」と思った。驚いたのは、来日初日に地震があったことだ。初めての地震だったので怖かったし、寮の壁にひびがあり修繕した跡があったのも怖かった。

日常生活は楽しかった。インドネシア、台湾、中国、ベトナム、韓国、アメリカなどいろいろな国の友達もできた。タイ語を勉強しているという日本人学生とも大学スタッフを通して知り合った。

1学期間だけの留学だったのでアルバイトのチャンスはなかった。地域の人との交流もホームステイ以外なかった。ホームステイは日本人の生活を初めて体験する楽しい機会だった。田舎の大きなお宅にタイ人の友人とホームステイした。ホストマザーと畑に行って野菜を植え、9月には食べられると言われたがその頃には帰国していて叶わなかった。一緒にカレーやお好み焼きやいなりずしを作って食べたのはいい思い出だ。

* 1 : 4か月、やっぱりちょっと短いと思いましたか。

A : とても短いです。

* 1 : 他になにか留学中の思い出みたいなのを、付け加えるとしたら何かありますか。

A : やっぱり初めてだったこともありますし、日本が、初海外、初日本、すべてが、新鮮で。全部が初めてのことばかりだったので、全部が珍しくて、面白くて。大学の雰囲気が好きだった。

* 2 : どうしてですか。

A : 騒がしすぎない。適度な、人の量が。ふつうの服でみんな来てる、勉強に来てる。

* 1 : あ、はいはい、こっちは制服ない。

A : タイと違うんだなあっていうのがとても印象が、雰囲気が残っていますね。

初めての留学生活は自国との違いを感じ、新しいことに日々出会う体験であった。

《留学生としての学修》

日本語のクラスは中級前半のクラスだった。中国、韓国、アメリカ、タイの多国籍クラスだった。他のクラスメートと比べて自分の日本語力に自信がなかった。初めての宿題で自分だけテーマを勘違いして全然違ったことをしてしまったのが恥ずかしかった。その後も説明する宿題が多かったが、いっぱい書くことがいい経験になったと思う。

日本語の教科書にはタイ語はもちろんなく日本語だけで、「頑張らないとわからないから頑張ろう」という気持ちになった。日本語の授業の中で漢字の授業が好きだった。中国人や韓国人の友達が速く書くのに対して自分は調べて書くため差を感じたが、連想を使って覚える方法が面白いと

思った。

日本語の授業以外では英語の授業が面白かった。教師があまり教えずに学生たちに自分のことをたくさん話すように仕向ける授業が面白いと思った。日本人学生と一緒に授業で、宿題がなくほっとできる授業でもあった。

日本語については、来日「初日はみんなが上手すぎてこわくて話す勇気もなくずっと黙っていた」が、4か月後の「さよならパーティ」の時には友達と日本語でたくさん話せた。

《人間関係》

日本での人間関係は良好であった。クラスメートの他にもインドネシア人や台湾人の友人もできた。留学生寮のチューターや友人たちとは一緒にお花見に行ったり、留学生寮で自分の国の料理を作りあってシェアしたりした。

日本人学生が「タイ語を勉強しているので、タイ人を紹介してもらえませんか」とタイ語で書いたメモを大学スタッフからもらい、タイ語を見たら嬉しくなって交流が始まった。この日本人学生とは今でも Facebook で近況を確認しあっている。

《留学後》

留学終了後自国の大学のカリキュラムとしてインターンシップをし、半年後4年で大学を卒業した。卒業後インターンシップ先であったホテルに就職し、約8か月働いた後、日系企業に転職した。同企業で約2年間働いた後、現在勤めている日系企業に転職し、2年がたった。転職の理由は給料である。

ホテルでの仕事では日本語はあまり使わず、日本人客でも英語で話す場合が多かった。次に就職した日系企業では、日本人マネージャーもタイ人マネージャーも英語ができたので、社内でコミュニケーションは英語で、日本語の通訳はいたがあまり必要とされていなかった。日本人マネージャーや本社へのメールは日本語を使った。現在の会社でも日本語使用の状況は同じである。日本語を使うのは特別の場合である。

A : 2年前、日本人のマネージャーはお客さんと、ベトナムと一緒に行きました。

* 1 : ああ、一緒にベトナム。

A : そして、ベトナム人の担当者は日本語を勉強したことが。たくさんしゃべりました。

* 1 : 久しぶりに話した。ベトナム人と日本語で。

一方プライベートでは、留学後毎年のように日本に旅行に行っている。関西に3回、九州など計5回行っている。次は東北に行く予定である。計画としては全都道府県に行きたいと思っている。

* 1 : 日本の、何がそんなにいいんですか。

A : 全部いいです。料理、料理、天気、観光

* 2 : 観光地？

A : 私、電車が好きです。

* 1 : あ、電車ね。(タイには) ないからね、あんまりね。

日本語学習を始めた頃からの「日本に旅行に行きたい」という希望は着実に実現している。

《留学を振り返って》

日本語を長い間勉強したのに、大学卒業後あまり使わないので忘れてしまい、今少ししかできないことを恥ずかしく思っている。

しかし、1学期間だけという短い留学期間でも現在仕事をする上で役に立っていると思うのは、礼儀やマナーなどたくさん日本人のことがわかったことだ。

また、日本留学を通して勇気や自信が得られたと思う。

* 2 : 留学に行ったこと、どうですか。

A : もし行ってなかったら、たぶん今もずっと自信がなくて、話すチャンスも自信がなく、勇気がなくてだったと思うんですね。行ったからこそ、今の形で話せるし、自信をもっと働いている。

* 1 : 自信を得たわけですね。

A : 日本に自分だけでも行けるし。

留学時に「時間が戻れるのなら、頑張ったのに」という気持ちもある。留学中にやりたくてもできなかったのはサークル活動である。いろいろなサークルの看板があって興味があったが、勇気がなくてできなかったことを残念に思っている。

1.2. 調査協力者 B さん (9) のライフストーリー

1.2.1. B さんの略歴

B さんは日本のアニメ、漫画、ゲームが好きで日本語を勉強したいと思い、大学のビジネス日本語学科で日本語の勉強を始めた。2 年次終了時に交換留学で J1 大学に 1 学期間留学した。留学終了後出身大学の 3 年生に戻り、4 年で大学を卒業した。卒業後日系企業に就職したが、2 度転職した。現在勤めているのも日系企業である。旅行が好きで、留学中にもいろいろなところに行ったが、留学終了後も 2 度日本を訪れている。

1.2.2. B さんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

B さんは日本の漫画やアニメ、ゲームが大好きで日本語を勉強したいと思い、大学から日本語を勉強し始めた。勉強を始めてみると、思っていたより文法が難しかった。しかし、言葉だけでなく日本の生活や文化をもっと知りたいと思い、2 年次に交換留学生として J1 大学に 1 学期（約半年）留学することになった。

留学前に不安だったことは、学習し始めて間もない日本語と初めての一人暮らしだった。逆に楽しみにしていたことは、観光地や博物館など日本のいろいろなところに行くことと、いろいろな日本料理を食べることだった。

《留学中の生活》

一緒に日本留学することになった同級生と空港から留学生寮までバスとタクシーを乗り継いで来た。

最初に困ったのは、契約前は寮でインターネットが使えず、着いたことを家族に連絡できなかったことだった。日本人学生の携帯を借りて家族に連絡をした。期待と違っていたのは、大都会育ちの B さんにとって α 市が静かで、デパートやコンビニが少ないことだった。

来日時寮には必要なものがほぼそろっており、日常生活は快適だった。授業も 10 時から午後 2 時半までが多かったので、時間に余裕があった。中古の自転車を買って、授業後一緒に来日したタイの友人といろいろなところに行くのが楽しかった。1 学期間だけアルバイトできるところはな

かったのでアルバイトはしなかった。

近くにスーパーマーケットもあり買い物には不自由はなかった。また、大学の食堂の料理がおいしかった。カツカレー、親子丼、ラーメンが好きだった。そのせいか日本滞在中に6キロ太った。

大学の国際交流イベントや研修旅行にも積極的に参加した。印象に残っているのは、研修旅行で行った海岸の町で水族館を見学したりおいしいカキフライを食べたりしたことだ。全学留学生対象の見学旅行で行った鎌倉もとても楽しかった。最も楽しかった経験はホームステイだった。一緒にお好み焼きを作ったりそば打ちをしたりした。

タイ人の友人とは自転車で大学周辺を散策するだけでなく、東京にも一緒に行った。安いのでカプセルホテルに泊まったことも楽しい思い出だ。タイ人の友人とは、そのチューター、自分自身のチューターの4人で雪のイベントにも行った。

帰国直前には一人で浅草寺やディズニーランドに行った。タイ人の友人はお金がないということで同行しなかった。

*： どうでした、一人で旅行して。

B： 楽しかったです。いい経験です。日本で一人で旅行することは大丈夫です。

一人で旅行できたことで自信が得られた。

《留学生としての学修》

日本語の授業は初級修了者向けの中級前半レベルのクラスで週6コマぐらいだった。少人数の多国籍クラスで、クラスメートは優しく関係は良好だった。授業内容も「大丈夫」だった。英語による専門科目も数科目履修した。いずれも3～10人ぐらいの少人数クラスで、授業を通して日本人の友人もできた。

《人間関係》

日本での人間関係は良好だった。

日本語の先生方も優しくかった。日本語の授業のクラスメートはタイ人の友人以外は年上で優しく接してくれた。駅に連れて行ってくれたり、料理を作ってくれたりした。

チューターとの関係も良好で、いろいろなことを手伝ってもらった。前述のように雪のイベントなどにも一緒にいった。

チューターの他にも国際交流に関心のある日本人学生とボーリングに行ったり寮で一緒に料理を食べたりした。

前にJ1大学に留学していた同級生の紹介で、タイ語ができる地域の方とも知り合い、ボランティアでタイ語教室でタイ語を教えたり、一緒にタイ料理を食べに行ったりした。留学中に食中毒で1日入院したことがあるが、その時通訳をしてもらって助かった。同氏とは現在もFacebookなどで連絡を取り合っている。

1学期という短い期間であったが、多くの人と関わり、様々なサポートを受けた。

《留学後》

留学終了後自国の大学の3年生となった。留学を通して日本語は聞いたり話したりするのはよくなったと思うが、3年次の授業内容は文法や敬語など難しいと感じることも多かった。2年後大学を卒業した。卒業後就職するまでの約5か月間旅行をするなど自由に過ごした。その間日本にも旅行した。

卒業の約5か月後日本企業に就職した。その後2年くらいで転職し、今は3番目の会社に転職

して約3か月になる。転職の理由は主として「給料」であるが、今回の転職は以前勤めていた会社が地方に移転したため通勤が難しくなったためだ。タイでは日本人が経営する派遣会社があり、日本語ができれば日系企業への転職はそれほど難しくない。現在の仕事はこれまでの仕事と同様デスクワークで、上司1名は日本人だが、仕事で日本語を使うのはメールぐらいである。

*： どうですか、お仕事は？

B： 仕事は最近はいいと思います。ちょっと楽な仕事です。書類関係だけです。

*： ああ、デスクワークなんですね。

B： はい。あまり忙しくないです。

*： 日本語はどのくらい使うんですか。

B： でも、日本語はあまり使わないです。連絡

*： 連絡ぐらい

現在日本語は使う機会は多くはないが、留学経験が現在の仕事に役に立っていると思うのは日本のマナーがわかるようになったことである。

*： 今、仕事をする上で、日本語、日本に留学したことが役に立ってるなど思うようなことはありますか。

B： あります。私は留学生したことがありますね。日本のマナーが知っています。

具体的には名刺交換や飲み会での細かい振る舞いが自然に身についたと思う。

*： 留学したことが今の生活とどういう関係があるかとか、どういう影響があるかとか、留学してよかったなど思うこととか、お聞かせください。

B： 日本の生活は、たくさん経験をもらいました。例えば日本人はいつもこういうことをすると、私は知っています。

留学経験を通して、日本人の行動のパターンや禁止事項がわかるようになり、会社で日本人に会った際、自分がどう行動し、どう話したらいいかがわかるから、その点よかったと思う。

留学後も好きな日本のアニメや漫画をよく見ている。日本へは留学後2回旅行し、また行きたいと思っている。

《留学を振り返って》

留学全体を振り返って、授業だけでなくいろいろな経験ができたことが楽しかった。旅行や茶道体験、ホームステイなど様々な体験ができた。

留学中嫌だったことは日本語が十分ではなくわからないことが多かったことだ。

B： 留学生する時、その時私は日本語が少しだけわかりました。いろいろなこと、わかりません。

N3合格後に留学していたら、もっとできることが多かったと思う。

留学中やりたかったができなかったことは、旅行である。もっといろいろなところを旅行したかった。

1.3. 調査協力者 C さん (10) のライフストーリー

1.3.1. C さんの略歴

C さんは高校で選択科目として学び始めた日本語が好きになったため日本語学校でも並行して勉強し、父の勧めもあって大学はビジネス日本語学科に進学した。外国に行きたいという気持ちと日本人ばかりの環境で学びたいという動機で、1 年次終了後 J1 大学に交換留学生として 1 学期間留学した。留学終了後自国の大学に戻り、4 年で大学を卒業した。卒業後日系企業に就職し、約 6 年間同じ会社で仕事を続けている。

1.3.1. C さんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

C さんは高校の時外国語選択科目である中国語、フランス語、日本語の中から日本語を選んだ。理由は消去法だったのではないかと思うが、勉強し始めると日本語の勉強が好きになり、日本語学校でも毎日勉強した。料理関係の学科に進学したいという気持ちもあったが、父親からの勧めもあり、大学はビジネス日本語学科に進学した。大学ではまた一から勉強しなおす感じであったが、海外に行ってみたくと子どもの時からの思いと、日本人ばかりの環境で日本語のスキルアップがしたいと思い、1 年次修了後大学間協定のある J1 大学に交換留学することにした。

東日本大震災後で一緒に行く予定の友人は両親の反対で留学を取りやめたが、「行きたい」という気持ちが強く、奨学金も得られたため迷わず留学した。

留学前は、自国とは全く異なる環境に慣れるか不安であったが、楽しみだという気持ちのほうが大きかった。

《留学中の生活》

X 大学では震災のため交換留学のキャンセルが相次ぎ、留学生数は全体として少なかった。タイ人は 1 名だけで言葉の問題もあって、留学当初は不安だった。来日後 3 日間くらいはホームシックになり一人で泣いた。

C : 言葉もそんなでできなかったんで、何と言うのかな。旅行とか、旅行じゃない、遊びのときですね。ちょっと困りますね。そんな漢字も読めないし、どうやって行くかっていう。

* 1 : どこか行く時にね、なるほど。そうだね。タイ人も 1 人だったよね。

C : もし友達がいたら、例えばタイ人と、いたら相談なんかできます。日本人と相談できるんですけど、言葉の問題ですね。

よく覚えてはいないが、ホームシックからは 3 日ぐらいで立ち直ったと思う。

生活環境はいいと感じた。特に、ゴミの分別の仕方がタイと違ってきれいなのが印象に残っていて、自分自身も規則に従って分別した。

留学生が少なかったためか留学生の友人はあまりできなかったが、自分自身のチューターや留学生寮のチューターをはじめ、日本人の友人は数人でき、東京などに一緒に出掛けた。

奨学金をもらっていたので、アルバイトはしなかったが、タイ語教室を開いている地域の人と大学教員の紹介で知り合い、時々タイ語教室で教える手伝いなどをした。タイ語教室の生徒との交流もでき、花火大会に行ったり、一緒に食事をしたりした。

震災直後だったこともあり、学内外でのイベントは少なく、参加したのは横浜への見学旅行とホームステイぐらいだった。

ショックだった出来事は、夜7時頃買い物からの帰り路で痴漢につけられ、逃げ帰ったことだ。それ以外は日常生活では特に問題はなかった。頻繁に起こる余震も怖くなかった。

《留学生としての学修》

留学前に言葉のことが心配だったので本などで準備したが、J1 大学での日本語のクラスは初級修了者向けの中級前半のクラスで、宿題も多く、難しく感じた。自分自身の話し方が上手ではないと感じていたので、練習ができる発表の時間がもっと多くてもよいと思った。

日本語以外の授業では、英語での専門科目をとったが、1科目は難しくて全くわからず履修を諦めて、他の科目に変えた。

留学を通して、日本語が少し上達したと思う。帰国後日本語能力試験 N3 にも合格した。

《人間関係》

日本語のクラスは多国籍で少人数であった。年上の研究生は誘ってくれたりいろいろなものをくれたりして優しくだったが、嫌われていると感じるクラスメートもいた。クラス内外ともに留学生の親しい友人はできなかった。

しかし、日本人学生とはチューター、留学生寮のチューター、英語での専門科目のクラスメートなどと友達になり、東京などに一緒に出掛けた。

また、タイ語教室を開いている地域の方とその生徒とは、タイ語を教える手伝いをしたこともあって交流が続き、食事に行ったり花火大会に行ったりした。現在も face B:ook など連絡をとりあっている。

全体としては留学中の人間関係は良好だったと思う。

《留学後》

留学終了後は自国の大学の2年次に戻り、4年で大学を卒業した。友達から情報をもらって、現在勤めている日系企業の面接を受け、就職した。社員6人の小さい会社なので、通訳も含め様々な仕事をこなしている。社長と工場長は日本人で、コミュニケーションは日本語でとっている。人数が少ないので、人間関係に問題はそんなに多くないと思う。転職が珍しくないタイだが、卒業後一度も転職せず6年間同じ企業で仕事をしている。

現在はモチベーションが持てず、閉塞感を感じている。

C: 今、なんかモチベーションがないんですね。だから、ゴール、目的、何と言うのかな。目的、ゴールですね。が、ないんですよ、今。ぼーっとして。

日本語についても在学中 N3 を取ってから N2 に挑戦したが、不合格だった。

* 1: 今はどういう感じですか、日本語に対しては。

C: 日本語に対して。

* 1: 自分の日本語。

C: 今、まだまだですね。足踏み状態だと思います。

* 1: ああ、そうかな? はい。なんかそこを抜け出したいとかそういうふうには思ってるんですか。

C: 合格、N2 を合格したいですけど、でも、モチベーションもあまりないんですね。探さない。

活路を見出そうと転職を考えたが、社長に「やめないでくれ」と懇願され、現在に至っている。

日本へは仕事で行くことはないが、大学卒業後2回旅行した。

《留学を振り返って》

留学生活は楽しく、1学期間の留学は短いと感じたので、自国の大学の教員に延長できないかと相談したが、次に留学する学生が決まっていたので、叶わなかった。

留学してからかなり時間が経っているので、現在の生活への留学体験の関わりはあまりはっきりわからない。

* 1 : 今、仕事してる上で、留学の経験が役に立ってるなというふうに、こういうことがつながってるなとか、思うことありますか。

C : まあ、マナーかなと思って。その人と連絡とか。それぐらいと思う。

しかし、留学には「行ってきて、よかった」と評価している。

C : 行かないといろいろ見えないですね。いろいろの、経験、何と言うのかな。経験を積まないですね。

* 1 : そうですよ。実際の経験が積めない。その経験ってどういう感じの経験？例えば。

C : 日本でどういう状態、どういう環境とか。日本の面、マナーとか。

* 1 : なるほど。やっぱ実際に行ってみないと分かんないことが結構あるっていう。

C : 分かんないと思う。例えば、友達の家に行って、どういうやり方とか分かりました。勉強になりました。

また、Cさんは留学生活を振り返って、10点満点で7点と答えた。やりたかったができなかったことは友達ともっと旅行などに行きたかったことと勉強である。もっと頑張れたのにという後悔がある。

* 1 : こういうことをやっておけばよかったっていうのは、その友達と旅行に行くこと以外に何かありますか。

C : うーん、勉強についてと思います。勉強、もっと勉強、もっと復習とか。

* 1 : もっとすればよかったって。

C : よかったと思う。

* 1 : すればよかった。なるほど。結構、大変だったのにもっと勉強すればよかったと思ってる。

C : そんな頑張らなかつたんですね、そのとき。

留学中もっと勉強したかったことは、コミュニケーションである。

* 2 : どんな勉強したいと思ったんですか。

C : みんなとコミュニケーションです。私、口数が少ないんですね。そういう人だから、もっとコミュニケーションしたほうがいいんです。

* 2 : てことはその、勉強っていうのは、教室で勉強することじゃなくて、教室の外の勉強ですか。

C : 両方と思います。先生とか友達とか。

また、留学後十分ではないと感じたのは語彙数である。特に、大学で勉強した内容だけでは足りないと思うのは専門用語で、分からない場合も多い。現在の仕事に対応するため、語彙数を増やす

努力をしている。

C： 増やす方法ですか。コミュニケーションですね。今、仕事でも、T大学の時習った言葉も使ってます。でも、今は、仕事関係ですね。社長とか、工場長としゃべって、だいぶ勉強なりますね。

*2： 分からなかったらすぐ質問しますか。

C： はい、そうですね。

1.4. 考察

3名は、留学当初は寮の設備の不備など生活上の問題や地震、初めての一人暮らしによる「ホームシック」など様々な困難に直面した。特に、日本語でうまくコミュニケーションがとれず、留学生、日本人ともに友人を作るのに苦労した。しかし、徐々に生活に慣れ、聞く・話す力の向上が自覚されるにつれ、友人ができ、「ホームシック」などの留学当初の困難を克服して、日本での生活に適應していった。

日本人の真面目さや優しさなど、来日して実際に来日して実際に接して初めて実感したこともあった。約半年間の留学だったが、「日本語クラス」のクラスメート、チューターや「日本人学生向けのクラス」での友人など学内での友人関係が中心であった。地域住民との交流もプログラム行事としての「ホームステイ」や教員などが紹介した人に留まった。

日本語は日本人とはもとより留学生同士を結ぶ言語として機能していた。タイでは日本語を使う経験が少なく、留学当初は日本語がわからず会話に参加することも難しかった。しかし、次第に、友人の言うことが理解できる、うまく答えられなかったことが答えられる、友人たちの会話に参加していることに気づくといった経験から、日本語の上達を実感していった。

全員が「留学してよかった」と評価しており、「実際に行ったことに意味があった」、「行かないとわからない」など、留学したからこそできた経験をあげている。

留学後も日本で知り合った友人1～2名とはSNSなどで連絡を取り合って関係を継続していた。日本語の上達は「聞く・話す」能力を中心にあげられ、日本語使用時の自信となっていた。日本語使用だけでなく留学を通して行動全般にも自信を得ていた。マナーや日本人の考え方など暗黙の社会規範は、教えられる知識としてではなく日本で生活する中で自然に感じ取った。

Cさんは大学卒業後同じ会社に勤め続け、頼りにされる存在になっている。Aさん、Bさんは2回転職をした後現在の会社に就職している。転職はタイでは一般的なことだ。現在の仕事はメール程度で日本語はそれほど使わない。全員大学卒業後、日本に旅行に来ており、日本語ができない友人に頼りにされたりしている。一人で日本を旅行できるという自信があり、「日本語ができる」ことは「楽しみ」も広げている。

2. タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価（2学期間留学の場合）

本節では、日本語専攻でタイの日系企業で通訳・翻訳業務に携わる元交換留学生4名のライフストーリーを取り上げる。いずれもタイのT大学ビジネス日本語学科から日本のJ1大学へ2学期間(11か月)交換留学した。専攻と卒業後携わる業務が密接に関わる場合、留学経験がどのような意味を持ち、その後の人生にどのような影響を与えているかを検証する。また、前節の1学期間留学との成果の違いにも触れたい。

インタビュー協力者4名の略歴を表4にまとめた。J1大学では、1学期目は全員中級前半のクラ

スで日本語を学習し、2学期目はCさん以外は中級後半のクラスに進んだ。全員奨学金のない留学であった。留学終了後6年から4年が経過し、調査時には全員日本語能力試験N2を取得していた。

表2 インタビュー協力者の略歴

	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん
日本語学習のきっかけ	日本のアイドルやドラマが好き	日本の漫画が好き 日系企業で働きたい	祖父の日本訪問の話	高校の選択科目
大学入学前の日本語学習	高校で3年(週5時間)	高校で3年(週1、2時間)	高校で1年	高校で3年(週5時間)
留学した学年	3年次2学期	4年次2学期	3年次2学期	4年次2学期
卒業後の進路	日系企業D1(3年)	家業手伝い(1年)	日系企業F1(4か月)	日系企業G1(6か月)
転職・その他	日系企業D2(8か月) 日系企業D3(～現在)	日系企業E1(2年) 日系企業E2(～現在)	日系企業F2(2年) インターンシップ(東京3か月) 日系企業F3(～現在) M B : A取得	日系企業G2 日系企業G3(～現在)

2.1. インタビュー協力者Dさん(11)のライフストーリー

《日本語学習及び留学のきっかけ》

日本のアイドルやドラマが好きで、ドラマでアイドルが話していることを知りたいと思い、高校から日本語の勉強を始めた。高校で毎日1時間、週5時間、3年間タイ国中等教育用日本語教科書『日本語あきこと友だち』1～6を勉強した。大学はビジネス日本語学科に進学した。高校の勉強と違って、大学では日本人教師も数人いて日本語が「使える」ようになったと感じた。しかし、聞くことは問題なくてもなかなか「しゃべれない」という感じだった。

日本のアイドルが好きでもっと日本の文化を知りたかったので、一度日本で生活してみたいと思っていた。交換留学の募集を先生から聞き、応募して選ばれた。3年生後半からJ1大学に2学期間留学することになった。

*1: どういうことを期待してたんですか、そのわくわく感は。何にわくわくしてたんですか。

D: うーん、日本の生活。

*1: ああ、やっぱり日本の生活ね。

D: だって、タイの生活はみんな、もうタイ人ですから。でも、日本人とタイ人、全然違いますから。どんな人、会えるかな。または、自分も、日本語は大丈夫かな、話せるかな、使えるかな。

*1: それ、不安じゃなくて楽しみだったんですね。

D: はい。

《留学中の生活》

3月末の来日初日、寮に夜到着したため大学職員がおらず、ガスの開け方がわからないまま冷たいシャワーを浴び、ベッドだけで布団も枕もない寮の部屋で、寒い一夜を過ごした。スタートは大変だったが、それ以降カルチャーショックはあまり感じなかった。

最初の頃は、中国や韓国からの留学生は「日本語がペラペラで」、同じように話せない自分が友達になれるか、不安が大きかった。しかし、だんだん慣れて日本語が話せるようになると一緒にい

ろいろなイベントができて、楽しくなった。

D： で、ロビーでみんな、バースデーパーティーとか、何とかパーティーいっぱいあって。勉強の時は勉強ですけど、友達とイベント活動とかできたのはすごい。しゃべる時間、チャンスもたくさんあって。最初は距離あるんじゃないですか。だんだん慣れてきて、みんな。

* 1： ああ、割と早く距離が縮まったってことね。

D： はい、そうです。

来日2か月後に寮の近くの居酒屋で始めたアルバイトもいい勉強になったと思う。

D： もしバイトをしなかったら、あんまり日本の経験とかはもらえないかなと。

* 1： うん、そうね、また、学校とは違う。

D： 学校と違いますから、普通の日本人と話せるし。

始めは厨房で皿洗いや料理をしたが、慣れてきてからはホールの仕事もした。

* 1： お客さんだったら大切にしないとイケないしね。

D： 最初も、日本語、そんな上手じゃない。今もそうじゃないですけど。お客さんから聞かれて、答えられないときもあって。泣きたいくらいのときもあったんです。プレッシャーがかかって。

* 1： ああ、答えられなかった。

D： 答えられない、書けないとか。メニューもいっぱいあって。

* 1： 覚えられない。

D： 覚えられない。あとは、そんな時、すごい辞めたいくらい、考えていた時もある。でも、だんだん先輩から教えてもらって。

店長や日本人先輩に優しくして接してもらい、留学終了時までアルバイトを続けた。

ホームステイにも参加し、ホームステイ後もホストマザーに着物の着付などのイベントに誘ってもらった。

印象に残っているのは大学のある町の祭りに参加し、踊ったことだ。祭りの前に毎週集まって、踊りを教えてもらい、練習した。暑くて大変だったが、踊った時の写真を見て、「私も日本の活動に参加できたって、祭りに参加できたっていいな」と思う。

日本の季節を体験できたこともよかった。

D： 私、春に行って、お花見できて、台風もあって。

* 1： ああ、台風もありましたね。

D： はい、秋入って、雨も多かったし、雪も。

* 1： ああ、雪も見ました？

D： はい、見ました。みんなで雪、遊びましたから。その時うれしかった、初めて雪だったから。

夜中に雨が雪に変わり、それを見て寮の部屋からみんな一斉に出て、雪合戦をしたことを思い出す。

《留学生としての学修》

授業のことはなぜかあまり覚えていない。1学期目の日本語授業は中級前半のクラスだった。一緒に来たタイ人の他、中国人、韓国人、アメリカ人のいる多国籍クラスだった。中国からの学生が優秀だった。タイでは授業中タイ語を使うこともあったが、日本では他のクラスメートがわからないから日本語で話さなければいけなかった。2学期目の中級後半のクラスは漢字圏の学生が多く、漢字のクラスの進度が速く大変だった。

日本語の上達を実感したのは、買い物の時うまく対応できたり、友達に言いたいことが通じたりした時である。

* 1 : 最終的に上達したなど思うような実感がありましたか。

D : ありました。

* 1 : どういう時にそういうふうに思いましたか。

D : 買い物行った時、最初は「えっ」て、スタッフ、何を言ったか分からなくて、その時は答えられないとか、何と言い出すか分からなくて、その時は大変でしたが、でも、上達できた時の瞬間は、聞かれたことは分かってて答えたとか、何と言ったか分かってきた時ですね。あと、他の友達も話せるぐらいの時は非常に、すごいうれしかったです。

* 1 : うんうん。「ああ、思ってることが通じてる」っていう。

D : はい、もう普通に通じてて、私、話したい、言いたいことを分かってくれて、「ああ、良かったな、もう、いいな」と一番ほっとした時。

D : やっとこの輪の中に入れるっていう。

留学中に N2 にも合格した。

《人間関係》

最初は他の留学生のように日本語が話せないことが原因で距離を感じた。

D : 全然、最初は友人関係は良くないですかね。

* 1 : どういうふうに。

D : 良くないというか、タイ人、インド人、インドネシア人、みんな違いますから。性格は違いますね。だから、ある話は合わないとかになると、タイ人に対して、タイ人の人たちはそんなに（日本語が）上手な人じゃないですから、最初は「えー」って、「なんで」ってみたい。タイ人に対してあんまり、私、自分の思いこみかもしれないですけど、みんなと話せないから、距離がちょっとある。

しかし、それは最初だけで、一緒にいろいろな所に行ったり、イベントに参加したりする機会を通して寮で一緒に生活することに慣れ、距離は縮まっていった。留学生寮の友人たちとは今でも LINE や Facebook など連絡をとりあっている。

留学生寮のチューターたちをはじめ、日本人学生とも仲良くなった。帰国後タイに旅行に来た日本人学生と食事をしたり、タイに仕事で来た元チューターと会ったりした。

アルバイト先でも仕事では厳しい店長が普段はよく話してくれた。日本人スタッフもいろいろなことを優しく教えてくれた。アルバイト仲間のインドネシア人とは、（調査時の）数か月前にタイの D さん宅に泊まるといった付き合いがまだ続いている。

ホストマザーの誘いで参加したイベントでも友人ができ、交流が続いている。帰国直後は

Facebook でよく連絡を取り合ったが、就職後はお互いに時間がなく近況を確認する程度である。

全体として人間関係に恵まれた1年で、その後も SNS などを通して交流が続いている。

《留学後》

留学終了後自国の大学で2か月間サマーコースを受けた後、卒業した。卒業後すぐ大手日本企業に通訳として就職した。上司にも恵まれ3年間勤めたが、転職した。

* 1 : どうして転職したんですか。

D : 新しい経験を探したかったから。

* 1 : ああ、新しい経験をしたかった。

D : よく言われてるのは、もしこの工場のことはもう慣れて、で、新しいことはなくて、全部分かってるので。

* 1 : ああ、ルーティンになるって感じですね。

D : そうですね。他の会社とか、他の工場もまだまだ分からないことはいっぱいあるじゃないですか。だから、通訳以外は私も何の仕事できるかって。だから、そこで辞めて。

転職先も日系企業だったが、秘書のような仕事だった。通訳以外にも営業もした。上司とあまり合わず、8か月で現在の会社に転職した。

現在勤めている日系企業にも通訳として採用されたが、現在は人事の仕事をしていて日本語を使う機会は減った。日本人の上司も優しく人間関係は良好だ。

D : 今の私、1年間、1年3回、会社のイベントがあって、オフィスの監査があります。私、メインとしては、日本人から情報を受けて、タイ人のほうに伝える、また、報告するという役があります。だから、日本語いっぱい使うんです、その期間は。

それ以外では上司が会議出席やスピーチをする時や月1回工場を回る時に通訳としてついて行く。

* 1 : 仕事をする上で、その、留学経験が役に立っているなど思うことはありますか。

D : いっぱいあります。

* 1 : いっぱいあります。例えば？

D : 実は、通訳の仕事は本当に難しいです。日常会話じゃなくて、でも、言葉、専門の言葉いっぱいあるんですけども、それを勉強して、日本で勉強した日本語を合わせて、通訳できるようになって。最初、私、いい通訳さんじゃなくて言葉も分からなくて。ただ、日本人と話せるんで。

* 1 : はいはい、割と自然に。

最初はできなくて辞めたいと思うこともあったが、だんだん慣れてきた。留学中に日本人と自然に話せるようになったことが大きいと思う。

タイでは30歳ぐらいまで自分に合う仕事を探して転職をするのは一般的だが、インタビュー時Dさんは30歳も近かった。今、日本でも仕事をしてみたいという考えもある。

《留学を振り返って》

日本留学はDさんにとって「宝物」のような経験だったという。

D : (日本留学は) すごい意味がありますね。もし日本に行かなかっただら、こんな、今の私、

なれなかった。だから。

* 1 : どういう面。

D : そうですね、タイにいても、4年間大学生してて、卒業して何をするか、自分もまだ思わなかったから。でも、日本語できたから、通訳ぐらいできるんじゃないですか。

* 1 : という自信が。

D : 自信がたくさんあって、仕事できたのは非常にすごい。宝物みたいです。

* 1 : うん、なるほどね。特に、日本語の面ですごい自信も出たっていうことね。

日本語に自信が持てるようになったのは日本人の友達がたくさんできたからだと思う。

D : 話して、間違っても日本人から分かってくれたら、それはいいんじゃないですか。だって、私、日本人じゃない、自分は日本人じゃないですから、間違っても。私も日本人からタイ語話してくれているのはうれしい。間違っても問題ないじゃない。

また、アルバイトなどを通して日本人の仕事の仕方が勉強できたと思う。

D : 日本語だけじゃなくて、日本の文化と、日本人と経験したこともたくさんできたし。だから、日本人の上司、何を思ってるかっていうのも分かりやすいじゃないですか。

留学中苦しい時も、1年は短いので逃げたらこのような機会はもうないから「頑張るしかない」と考え、乗り越えてきた。

D : 勉強とか、苦しいっていうか、もし、自分は練習しないと上達できないじゃないですか。だから、頑張らないといけない。バイトでも、最初は何もできなくても、それは誰でも最初からできるわけじゃないですから、頑張らないと。

Dさんは、留学した1年間で10点満点で8点だと評価した。マイナスの理由は、「もっと上達できる」と思っていたが、最初上達するのに時間がかかったと思うからだ。もしN1が取れたなら、満点だっただろう。

最後に、後輩へのアドバイスとして以下のように述べた。

D : 日本に留学するのはすごい。私にとっては宝物ですから。恥ずかしがらないで、自分の日本語は、最初はまだまだかもしれないですけど、もし恥ずかしがったら、全然何もできないです。話せない、友達もできないし、いろんな経験できることもできないし。自信を持って、日本語を話してください。

2.2. インタビュー協力者Eさん(12)のライフストーリー

《日本語学習及び留学のきっかけ》

子どもの頃から日本の漫画が大好きだったことがきっかけで、高校1年生の時から日本語を勉強し始めた。高校では週1~2時間、日本語の授業があった。将来日本企業で働きたいと思っていたので、大学はビジネス日本語学科に進学した。

日本に交換留学することを決めたのは4年生の時、ほぼ全カリキュラムを終えてからJ1大学に留学した。将来給料がいい通訳として働くため「日本語のスキルアップをしたい」からというはっきりした目的をもって留学した。

E： 大学で勉強した時に、私のスキル、日本語のスキル、例えば、聞き取りとか、しゃべり方とか全然できなかったです。そのため、通訳として働けるために、もし日本に乗り込んで、勉強すれば、多分、スキルアップをできるかなと思います。

加えて、海外に行ったことがなかったので、行ってみたいと思っていた。タイは一年中夏なので、日本の季節を体験するのも楽しみだった。

E： 日本人はどういうふうに日常生活してるのかも知りたいです。いろんな経験が欲しいです。

LGBT 当事者である E さんが留学する前に不安だったのは、日本では LGBT 当事者たちがどのように受け入れられているのかということだった。二つ目の不安は勉強のことだった。タイでは日本語コースでも先生がタイ語を使って教えてくれたのでよくわかったが、日本では日本人の先生が日本語だけで教えるのでわかるかどうか心配だった。さらに、東日本大震災後だったので、地震のことも不安だった。

《留学中の生活》

来日当初は、日常会話でうまく話せず、日本人の友達作りにも苦労した。LGBT 当事者である E さんに対する日本人の反応も心配だった。実際のところ心配には及ばなかった。ただ、旅行などはチューターやよく知っている東南アジアの友人とだけ行くように配慮した。

外国人の友達も留学生寮で生活を共にすることで、中国人、インドネシア人、ベトナム人などたくさんできた。留学生寮では、作った料理を持ち寄る食事会やいろいろなパーティがよくあった。日本人チューターにもいろいろ助けてもらい、よい関係が築けた。

友人の紹介で来日 1 か月後から寮の近くの居酒屋でアルバイトを始めた。それまで料理を作ったことがなかったので、最初は何もできず大変だった。料理は失敗ばかりしていたが、だんだん仕事にも慣れて楽しくなり、帰国直前の 2 月中旬まで続けた。

国際交流サークルに入り、寮のイベントによく来る日本人メンバーと一緒に花火を見に行ったり、夏休みに大阪旅行に行ったりした。お金がなかったのであまり旅行はできなかったが、節約してバイト代をためて行った大阪旅行だった。

大学のプログラムでホームステイをしたことをきっかけに、地域の人との交流機会も持てた。ホストファミリーにいろいろな所に連れて行ってもらったり、着物の着付けのイベントなどに誘ってもらったりした。タイの文化紹介やタイ料理を作るボランティアにも数回参加した。

楽しみにしていた日本の四季も体験できた。春に桜、冬に雪が見られたことや紅葉など秋の雰囲気も良かったと思う。日本でしかできない多くの貴重な経験ができた 1 年間であった。その中でもアルバイトとサークル活動が最も楽しかった。

《留学生としての学修》

最初の学期は中級前半の日本語クラスを取った。タイからの友人、韓国人、中国人のいる少人数クラスだった。タイの大学で勉強したことと同レベルぐらいだったので全然問題はなかった。2 学期目は中級後半のクラスを取ったが、漢字のクラスでは毎回漢字テストがあり、大変だった。

日本語の授業以外では、英語と日本文化に関する授業を取った。日本文化のクラスは、日本人学生・留学生協働のグループワークが中心のクラスだったので、問題はなかった。

日本語が上達したと実感したのは、友達とよく話せるようになった来日後 3 か月ぐらいの頃だ。

帰国後 N2 に合格した。

《人間関係》

来日直後からチューターにはいろいろ助けてもらった。

E : よく分からない時によくチューターによく相談してて、例えば、勉強のこととか、向こうから声をかけて、教えてくれていました。だから、私も頭があまり良くないので。

* 1 : いや、いや。

E : ちょっと勉強、時間かかります。よくじっくり、教えてくれて。

来日当初は日本語があまりしゃべれず、友達作りはうまくいかなかったが、まず留学生寮で生活を共にする留学生と仲良くなった。インドネシアやベトナムからの交換留学生や中国からの大学院生などと寮でのイベントなどを通じて友達になった。日本人の友人はチューター以外なかなかできなかったが、日本語で話せるようになってきた来日 3 か月後ぐらいから留学生寮によく来る日本人学生の友人が増えた。

国際交流サークルに入って、仲良くなった日本人が夏休みに大阪旅行に誘ってくれた。日本人学生・留学生 10 人くらいで行った旅行は楽しい思い出である。チューターや留学生の友人とは Facebook などでも時々連絡を取り合っている。

また、分からないことがあれば、日本語の先生の研究室によく相談に行った。アルバイト先やホストファミリーなど地域の人々にも優しく接してもらい、いろいろな体験ができた。多くの人々に様々な形で支えられた留学生活だった。

《留学後》

帰国後すぐに大学を卒業した。卒業後母親の体調が悪かったため、実家の仕事を約 1 年間手伝った。1 年後通訳として日系企業に就職した。大学で勉強した日本語と仕事で使う日本語は全然違うので、最初は通じないことも多く、大変だった。

E : E1 社で働いた時に、通訳の経験がないので、大変でした。何も、通訳とか、翻訳とか全然できなかったです。

「頑張っ」て、だんだん慣れていった。上司に「よく頑張ったね」と言われた時はうれしかった。

2 年後現在勤めている会社に転職した。転職の理由は「給料アップ」だが、それ以外にも「他の部署も勉強したい」ことで、「知識を広げれば将来はもっと」可能性が出てくると考えている。現在も専門用語の勉強や N1 への挑戦など、スキルアップに努めている。

仕事をする上で留学経験が役に立っていると思うのは、留学で日本語のスキルアップができたので通訳ができるということである。日本文化への理解も役立っていると思う。

E : 通訳をした時に、よく日本の文化とか、タイの文化も把握して伝えるでしょう。ちょっと通訳する時にもよく気を付けています。

留学後日本へは旅行で 1 回、出張で 1 回行っている。今後日本での駐在などの可能性もある。

《留学を振り返って》

E さんは自分自身の日本留学経験を「満点が 10 点であれば、10 点あげる」と評価し、後輩に次のようなアドバイスをしている。

E : 留学でアルバイトやったり、勉強をやったり、友達もできましたので、機会があれば、

ぜひ留学したほうが。

* 1・2: したほうがいい。

E: と思います。いい経験だと思います。

* 1: うん、うん。やっぱり1年でよかった？

E: よかったです。もし半年だったら、多分変わんないと思います。少なくとも1年。

最後に、一つ残念に思うのは、留学する前に自分自身のスキルがもっと高ければ、もっと多くのことができたかもしれないということである。

2.3. インタビュー協力者Fさん(13)のライフストーリー

《日本語学習及び留学のきっかけ》

Fさんは、約40年前に仕事で日本に行ったことのある祖父の話聞いたことがきっかけで日本に関心を持った。高校1年生の時選択科目として日本語を1年間勉強した。2年間のブランクがあったが、もっと日本語が勉強したいという気持ちもあり、奨学金が得られる大学のビジネス日本語学科に進学した。

大学での日本語の勉強はブランクがあったこともあり、ゼロからのスタートのようなもので、最初は難しく感じた。特に、文字や語彙の多さが大変だった。

自分自身の日本語に自信がなかったので、留学は考えていなかったが、仲のよい先輩と一緒に応募しようと誘われ、応募し、面接試験の結果、3年生の時その先輩とともに留学することになった。

留学前に不安だったのは自身の日本語能力だった。

《留学中の生活》

留学当初から自分自身のチューター、寮のチューターをはじめ、みんながFさんと話す時わかるようにゆっくり話してくれるなどして、優しくしてくれた。

留学生活で大きな位置をしめたのがアルバイトだ。親からの仕送りがなかったため、生活費はアルバイトで賄った。来日1か月後の5月から帰国する2月まで、週に3～4日、寮の近くの居酒屋でアルバイトをした。夜遅くまで働くのが大変だったが、店長からレシピを教わり、一緒に料理を作るのは楽しかった。アルバイト仲間はタイ人の先輩、インドネシア人2名、日本人学生3名だった。

* 2: アルバイトをしていて、一番困ったことってありましたか。

F: 一番困ったは、コミュニケーション。

* 2: コミュニケーションですか。店長とか日本人のスタッフさんですか。

F: はい。

* 2: どういったことですか、それは。仕事の内容ですか。

F: 仕事の内容。たまに日本人とインドネシアの友達、話して、二人だけ分かって。

日本語が上手なインドネシア人と日本人の会話についていけないこともあり、「よくないなと思って。自分を向上しないといけない。」と思った。

* 2: アルバイトをしたから、身に付いたっていう特別なことは何かありますか。料理以外で。

F: 料理以外で。まず、日本人と一緒に働き方です。

言葉がわからないFさんに日本人スタッフが仕事の仕方を丁寧に教えてくれた。

* 2 : で、どうやって仕事の進め方っていうのを覚えていったんでしょう。

F : 日本人のほうが説明してくれるんですね。何をやらないと (いけないか)、簡単な言葉……。

* 2 : 簡単な言葉を使って。

F : 説明する。たまに、私分からない時にやって見せる。

店長は仕事には厳しく、間違えると大きな声で叱ることもあったが、普段はよく冗談を言い、Fさんにとっては「お父さん」のような存在だった。このような環境で、一度もアルバイトを辞めたと思うことはなかった。

日常生活では困ったことはあまりなかった。ボランティアで、小学校や地域の国際交流団体などでタイ紹介の発表をしたのが楽しかった。ホームステイも楽しい思い出。クラスメート3人でホームステイし、いろいろなところに連れて行ってもらったり、納豆を食べたり、そば打ちをしたりした。約1年の留学で印象に残ったのは、日本の季節や自然を感じることができたことである。

《留学生としての学修》

日本語のクラスは一緒に来日した先輩とともに中級前半のクラスだった。韓国人交換留学生、中国人研究生がクラスメートの少人数クラスだった。

* 1 : 日本での勉強はどうでしたか。

F : 勉強は、最初から難しかったんですが、先生がゆっくり教えてくれて、宿題をあげて、宿題をやって、少しずつ分かってきました。

しかし、Fさんは2学期目も授業内容の違う同じレベルのクラスを取るという選択をした。一緒に来た先輩は上のレベルのクラスに移った。

* 1 : 2学期目はどうでしたか。

F : 1学期目と比べると、2回目のほうがいろんなこと、分かっていて、勉強しやすいです。

同じレベルの日本語授業をとることによってより日本語が理解できていることが確認できた。

* 1 : 他に何か、上達を感じた時ってありますか。あー、私、うまくなってる。

F : インドネシアの友達と話せるようになって。

留学生の友人との会話を通して日本語の上達が実感できた。

日本語の授業のほかに、異文化理解や英会話の授業を取った。異文化理解の授業は日本人学生向けの授業で、授業を通して日本人の友人もできて楽しかった。この授業では名刺交換やメールの書き方など日本のマナー、日本人の考え方など現在の仕事で活かせることも学べた。

《人間関係》

来日当初から寮のチューター、自分自身のチューターなどに優しく接してもらった。日本語のクラスメートとの関係も良好だった。寮で生活するベトナム人や日本人向けの授業を通して日本人学生とも仲良くなった。特に、アルバイト仲間であるインドネシア人留学生やチューターとは行動を共にすることが多く、今でも連絡を取り合っている。これらの友人とは、近隣の水族館や湖に遊び

に出掛けたり、大阪旅行に行ったりした。

指導教員の授業は取らなかったが、何回か一緒に食事をするなど関係は良好だった。日本語の先生の紹介で、タイ語を勉強している地域の人とも知り合い、タイ語教室で会話の相手をしたり、一緒に食事に行ったりした。

アルバイト先でも、「お父さんみたいな」店長をはじめ、日本人学生、留学生のアルバイト仲間とも関係は良好で、仕事は大変だったが、楽しく続けることができた。

寮の近くにあるタイ料理の店にもよく行った。タイ人の「おばあちゃん」が経営する店で、タイの調味料やお菓子などを無料でもらうこともあった。タイ料理が食べたいのはもちろんだが、「おばあちゃん」とタイ語で「普通の生活のこと」を話す場は「大事」だと思った。

《留学後》

留学終了後自国の大学に戻り、約1年後に卒業した。同級生とは1年遅れの卒業となった。卒業後日系の不動産関係の会社に就職したが、自宅から遠く通勤に時間がかかったため4か月で退職した。別の日系企業に通訳として就職したが、2年後会社がタイから撤退した。大学の先輩の誘いがあり、現在勤める会社の面接を受け、合格した。

同企業で働き始める前に、3か月間東京の会社でインターンシップをした。インターンシップはウェブサイト調べて申し込んだ。タイ人16人が4回に分けて日本企業に派遣されるプロジェクトで使用言語は主として英語であった。

現在勤める会社では、主として通訳・翻訳業務に携わっている。具体的には、会議での日タイ語間の通訳やメール、手順書などの翻訳である。インターンシップをする前にN2を取得した。

また、前の会社に勤めていた時大学院に入り、数か月前に修了して、MBAを取得した。MBAを取ろうと思ったきっかけは前の会社で人事部の仕事を手伝った時に「自分のスキルアップをしたい」と思ったからだ。大学院は社会人向けで、授業は日曜日午前8時から午後9時まで集中的に行われた。1科目終わる度にテストがあるが、仕事をしながらでは勉強時間が十分とれず大変だった。宿題は仕事が終わってからやった。具体的に大学院で学んだことをどう活かすかというプランはまだないが、将来のステップアップにつながると思う。修了したばかりの今は「休みたい」という気持ちだ。

《留学を振り返って》

インタビューを受けるにあたって、留学中のいいことばかりが思い出された。

現在の自分自身の日本語について、大学で勉強している時より自信が持てるようになったと思う。

* 1 : それは、どうしてそういう自信が持てるようになったと思いますか。

F : 2回目、今通訳している会社。毎日、日本語使っていて、日本人と話して。

* 1 : あー、なるほどね。やっぱり話す機会が結構あるっていうことですね。

F : はい。毎日、日本人と話して、自信が。

* 1 : 自信ができました。

F : はい。

現在の仕事への満足度も高い。

* 1 : 今の仕事はどうですか。満足していますか。

F : 楽しい。(満足)しています。

* 1 : そうですか。日本語を毎日、使う、その仕事は。

F： 日本人と仲良くして、仕事を楽しくしています。

* 1： 給料もたくさん出るし。

F： はい。

日本留学が今の仕事に役立っていると思うことは、留学を通して日本文化や仕事をする時のマナー、日本人の考え方がわかったことだ。通訳する時に活かされている。全体として留学したことはよかったと思う。

F： 日本語がよくなりました。帰国したときに、(T大学の)先生に言われたんです。留学する前と、変わったと言われて、留学したことはいいと思います。

日本語の上達だけではなく、留学を通して自分自身が成長できたと思う。

2.4. インタビュー協力者 G さん (14) のライフストーリー

《日本語学習及び留学のきっかけ》

高校の時、外国語をフランス語か日本語から選択することになったが、ファッション雑誌などで興味があった日本語のほうを選んだ。高校で3年間日本語を学んだ後、ビジネス日本語学科に進学した。高校生なりの考えで、日本語は頑張れば大学でもっとできるようになるから挑戦してみたいという気持ちがあったことと、日系企業で働ければ給料がよいという考えがあったからだ。大学の勉強は高校に比べると漢字や読解が難しく苦労したが、さらに上のレベルまで達成したいと思った。日系ビジネスのマナーの勉強は面白く、今の仕事にも役立っている。

4年生のカリキュラムをほぼ終了した後2学期間交換留学した。留学の動機は、タイでも努力すればできる漢字や読解と違って、「話す・聞く」スキルを向上させたいと思ったからだ。最初は両親から反対されたが、本気であることを示し、許しを得た。

留学前に不安だったことは経済的な問題だった。また、せっかく両親の賛成を得て留学することになったのだから、帰国後N2をとるという「プレッシャー」を自分自身にかけた。約1年間の留学で本当の日本社会に身を置くこと、日本人の友達ができることなどを楽しみにしていた。

《留学中の生活》

来日後困ったことは「山のよう」にあった。まず、初めての一人暮らしで、ホームシックになり、毎日泣いていた。日本語のクラスは中級前半のクラスだったが、韓国人や中国人と一緒に勉強するのは大変だった。来日後すぐに始めた居酒屋でのアルバイトもそれまでやったことがない経験だったので馴染めなかった。日本の生活にまだ慣れていない段階で始めたせいもあるが、勉強とアルバイトのバランスがとれず朝起きられなくて授業をさぼることもあった。4か月くらいたって、どちらかを選ばなければならないと思い、友人や家族と相談してアルバイトを辞めた。

留学当初は予想外に寂しかった。しかし、ほどなくインドネシア人や韓国人、アメリカ人、日本人の友達も思っていた以上にできた。特に、自分自身のチューター、タイ人の友人とそのチューターと4人でよく行動した。

《留学生としての学修》

日本語の授業は中級前半のクラスだった。最初は漢字圏の学生が日本語がよくできるので一緒に勉強するのは大変だと思ったが、授業内容はタイで勉強してきたことを応用するという感じだったのであまり問題はなかった。2学期目は中級後半のクラスに進んだが、難しく、授業後何度も繰り返

返して復習した。

* 1 : (中級後半のクラスは) どうでしたか。

G : 最初は難しかったです、本当に。

* 1 : 中国人ばかりで。

G : そうです。難しかったですので、だから、もし大学から戻ってきたら、それは、ちょっと繰り返さないと駄目でした。じゃないと駄目になっちゃいますので。だから繰り返しました。

アルバイトを辞めて勉強に集中できたのがよかったと思う。

* 1 : 自分で上達したって感じたことはありませんか。

G : あの時思ったのは、そんな気持ちがなかったんですけども、でも、戻ってきたら、もっと日本人の話とか、テレビのニュース見たら、行く時よりもっと聞き取れたって分かって。だから、なんとなく良くなったんじゃないかなって思っていました。でも、日本にいた時には自分的に言うと改善したよってというのがなかった。

留学前に目標としていた N2 は留学中と帰国直後に受験したが不合格だった。就職してから再挑戦し、合格した。

《人間関係》

留学当初は初めての一人暮らしで、ホームシックになり寂しかった。しかし、来日直後から自分自身のチューターとタイ人の友人のチューターがいろいろと手伝ってくれた。

G : お二人が私たちにとっていつもですね、助けます。例えば、どんなことでも、勉強以外のことでも、相談。例えば、生活のことだとか、他に困ってること、よく相談できたのが感動しました。

毎週昼食を一緒にしてくれたりして、よく 4 人で行動した。チューターに恵まれて、「留学の学生ならやっぱりチューター必要だ」と思う。知らないうちに日本の生活に慣れてホームシックは治り、問題なく生活がおくれた。

その他にも国際交流サークルのメンバーなど、日本人の友人もできた。インドネシア人、韓国人、アメリカ人など留学生寮と一緒に生活する留学生の友人もできた。

留学中印象に残っているのは、「外国人の楽しさ」だ。留学生寮のラウンジでよく集まっている色々な国の人と話したり飲み会をしたりしたのは楽しく、そういう友人関係が良かったと思う。お互いの部屋で集まってたこ焼きを作ったり、食事会をしたのも楽しかった。これは、留学をする後輩たちにも勧めたい体験だ。その他、他大学に留学しているタイの友人と一緒に旅行したのもよい思い出だ。

《留学後》

留学終了後自国の大学を卒業し、1～2か月の就職活動を経て日系企業に就職した。オフィスワークで仕事内容の範囲は狭かった。他県で通勤に時間がかかったため6か月で辞めて、現在住んでいる県の日系企業に転職した。同県で最も大きい日系企業の1つで、福利厚生が充実しているのが魅力だった。通訳として就職したが、販売から製造現場まで仕事の幅が広がり、大変だった。N2に合格したことを機に昇給の交渉を部長に交渉したが認められなかったため、他の会社を探し、

現在の会社に転職した。

これまで勤めた3社はいずれも食品関係の日系企業で、自分自身も食品に関心があるため一つの専門性にしたいという思いがある。現在は通訳・翻訳業務が主であるが、将来的には営業やマネジメントにも関わってみたいという希望がある。

留学が現在の仕事をする上で役に立っていることとして、日本語、マナー、規則順守の姿勢を挙げた。

* 1 : 仕事をする上で留学をしたことが役に立っていることっていうのはありますか。

G : あります。いっぱいあります。もちろん日本語のことも一番なんですけど。もし日本に留学しないと、聞き取りのスキルとか全然できないと思います。もっと苦労だと思います。

* 1 : 日本では自然に入ってくる、量が違いますよね。

G : はい、その感じですか。最初は日本語ですね。次は日本人とのマナーです。マナーも、とってとっても大事なんです。例えばの話なら、簡単なことならそれは、例えば会議があるとします。もしお客さんとかもっと偉い人が入ってきて、もしその人がまだ座らないと私たちもそのまま立たないと駄目っていう、ちっちゃいのがよく勉強になりました。ただクラスで勉強しないこともありますけど、社会で見たことも勉強になりました。

* 1 : なるほどね。

G : はい。日本のマナー。結構ありましたけど、日本人の考えっていえるかどうかですね。大体は、日本人はもしルールとか決まり、法律法令ありましたら、90パーぐらいいえますけど、みんなよく守ってます。でもタイ人なら気持ちに添って、やるかやらないかっていうのはあります。あれも役に立ちました。

* 1 : やっぱ、これぐらい求められるということが。

マナーや規則順守の姿勢は実際に日本で生活する中で感じとったと思う。

《留学を振り返って》

外国語を勉強すると決めたら、その国に行って生活したほうがいいと思う。

G : なぜかという、言葉です。その語だけではなく、その国の人の性格だとか考え方とか、マナーとかも自然に勉強できるのが一番いい勉強なんじゃないかなって思ってます。

その国で生活ができるかどうかで、その言語をマスターできるかが判断でき、次のステップに進むことができると思う。

留学中にできたらよかったと思うことは、アルバイトと日本人の友人たちと旅行することである。アルバイトは勉強との両立が難しく辞めてしまったが、本当はやってみたかった。経済的に両親に負担をかけたことは今も心残りである。

2.5. 考察

以上のように、4名は同じ大学から同じ日本の大学に約1年間交換留学しているが、その体験や評価は、自身の性格、出会った人々などのそれぞれが置かれた環境に影響を受けながら個々に展開していることが描出された。

本節では、その中で4名の共通点を「総合的な留学評価」、「留学中の人間関係と日本語の上達」、「留学で学んだこと・活用していること」、「転職・キャリアへの意欲」の4項目にまとめ、考察を加える。

《総合的な留学評価》

4名全員が日本留学を肯定的に評価している。Dさんは留学したからこそ日本語力がつき、通訳の仕事を得、自信をもって従事できており、留学は「宝物」のような経験だと振り返っている。Fさんもまた留学を通して日本語に自信が持てるようになり、人間としても成長できたとしている。Gさんは外国語学習にはその言語が使われている国に行って生活したほうが良いと日本滞在経験そのものへの意義を指摘している。Eさんは自分自身の留学を10点満点だと評価し、後輩にも機会があったらぜひ留学してほしいと述べている。

《留学中の人間関係と日本語の上達》

4名ともに来日直後は日本語が話せず、友人を作るのにも苦労した。多国籍の日本語クラスでは、日本語が上手な韓国人や中国人に対して最初は劣等感を持った。幸い全員が日本人チューターや留学生寮のチューターに恵まれ、様々なことを教えてもらったりサポートしてもらった。世界各国から来た留学生や日本人学生と一緒に食事をしたり、イベントに参加したりしながら、仲良くなっていった。日本語の上達を感じたのは、日本人や留学生の友人と話して通じた時やニュースや日本人の話が聞き取れた時だ。

ホームステイやボランティアでの文化紹介などを通じて地域の人たちとも交流を持ち、人的ネットワークを拡大した。EさんとFさんは国際交流サークルに入り、メンバーの日本人学生たちと一緒に旅行したり、イベント参加したりし、親交を深めた。

4名は奨学金が得られなかったため、アルバイトをする必要があった。Gさんは学業との両立が難しいと感じやめたが、3名は居酒屋でのアルバイトを留学終了時まで続けている。大変だったが、アルバイトを通して日本人の就業姿勢や慣習、考え方などへの理解が深まり、現在の仕事にも活かしている。3名は先輩の紹介で状況がわかっていたり数人の留学生と一緒にだったこともあり、1つのアルバイト先で留学終了時まで働き続けることができた。店長や日本人・留学生スタッフとも良好な関係を築く過程に日本語の上達が寄与していた。

日本で得た友人たちとはSNSなどで連絡を取り合うだけでなく、お互いに訪問し合ったりして帰国後も関係が維持されていた。

以上のように、自発的な他者との関わりやその評価によって自らの日本語の上達を確認し、日本語の上達が他者との関わりを促進するという経験を繰り返して循環的に人的交流が拡大・深化していく過程が見られた。

《留学から得たこと・活用していること》

日本語専攻の留学生にとって、留学で得たのは第一に日本語力の向上である。特に「話す、聞く」力は上達が実感できた。日本人と話すことに慣れ、自信を持って自然に話せることは通訳の仕事では重要である。

さらに、異文化理解の授業で習ったマナーや習慣、日本で生活する中で感じ取った暗黙の社会規範や日本人の考え方、アルバイトを通して学んだ日本人の働き方や就業慣習などは、日系企業で働く上で役立っている。日本とタイ双方の文化を理解した上で通訳・翻訳できるのは強みだという。

留学で得たことが、日系企業という職場で十分に活かされていると感じていることが確認できた。

《転職・キャリアへの意欲》

4名は大学卒業後4～5年の間に1～2回転職している。いずれも日本企業間の転職である。転職の理由は第一に給料だという。他に、通勤時間、人間関係、他業務への挑戦、福利厚生、企業のタイからの撤退などである。インタビュー協力者によれば、タイでは30歳ぐらいまでは自分に向けた仕事を見つけるために転職を繰り返すのは一般的だという。タイ社会における日本留学生の役割の変化を論じた佐藤（2019）でも、日本企業に就職した元留学生在が処遇のよい職場を求めて転職を繰り返すことが報告されている。

また、佐藤は、中所得国となったタイでは、日本企業におけるキャリアが若者にとって魅力的なものになっていないという。日本の大学・大学院の正規課程留学者に対する調査では、日本以外の外資系企業やタイ企業に比べて日本企業の給与水準の低さと昇進の遅さが人材確保の障害になっていると指摘している。さらに、社内公用語を英語にする日系企業の増加もあって、元日本留学者の日系企業離れもあるという。

とはいえ、自国で日本語を学ぶ日本語専攻の学生にとっては、日本企業で通訳・翻訳業務に携わることは新卒では他の業務よりも収入も高く、専門を活かせる業種であるため、満足度は高く、依然として魅力的に捉えられていた。4名は就職後も業務をより円滑に遂行するため、専門用語の勉強をしたり、N2取得後もN1取得を目指して学習したり、日本語のレベルアップに努めている。しかし、通訳・翻訳者としてのスキルアップを図りながらも、通訳・翻訳業務に留まらず営業や人事などの他業務にも関心を持ち、日本でのインターンシップやMBAの取得など、さらなるキャリアアップに向けて努力していた。日本での就職を考えるものもいた。

以上のように、元交換留学生在が日本留学で得たものを活用しながら就職後も日本語能力の向上に努め、更なるキャリアの構築を模索する姿が観察された。

3. インドネシアで働く元交換留学生の留学評価

本節では、日本語専攻で日本の地方大学に約1年間の交換留学をし、大学卒業後出身国で働くインドネシア人3名のライフストーリーを取り上げる。3名はインドネシアの大学で日本語を専攻し、在学中にそれぞれ異なる大学に交換留学をした。

元交換留学生在もタイと同様の評価が得られているのだろうか。

3.1. インタビュー協力者Hさん（15）のライフストーリー

3.1.1. Hさんの略歴

協力者Hさんはインドネシアの大学の日本語学科3年終了後に約1年間交換留学をした。帰国後卒業論文執筆などで1年間大学に在籍し、卒業後約2年間現地の日系企業で働いている。交換留学の前に約1か月日本でのインターンシップを経験している。

3.1.2. Hさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

日本語学習のきっかけは、中学の時に日本の音楽が好きでその歌詞を理解したいと思ったことである。辞書を買って独学した。高校で科目として日本語を選択し学び始めたが、その内容はひらがな、カタカナ、基本文法程度であった。大学は高校の先生の勧めもあって日本語学科に入学した。4年生の時協定校のJ2大学への交換留學生2名の募集があったので応募し、選抜されて半年後の

10月に私費で留学した。

《留学中の生活》

Hさんは留学前に大学のプログラムで日本の企業で1カ月のインターンシップを経験していたが、単身で来日するのは初めてであった。深夜に到着したため、次の日の10時に大学からの迎えが来るまで一人空港で待つのは不安であった。最初に入った寮は大学から約10キロ離れたところで、交通費節約のための自転車通学は大変で、1カ月後に大学近くの寮に引っ越した。

日本語を勉強していたので言語についてはあまり不安はなかった。また、J2大学には50名近いインドネシア人が在籍していたので、安心だった。

留学前から最も不安だったのは、奨学金が得られなかったこともあって経済面であった。

*： 留学前に何か不安だったこととか、ありましたか。

H： あ、する前。もちろん、お金ですね。でも、その時、先輩が日本にいてアドバイスをもらいました。大丈夫ですって、日本で、アルバイト。でも、日本に来て、アルバイト探すのは大変です。難しいです。

その後Hさんはいろいろなアルバイトを経験した。まず1月から新聞配達をやったが、慣れない寒さや雪の中の配達は大変で3か月でやめ、レストランで餃子・寿司作りやサービスなどのアルバイトをした。経済面での不安から、アルバイトのスケジュールを優先して授業をとったため、受けた授業がとれなかったのは残念だった。

秋に来日したため、寒くなっていく気候にも苦労した。雪を見た時は「最初ワイ、ワイという気持ち」で「大変うれしかった」が徐々に苦しい気持ちに変化していった。

しかし、留学前の期待と大きく違っていたのは日本人との交流であった。

*： 留学前に日本留学で期待していたこととか、留学ってこんなのかなというような期待がありましたか。

H： 留学する前には、日本人との交流ですね。日本人との交流は、もっと、もっと、やりやすいと思っていましたけど、でも、日本に来て日本人と交流はあまりできてないんですね。

《人間関係》

Hさんは最初に接する日本人であるチューターに恵まれなかった。

H： 友達チューターがいい。一緒に旅行するとかしたり、一緒に部屋に。でも、私のチューターはちょっと、ちょっとです……。よくなかった。

H： 私、口座、銀行口座を開けるとか、自分で。寮を変えるのも自分で。だいたい自分でやりました。チューターはいるけど、いないみたいです。

その後チューターを替えてもらったが、そのチューターも4年生で就職活動などで忙しく、1回しか会えなかった。

日本人と友達になるのはさらに難しかった。

*： 日本人の友達はできにくかったんですね。

H： はい。だいたいできない。だいたいの日本人はヨーロッパ人と。友達になりたいかもしれませんがね。

*： 日本人と同じ授業はとらなかったんですか。

H： あ、とりました。あの、でも、授業だけ。

と述べているように、日本人学生とは授業で会うだけの関係から友人関係へとは発展させられなかった。「冷たい」という一般的な日本人の対人姿勢の印象は留学を通して強化される結果となった。

H： 留学する時、日本人も私に言いました。「日本人は冷たいですね」と言いました。だから、日本人はそんな感じが。そう思います。一般的に。そう思いますね。

一方、日本語教師である指導教員との関係は良好であった。留学中印象に残ったことは、送別会で指導教員からアドバイスや励ましの言葉もらったことである。

大学の外では、アルバイト先の人が仕事をする時話しかけてくれ、アルバイトを通して日本人の仕事の様子や仕事に対する態度を知ることができた。

同じ日本語の授業を受けている中国人と友達になった。また、モスクで地域に住んでいるバングラデシュ人やアフガニスタン人などと交流できた。

《交換留学生としての学修》

授業は日本語の授業を中心に日本文化や日本人学生と協働型の「日本の政治」などの授業をとった。日本語のクラスはプレイスメントテストで5レベル中の上から2番目のクラスになった。学習内容は漢字以外は既に学んだことが多かったが、インドネシアの大学の教え方よりJ2大学の教え方のほうがいいと思った。インドネシアでは1クラス約30人だったが、日本は10人程度の小クラスだったのもよかった。

帰国後、日本語能力試験のN2にも合格し、会話スキルの上達も実感した。

H： 会話のチャンスも留学前に、日本語でしゃべるチャンスはなかった。なかなかなかったですね。留学中に日本語で、だいたい日本語でしゃべったり、話し合ったり、いろいろなこと、だいたい日本語でやりましたので、日本から帰ってから、少しだけ日本語の会話のスキルが上がりました。

勉学では、前述のようにアルバイトの予定を優先して取れない授業があったことを悔いている。

《留学後の生活》

帰国後1年間で卒業論文を仕上げ、卒業から調査時まで約2年間インドネシアで日系企業で働いており、「だいたい留学の経験とか、日本語も役に立ちました」と留学と今の仕事との関連を評価している。就職時に日本語のスキルや留学の証明書などが評価されたと思うし、日本語ができるから今の職を得られたと考えている。

H： 外国人との交流も好きなので、日本語、特に日本人とは交流好きなので、日本語で、いろいろなことをできて、ほんとによかったと思います。

勤めている日系企業では日本人はマネージャーだけで、日本語は使うが仕事以外ではあまり交流はない。報告書など専門用語は難しいが、使う日本語は限られている。「大学を卒業して日本語はあまり勉強していないので、日本語が退化している」と感じている。

実は、Hさんは教師になりたかったが、教師の給料は高くないので日系企業に就職することを選んだ。

H： 日本から帰って、私の夢は先生、先生になりたいと思いましたけど、通訳、日本の会社で

通訳とスタッフとして仕事を始めてますので。でも先生になるのは夢。私、40代ぐらいに。今問題は給料ですね。インドネシアで先生の給料は大変厳しい。

また、進学したいという気持ちもあり、文部科学省のプログラムに応募したいとも考えている。私費での留学の大変さを経験したので、留学する機会が得られるなら奨学金を得て「勉強だけ集中して」したいと思っている。

《留学を振り返って》

留学中、自国とは異なる環境で独力でいろいろなことができたことは自信となった。

H： だいたい日本の生活が自分でできた、留学する前には自分でできないと思いましたが、日本で自分で。自分でできるのは予想外ですね。

また、1年間の留学を以下のように評価している。

*：（日本留学についての）評価、最後に聞かせていただきたい。

H： 評価ですね。だいたい私の生活にほんとに役に立ちます。経験とか、アルバイトの経験、日本の生活。苦しさ楽しさ。いろいろなこと、感じました。日本語、学べるのは日本語だけじゃなくて、生活のこともいっぱい学びました。（中略）世界はインドネシアだけじゃなくて他のところもありますという感じだと思います。

3.2. インタビュー協力者Iさん（16）のライフストーリー

3.2.1. Iさんの略歴

協力者Iさんはインドネシアの大学の日本語学科在籍中に1年間交換留学をした。大学卒業後1年間現地の日系企業で働いたが、調査時の1か月後に研究留学生として日本の大学院に留学することが決まっていた。

3.2.2. Iさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

高校生の時、日本の漫画を読んだり、兄のパソコンで日本のドラマを見たりして面白いと思い、日本語に少し興味を持った。大学入試は専攻を3つ選ばなければならない制度であるため、英語、工学、日本語を選択し、合格した日本語学科に入学した。高校で日本語を勉強していなかったのが不安だったが、友人もでき、授業にも慣れて楽しくなった。日本語学科の学生なので日本に行くべきだという考えはあったが、4年次に卒論のテーマで迷っている時先生の勧めもあって交換留学に応募した。J3大学の奨学金のテストに受かり、留学することとなった。

《留学中の生活》

Iさんの留学前の不安は自身の日本語能力と人見知りの性格であった。

I： 不安は、やっぱり僕はずっと日本語の能力が自信がなくて、社交的なタイプの人間ではないので、人見知りで、話下手。ずっと感じてるので、なんか、日本に行ったら友達できるかなという不安、あります。

一方、留学への期待も「たくさん友達ができる」ということと日本語の上達であった。

J3大学への交換留学は同じ大学からIさんも含めて6人いた上、J3大学の所在地にはインドネ

シア人が多く、安心ではあったが「逆にちょっと残念だな」と思った。

来日時に、まず授業の取り方の違いに戸惑った。インドネシアではカリキュラムに沿って同学科の学生は全員同じ授業を受けるのに対して、日本では自分で取る授業を選択しなければならないのは大変だった。

生活面では、J3 大学では奨学金を受けている学生は寮には入れないことになっていたため、民間アパートを借りる手続きも大変だった。健康保険のシステムや携帯電話の契約もチューターが助けてくれたものの難しかった。

Iさんは奨学金だけでは十分ではないという不安からアルバイトをしたいと考えていたが、最初は指導教員から勉強に集中するように言われ、諦めていた。しかし、留学生の友人の紹介でカフェでアルバイトを始め、そのことを指導教員に報告すると、意外にも認めてくれ、帰国までそのアルバイトを続けた。カフェに来るお客さんは外国人に理解があり、よく話しかけてくれたこともあって、アルバイトはおもしろく、いい経験になった。

留学中に留学生向けのスキープログラムや富士登山なども経験した。

《人間関係》

Iさんのチューターとの関係は良好で、次のようなエピソードを語った。

*： チューターさんとはどうだったんですか。

I： すごく仲はいい。あの、日本に行った時は炊飯器がやっぱり大事と思って。なかなか買うと値段が高かったので、最初の方はやっぱり節約したいので。奨学金をまだもらっていないので、で、チューターが「僕二つ持っているの」って。すごく優しくて。もらいました。助かりました。

J3 大学には留学生と日本人学生の交流サークルがあり、欧米の留学生が多かったが、日本人学生と日本語で交流する機会も持てた。

Iさんは人見知りの性格もあって期待したほど多くの日本人の友人はできなかったものの、今でも連絡を取り合う友人が数人できた。

留学生の友人では、ブラジル人の友人ができ、授業だけでなくアルバイトや筋トレなど、ほぼ毎日のように行動を共にした。たまたま二人で立ち寄った古着屋さんの店長と仲良くなり、海外に関心のある店長とはよく話した。

Iさんにとって留学中の最も印象に残った出来事は、日本人と留学生の友人が開いてくれたサプライズの誕生会である。

I： たこ焼きパーティーをやったんですけども、少し煙が出てて、韓国人の友達が少し目が痛かったというか、赤くなって、「昔もこういうことありますよ」って、薬を買いに行きます。日本人の友達と一緒にいったんですけども、帰った時にはケーキをくれたんですよ。「誕生日、おめでとう」と言われました。すごく感動しました。

インドネシアでは誕生会をする習慣がないので初めての経験だった。同じアパートに住む留学生も一人ずつプレゼントをくれた。

Iさんは留学中の人間関係は全体として「よかったかなと思います」と振り返った。

《交換留学生としての学修》

Iさんは卒論提出を残すのみだった4年次終了時に交換留学をした。4年次は日本語の授業があ

まりなく、日本語を話す機会も少なかったため、留学時には忘れていたことも多かった。I 大学での日本語の授業は一度学んだことを学びなおすという感じで、課題なども多くはなかった。自分の意欲の問題ではあるが、もっと勉強すればよかったという悔いが残っている。また、留学中に卒論も進めるつもりだったが、最初は図書館で文献にあたったり関連のある授業をとったりしたものの、実際には書けなかった。

留学中に日本語の上達を感じたのは、日本人学生向けの授業でインドネシアの友達がわからないところを教えることができた時や、最初は全然わからなかった日本人の話を「盗み聞き」してわかった時などである。

《留学後の生活》

I さんは帰国後卒論をしあげ、1 年後に卒業した。卒業後の就職活動で日本語学科の事務所で見つけた日系 IT 企業の面接を受け、就職した。

* : お仕事はどうか。楽しいですか。大変ですか。

I : 大変ですね。正直、大変です。でも、周りのスタッフはすごくいいスタッフなんで、楽しくできるんですけども、仕事自体は、大変だと思う。

I さんが勤める支店には日本人スタッフはおらず、日本語ができるスタッフは 2 名だけで、税金や保険などに関しても二人でやらなくてはならない。専門用語が難しく、何が伝えたいのかわからず誤解が生じることも多い。日本との仕事上のやりとりは英語が多いが、日本のスタッフがわからないことがあったら日本語にすることがある。

* : 留学したことで、今の仕事に役にたっているなど思うようなことがありますか。

I : はい。やっぱり日本のスタッフと日常会話をしている時はやっぱり大きいと思います。専門用語的なものはプロジェクトに関して使うんですけども、ほぼ毎日普通の日常会話なので、やっぱり役に立ちました。

しかし、I さんはこの会社を 1 年でやめて、調査時の 1 カ月後奨学金を得て日本の大学院に留学することが決まっていた。将来、教師になりたいと思っている。

I : 先生になりたいのは、人見知りで、自分が困っているから、あえて教えることを知りたくて。あとは先生になるきっかけは、また日本の映画を見て、えっと「ビリギャル」かな、あれを見て、先生っていいなと思って、先生になりたいと思いました。

教師を志望することと交換留学との関連については以下のように述べた。

I : (留学は) けっこう影響があると思います。なぜかというと教えるのが、もし経験がないと、教えるのがただ作り話みたいな感じなので、経験があるともっともっと説得力があるので、学生さんたちに「こういうことがあるんだ」ともっと正しく言えるのではないかと思います。

《留学を振り返って》

最後に、1 年間の交換留学の評価を聞いた。

I : やっぱり楽しいことがたくさんあったんですけども、後悔のストヘーリーも結構ありますね。

* : 後悔。やればよかったこと、聞こうと思ってたんですけど。例えば、どういうことです

か。

I：例えば、筋トレは毎日しなくても大丈夫。日本をあちこち旅行したらいいなと思いました。で、自分の意思をあまり、周りがどう思ってるかはあまり気にせず、自分の道をまっすぐ行ったほうが良いと思いました。(中略) けっこう後悔しましたね。そういう時は楽しいけれども、やっぱり。留学した時やらなかったことは残念と思います。

3.3. インタビュー協力者Jさん(17)のライフストーリー

3.3.1. Jさんの略歴

協力者Jさんはインドネシアの大学の日本語学科2年終了時に約1年間のJ1大学に交換留学をした。大学卒業後フリーランスで通訳・翻訳をした後、現地の民間日本語学校で教鞭をとり、その後出身大学の大学院に入学した。大学院在学中に修士論文のデータ収集と論文執筆のため日本の財団の支援を得て3か月間J2大学に留学した。調査時にはフリーランスで通訳・翻訳をしながら、大学院で研究を続け、日本の大学院への進学を目指していた。交換留学終了から約4年が経過していた。

3.3.2. Jさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

Jさんは、子供の頃毎週日本のアニメを見ていて、日本に親近感を持っていた。親戚や友人の親に日本留学経験者がいて、自分も留学したいという気持ちを抱いた。高校の時よく見ていた日本のお笑い番組を通して、少し日本語がわかるようになった。進学校の高校では有名大学への進学が一般的であったが、通学の利便性や学費などを考えて出身地の国立大学で言語教育が充実している大学を選んだ。日本語を「最大限まで活かせると別の質になれる」と思い、入学後頑張って勉強し、留学前には日本語能力試験N2にも合格した。2年次終了後当時交換留学できる唯一の大学だったJ1大学に留学した。留学後奨学金がもらえることになった。

《留学中の生活》

Jさんは留学前「不安はまったくなかった」という。2年次終了時に交換留学生に選ばれることはなかなかないことなので誇らしかったし、「留学したい」という気持ちが何よりも勝っていた。

来日後まず直面したのが電気、水道などの手続きの難しさであった。留学生寮のチューターが新入留学生を集めて手続きをしていることを知り、一緒に済ませることができた。また、インドネシアでは固定されたカリキュラムであるため、自分で授業を選択しなければならないのは大変だった。

イスラム教徒であることで思わぬ問題や制約もあった。

J：ちょっとびっくりしたのは、節約してふりかけを買ったら、意外と豚肉がはいっていた。社会体験としてアルバイトをしたいと思ったが、居酒屋などのお酒を出すところは抵抗があったし、ヒジャブを付けているのでアルバイト先の制約があった。パン屋で週3回朝6時半から11時までパンの成形をするアルバイトを見つけた。力仕事で大変だったが、勉強になった。

大学では日本語を使うことに重点を置き、周りから「やりすぎ」と思われるくらい積極的に授業に取り組んだが、じっくり勉強したのは寮であった。80%くらいの力を勉強に注いだと思う。

日本人学生、留学生、地域の人など徐々に出会いが増えて、誘われることも多くなった。また、奨学金のおかげで余裕もあったため、東京の大学院に進学した先輩を3か月に1回程度訪ねて大学院進学のための情報収集をしたり、J2 大学に留学している後輩のところに遊びに行ったりした。

*： 日常生活もけっこうアクティブだった。

J： そうですね。ほんとに1年間また来れるかどうかわからなかったので、今のチャンスをできるだけ使おうみたいなことにしてた。

《人間関係》

日本人学生をはじめ日本人の対人姿勢には冷たさを感じた。

J： 一番びっくりしたのは、やはり日本人の学生は冷たいことですかね。特に私、特別に髪を見せないし、みんなも抵抗あるんじゃないですかね。仲良くできた人は普通に仲良くして、一緒に授業にも出ますし、やはりたまにがん見されてて、またはちらちらされてて、いやとは思わないけど、話しかけるよみたいな気持ちになりますね、もしそこまで見たら。

専門科目の教員など外国人との接触の少ない日本人についても同様の印象を持った。

J： 留学生センターの先生はすごくサポートしてくれて、授業も楽しいし、みんなコミュニケーションがすらすらできます。でもやっぱり他の学部の授業をとると、やはり先生も異文化に関する興味もないので、ほんとに「ザ・日本の先生」のバージョンが出てる時「うあっ」てなってますかね。

しかし、徐々に友人関係を広げていくことができた。チューターとは初対面の時こそ「冷たさ」を感じたが、Facebook で同じアーティストが好きだということがわかり、距離が縮まった。J 1 大学では大学主催のパーティに加えて、チューターをはじめ国際交流に関心がある学部生も参加できる学生主体のパーティやイベントが多く、交流の機会に恵まれていた。自分たちでも新たに毎週金曜日に一緒に食事をする「食事会」を行った。クラスメートだけでなく、寮での交流を通して多くの日本人学生、世界各国の留学生の友人ができた。これらの友人とは今でも SNS などを通して繋がっている。チューターには再来日した際に空港まで迎えに来てもらい、数日間泊まらせてもらった。

インドネシアで教えた経験のある指導教員との関係は良好で一緒に外食するなどした。地域の人とも交流があり、周辺の観光地やお祭りにも連れて行ってもらい、今も連絡を取り合っている。ホームステイの家族とも連絡を取り合い、関係を維持している。

《交換留学生としての学修》

授業では先生に質問をしたり、コミュニケーションの練習はできたが、じっくり勉強できたのは寮であった。

J： メディアからの日本語を勉強するのが一番多かったんじゃないですかね、バラエティとか。(中略) または、私たち日本語学習者にとっては JLPT を一所懸命とらないといけないわけなんで、対策は学校じゃ物足りないと思うんで、自分で試験の前に三冊、二冊ぐらい本を終わらせて受けることによって完全に合格じゃないみたいな。

頑張ろうという気持ちの中には自分を「いじっていた友達」を見返したいという気持ちもあった。

日本語の授業では来日したばかりの学期より次の学期のほうが簡単に感じたのは日本語が上達したからかもしれないと思う。しかし、上達が客観的に測れるのは日本語能力試験だと考え、留学中にN1に挑戦し、文法と聴解の力がついたことが確認できた。読解の点数が足りなかったが、帰国後再挑戦しN1に合格した。

Jさんは日本語の授業の他、単位互換ができる専門科目を選んで履修し、大変だったが単位を取得した。

《留学後の生活》

帰国後1学期はJ1大学で取れない科目の単位をとり、次の学期は実習と論文で、帰国後1年半で卒業した。卒業後フリーランスの通訳を始めた。会社の通訳より自分には合っていると思っていたが、親が心配したことやいやなこともあったため辞め、民間の日本語学校の教師をアルバイトとして始めた。1年半たった頃大学の先生に勧められて大学院に進学した。文部科学省の試験を受けて日本の大学院に留学したいと思っているが、親の許可が得られずインドネシアの大学院で勉強しながらチャンスを待つことにした。将来は大学で教えたいと考えている。

現在、大学院に通いながら再びフリーランスの通訳をしているが、以前とはちがひ、あるインドネシア人の通訳・翻訳担当者のような形で仕事を得ているので、不安はない。時間が自由で、翻訳については自宅でできるので研究と両立できている。

《留学を振り返って》

日本語や日本留学経験はJさんの人生において大きな位置を占めている。

J： 日本語、自分の仕事になってますね。日本語じゃないと自分がどこから稼ぐっていうより、他の分野は自分得意じゃないですし。できると思いますが。日本まで行って活かさないともったいないじゃないですか。なので、最大限に使おうと。(中略)8年間もかけて日本語と接して、人生の半分というか1/3になっているじゃないですか。

留学中勉強も頑張ったが、思い出されるのは勉強よりも「普通に楽しかった」ことである。その中でも人との出会いが印象深い。

J： チューターとの出会いですかね、広い人脈に出会うことが印象に残っていますかね。この人と会う時こんな感じだったんだけど、段々仲良くなって。一番印象に残ってるかなって。

Jさんは留学中の出会いについて次のように付け加えた。

J： ほんとに留学することによって、新しい経験だけではなく、新しい家族ができるような感じがしますね、私にとっては。家族の存在をすごく感じたですね。日本に行くと、ただの学び先だけではなく、そこにも私を待っている人がいますし、再会できるのがうれしい人もいますし。

最後に、1年間の交換留学をどう評価するかを聞いた。

J： できればお勧めしたいですかね。後輩にお勧めして。ここで最大限まで日本語を勉強していても、物足りない部分、絶対にありますので、自然さとか、ニュアンスとか、日本で学ばないといけないものとか、できないものもあって。日本語学科となると、できれば留学したほうがいいんじゃないですか。

就職の場面でもすごく自分のポイントになっていますし、最近の会社はできれば留学経験がある人みたいな条件も付けくわえて、ものすごく自分の value になってるんじゃないですかね。

留学中にやればよかったと思うのは通訳や先生の研究のアシスタントなど「ハードルの高いバイト」である。また、少子化のせいか大好きな子供と触れ合う機会が留学中ほとんどなかったことを残念に思っている。

3.4. 考察

本節では、3名の留学評価から読み取れる交換留学の意義について考察を加え、語りから浮かび上がった受入体制の問題点を検討する。

3名は大学で日本語を主専攻とし、交換留学生として選抜された優秀な学生である。3名は子供の時から日本の漫画やドラマ、音楽に触れ、日本に親近感を持っていた。しかし、大学入学前は特に日本語に強い関心があったわけではなく、親や先生の助言もあって日本語学科を選んでいった。いずれも大学在学中に交換留学制度を利用して日本留学をした。現在、フリーランスの通訳・翻訳家、日系企業の社員として通訳業務にも携わるなど日本語を使う仕事に従事している。

経歴から見ると共通点が多い3名ではあるが、交換留学中の体験とその評価は、自身の性格、経済状況、出会った人々、大学の受入体制などのそれぞれが置かれた環境に影響を受けながら3人3様に展開していることが、ライフストーリーの語りを通して描出された。

しかし、日本語が主専攻である3名ともに交換留学の経験を有意義なものとして評価している。池田・八若(2017)の文系元留学生と同様に、日本滞在経験そのものに意義を感じ、日本に滞在しなければできないことから多くのものを吸収し、自信を得、視野を拡大していた。3名は大学卒業後日本語や留学経験を活かした仕事についており、その点でも評価が高い。さらに、就職後も学習への意欲を継続して持ち、日本の大学院への進学を希望している。3名にとって、交換留学は1年間という短い期間であるが、自信を得、自分に足りないものを認識し、大学院留学という次のステップへの動機を提供する場となっていた。日本語の上達という「専門性の深化」、「人間的成長」や「自信」、就職での評価などの「他者からの評価」と、短期間の留学であるが、田中(2014)で指摘されている留学成果との共通性が確認できた。

日本語専攻の学生は日本・日本語の専門家として日本の良き理解者となる人材である。さらに、将来理解者となる日本語学習者を育てる人材となる可能性も持っている。交換留学は留学生の人生において重要な意味を持つだけでなく、このような人材を育てるきっかけをつくる場となる意義深いプログラムと言えるだろう。

一方、3名の語りから、ホスト国である日本の留学生受入体制の問題点もいくつか判明した。まず、経済的支援の問題である。奨学金が得られなかったHさんと奨学金受給者の2名との間には留学中の経験に明らかな差異が見られた。Hさんは経済的な苦境に立ち向かい、成長への糧としたが、勉学の妨げになる状況には制度上の改善が求められる。IさんもJさんも奨学金受給者であるが、経験としてアルバイトをし、日本での貴重な体験として評価している。これらのことを踏まえ、受給者数や支給額の配分の仕方などを含めて交換留学生に対する奨学金制度の在り方を見直す必要があるのではないだろうか。

次に、来日時の手続き支援についてである。来日時の諸手続きの煩雑さについては本研究の3名

だけでなく池田・八若（2017）の大学院留学生をはじめ多くの留学生から指摘されている。諸手続きの簡便化には時間を要するだろうが、手続きへの支援を個々のチューターに託すといった状況には改善の余地がある。手続きの煩雑さが自明のことであるなら、一時的な支援ボランティアを事前に募るなど集団での支援体制を構築するなどの対応が考えられる。

3点目は、日本人学生の友人作りの難しさの問題である。Jさんは友人を得たものの、一般的に日本人は「冷たい」と感じている。Hさんは日本人学生の関心が英語を話す欧米人に向いていると感じ、日本人との交流は難しかった。日本人学生の友人作りの難しさは有川（2016）、吉野（2017）でも指摘されている。有川は、インドネシア人学部留学生の日本人の友人作りの難しさについて、自国の体験に基づいた友人関係の認識とのずれが困惑や不信感を引き起こしていると分析している。これらのずれに関して留学生側の理解や適応を求めがちであるが、多文化との共生が求められつつある日本において日本人側も自らの対人姿勢の問題点を認識し、変えていく方策を考えるべきであろう。しかしながら、池田・八若（2016、2017）の大学院生の場合はいずれも日本人学生の友人作りの問題に関する言及はなかった。友人作りについては留学期間や学部生特有の要因を探る必要もあるだろう。

4. ベトナムの企業で働く元交換留学生の留学評価

本節では、日本語専攻で日本関連企業で主として通訳・翻訳業務に携わるベトナムの元交換留学生2名のライフストーリーを取り上げる。国際交流基金（2020）によれば、ベトナムでは、ベトナム人の雇用に積極的な日本企業が増えており、現地の日系企業への就職機会が急増しているという。また、ベトナム国内の日本語教育機関数・学習者数ともに大幅に増えており、顕著な日本語学習熱の高まりがみられるという。

表3にインタビュー協力者2名の略歴を示した。

表3 インタビュー協力者の略歴

	Kさん	Lさん
日本語学習歴	大学（日本語専攻）	中学・高校（選択科目）、大学（日本語専攻）
留学した学年	3年次終了後	3年次終了後
卒業後の進路	大学で日本語教師（3年半）、大学院でも学ぶ	留学・技能実習生送出関連企業（～現在）
転職・その他	日本の独立行政法人契約社員（2年半） IT企業社員（マーケティング日本担当～現在）	なし

4.1. インタビュー協力者Kさん（18）のライフストーリー

《日本語学習及び留学のきっかけ》

子供の頃から日本の漫画が大好きで、大学で日本語を勉強し始めた。勉強し始めて1年間ぐらいはとても難しいと感じた。それまで勉強した英語とは日本語は全く違うと感じた。文字も違うし、語順も逆なのでいつも考えてから言う感じだった。場面が違うと言い方が違うし、曖昧で「行間を読む」ことも求められる。しかし、「日本の社会、自分の目で見たい」、「映画と、マンガ、似てるかどうか。」と思い、どうしても留学したいと思うようになった。当時交流のあったJ1大学には奨学金を得て先輩が行っていたので、可能性が高いと考えた。奨学金の選抜試験は大学のトップ10名が受験できるという難関であったが、それを突破して3年次終了後留学した。

日本語能力試験2級（現N2）を取得してからの留学だったが、それまで日本人との接触は日本

語の先生2名だけだったので、日本で自分の日本語が通じるかどうか不安だった。

通訳になりたいという希望があり、「1年日本に住んで、帰ったら何でも分かる」ようになると期待していた。

《留学中の生活》

空港までベトナムの大学と交流のあるJ1大学教員が迎えに来てくれたり、指導教員が生活用品を準備してくれたりして、順調に留学生活が始まった。慣れない寒さは大変だったが、生活面では、日本はたいていものに説明書などがあるなど便利なので、困ったことはそれほどなかった。

初めての一人暮らしで最初少しホームシックになったが、同じ大学から一緒に留学した友人がいたことや、Skypeを使って画像を見ながら家族と話せたことで、乗り越えられた。

J1大学のある町は漫画でみていた日本とは違っていたことにまずびっくりした。

K： 最初、びっくりしましたよ。

*： マンガと違うって思って。

K： そうですね。日本は発展国なので、どこでも高いビルがあると想像しています。そして、ハノイでも、結構その時は発展してきたので、高いビルもたくさんあるし、結構にぎやかでした。J1大学のある町は、静かでした。

また、日本は「世界で一番安全な国」だと聞いていたのに「痴漢注意」という看板が多いのにも驚いた。痴漢については他の人からも聞いており、7時半までに留学生寮に帰るようにしていたので、幸いなことに自身が痴漢に遭うことはなかった。

しかし、留学当初に期待と違うと最も感じたのは、日本人の対人行動の「冷たさ」だった。

K： マンガでは、親切な人ばかりだと書いていますので、実際、周りの人は忙しくて、ちょっと冷たい感じが。

*： やっぱりそうなんですか。冷たい感じが。

K： でも、J1大学の授業で、実はその人が冷たいわけではなくて、ただ恥ずかしいとか、他の人がそうだと自分もそうしなければならないという人が結構いますので。だんだん冷たさが減りました。でも、最初は本当に冷たかった。

さらに、自分自身の日本語の不十分さも感じた。

K： 最初は伝えたいことは全部、伝えきれないような気がします。なぜかというと、生の日本語は違うようです。

それまでの日本語の勉強では、ベトナム語から日本語に訳していたので、どうしてもベトナム語の影響があると感じていた。

最初戸惑ったこととして印象に残っていることの1つに「自己紹介」がある。

K： 日本へ行く前には、自己紹介は、ベトナムではあまりしなかったんです。でも、日本へ行って、どこでも自己紹介。1日には、3回ぐらい自己紹介とかしてたので、結構、慣れてきました。でするので、今、仕事で誰かに会うときも、自然に自分のことを、先に自己紹介を行いますので、日本が・・・。

*： 習慣になったんだ？

K： はい。そうですね。日本人だけではなくて、ベトナム人とか、他の、ヨーロッパから結構

人を雇っても、これは、親切な挨拶として、みんな受け入れてもらったんです。

*： 自分が誰か、どういう人かっていうことを言うっていうのが、関係づくりにいいっていう感じですね。

最初は知っている人もいるのに、何回も言うのが恥ずかしかったが、今では慣れて全く違和感もなく、友達になりやすいと感じている。

《留学生としての学修》

指導教員のゼミ、日本語教育やメディア関係の科目など日本人向けの授業も数科目とった。授業で参考文献などで読んだことをもとに議論するのが大変だった。

K： 昔、長い文章は、試験、読むだけでしたので、長くても、3、4ページぐらいで終わりということですけど、日本、J1 大学で参加した授業の中では、いつも、その本を半分とか読んで、次の・・・。

*： 授業の準備をしないといけないっていうこと。

K： そうですね。

レポートも大変だった。

*： レポートとかも大変でしたよね？ それこそ、これだけ授業、取ると。

K： はい。私のめちゃくちゃな日本語、多いんで、ちゃんと採点してくれて、本当にありがたかったんです。

おそらく1年間だけの留学生ということで先生方もそれほど厳しくなかったのだと思う。大変だったが、単位もとれて何とかあった。今は「よかった」と思っている。

来日後3か月の頃 JLPT1 級（現 N1）に合格し、だんだん本も読めるようになったと感じた。

K： 今でも N1 を持っている人でも、本が読めない人が結構いますね。でも、私は経験のおかげで。

*： で、やっぱり、たくさん読んだおかげで。

K： はい。そうですね。文章の書き方も、結構うまくなりました。

今でも作文と読解は得意である。

1年間留学すれば何でもわかるようになるという期待に反して、「勉強はまだ足りないまま」帰国したと思っていたが、帰国後の授業では聴解や翻訳のスキルの上達を実感した。

K： ベトナムに戻って、1年、(大学で)勉強したじゃないですか。そこで、また、翻訳の授業があつて、筆記試験は全然、私にとっては問題がありません。勉強しなくても、簡単に合格できるようになります。

《人間関係》

来日後1学期目は寒くてあまり外に出られず、チューターによく助けてもらった。2学期目、春になってからは赤十字サークルなどの交流活動に参加し、楽しかった。日本人だけでなく、韓国、中国、モンゴル出身の友人もできた。

2学期目の4月からは J1 大学の新生と一緒に授業や活動に参加した。みんな初めて会うので交流しやすいと感じた。「そこで、みんな一緒にグループでレポートを出しますので、結構、交流が多かった」と振り返っている。

指導教員との関係も良好だった。指導教員からは授業外でも日本の文化などについて多くのことを教えてもらった。授業に関連してお祭りや有名なお寺などに連れていってもらった。その中には他の留学生と話していて自分しか知らない知識もある。授業外でも有名な滝やリンゴ狩りにも一緒に行った。指導教員とゼミの留学生と一緒に花火大会に行ったのもよい思い出だ。キティやドラえもんなどの形など新しい発想のものがあつて、それまで見た花火の中で一番きれいだと思った。指導教員のおかげで、楽しい1年が過ごせたと思う。

数年前まではJ1大学の教員が交流プログラムでベトナムに学生を連れて来ていたので、交流活動に参加したりしていたが、最近あまり連絡をとっていない。留学中親しくなった友人とはFacebookを使って帰国後も連絡を取り合っていた時期もあったが、Facebookをやめてからは連絡もなくなった。指導教員とも日本への出張の際などに連絡をとっているが、この数年は会えていない。

地域の人との交流は個人的には少なかったが、中学校や高校に行って自国の文化を紹介する親善大使の活動に参加した。

《留学後》

留学終了後1年間出身大学で勉強し、卒業した。当時は日本語教師になりたいという気持ちが強く、いろいろ選択肢はあつたが、日本の独立行政法人によるプログラムがある理系大学に日本語教師として就職した。日本人スタッフと一緒に教えることができることや留学で経験した直接法で教えることなどが魅力だった。自分が体験してよかったと思うことを学生にも体験してもらいたいと思ったからだ。

*： どうでしたか。日本語教師のお仕事は。

K： 楽しかったですけど、大変でした。ベトナムの、大学教師は結構、給料が安かったですので、大変です。

担当は基礎の日本語を教えることで、専門関連の日本語は日本人スタッフが教えた。学生は真面目でいい学生ばかりだった。大学卒業後日本で就職するというプログラムなので今はその多くの修了生が日本にいる。日本で経験を積んで、帰国後起業する者も多い。教え子が活躍しているのはうれしく思う。しかし、同プログラムが終了し、日本人スタッフが帰国して教育方針も変わったことから、3年半で大学を辞め、日本の独立行政法人に契約社員として就職した。

そこでは、「日本の地方の団体がベトナムの地方をサポートしたい」時の支援をするという草の根技術協力の仕事に携わった。制度としては正社員になることもできたが、情勢をみると可能性はあまりないと思った。ODAによる事業であるため、ODAが縮小されると自分の仕事がなくなると思い、2年半勤めて、29歳の時現在の会社に転職した。日本への出張が多く、日本語が活かせると思ったからだ。30歳になると就職しにくくなるという背景もあつた。

*： これはどうやって探したんですか。

K： ただ、募集を見て応募しました。

*： そこを選んだ理由とか、そういうのは。まずは日本語？

K： 日本語。それから、今、ITは結構、はやっていたんです。大学で教えていたときにも、みんなは就職（活動）したら、すぐ内定もらえるぐらい、すごいはやっていたんですから、ITがいいかなと思って、ITに就職して。そして、うちの近くに、近い所を探しました。

現在勤めている会社は社長が日本で9年働いた経験があり、顧客は日本人が多い。今は日越の翻訳をチェックする立場でもある。

*： 今の仕事はとうですか。

K： まあ、いい仕事ですので。はい。

*： 選んで良かったっていう感じですか。

K： そうですね。

*： その、翻訳のチェックをしたり・・・。

K： 実は、マーケティング担当ですので、あの、日本の展示会に出展したりとか、新聞広告を出したりします。

日本語学習は留学終了後も続けている。大学で教えるために大学院に進学する必要があったので、勤務先の大学院に進んで日本語の指示詞をテーマに研究した。前職ではビジネス日本語の重要性も感じて勉強した。

K： ビジネス日本語は、前の勤務先に入ってから、ビジネス日本語はすごい重要だと思っていました。そこは、例を読んでも全然、分からないくらい、敬語ばかりですし、言い回しも多いんです。

現職についてからは、IT 専門用語など実際の案件を通じて勉強している。

《留学を振り返って》

日本に留学してよかったと思うことはいろいろある。

まず、就職に際しても留学したことが評価されたと思う。

K： まずは、面接の時でも、日本行ったこと、特に、日本へ留学したことがある人は優先されるような気がします。日本人のお客さまと仕事をしますので、やっぱり、日本の感覚がある人が優先されます。

*： そうなんだ。やっぱり、何となく雇う側も、留学したことがあるっていいと感じているということですかね。

K： 私が、職歴を見て、分かると思いますけど、マーケティングの経験とか知識は全然、持っていなかったんです。でも、日本語ができましたので。それからマーケティングの知識を勉強させてもらって、今は担当になります。

*： なるほどね。両方できたら素晴らしいね。マーケティングのほうも。

K： そして、将来にも役に立つと思います。お客さんと話すときは、どこで留学するか、やっぱり、話になりますね。

顧客との対応に際して、学習した言語が日本語でよかったと思うこともある。

K： 今までは、開発して、お金を払わない人、日本人のお客さんはいません。ヨーロッパとか、シンガポールにはそういうケースが出ました。でも、私は日本市場を担当しましたので、全然そういう悩みはありませんけど、他の人は。

*： そういうところは、割と信頼できるかもしれないですね。

K： そして、日本人は真面目ですので、こちらの、時々は注意不足のところがありますけど、いつも・・・。

- *： ああ、はい。細かいところに気が付いてくれるっていう。なるほど。そういうことはあるかشれないですね。じゃあ、日本担当でラッキーみたいな感じなんですね。
- K： 日本語を選んで良かった。英語だったら、今、苦労しています。

現職では日本語からベトナム語に訳すことが多いが、「日本人の発言を聞いて、細かいことが分からない人は、ちゃんと分からない」、日本での生活体験があるからこそわかると感じることもある。

さらに、留学全体を振り返って、次のように評価した。

- K： 人生が変わりました。視野が広がっているし、その、考えも全然、変わりました。
- *： うん。ちょっと具体的に、視野が広がるっていうのは、どういうことですか。
- K： 前、ベトナムでは、先生が教えたことばかりを・・・。
- *： 真面目に。
- K： とか、そのことだけを信じてたんですけど、日本は違う世界ですので、それは本当に絶対、正しいかどうかを・・・。
- *： 疑ってみる。
- K： はい。自分の考えを持っています。

留学終了後、次の年留学する後輩のために注意すべきことを書き出して残した。銀行口座の開設や大学の旅行への申込み方、ゼミや授業の情報、交流イベントやサークル活動などについての情報をまとめた。後輩たちにも日本留学を勧めたい。安全で、いろいろな形でサポートしてもらえたからだ。

- K： 勧めます。本当に。私は、海外、初めて行くのは日本ですので、良かったです。ですので、初めての海外は。だから、日本へ行ってください。

留学についてやっておけばよかったと思うことは、交流活動への参加と帰国後の友人たちとの連絡だ。

- K： もっと、交流活動とか、他の活動に参加したほうがいいなと思っています。そして、戻った後は、そのときはみんなと連絡しなかったんです。ちょっと忙しくてとか、恥ずかしいとか。全然いいこと、大したことがないですので、連絡しなかったんですけど、結局、止めてしまって、残念だったなって。

4.2. インタビュー協力者Lさん（19）のライフストーリー

《日本語学習及び留学のきっかけ》

Lさんが合格した中学では、必修の英語以外にフランス語か日本語を選択して勉強することになっていた。迷っていたら、父親がニュースなどを見て「これからは日本語に投資」と勝手に選んだのが日本語学習のきっかけだった。「最初は嫌だったんですけど。なんで、全然聞かずに、(父が)自分で決めるんだよ」と思ったが、日本語を勉強してみたら面白かった。中学を卒業したらやめるという選択もできたが、高校に入ってから勉強を続けた。中学では週3時間、4年間でN5程度、高校3年間でN4程度になったと思う。

高校の時の日本人の先生の授業が面白くて興味がわき、勉強を続けたいと思ったため、大学で本

格的に日本語を勉強し始めた。大学ではまったく日本語学習の経験のない学生と一緒にゼロから学び直した。最初は全部知っていることでつまらなかった。

L： 既に勉強してる私たちがいて。やっぱりゼロの学生さん、他の学生さんもそれを見て、すごく努力したんですよ。やっぱりもともと勉強してるのに、負けないわけって感じで。

*： 負けるわけにはいかないね。

L： それで、やっぱり、つまんないはつまんないけど。やっぱり、100パーセント完璧に、テストをやって、もう全部、満点にするっていう。

*： 新たな目標ができたという・・・。

このような競争的な学習環境が面白かったのかもしれないと思う。

当時は交換留学先はJ1大学だけだったので、優秀でなければ行けなかった。実力を見せたいという「プライド」があった。また、「やっぱり日本語を勉強するのに、日本へ行けないなんてちょっと残念じゃない?」とも思っていた。加えて、高校時代に作文コンテストで優勝して2週間交換プログラムで日本に行った経験があり、また行きたいという気持ちもあった。選ばれて3年生終了時にJ1大学に留学することになった。

心構えもできていたので、留学前の不安はあまりなかった。

L： 高校のときの、一度は行ったし、そのときも、日本語能力もN2ぐらいだったんで、そんなに言語的な問題はなかったんですけど。不安とかは、別になかった。

留学前の期待は多くの友達を作ることだった。

《留学中の生活》

10月の来日だったので寒さには困ったが、ベトナムで日本文化についての授業も受けていたこともあって生活上の問題はあまりなかった。ベトナムから持ってきた調味料などを使って自炊もできた。

しかし、留学前の期待に反して友達づくりは難しかった。

L： やっぱり、勉強したら、クラスの形で、日本人のみんなと一緒にいる気持ちだったんですけどやっぱ、単位制度だったので、もう学生さんはバラバラなんで。クラスメートの、感じは全然なかったんですね。他の、外国人の留学生とかは、(日本語の)クラスになってるんですけど、それちょっとクラスメートって感じだったんですけど。

指導教員のゼミにも参加したが、週1回だけだったのでクラスメートという感じにはなれなかった。さらに、留学生寮でも前の学期から住んでいる留学生の輪に入っていくことが難しいと感じた。

L： 寮に住んでたんですね。寮のみんなとは、チューターとかはいたんですけど。やっぱり、前期と後期があるんじゃないですか。で、前期から入っちゃった子が。私は後期からじゃないんですか。それで、もう、みんなはもう仲良しで。

*： ああ、なるほど。

L： お互いも知ってたし。新しいメンバー、私のような新しいメンバーだと、まだ不慣れないことが。それがあって。なんか、え?新しい関係をすぐに入れない。ラウンジに入っても、みんながこう見て。見られる感じだって感じで。

韓国人留学生はみんなに人気があったし、中国人は中国人で固まっている感じがして、既にグループができてるように思えた。

コンビニとラーメン屋でアルバイトをした。ラーメン屋は先輩からの紹介だった。店長は「怖い」と言われていたが、冗談をよくいう面白い人で大変お世話になった。店長からは仕事に対する姿勢を学んだと思う。

L： 一番、印象が残ったのは、一度最初アルバイト、ホールのほうだったんですけど、なんか、声が小さかったんで。それ、すごく叱られて。おまえ、何だ、元気ないの？とか言われて。次は入らなくてもいいよとかみたいな、言われて。

*： あ、そういうのがみんな怖いって言うんだよね。フフフフ。

L： はい。でも、じゃあ自分が駄目なんだって思って。やっぱり、逆に考えると、もし相手、自分が会う相手が小さい声で話してくれたら。やっぱり、コミュニケーション取れないか。で、それで、やっぱり活発な、店員のいるお店だったら、やっぱり人気があるっていうのもあるんだねって、思って。じゃあ、次に、もう大きい声で。それで、今でも、今の職場でも、私が一番声が。

*： 声が大きい。

閉店後の態度でも店長に注意された。

L： もう一回は閉店の時間で。もう1日、疲れたので、疲れた顔をして。その時も、接客とか、もうないし。じゃあ、その顔してもいいじゃんって感じで。で、掃除しながら、こう。下を見ながら、お掃除して。おまえ大丈夫かいって言われて。え、なんですか。今、お客がいないけど、まだ、店員さんは、周りにいるじゃないって。みんなも疲れてるけど、おまえの顔を見たら、もっと疲れるよって。それで、ああそうなんだっていうふうに。じゃあ自分の顔だけじゃなくて、やっぱりみんなの様子を見ないといけないんだっていうふうに気付いて。それで、今でも、今の職場でも、いつも元気に。

日本でのアルバイト経験から得た就業姿勢は現在の仕事にも活かされており、新入社員などにも伝えている。

留学中印象に残った二つのエピソードがある。一つは、「町おこし」関連の授業で外国人にゴミ分別をどのようにしてもらうかを提案する発表をした時、市の行政の幹部の方が来てくれたことだ。ベトナムでは考えられないことなので、「ただ大学生の授業でも、こんな大事な方が来てくれるなんて。すごいな」と思った。在学中の学生が大事にされていると感じた。もう一つは、大学でハロウィーンの時期に開かれた国際交流パーティに学長が出て、挨拶してくれたことだ。文化差を感じると同時に、ここでも留学生が大事にされていることを感じた。

《留学生としての学修》

日本語の授業はプレイスメントテストの結果一番上のレベルのクラスになったが、日本語の授業は面白くて問題はなかった。

しかし、日本人学生向けの教養科目や専門科目では戸惑ったことがいくつかあった。一つは、自分で授業を選ばなければならないことだった。ベトナムとは異なる制度なので、先輩からの情報を参考にして、単位互換ができる日本語関連の授業や異文化理解の授業、指導教員のゼミなどをとっ

た。

次に、日本人学生向けの授業で困ったのは多くの授業がレポートで評価されることだった。

L： ベトナムと違ったのは、レポートで採点。結果と成績となるんですけど。ベトナムではそれはないんですね。ほとんどは全部、テストの形で。

「異文化理解」のような正解がないものをどう書けばよいのかにも戸惑った。

L： それはそれで、ちょっと困ったんですね。で、テーマも考えながら、とかみたいな。で、チューターさんもいたんですけど。チューターさんの意見も聞いて。ちょっと教えてくれない？みたいな。それで、グループのみんなも、ちょっと参考にして。それ作れたんですけど。それはやっぱりレポートは、採点っていうのはなかったんで。それは困ったことかな。

もう1点、ベトナムではないもので戸惑ったのは毎回授業後に質問やコメントを書く「振り返り」だった。

L： もう、あれは。やっぱり、普通の生活上の日本語コミュニケーションとかは全然、問題ないですけど。

*： はいはい。違いますね。

L： はい。でも、専門的な言葉とかも重なって。ああって感じで。じゃあ、え？最後にどう、どう書けばいいのかみたいな。

ベトナム語なら書けたかもしれないが、日本語では難しかった。

L： 書いたんですよ。やっぱり私、ちょっとでも書きたいな気分で。よく考えて、書いて。でも、文法的とかも全然、気にしないんで。ただ、聞いていることを、意見とかを書いたりして。でもそれも、問題でしたね。困ったこと。

さらに、指導教員のゼミは社会心理学で、各学生が準備した新聞記事を読んで意見交換するという形で進められたが、当日配られたものは漢字などの問題で読むのが大変だった。自分が担当の時はみんなが興味を持ちそうなテーマを選んだが、他の学生が選んだトピックがあまり関心のないものの時はつまらなく感じた。

留学中の日本語の上達については自分では気づかなかったが、チューターに日本語を褒められたり、修正や添削部分が少なくなったりしたことで実感した。

L： これはちょっと、正しい日本語にしてくれない？とかで、私の言いたいことを言って。間違っていないよって。あ、そうなん？って感じで。

*： うんうん。

L： もう一回レポートを書いて、チューターさんに出して、返却するのを多分、赤が。

*： 赤が。

L： いっぱいあるんだなって思ったんですけど。意外と少なかったんで。

*： あー。添削部分が少なかった。

また、日本語クラスのクラスメートたちは優秀だと思っていたが、韓国の留学生に「Lさんはク

ラスでトップ」と言われた時は「え？そうなんって感じ」だったが、嬉しかった。

《人間関係》

単位制度でクラスという形になっていないためか、価値観の違いかわからないが、授業で一緒だった日本人学生が教室を出たら「それでもう知らないぞみたいな」態度には、困惑した。

L： 私と一緒にいった子が、同じグループに入った日本人の男の子がいて。でも、クラス出たらですね。道で会ったら、ちょっとって、こうしよう（頭をさげる動作）と思ったんですけど。すぐに避けちゃうぐらいな。

グループワークでも一回限りの場合は同様だったが、学期を通じて同じグループだった場合は次第に仲良くなって、一緒に出かけたりするようにもなった。

一対一でついた個人チューターは来日当初から「すごく熱心で、親切にしてくれた」。

L： いろいろ教えてもらって。レポートの直しとかをしてくれて。それで、一緒に買い物に行かない？とかみたいなのも。

*： うんうん。誘ってもらった。

L： はい。ありがたいんですけど。でも、私、別に、チューターは、やっぱ、サポートしてくれるっていう役割なんですけど。私のほうは別に、言語とかも全然、問題なかったんで、大丈夫だよって。週は1回ぐらいは（会っていた）。

2学期目になると、寮のチューターや留学生、寮のイベントに参加する日本人とも仲良くなれた。

*： じゃあ、友達も2学期目は、グループに入れたという感じですかね。

L： 入れたんですかね。はい。深くは入れなかったんですけど。

*： あ、もっと深く入りたかったですか。

L： いや、別に、それぐらいでいいって感じでした。

友人たちとは、日本人・留学生ともに今でも連絡を取り合っている。社会人になってタイに出張した時タイの留学生にも連絡をとった。

指導教員はベトナムの大学と交流のある先生だったが、毎月留學生活の報告を出す程度で、ゼミ以外ではあまり会うことはほとんどなかった。履修していた「異文化理解」の担当教員は個別のコミュニケーションはなかったが、オープンな感じで楽しく授業を受けることができ、次の学期も同教員担当の授業をとった。

アルバイト先での人間関係も前述のように良好だった。社会人となって、日本に出張した際にはお世話になったラーメン屋の店長に会いに行った。

コンビニでも常連の人がいて、あまり人が入っていない時にはよく話しかけられた。

L： 方言を使わずに、標準語、言ってくれた方だったら、よくコミュニケーション取れたんですけど。

いつも買うたばこを取り置いたりした。スタッフとの関係もよく、お土産をもらったりもした。後輩たちにアルバイト先として紹介したので、今も後輩たちがそこでアルバイトをしていると思う。

地域の人との交流としてはホームステイがある。ホームステイ終了後もホストマザーがX大学

のある町の友人に会いに来た際に2、3回ほど会った。今でも時々連絡を取っている。

《留学後》

帰国後単位互換はできて卒業要件は満たしたが、卒業時期が過ぎていたので、半年間卒業を待つことになった。また留学したいという気持ちがあって書類などを揃えて留学の可否の結果を待つ間、自営業の家族を手伝った。時間があつたので、英語の塾に通ったり、体力づくりにジムに通ったりした。いろいろあつて留学は実現できず、今の会社に就職することにした。

顧客はほとんど日本企業で、留学や技能実習生関連の事業を行っている。社長のアシスタントとして、日本対応の窓口となる業務を担っており、翻訳・通訳業務も行っている。翻訳スタッフもいるが、重要な文書の翻訳を担当している。仕事は忙しく、時差があるので夜でも対応しなければならないこともある。

L： もう、日本語、うんざりするぐらいのときもありますよ。アハハハ。

*： ああ、そうですか。ハハ。

L： 私ずっと仕事がいっぱいで。ああ、ちょっと勘弁してくれない、ぐらい。

*： ああ、それぐらい、やっぱり。

L： それもあるんですけど。でも仕事がないときは、少ないときは、もう、つまらないし。忙しくていいんですっていうふうに言ったんじゃないですか。

仕事をする上で留学経験が役に立っていると思うのは、日本語能力はもちろんだが、前述の就業姿勢や日本人に対する接客態度である。例えば、敬語を使うかどうかなど丁寧さの調整や雰囲気づくり、表情などもアルバイト経験を通してうまくできるようになったと思う。

細かい慣習は日本に行かないとわからないと思う。例えば、日本ではお店に入ると必ず「おしぼり」が出されるが、ベトナムでは店員に伝えないと出てこない。そのため、日本人を接客する際おしぼりが出ていなければすぐ伝えるようにしている。このように日本での社会経験から学んだことが多いと思うが、授業で得た知識も仕事に役立っている。

L： 日本事情の授業とかでも、日本の歴史とか、そういうのも教えてもらったんで。それでも、その話でも、接客のとき、やっぱりそれは、日本人の常識なんですけど。ベトナム人が知ってるなら、あ、すごいな、みたい。それもあるんで。それを使って話をかけたりすれば、やっぱり、仕事以外でも、ちょっとでもね。

*： 近くなる。

L： 近くなるように。そういう話を使ってますね。

また、他の社員とあまりコミュニケーションがとれていない若い日本人社員に対して、「みんなとコミュニケーションをとってほしい」という助言をする際にも、日本文化への理解が活用できたと思う。

日本語は仕事を通じてブラッシュアップしている。メールのやりとりでは敬語を多用するので、「自分のものにしよう」と思って取り組んでいる。

留学終了後もう一度留学したいという気持ちがあつた。和製英語に関心があつて研究したいと思っていた。言語は面白いと思う。

L： 言語で、傷つくとか、そういうのも、できますから。やっぱり見えない武器なんですよ。言語で、話すことで、解決できると思いますので。

進学したいという気持ちは持ち続けていて、忙しくない時期には自習していた。今は忙しくて自分の時間もないぐらいだが、自分自身のことを「勉強するタイプ」だと思っている。

《留学を振り返って》

留学を通して、専門の日本語の上達だけでなく、アルバイトなどから日本人の就業姿勢や接客態度などについて多くのことを身につけられたと思う。日本に行かなければ感じ取れない細かな慣習にも気づけた。

留学全体の評価としては「よかった」と思う。今（インタビュー時に）具体的にあげられないが、前述したことよりもっといろいろなことが身についたと思う。社会人になって数年たったからこそそう思える。留学直後だったら、「遊びの思い出ばかりだった」だろう。

留学を振り返って留学中「やればよかった」と思うことは、アルバイト時間を減らしてもう少し授業に時間を使うことだ。例えば、日本人向けの授業で面白くて役に立つと思うものもあったが、準備があまりできず集中できなかった。

もう一つは寮の留学生たちともっとコミュニケーションをとることである。

L： もうちょっと、あの、寮の皆さんと、部屋にいる時間じゃなくて、ちゃんとみんなと会って、もうちょっとコミュニケーションを取ったらいいなって。

定められた時間内のアルバイトであったが、終わると疲れて部屋に戻るだけだった。もっと飲み会などにも参加できればよかったと思う。

帰国後、留学先の選択に迷っていた後輩たちに経験をもとにした助言した結果、後輩も X 大学に留学することになった。

L： （後輩たちが）帰国後も、よかったんですよって。他のところに行った子たちは、奨学金とか、なんかもらったらしいんですよ。でも、私もらわなくてもいい。J1 大学がよかったっていうふうに言ってくれました。

後輩たちも今ベトナムの大学や日本で働いている。

4.3. 考察

日本語専攻で約 1 年間交換留学をしたが、奨学金やアルバイト経験の有無、受入態勢などの違いなどによる個別的な体験が語られた。本節では、共通点と相違点を整理し、「日本語習得」、「人的ネットワークの構築」、「総合的な留学評価」の 3 項目にまとめ、考察を加える。

《日本語習得》

それぞれ日本語学習開始は中学からと大学からと異なるが、留学時の日本語レベルは JLPT N2 程度で、自身の日本語能力については八若・小林（2021）の N3 レベルで来日した元留学生のような不安はなく、日常生活でのコミュニケーションにも問題はなかった。2 名ともに日本人向けの科目をいくつか履修しているが、そこではまず履修科目を自分で選択することや討論中心の授業、試験ではなくレポートによる評価など、ベトナムとは異なる制度に戸惑っている。K さんは多くの文献を読んだりレポートを書いたりするのに苦労したが、帰国後読み書き能力の向上を実感している。一方、L さんは日本人向けの授業には関心を持ちつつもアルバイトなどで十分準備ができなかったり、指導教員のゼミも話題によってはつまらなく感じたりした。日本語の上達は留学中にチューター

による添削箇所が減って褒められたり、留学生の友人に指摘されたりしたことにより確認している。

2名ともに留学によって上達した日本語は高度な日本語能力が求められる現在の仕事でも活かされていると感じると同時に、さらなるブラッシュアップに努めている。

《人的ネットワークの構築》

2名ともに留学当初日本人の対人行動に冷たさを感じ、友人作りの難しさを指摘している。日本人学生の友人作りの難しさは有川（2016）、八若（2018）、吉野（2017）などの研究で指摘されている。有川は、学部留学生の日本人の友人作りの難しさについて、自国の体験に基づいた友人関係の認識とのずれが困惑や不信感を引き起こしているのではないかと指摘している。この指摘のように、Lさんは日本人の友人作りの難しさの要因をクラスやカリキュラムが固定しているベトナムとは異なり、授業ごとに履修者が異なる日本の大学では教室を出ると知らない者同士ようになり、友人関係には発展しにくかったと分析している。また、Kさんは留学当初に感じた冷たさは親切的な日本人が描かれているマンガなどから受けたイメージとのギャップに起因していると述べている。このような個別的な理由の分析が自発的に語られるのはライフストーリー研究ならではの成果であると言える。

1学期目は2名ともに留学生の友人作りでも苦労している。10月来日の2名にとって、前学期は既に構築された友人関係の輪や同国人同士のグループの中に入るの難しく感じられた。しかし、2学期目になると、留学生向けのイベントやサークル活動への参加や学期を通じたグループ活動によって留学生、日本人学生ともに友人関係が築くことができたようだ。1学期間留学と2学期間留学の成果の比較を行った八若（2020）では、2学期間留学者には自発的なコミュニティ参加による他者との関わりから自信を得てさらなる人的ネットワークを拡大する循環的過程が観察され、人的交流の差に留学期間の関与が認められたとしている。本研究の2名も同様に人的ネットワークの構築に一定の時間が要したと言えるだろう。

アルバイトをしていたLさんは、アルバイト先の店長やスタッフと良好な関係を築き、インドネシア（八若2018）やタイ（八若・小林2021）の元留学生と同様に、アルバイトを通して日本の職場での慣習や就業態度が身についたと感じていた。一方、奨学金を得たためアルバイトをしなかったKさんは指導教員やゼミの学生と行動を共にすることも多く、良好な関係であった。アルバイトでもゼミでの勉学でもベトナムでは経験したことのない困難に直面することがあったが、それを自力で、または周囲からのサポートを得て克服したことによって自信を得ていく過程がインタビューを通して観察された。

2名ともに留学中の人的ネットワークは留学後も維持されていたが、留学後10年近く経過したKさんはSNSをやめたことをきっかけに、連絡がとれなくなったことを残念に思っている。

《総合的な留学評価》

全体として2名の留学評価は肯定的であった。Kさんは「日本留学は人生を変えるような体験だった」と言い、Lさんもインタビューでは語り切れない多くのことを留学から学んだと言う。

Kさんはいくつかの転職を経て、現在の仕事に満足している。Lさんは進学を希望していたものの、現職では上司から重用され、忙しい日々を送っている。いずれも留学を通して身につけた日本語能力が現在の仕事に役立っていると述べている。また、日本で生活しなければわかりにくい暗黙の社会規範や日本人の考え方への理解は日本人を顧客とする仕事においては重要な役割を果たしていると感じている。さらに、就職においては日本に留学したこと自体が評価されていると感じている。

ハノイの日系企業における元留学生を中心としたベトナム人の採用・就業の実態を調査した堀井(2011)は、ベトナムでは漢字習得がネックとなって JLPT1 級(原文のまま)のレベルに達するのは難しく、2 級、3 級のレベルで日系企業に就職するケースが多いと述べている。そのため、日本語能力の高い留学経験者は日本語の応用力、日本人の考え方など異文化コミュニケーション上の理解力がある点で高く評価されているという。この指摘はまさに K さん、L さんにも当てはまると言える。

5. ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生の留学評価

以上述べてきたように、元交換留学生はその多くが日本語専攻で、卒業後出身国の日系企業への就職など日本語能力を活かした職業に就く場合が多く、日本語の上達は日本留学の成果の 1 つとしてあげられることが多かった。また、アルバイト経験などを通して得た日本の暗黙の社会規範への理解が現在の業務遂行に寄与していた。

日本関連企業への就職の他、日本語専攻の元留学生の就く職業の 1 つに日本語教師が挙げられる。日本語教育に携わる教員の場合その専攻が日本語であることが多く、日本・日本語の専門家として将来日本の良き理解者となる日本語学習者を育てる人材でもある。本節では、ベトナム人日本語教師 2 名のライフストーリーから、大学教員となった日本語専攻の元交換留学生にとって日本留学がどのような意義を持つのかを検証する。

5.1. 日本語非母語話者教師に関する先行研究

海外での日本語教育においては教育機関数、教師数ともに増加し続けている(国際交流基金 2020)。国際交流基金(2020)の調査によれば、海外教育機関の日本語教師のうち日本語母語話者が占める割合は 21%で、海外での日本語教育の担い手は主として日本語非母語話者教師(以下、非母語話者教師)であることがわかる。また、近年、日本の大学・大学院でも日本語教育を専攻する留学生の数が日本人学生を上回るというケースが報告されており、非母語話者教師の特性をどう活かし成長につなげるかという視点から、非母語話者教師の意識や姿勢を探る研究がなされている(嶽肩他 2012、島津 2016、川上他 2021)。

嶽肩他(2012)は、非母語話者教師の意識に関する近年の質的研究を概観し、国を問わず非母語話者教師に共通した意識として、日本語・日本文化の知識の習得や日本語学習者及び教授者として学び続ける姿勢が重要であること、学習者のロールモデルとなり知識・情報を伝えることに喜びを感じることを挙げている。また、量的・質的データを用いた同研究でも同様のビリーフや姿勢が認められたことを報告している。

川上他(2021)は、非母語話者教師の日本語教育観や経験について、中国・韓国出身の非母語話者教師 3 名への半構造化インタビューから検討した。その結果、非母語話者教師の利点として学習者としての経験と学習者の理解を確認・促進する母語使用が挙げられ、困難点として言葉の運用に関する説明、聴解・会話の授業、最新情報の入手、日本語の維持が挙げられた。また、「教える」ことに難しさを感じつつも、教え方の改善や工夫を試みていた。

島津(2016)は、日本語教師を目指す韓国人大学院生 2 名が非母語話者教師としての専門性とアイデンティティを獲得してきた過程をライフストーリー作文から検討した。日本人とのコミュニケーションの成功時の感動といった個人的感情や言語教育の成功体験などが日本語教師という職業選択に繋がり、それらの経験によってもたらされた意識や態度が将来あるべき教師像に結びつき、

非母語話者教師の役割観の形成や専門性の獲得の動因となっていることを示した。

いずれの研究の対象者の多くは日本留学経験者であり、留学経験が自らの日本語能力や日本語教育観に影響を与えていると思われるが、これらを自らの留学経験と結びつけた言及は多くはなかった。

杉村（2019）は非母語話者教師にとっての日本留学の意義を、日本語教師としてのキャリアを開始後に日本留学を経験し、母国の大学で教鞭をとる元留学生のライフストーリーから分析している。その結果、留学が多くの学びと変容をもたらし、それらが取捨選択されながら日本語指導に活かされており、日本語教師が留学から得た恩恵は指導をうける学生にも伝承されていると指摘している。

しかし、このような非母語話者教師としての意識形成や能力獲得と留学経験との関連という視点から検証した研究はまだ多くはない。

本節では、ベトナムの大学で日本語を教える元交換留学生のライフストーリーから、日本留学の経験が日本語教師としての意識や業務にどのようなつながりを持つか、自身の日本語習得にどのように関わっているかに焦点を当て、留学の意義を探りたい。前述の国際交流基金（2020）の調査では、ベトナムは近年日本語教育機関数・学習者数ともに大幅に増えており、顕著な日本語学習熱の高まりがみられる国の1つである。

5.2. インタビュー協力者 M さん（20）のライフストーリー

5.2.1. M さんの略歴

表4にMさんの略歴を示した。

表4 Mさんの略歴

大学入学	日本語学習開始。大学の交流事業で2週間日本に滞在。
大学3年次	J1大学に交換留学（約1年）。
留学終了後	3年次残りどと4年次課程の学修。夏休みにアルバイトで日本語を教える。
大学卒業後	大学の専任講師として日本語を教える。夜間の大学院（ベトナム）に進学（日本文学専攻）。
大学院2年次	J5大学大学院（日本文学専攻）に留学（1年半）。
留学終了後	元の大学に復職。大学院修了（修士）。日本文学の翻訳家としても活躍。現在に至る。

5.2.2. M さんの語り

略歴で示したようにMさんは奨学金を得て2回の日本留学を経験している。本節では、Mさんの語りを、日本留学と日本語教師という仕事との関連及び日本語習得という視点から、「日本語学習及び留学のきっかけ」、各留学での「生活」「人間関係」「学修」「留学後」の項目に分けてエピソードを交えて提示した。

《日本語学習及び留学のきっかけ》

中学の時英語が大好きで高校では英語専攻のクラスに入ったMさんは、大学では別の言語を学びたいと思い、いろいろな言語が選べる東洋学部に進学した。2学期目に専攻する言語を決める際に説明会で日本学科の先輩が「日本語を勉強したら、将来いろいろチャンスあります」と言っていたことや、子どもの頃から「おしん」などのドラマを見て日本の文化が大好きだったことから、日本語を選択した。

日本語の勉強は、それまで勉強してきた英語とは違っている点が多く戸惑った。文法は英語など

と語順が違うので頭の中で整理できず言葉がすぐ出なかった。発音は「ズ」「ヤ」「ユ」「ヨ」などベトナム語にない音が難しかった。授業は文法や漢字の授業が多かった。日本人の先生は一人で、会話の授業は週1回だけだったので、日本語を話す機会はほとんどなかった。

大学の交流事業で約2週間日本に行った経験から日本は便利で経済的に発展している国だという印象があり、そこでの新しい生活に憧れがあった。在学中に留学しようとは思っていなかったが、成績順で協定校に留学できる制度があったため、3年生の時先生に声をかけられ、選ばれて留学することになった。留学先にはいくつか選択肢があったが、奨学金受給などの条件から3年次の時でJ1大学に留学することにした。

留学前に最も心配だったのは日本語だった。日本人と話す機会もなかったもので、3年生になっても全然話せず、日本人や他の留学生とコミュニケーションがとれるか心配だった。

ドラマで見た日本人の生活や文化を実際に体験し、体感できるということを最も期待していた。日本のいろいろな所を旅行したいとも思っていた。また、自分の日本語がもっと上達するという期待もあった。

M： 周りも日本人ばかりで、あと外国人の留学生と交流もできる。全部、日本語をしゃべらないといけないですね。そういう生活ですから、絶対、上達できると期待していました。

《1回目の留学について》

《留学中の生活》

ビザの問題で来日が約1か月遅れ、来日時には既に授業が始まっていた。加えて、日本語の授業は初級と上級のクラスしか開講されておらず、中級前半が終わったMさんは上級のクラスに入るようになった。最初の1か月は何もわからない状態で過ぎ、付いていくのは難しいと思って初級のクラスに移り、少しほっとした。少人数で、バングラデシュ人、ラオス人など多国籍クラスだった。

M： でも、それは良かったことかも。最初は、自分の能力、日本語能力に合ったコースがなかったことは困っていましたね。ずっとN1持っている先輩たちと一緒に勉強をして、私、何も分からなくて、恥ずかしかったし、大変でした。

生活面でも、来日が1か月遅れたことで寂しい思いをした。

M： 生活、その時は寂しかったんですね、やっぱり。すぐ友達もできなかった。私、1か月、遅れたんですから、もうみんな、友達、できたんですね。ベトナム人いましたが、みんな、他の人は奨学金もらえなくて、バイトをしないといけなかったんですね。バイトをしてるベトナム人と、友達にもなりたいたんですけど、でもやっぱりみんな忙しくて、最初は、もう誰もいなかったんです。生活の面は、食事とかは問題なかったんですけど、友達がいなのが寂しかった。

留学生寮では、寮に住んでいる留学生や日本人チューターなどが集まるイベントがよく行われた。友達ができたのは、寮で行われるパーティだった。上級のクラスで一緒だった韓国人や中国人ともよく話すようになった。大学院生の台湾人、ベトナムからの交換留学生、研究生、研究者などとも仲良くなった。友達がだんだんできて、寂しさも乗り越えられた。

J1大学では、日本語コース履修者のための研修旅行が各学期に1回、全学留学生対象の見学旅行が年1回、その他に地域の国際交流団体の招待による旅行などもあり、これらに参加することによって交友を拡大、深化できた。

夏休みや春休みは長かったので、よく一人で旅行した。旅行での印象深いエピソードがある。

M： ひまわり祭りがあって、ひまわりが大好きなので、そのひまわり祭り、見に行ったんですね。だけど、すごい田舎の所ですから、交通は不便ですね。歩かないといけなかった記憶があります。その時は、道に迷ってたんですね、ひまわり畑まで行けなくて。ラーメンの店で、食べた後で道、聞きました。道を聞いたら、説明してくれたんですけど、なかなか分からなくて。そのラーメンのオーナーさんは、車に乗せてくれたんです。ひまわり畑まで連れてきてくれたんです。すごい感動しました。

また、京都に行った時にも忘れられない思い出がある。

M： 京都でバスに乗ったとき、どこで降りるか分からなくて、周りの人に聞いてみたんですね。1人の若い女の人が助けてくれました。「私も一緒に降りますから」、一緒に降りて、その後は、いろいろ連れて案内してくれたんです。京都に詳しい人ですから、いろいろ案内してくれて。

日本ではいろいろな人が助けてくれた。全然知らない人でも優しく教えてくれた。

また、留学中、日本語教師という現在の職業に関心を持つきっかけとなった体験があった。

*： 日本にいる間に日本語が上達したなど思うようなことは、やっぱりありましたか。

M： ありましたね。日本人と交流できたこと、大勢の人の前で発表できること。特に、J1大学の先生と一緒に参加したボランティアの活動ですね。近くの町でインドネシア人に日本語を教える活動に参加して、そのおかげで、あと日本語教師に興味を持つようになりました。

*： そう言われると、すごいですね。

M： そのおかげで、多分、私の今の仕事は、そのボランティアの活動からスタートだと思います。

*： 初めて教えたんですね。

M： はい、そうですね。

*： 日本人よりやっぱりうまく教えられる。

M： 先生、褒めてくれたんですね。その時、すごうれしかった。その前は、教師の仕事、嫌いでしたよ。毎日、同じことをやってて、なんかつまらないなと思って。だけど、誘われたとき、あっ、なんか自分にも役に立つかなと考えて、参加してみました。その時、全然しゃべれない人たちに、自分は日本語、簡単な日本語で声、掛けて、だんだん少しずつ会話ができるようになってうれしかった。この仕事も楽しいんじゃないかと考え始めました。

《留学生としての学修》

上述のように、1か月来日が遅れたこと、レベルに合った日本語クラスがなく上級クラスに入ったことなどで、来日当初は苦労した。1か月後初級のクラスに移り、楽になった。

日本語のクラス以外には、1学期目から指導教員の授業とゼミに参加した。異文化理解の授業だったが、最初は何もわからず大変だった。指導教員の授業以外にも、異文化理解関連の授業や英語の授業を取った。

2学期目は、友達もでき、授業にも慣れて、日本語の上達も実感できるようになった。

M： その後は慣れてきましたね。特に、日本語の授業で友達もできて、先生とも会話できまし

た。自分の日本語能力もだんだん上がってきて。ゼミでも多くの人の前で一人で発表できるようになり、自信がついた。

M：ちゃんと自分の話も、相手、理解してくれて、それは良かったかなと思いました。

*：相手が理解してくれるというのはいいですね。

M：はい。例えば、異文化の授業で、ベトナムの文化を紹介したこととか、ベトナムの伝説の話とか、みんなの前でそういう話をして、みんな、理解してくれて、良かったです。だんだん、自信、ついてきて。

《留学中の人間関係》

1 か月来日が遅れたことで、既にできた友人関係の中に入れず、最初は寂しい思いをしたが、留学生寮で行われるイベントなどを通して、徐々に様々な国からの留学生と友達になることができた。

指導教員は優しく、よく指導してくれた。いろいろな所へ連れて行ってくれたり、指導教員の家でパーティにもよく呼んでくれたりして、関係はとてもよかった。また、当時ベトナムとの関わりがあった先生がいろいろ助けてくれた。その先生の授業は取っていなかったが、映画を見てディスカッションをするイベントや課外活動に誘ってくれた。留学後先生方がベトナムに調査に来た際には会うなど、今でも連絡を取り合っている。

前述のように、多くの留学生の友人を得、留学後も連絡を取り合う関係が続いている。ラオスに研修で行った時には元クラスメートが空港まで会いに来てくれた。韓国人の友人が二年前ベトナムに来た時一緒にハロンを観光した。昨年 M さんが韓国に行った際にも会う機会を得た。

一方、日本人の友人もできたが、親しいと思える関係にはなれなかった。

M：悪い面ではないんですけど、日本人の友達もできたんですけど、そんなに親しくなかったんですね。日本人って、私も異文化の授業を受けて、日本人とベトナム人の違いも勉強して、例えば、日本人は本音と建前があって、あんまり本音、出さないとか。いつも建前、いいことばかり言ってて、本当にどう考えてるか分からなくて。だから、親しい日本人の友達、できてないんですね。

チューターは日本語の作文やレポートのチェックなどをしてくれて感謝しているが、会うのは1か月に1回程度で仲がいいという関係にはならなかった。積極的ではない自分にも問題があったと思うが、日本人学生とはコミュニケーションはとっていても留学生の友人と同じような関係になるのは難しかった。

*：それは割とよく聞きます。だから、距離の取り方、向こうも苦労しているっていうこと、あるかもしれないですね。

M：そうですね。日本語、その時も、そんなにたくさん話せなかったから、チューターに会った時も、たくさん話せなかったです。それで、限界があるかな。その会話のテーマとか、あまり広がらなくて。

地域住民との交流にも積極的に参加した。大学の行事としてのホームステイのほか、ベトナムに関心がある家庭から招待されたり、クラスメートのホストファミリーの家と一緒に行ってホームステイしたりした。帰国後ベトナムに遊びに来た人もいるが、SNS を使わない年配の人たちとはその後連絡がとれなくなったのを残念に思っている。

大学の近くに住んでいる老夫婦にも親切にしてもらった。料理を一緒に作ったり、着付けや生け花を教してもらったりして、「本当に日本人の生活、日本人の家庭の生活」が実感できた。一番の思い出は夏祭りに地域の人に踊りを教えてもらって、一緒に踊ったことだ。

多様な人々と関わりを持ち、多くの優しい人々に支えられた留学生活だった。J1 大学への留学は「私の中、その1年間は最高でした。」と言える。

《1 回目の留学終了後》

当時は単位互換の制度がなかったため、出身大学で3年生の課程の残りとして4年生の課程を終えなければならなかった。卒論のテーマは村上春樹だった。

M： ボランティアの活動に参加して、ここに戻ってからも、日本語教師の仕事をやってみたいなと思って、3年生、終わった後で、夏休みですから、アルバイトを始めました。普通、ベトナム人は、アルバイト、あまりしてなかったんですね、その時は。私も全然してなかったんですけど、でも、やっぱり日本でもいろいろな経験があったから、バイトを始めようと思ってたんですね。で、日本語教師、その時は、技能実習生に教えました。『みんなの日本語』の教科書で日本語を教えましたね。日本語を教えたおかげで、自分の日本語能力、上がって、卒業した後でも、やはり日本語教師、続けたいなと思って、今の大学のセンターに応募しました。

大学卒業後日本語教師として働きながら、夜間の大学院で村上春樹の研究を続けた。1年後在籍大学とJ5大学とが協定を結んだのを機に、奨学金を得て1年半J5大学の大学院に留学することになった。J5大学では専門の日本文学を学び、引き続き村上春樹の研究をした。

《2 回目の留学について》

《留学中の生活》

2回目の留学では、会話もでき、買い物や旅行なども一人で対応できたので、生活面ではほとんど困ることはなかった。J5大学大学院ではJ1大学の時のような留学生サポートはなく、来日初日から全部自分で対処しなければならなかった。

M： J5大学に行った初日、誰も迎えに来てくれなかったんですね。駅で大きい荷物、自分で運ばないといけないですね。スーツケース、二つ、すごい大きかったんですね。

*： 1年半ですからね。

M： そうですね。最初は、寮、1週間泊めてくれたんですね。他にアパートを探す間に。それで、寮まで自分で行ったんですね。だけど、途中で、荷物、多かったから、タクシーに乗ることしか。だから、タクシー、乗りました。

歩いて行ける距離だったが、一人で荷物を運ぶのは大変でタクシーに乗ることになった。

最初の留学とはいろいろな面で大きく違った。チューター制度もなかった。

M： J1大学にいた時、センターがあって、そのセンターの人たちがいろいろ、市役所とか携帯、買いに連れて行ったんですけど。指導教官が直接空港まで迎えに来てくれなかったけど、代わりに誰か迎えに来てくれたんですね。それはすごい優しかった、親切でしたね。だけど、J5大学にいた時、もう全然何もなかった。全部、自分でやらないといけないことになりましたね。市役所とか、携帯電話とか、銀行口座を開くとか。

全部自分で対応したので、自立できたと思う。「どこに行っても一人で生活できる」自信がついた。J5 大学は東京まで電車で約 20 分のところにあり、J1 大学のある町と違って物価が高かった。アパート暮らしは家賃も高く、寮と違って、友達と一緒に過ごす時間は持てなかった。研究室とアパートを往復する毎日だった。

M： そうですね。J1 大学にいたときは、交流会とかたくさんあって、いろいろな友達ができました。いろいろな国からの友達、できました。だけど、J5 大学にいたときは、ほとんどそんなことはできなかつたんですね。

《留学生としての学修》

J5 大学の指導教員は村上春樹の研究をしていたので、村上春樹の研究が中心となった。夏目漱石や芥川龍之介に関する授業や、ライトノベルの研究をしている先生の授業など指導教員以外の先生の授業も受けた。指導教員からベトナムに興味があるという先生を紹介され、本や雑誌の編集に関するゼミにも参加した。

指導教員の研究対象は村上春樹だったが、ゼミの学生の研究テーマは古典も含んでおり、学生の発表を理解するのは難しかった。また、指導教員の学部の授業も受けたが、学生が選んだ作品について発表する形態で理解するのは大変だった。

M： 先生の授業で、学部の授業ですけど、その授業も受けてましたね。1 人は 1 冊の本を選んで、まとめて、他の人の前で発表するみたいな感じの授業ですけど、その授業も分からなかったですね。本を読まないで、よく分からないですね。

しかし、J5 大学での授業はベトナムにはない授業なので、いい経験だったと思う。

M： でも、いい経験ですね。研究の仕方とか、本の読み方とか、読書の授業あるから、その授業、みんな一緒に本を読んで、その段落について、その人物について解釈するから。ベトナムで、そういうことはなかなか。

この経験から学生にとってもいい勉強になると思い、読書の授業を作ろうと思っている。

M： 私、読解の授業、担当してないんですけど、センターの図書室で学生、よくそこで勉強してて、自習室みたいな感じですね、自習してる学生に読書とか先生が紹介して、この本がいいよとか、学生に紹介して、一緒に読書の勉強とか、つくりたいなと思っています。

《留学中の人間関係》

アパート暮らしでは J1 大学への留学の時のように留学生の友人はできなかったが、多くの時間を共にする研究室で日本人の友人を得た。

M： 同じ指導教官、2 人の日本人、友達ができましたね。中国人の友達もできました。今回は、J1 大学にいた時と違うところは、日本人の友達、ちゃんとできました。その 2 人も、教室もいつも一緒に入って、研究室も同じ。

*： いる時間、長いですね。

M： そう、いる時間、長くて、いつも一緒ですから。あと、そのゼミ、私だけベトナム人ですから、外国人ですから、いろいろ助けてくれたんです。

*： 論文を書くときとかも。

M： いつもチェックしてくれて。

*： 興味も似てるから、話すことがありますね。

M： そうですね、話すことは結構ありますね。あと飲み会とか、よく参加してて。それは、本当に友達できました。で、1人は、そのJ5大学を卒業した後で、日本語教師の仕事も始めました。それで、ホーチミンでやりました。

その友人は今は日本語教師をやめ、ホーチミンの別の会社で働いていて、ベトナム語もできるようになっている。出張でハノイに来た時には会っている。

上述のように、研究中心の生活で、地域の人や他の留学生との交流はほとんどなかった。

M： ちょっと寂しいですね、ある意味で。私と同じ大学を卒業した人と、時々、新年会とか忘年会があって集まるけど、他にはないんですね。時々、一緒に出かけてみたいいな感じですね。

《東日本大震災》

2回目の留学中に東日本大震災があった。

M： その時は、多くの留学生は帰国しました。心配なので、他の人は帰国したんですけど、私は。地震があったのは2011年3月ですね。帰るか、ちょっと迷ってたんですけど、国際交流センターの人から、帰ったほうがいいよって言われましたが、でも、やっぱり帰った後でもいろいろ大変かなと思って残りました、帰らずに。

*： 東京だったら、その後、そんなに残ってもね（大丈夫）。

M： だけど、その地震があった時、いろいろ、日本人の精神が分かるようになりましたね。強かったことですね。

*： 強いと思ったんですか。

M： はい、強いと思いました。

*： 例えば、どんなところでですか。

M： 地震があった日、家に帰れない人、いましたね。その中で、みんな、ちゃんと並ぶこと、それはすごい印象に残ってました。

*： パニックにならないで。

M： パニックにならないで。もうベトナム人だったら、すごい怖くて。あと、取り合いになったり。

*： 取り合ったり、残ってるものを。

M： そうですね。ていうこともあります。でも、日本人はきちんとしていた。それはすごいなと思って。それは「さすが日本人ですね」と思いました。みんな、結構冷静ですね。

*： そうでしたね、なんか。

M： 周りの外国人、私の友達も、ある人は、もう内定ももらったんですね。だけど、怖くて、もう帰国しちゃったんですね。そういう人もいました。日本人の友達と話してみたら、日本人だから逃げる所ない、残るしかない、日本にいるしかないから。それはそうですけど、でも、日本人は強いなと思って、精神的に。だから、いろいろ学べました。本当にその日自分の中も怖くて、いろいろな人にも言われたんですけど。でも、日本人を見て、「ああ、やっぱりいろいろ学べる」と思いました。

地震はすごく怖かったが、このような日本人の姿勢に触れ、「自分も何か役に立ちたいな」と思

い、ボランティア活動に参加した。被害の大きかった陸前高田に行った。

M： 結構、地震の被害、ひどかった所ですね。5階建ての小学校かな、全部、壊れてた。ひどかったんです。自分の目で見て、すごい怖かった、こんなひどい地震があったなと思って。

*： でも、すごい、ボランティアに参加してくれたんだ。

M： いえ、でも、本当に行ってみたら、逆に、なんか力をもらいました。あんな被害、受けたんですけど、みんないつも優しく迎えてくれて、いろいろなものも、食べ物とか作ってくれて、すごい感動してましたね。私たち、何もできなかったんです。

*： いやいや、そんなことないです。

M： 本当に本当に。その村、おじいさん、おばあちゃんばかり。若い人、あんまりいなくて。だけど、いつも笑って迎えてくれたから、心、暖かかったなと思いました。

*： 何日後ぐらいに行ったんですか。

M： 2日。でも、夜行バスですからね。

*： 地震の2日後ぐらいに？

M： そうですね。テントの中に入って泊まりました。ちゃんと屋根があったんですけど。

*： 寒かったですよ。

M： 寒かったんですね。雪とかが降ってた日。すごい寒かった。でも、そのボランティアの活動に参加して、村の人から力をもらって、それは私の中の忘れられない思い出です。

*： それは、本当に、地震、ないとできないというか。

M： でも、実際に行って、今までドラマとか本とか日本人についてたくさん書いてるんですけど、でも自分の目で見て。

*： 『おしん』の世界だったんですね、精神が。

M： そうですね。日本人の精神を本当に分かるようになりました。実感できました。(中略)

M： でも、多分、これから困難があっても、その精神を維持したら、どんな困難でも乗り越えられると思います。

《2回目の留学終了後》

2回目の留学に際して仕事を辞めなければならなかった。Mさんの後任は1年契約だったため、留学中に元の勤務先のセンターの講師から「戻りたいか」との打診があった。戻る意思があるなら新しい講師を採用せずに待つとのことだったので「戻りたい」と回答し、留学終了後もとの常勤講師のポストに戻ることができ、現在も同センターで日本語を教えている。授業以外にも事務、外部との連絡、他大学とのやりとり、会議の通訳などの仕事もあり、忙しい。

日本語教師のほか、日本の小説の翻訳をしている。主にライトノベルの翻訳で、これまで5冊翻訳した。人気作家の作品や映画化された作品もある。出版社から頼まれたものを翻訳するが、好きではない作品なら断ることもある。1年に1冊くらいのペースで翻訳している。フルタイムの常勤講師なので、翻訳に充てる時間は夜か週末しかない。小説の翻訳は集中しないとできないし、行間を読まなければならないので大変だ。適切なベトナム語を選ぶのも難しい。

M： ベトナム語、一番、難しいですよ。

*： どの言葉を選ぶか。

M： そう、どの言葉を選ぶか。文学的な言葉ですから、もうそれは大変。あと、生活にもあまり良くないんですね、夜中まで仕事やって。

今は少し休みたいと思っていて、頼まれたら資料など、軽いものを翻訳している。

*： じゃあ、本当に、日本語と切っても切れない生活をしてるっていう感じですね。

M： はい。今、生活は7割か8割、日本語ですね。このセンターで仕事をしてるのも、うちに帰っても。うちにいる時間、あまりないんですね。だから、ほとんど日本語を使って生活しています。

毎年1回くらい日本語教育に関する研修やシンポジウムに参加するために日本に行くが、専門的な言葉は難しく、理解できないことも多い。言語は生活の変化に伴って変わるので、新しい言葉も出てくる。日本語能力の向上にも努めたいと思っている。

M： アップデートしないといけないですね。最近は全然時間なくて。だけど、できれば毎日日本語でニュース見たいですね。前はやってたんです。だけど、今年は忙しくてチェックするものが多かったから、ほとんど時間を取れなかったんですね。でも、できれば、毎日日本語のニュースもやりたいですね。

通勤のバスの中でも日本語の本を読んだりして日本語能力の維持・向上に努めている。また、日本語教育については研究の経験がなくその必要性を感じるので、奨学金が得られれば再留学して日本語教育に関する研究がしたいと思っている。

《留学を振り返って》

2回の留学はいずれもかけがえのない経験だった。

M： 留学の経験もすごく役に立ってるし、日本語の勉強も。日本語教師、選んだ理由も、日本語を使えるからっていう理由があって、毎日日本語を使えるっていう仕事をしたいですね。例えば、私の同じ学部、卒業した人は日系企業ですけど、毎日、日本語を使わないんですね。例えば、人事部の人たちですね。いろいろな仕事の種類があって、全然日本語を使わない人もいますね。でも、やっぱり日本語を長く勉強して、日本語を使いたい、日本語を使える仕事をしたいですね。

留学経験は仕事をする上で役に立っている。

M： 1回目と2回目。1回目は、まず、さっきも述べたとおり、日本語が上達できたと自分を感じました。1人で大勢の人の前で発表できることとか、自分で旅行できることとかあと、地域の人と交流できることとか。やっぱりそのことから、日本語だけじゃないって、日本についての知識もちゃんと身に付いて、今の仕事に役に立ってると思います。日本語を教えることですけど、日本語だけじゃなくて、日本人の性格とか、日本人の特徴とか、あと日本の文化とかも教えることはできると思いますね。

*： もう、セットですからね。

M： はい、そうですね。だから、例えば、今は日本事情の授業と日本史込みの授業を担当していますね。ですから、日本語だけじゃなくて、日本についての知識も教えられると思いますね。それは、日本への留学経験から。それはすごく効果的にやっていると思います。2回目の留学は研究、仕方とか、読書とか、その経験からは今の翻訳の仕事もすごく役に立つと思いますね。

2回の留学機会を得たが、やりたくてもできないこともあった。

M： J1 大学にいたとき、受け身じゃなくて、もう少し自分から積極的にやれば、もっと良かったなと思いましたね。今、振り返ったら、ああ、ちょっと後悔しているなと思いました。その時、みんな優しい。優しいから、自分は受け身になってしまうんですね。自分から助けを求めているって这种感觉ですね。もちろん、その時、大変なことあったから、それで、ちょっとまだ積極的じゃなかった。だから、もっと積極的に人に声、掛けて、コミュニケーションを取ればよかったなと思いました。

今教えている学生はですね、卒業した後で、日本の J10 大学に留学するという最終目標ですね。それは、ちゃんと目標があって勉強しているってことです。だけど、私は、その時は目標ははっきりしてなかった。それは今後悔してる。ちゃんと目標があったら、もっと良かったなと思いました。何となく留学、決まって、選ばれて、ああ、行けるって喜んだんですけど、でも、自分の中はちゃんと、留学している間、何が出来るか、どのぐらい成長できるかという計画も何も立ててなくて。いろいろな人が助けてくれたから日本語も上達できたけど、でも、ちゃんと目標があったら、その留学の意義がもっとあったかなと思いましたね。

*： それは後から言えるけど。まだ年齢も低いから。

M： そうですね、その時は若かったね。あまり考えてなかったんですね。実際、今の学生たちを見て、あまり目標を持ってないんですよ。だけど、自分の失敗したこと、その目標を持ってないから、あまりそんなに成長できないよってことは、学生に伝えたいと思いました。

5.3. インタビュー協力者 N さん (21) のライフストーリー

5.3.1. N さんの略歴

N さんは中学から日本語学習を始め、地元の大学で日本語を専攻した。3 年次終了時に J6 大学に約 1 年間交換留学した。大学卒業後、母校の大学院に進み、研究しながら母校で日本語を教え始めた。プライベートでは結婚し、出産した。産休・育休で 6 か月の休暇をとり、その間に「修士論文を書いた。調査時、修士課程を修了し、仕事に復帰したところだ。

5.3.2. N さんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

N さんは中学の選択科目として日本語を勉強し始めた。日本は発展していて就職に有利だという両親の勧めがあった。小学 3 年生から英語を勉強していて、新しい言語の学習を始めたいと思っていた。母親がドイツ語やタイ語ができ、言語を勉強したらその国の文化がわかって面白いと思ったからだ。

N： 最初はもちろん、その時は、新しい言語で、楽しみに勉強しました。大変とか、思ったことがなかったんで、遊びながら勉強した感じで、はい。

高校入学時も同様に外国語科目を選択することになっていたのので、引き続き日本語を選択した。大学入試の科目にも選べるので、一生懸命集中して勉強した。先生は日本人 1 名とベトナム人 1 名

で、大学進学まで接した日本人は先生だけだった。

地元の大学で勉強させたいという両親の希望があって、地元で唯一日本語が専攻できる大学に進学した。当時日本語学科は1学年100名ほどだったが、日本語学習歴のない学生も10名程度いたので、ひらがな・カタカナなど最初から勉強した。大学から日本語を始めた人は1年でN4を取らないといけないので大変そうだった。既修者は余裕があったので、日本の友好協会が来学した際の交流会などの活動に積極的に参加した。

N： 7年間、中高で勉強した時は、会話とかあんまりできなくて、だから聴解とかも、聞き取れなくて、だから、こういうチャンスに参加して、自分のスキルをアップする。

日本語を使いたい、日本で生活してみたいという理由で、3年次修了時に留学することにした。

N： もちろん、日本語を勉強している学生は誰でも留学したいですね。日本はどんな国か、文化はどういうふうか、日本人は実際に勉強したことと同じかどうか、確認してみたいですね。

いくつかの協定校の中から私立大学のJ6大学を選んだのは、スポーツが盛んなことと経済の授業がとれることだった。

自分の日本語に自信があり、留学前に不安なことはまったくなかった。授業料不徴収だったので経済的な不安もなかった。期待していたことは、日本でたくさんの人にベトナムのことが紹介できることだった。

《留学中の生活》

留学生活は順調にスタートした。バスや電車の乗り方にもすぐ慣れた。初めての一人暮らしだったが、楽しすぎてホームシックにもならなかった。

困ったのはベトナムの調味料が手に入らず、ベトナム料理が作れないことだった。検疫の関係でベトナムから調味料が持ってこられなかったからだ。しばらく探すと、ベトナムより高いが売っている店を見つけることができた。

留学生寮の家賃が無料だったのは助かった。自転車も借りることができた。留学生寮には、中国、ロシア、インドネシア、韓国などから正規・非正規の留学生が約20名住んでいた。ベトナム人も5名いた。Nさんの提案で1か月1回料理の持ち寄りパーティを行った。

N： 一番、良かったと思ったことは、他の国との留学生と、交流とかできて。で、私は1か月1回、料理パーティーみたいに行って、みんなはすごく興味がありまして。

留学中10回くらいこのパーティを行った。他の国の料理が食べられただけでなく、ベトナムからの留学生も出身地が違うのでいろいろな地方の料理が楽しめた。

生活費のために、前に留学していた先輩から紹介してもらったハンバーガー店で来日1週間後アルバイトを始めた。アルバイトを通じて日本人の友人もできた。スポーツセンターにも通い、バドミントンなどをしてそこでも日本人の友人ができた。

国際交流サークルにも入った。留学生も日本人もいるサークルで、英語圏からの留学生に英語を教えてもらったり、週1回集まって英語や日本語で話したり、交流会をしたりした。このサークルで知り合った友人とは今でも交流があり、Nさんの結婚式にはインドネシアやロシアからも来てくれた。学園祭では、ベトナムの屋台を出した。

旅行にもよく出かけた。東京には数回、横浜や同級生が留学している町などに行った。富士五湖の富士山がみえるラベンダー畑の美しい景色や温泉なども楽しんだ。

留学中の生活で印象に残ったことは日本人が「働きすぎ」だということだ。アルバイト先や先生、周りのサラリーマンを見てそう思った。

一方、学生があまり勉強しないとも感じた。教室で寝たり、音楽を聴いたり、話したりしているのを見かけた。

N： でも、学生、大学生は、あまり、勉強しない感じがしました。だから、みんな、あまり勉強しないから、社会人になって働き過ぎ。こういうことが、ありました。

*： 勉強しないでゆっくりした分、その後すごい。

N： そう、勉強しないから、仕事が大変ですねとか。そう思いました。アハハ。

ただ留学先の大学がスポーツが有名で、練習に集中して、練習に時間を使うので疲れているのではないかとも思った。

次に印象に残っていることは、「すごい便利」ということだ。何でもすぐ対応してもらえた。特に手続きはベトナムに比べてすごく早かった。

N： すごい早かったです。帰国手続きをする時は、私は多分、日本、ベトナムと同じでしょう。

1週間ぐらいかかりますって言って。で、バイトを休んで、手続きに市役所に行きましたら、1時間しかかからなかった。早かった。だから、ついでに旅行とかもしました。

《留学生としての学修》

最初の学期はほとんど日本語の授業をとり、二学期目は留学生向けの好きな科目を履修した。日本事情、日本の地理、歴史、日本のIT、マーケティング、観光などである。

留学生向けだが、日本人学生も履修していて、ついていくのは大変だった。

N： 先生が言ったことを、ただ、60パーセント、70パーセントしか分からなかった。専門の言葉とか。で、辞書を引いたら、すぐ次のことを言っちゃいますから。

*： そうね。引いている間にね。

N： そうですね。だから、はい。試験とかも大変でした。

成績はあまりよくなかったが、合格できた。単位互換のできる科目をとらないと、帰国後出身大学で1年間勉強しなければならないので頑張った。

《人間関係》

上述のように積極的に交流を進め、留学生寮やサークル、アルバイト先で友人と良好な関係を築いたNさんだが、最初は日本人の対人態度を冷たいと感じていた。

N： 寂しいですね。人とコミュニケーションは、最初はちょっと冷たかったで、親しくなったら、結構、話せます。

*： はいはいはい。そこまでが結構、大変ね。

N： はい。で、最初はちょっと。

*： 最初はちょっとやっぱり、なかなか友達できなかったんですか。

N： そうですね。で、活発とか、積極的じゃない人なら、生活は寂しい。

*： 寂しい生活の人もあるかなって？

N： こっちも話しかけないで、こっちも話しかけない。だから、全然、時間がかかっても…。

*： 仲良くなれない人もいるということですね。

N： はい。それは残念なことです。

積極的に働きかけて日本人の友人もでき、結婚式にも来てもらう仲になった。

J6 大学にはチューターや指導教員は制度としてなかった。手続きなどは国際交流センターの先生が手伝ってくれた。困ったことがあったら国際交流センターに相談した。

N： 留学生に対して、先生がたはすごく熱心に。

*： ああ、そうですか、へえ。

N： はい。熱心で。関心を持ってくれました。生活とかも、勉強とかも、いろいろ手伝ってくれました。

ただ個人的な問題は国際交流センターの先生などが近くにいるわけではないので、自分自身で解決した。

2、3人の先生方とは今も連絡を取り合っている。観光の先生がベトナムに来た際には案内した。

N： 最初は、ベトナムは分かりますけど、私の出身地は全然分からなくて。だから私は「来てください。案内しますよ」って言って、予定に入れて、来てもらいました。

地域での交流では、市役所から大学にお正月にあるパフォーマンスへの誘いがあり、ベトナム人15人で踊った思い出がある。同じ大学の5人だけでなく、近隣の日本語学校のベトナム人の先生が声をかけてくれて、日本語学校の学生も参加した。

また、スピーチコンテストにも参加し、「この町で一番驚いたこと」というテーマでスピーチした。スピーチコンテストの後交流会があり、みんなといろいろ話したり、ゲームをしたりして楽しかった。

大学のある町の母親たちのグループが2か月に1回程度開催している料理教室にも参加し、日本の料理を一緒に作った。

N： その教室は、日本の料理を一緒に作る。でも、私はベトナム料理、作ってあげたいって。で、こういうお願いがありまして。私は、その教室に1回、参加しました。その時は、日本人、カレーでした。で、どうしてベトナム料理を作らないかって考えて、で、担当者に言って、だから「あ、OKですよ」って。

ベトナム人5人で地域の人にベトナムのフォー、生春巻き、デザート作り方を教えた。その他、幼稚園や小学校でもベトナムの文化紹介を行った。

《留学後》

帰国後、日本でとった授業の単位互換が認められ、数か月間卒業を待つだけになった。卒業の時期は6月と12月だからだ。卒業まで家庭教師のアルバイトをした。また、母校の修士課程を受験して合格した。卒業後修士課程で研究をしながら、母校で日本語を教えた。

プライベートでも結婚し、出産した。子どもは1歳になる。産休・育休で6か月の休暇をとり、その間に「感謝表現の日越対照研究」というテーマで修士論文を書いた。(調査時の)前週、修士課程を卒業したところだ。この2年間、本当に大変だった。

今は子どもは祖母が面倒を見てくれている。論文を書き終えて、余裕ができ、今は「教える」こ

とに集中できる。

今ベトナムの大学は教師不足だ。大学で教えるためには修士や博士が必要だ。大学で教えながら大学院に行く教師も多く、教えることに集中できる教師に負担がかかる。さらに、給料が安いので、教師になる学生が減っている。他にいい就職先があるからだ。ハノイやホーチミンなどの大都市で就職する学生が多い。

N： だから、教えることは大変でした。大変ですね。

*： ちょっと授業数が多いのは大変ですね。学生数も多いですね。

N： はい。教えるだけではなく、活動とかも。文化室とかもつくと。他の文化授業とかもつくと、みんな、つまらないかなと。

*： ああ、そう。勉強だけになるとね。それをやっぱり伝える責任がありますよね。留学し人は。

忙しい毎日だが、仕事をする上でも留学は本当に役にたっていると思う。

N： (授業の) 導入は、全部私が日本にいるときの写真を使って、導入しました。

*： なるほど。

N： みんなも、頑張ったら、なんか、こういう先生が体験できたことも・・・。

*： 体験できますよって。

N： そう。楽しめて。で、みんなも興味がありました。実際に使える日本語だから、みんな一生懸命、勉強してくれました。

また、日本での生活を通してわかった情報を授業に取り入れることによって学生が関心を持つ。

N： (留学が役立っている) 二つ目は、日本とベトナムの違いがよく、何となく分かるようになって、だから、日本の文化とかの授業にその情報を入れて、みんなも興味や、持つようになりました。

日本での体験を通してわかるようになったことはたくさんある。例えば、「電車の乗り方」は留学前に知識として勉強した。

N： 黄色い線だ。黄色い線は何の線だ。乗る方法とか、下りる方法とかは、なんですかって。言葉を覚えるときは、そのまま勉強・・・。

*： 勉強するけど、なんでこれが必要なのか、大事なのか。

N： そうですね。

実際に体験しないとわからないことを伝えたい。

留学を通して感じた日本人の「迷惑、掛けないように仕事する」という考えも伝えたい。自分自身もそうだったが、ベトナム人は基本的に「何でも、私は」から考えていると思う。日本人は自分が所属する会社や学校のことを考えて行動していると思う。言われなくても、授業が終わったら教室の電気を消す、共有の場所を掃除するといったことを学生たちにも伝えて考えてもらいたい。

もう一つ、学生に伝えていることは「あいさつ」である。ベトナムではいろいろな場面で日本ほど挨拶しない。日本の「あいさつ」を文化の1つとして学生に教えているので、日本語学科の学生だけはちゃんと挨拶する。

N： 日本語勉強して、できるだけちゃんとあいさつしてください。友達にも先生にも日本人に

も。

*： 社会人になるとね。そうかもしれないですね。それって、あいさつするのは、やっぱりいい感じは受けるんですか。

N： そうですね。いつも笑顔で。ベトナム人は、笑顔が好き。大好きですよ。みんな、笑顔、自然な笑顔で、すごかったです。で、それと共に、お辞儀とかあいさつしたら・・・。

*： お辞儀があれば、もっと良くなるっていう。

N： そう。もっと良くなると思います。

日本語教師として日本語力・日本語教育能力の向上にも努めている。同大学に在籍する日本人教師に、教案をチェックしてもらい、「教える時に困ったこと」を共有し、解決しようという勉強会が学期末や夏休みにあり、参加している。職場としていい環境だと思う。

《留学を振り返って》

1年間の留学で会話が上達したと思う。また、自分の考え方が変わったと思う。留学前は自分のことだけ考えていたが、留学を通じて「やっぱり、みんなとつながってたらいい」ことに気づいた。繋がったら、「世界がひろーく」なった。

留学全体の評価としては「良かった」と思う。

N： やっぱり、良かったですね。日本は素晴らしい国です。日本人も素晴らしい人です。

*： うん。寂しいけど。

N： どの国でも、どんな人にも、悪い面も、良くない面も、いい面もありまして。でも、全体的に見たら、良かったです。

*： そうですか。

N： また、日本語を選ぶのは正しかった。

*： 正しかった。お母さんに感謝。

N： はい。そうですね。日本へも、心から感謝を持っています。

*： ああ、そうですね。へえ。

N： 日本語のきっかけで、日本の文化、日本人とか。

*： うん。それから世界にもつながって。

N： そうですね。つながって。それは、本当に良かったです。だから、みんなは、日本語、選んで、私もうれしいです。

留学中にやりたかった十分にできなかったことは一番やりたかった「ベトナム紹介」だ。

N： 1年間は、本当に短かった。で、慣れて、ちょうど慣れてきたら、もう帰国時間に決まりまして。一番やりたいことは、もっと、ベトナムの文化、紹介したいですね。日本のフェスティバルとかして。お正月のパフォーマンスしか参加できなかった。

*： あ、そうだね。そうですね。

N： ベトナムフェスティバルとかして。そして、いろいろな文化も、体験したいですね。相撲とか。

5.4. 考察

日本語教師としてのキャリアの長いMさんと約2年のNさんとは、経験や評価も大きく異なる。

また、Mさんは2回の留学を経験しているが、1回目と2回目の留学生活やその評価は、自身の日本語能力や意識などの個人要因、受入体制などの環境要因によって大きく異なっていた。本節では、2名にとっての留学の意義を、日本語習得と日本語教師という職業に対する意識、学び続ける姿勢に焦点を当てて、考察を加える。

《日本語習得と人的ネットワークについて》

Mさんは、日本のドラマなどによる親近感や先輩の助言から日本語を学ぶことにした。成績が良かったMさんは3年生の時、先生の勧めがきっかけで交換留学することになった。大学で3年近く日本語を勉強したが、話す経験は少なくて自信がなかったため、来日当初は授業や友人作りに苦労した。日本語は留学生同士を結ぶ言語として機能し、まず留学生コミュニティへの参加により日本語の上達を実感し、続いて留学生や国際交流に関心を持つ地域住民へと人的ネットワークを広げた。授業や交流の場で自身が話したことが理解されることに喜びを覚え、自信となった。1回目の留学では授業などで接触はあるものの日本人学生の親しい友人は得られなかったが、2回目の留学では同じ関心を持ち、多くの時間を共にする研究室の日本人学生と良好な関係を築いている。

Nさんは他の元留学生と同様に最初は日本人の対人姿勢が冷たいと感じていた。しかし、積極的な性格が功を奏し、留学中アルバイトや留学生パーティの企画、サークルの参加などを通して、日本人、留学生ともに多くの友人を得た。自身の結婚式にも出席してくれるほどの関係が築けた。料理教室や市のイベント参加など積極的に参加した。1年間の留学で会話が上達したと思う。

また、留学中に起こった偶発的困難の克服や一人旅などの経験が日本語使用の自信につながった。このように、2名の日本語習得には留学ならではの実体験や人的ネットワークが大きく寄与していると言えるだろう。

《日本語教師としての仕事》

ベトナムの大学では教師が不足している。大学で教えるためには修士や博士の学位が必要で、大学で教えながら大学院に行く教師も多く、教えることに集中できる教師に負担がかかる。さらに、給料が安いと、教師になる学生が減っている。他にいい就職先があるからだ。地元で就職したいと考えていたNさんは母校で日本語を教えることを選んだ。

Mさんの場合は、1回目の留学中にボランティアで日本語を教えた経験が日本語教師に関心を持つきっかけとなった。誘われて参加したボランティアだったが、全く話せなかった人たちが簡単な日本語で会話できるようになったことに喜びを覚えた。また、一緒にボランティアに行った先生から教え方を褒められたのも嬉しかった。島津(2016)の調査対象者と同様に、言語を教えた成功体験が「日本語教師」という職業選択に繋がっている。帰国後の夏休みに技能実習生に日本語を教えるアルバイトを始め、大学卒業後夜間の大学院に通いながら大学での日本語教育のキャリアを開始した。

Mさんは、日本語教師としての仕事では、日本語だけではなく、日本人の特徴、日本文化など日本に関わる知識も教える必要性があり、その意味で地域住民との交流や旅行など留学中の体験が有益だったと語っている。例えば、旅行では訪れた町や名所について知るだけでなく、旅先で困った時に親切にしてくれた人々から日本人の性質を感じとったエピソードが語られている。東日本大震災は留学中の特筆すべき出来事だった。東京近郊で自分自身も大変な思いをしたが、パニックにならず整然と並んで歩く帰宅困難者の姿に「日本人の強さ」を感じたという。ボランティアとして行った被災地では優しく迎えてくれた被災者の姿に逆に力もらった。逆境の中で「日本人の精神」の本質を実感した体験であった。これらは、授業やメディアなどからの知識ではなく、自らの実体

験を通してでしか感じ取れないものもあり、留学したからこそ得られたものだと言えるだろう。

Nさんも同様に実体験の重要性を指摘している。学生たちに実際に体験しないとわからないことを伝えたい。例えば、電車の乗り方のような具体的なものから、留学を通して感じた日本人の「迷惑、掛けないように仕事する」という考えや挨拶の大切さだ。

先行研究（池田・八若 2017、川上他 2021、杉村 2019、嶽肩他 2012、八若・Susi2021）の日本語教師や大学教員と同様に、留学で得たことを自らの教育実践にも活かしたり、学生に伝えたりしている。Mさんは一つの作品を皆で解釈しながら読む授業の経験をもとに、勤務校でも読書の授業を取り入れることを計画している。卒業後日本留学を目指す学生には、自らの経験を踏まえて、留学に際して「目標を明確にすること」、「積極的にコミュニケーションをとること」の重要性などを伝えている。Nさんもまた、日本での生活を通してわかった情報を授業に取り入れることによって学生が関心を持つと感じ、留学時に撮った写真などを授業の導入に使うことを心掛けている。

《学び続ける姿勢》

Mさんは「日本語が使える仕事をしたい」という希望から、現在、大学での日本語教育と翻訳という二つの仕事に従事している。生活の7～8割は日本語だというが、海外で教える非母語話者教師の困難点とされる日本語能力の維持とアップデートを心掛けている。最近では忙しくてできない場合もあるが、毎日日本語のニュースをチェックしたり、通勤バスで読書をしたりしている。年に1回程度日本のシンポジウムに出席したりするが、専門用語などわからないことが多いことにも気づかされる。

Nさんも日本語教師として日本語力・日本語教育能力の向上にも努めている。同じ大学に在籍する日本人教師に教案をチェックしてもらったり、「教える時に困ったこと」を共有し、解決しようという勉強会に参加したりしている。

以上のように、2名の語りから、非母語話者教師の共通意識として先行研究で指摘された、日本語・日本文化の知識の習得の重要性、日本語学習者及び教授者として学び続ける姿勢の重要性、自分が得た知識・情報を伝えることの喜びなどが認められた。2名にとって、日本留学は日本語教師としての意識の形成や専門性の獲得に欠かせない経験であると評価されていた。日本語専攻の元交換留学生として、八若（2018）、八若・小林（2021）の日系企業で働く元留学生と同様に、「日本語の上達」と「日本の社会・文化への理解」を留学の成果として高く評価していた。

6. 求職中の元交換留学生の留学評価

6.1. インタビュー協力者 O さん（22）のライフストーリー

6.1.1. O さんの略歴

日本のアニメが好きだというのが O さんが日本語に関心を持つきっかけだった。兄が日本語を勉強していたこともあり、中学生の頃からインターネットやラジオを通して独学した。本格的に日本語学習を始めたのは大学に入ってからである。3年生の時に1年間 J1 大学に交換留学した。O さんには日本で声優になるという夢があり、専門学校への問い合わせもしていた。最初は N2 が、次は N1 が必要と言われたあげく、外国人であることや年齢などで難しいと言われ、諦めた。大学卒業後の就職活動中に家業が忙しくなり手伝うことになった。調査時には祖母の世話など家事手伝いをしながら、日本語関係の仕事をする兄の手伝いをして日本語を忘れないよう努めていた。

6.1.2. Oさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

日本のアニメが好きで話されていることを知りたいというのが日本語学習のきっかけだった。また、兄が日本語を勉強していたので、同じ道に進みたいと思った。中学生くらいからインターネットやラジオのニュースを通して聞くこと、話すことを独学で勉強した。書き方など本格的に勉強を始めたのは、大学のビジネス日本語学科に入ってからだ。

大学に入って最初の1年は大変だった。インターネットでは何回も繰り返して聞けたが、日本人の先生と話してみても、会って話すのは違うと感じた。また、何回も聞いて理解していても書こうとしたら字が書けないということもあった。

3年生の時、大学に交換留学の制度があることを知り、家族に相談すると、留学に賛成してくれた。

*： 家族の後押しがあったんですね。

O： はい、後押ししてくれました。「お金あんま気にせず、勉強したいのなら行っていいよ」って言ってくれたので。私ももっと上達したいので。だから、この企画に参加して、テストを受けて。そして、留学決まったときに本当にうれしかった。

選択肢は二校あったが、情報が多かったJ1大学に留学することにした。

日本へは家族とツアーで行ったことがあったが、一人暮らしは初めてだった。留学前は不安と楽しみの両方があった。

O： やっぱり、ちょっと、不安と緊張感があって、行ったら大丈夫かなって思うとか。自分で話せる国。日本語を使って話せるんだと思うんですけど。でも、その人たちのことを知らないです。どうやって生活すればいいかは、全然分からないので。だから、緊張感と不安がありました。

一方、楽しみにしていることもたくさんあった。一番の期待は多くの日本人と話せることだった。また、アニメが好きなので、ロケ地やアニメグッズを売っている所に行くのも楽しみにしていた。

《留学中の生活》

日本に着いた時、新鮮で楽しみだと思ったが、寮での生活には大きな不安があった。

O： 入ったときには、初めての1人暮らしなので、寮に入って、こんなところがあるのだとか、ラウンジがあって、個室があって。それで入って、こんな部屋なんだなって。いろんなものがそろってて、ちょっと楽しみだったんですけど。でも、入っていったら、何をすればいいか、全然分からなくて。

*： 寮なので、まず何をすればいいか。

O： そうです。荷物もあったんですけど。でも、大体はまだそこのものじゃないので、服とかだけなので。部屋の中に何もなくて。それで、布団とかもないので。

1日目は日本人学生のボランティアが手伝ってくれたり教えてくれたりして、「これからこうするのだな」というのがわかった。その日は買い物ができなくて、布団はボランティアに貸してもらった。後日同じ大学の先輩が残っていた布団があることがわかり、借りた布団は返した。

インドネシア人留学生2名と寮の部屋が隣だったことや日本語のクラスも同じだったこともあってすぐに仲良くなり、同じ大学から来た友人を含めて4名でよく行動を共にした。一緒に日用品を

揃えるために買い物に行くのも楽しかった。

最初に直面した困難はパソコンだった。ノートパソコンを持っていこうと思っていたが、古かったので母に相談して日本で買うことにした。自分で買いに行ったが、どれを買ったらいいかわからなかった。「勉強するために使う」と言ったら、定員さんがいろいろ勧めてくれた。高いものを買うと母に怒られると思い、安いものにしたが、自分で全てインストールしなければならなかった。

O： タイでは大体お店がやってくれるので、これは初めてなので、どうしよう。どうすればいいのか、想像がなくて。一瞬日本が嫌いになりました。

さらに悪いことに、寮でのインターネット契約に2週間くらいかかり、インターネットで調べることができなかった。来たばかりで誰に聞いたらいいかもわからず、マニュアルを全部読んでなんとか無線がつながったが、その後もトラブルは続いた。

O： 無線もやっとできた後にほっとして、できたって思ったんですけど。ノートパソコンが本当に仕事のためだけにやっているものなので、ちょっと遅いっていうのがあって。それで、その後に、フリーズしたり、急に駄目になったりしているの。だから、どうしようって、本当に大変だったので。だから、自分で何とかしようとして何回もしたんですけど、あの時すぐ本当に大変でした。

本当にダメな時は買った電気屋さんに「このパソコン買ったんですけど、何とかしてください」と駆け込んだ。パソコンの不具合はストレスだった。

来日当初もう一つ苦労したのが、「場所」と「移動方法」だった。

O： どこに行けば何を買えるのか。どうやって、移動方法とかも、その時は、電車とかバスがあるのは知っているんですけど、どこで乗ればいいのか。バスとかは値段とかはいくらなのかとか、全然分からないので。だから、移動方法とか行く場所とかも、全然把握してないので。特にω県は初めてですし。

駅や有名な場所はわかったが、その他は情報がなかった。来日当初仲のよい留学生4人で遠くの店まで日用品を買いに行った時も帰りに道に迷った。まだ誰も自転車もなく、ネットもつながらない状態で多くの人に道を尋ねながら、大きい荷物を持って2時間以上歩いてやっと寮に帰れた。

その後、自分で自転車であちこち行ったり、バスに乗ってみたりして覚えた。

O： だから、その後、大体の道を把握しようと思ったんですけど。だから把握しないと、絶対また迷っちゃうなと思って。だから、1回いろんな所に行って道を覚えて、そしてここにいくときには、こうやって行くんだなとか覚えて。で、(ノートに)記録しました。

日常生活もいろいろなものを揃えるまで大変だった。どこで何を買うのかもわからなかった。肉などのパックに表示されている複数の値段の意味が分からず、間違っ買いそうになったりした。

逆に、いい意味で予想を裏切られたこともあった。留学した友達に「ωって田舎だぞ」と言われていたが、来てみると思っていたほど田舎ではなかった。駅のまわりには高い建物もたくさんあるし、デパートもあって、たいていのはそろっていた。町を散歩するのも楽しかった。「いろいろ目がキラキラして。あ、すごい」という感じだった。

仲のいい4人の中でOさんだけがアルバイトをしなかった。したい気持ちもあったが、指導教

員のゼミが楽しく、興味もあったので、そちらを優先した。家族が仕送りしてくれたが、経済的には大変だった。

O： 最初はちょっと不安なんですけど、大変だったんですけど。でも、だんだん、こんな。ちょっと自分の生活費とかも考えて書いて。1日これくらいを使っているの、じゃあ次までは大丈夫かなと思って、大体いつもノートをしていて。

高いものを買ってしまうこともあったが、次の日からまた節約すればいいと思った。

O： きょう、レシート全部持っていて、で、きょうの、何を使ったのかって全部記録して。あ、きょう、こんな感じで使ったなって。この1週間何を。あと、どれぐらい残っているとかでずっと書いてて。1年間やりました。

留学中印象に残っているエピソードはたくさんある。その中で、留学生や日本人学生、先生方と一緒にいった国際交流合宿は楽しい思い出だ。雨が降って外ではできなかったが、室内で真ん中に火のようなものを置いてキャンプファイヤのようなことをしたり、ウォークラリーやバレーボールなどをしたのが楽しかった。何よりもクラスメートや寮の友達以外のたくさんの人といろいろ話せたのがよかったと思う。Oさん自身はぐっすり寝てしまったが、同じ部屋でグループの人たちと一緒に寝たのも楽しい思い出だ。

来日直後に一人で東京に行ったのも印象に残る経験だった。最初の頃はみんな忙しいので誘っていいかどうかわからず、1人で行くことにした。道もわからなかったし、どの電車に乗ればいいのかもよく分からなかった。

O： 知らない所ですので。だから、行っていったら、どうしよう迷ったら、他の人聞いてもいいんですけど、やっぱり皆さん日本人ですので。日本語ができなかったら、私も大変なんじゃないかって思うから、聞いていたらいいんですけど、やっぱり知らない名前の電車の線とか通路とか、知らない道、町とか。

*： 聞いたら余計分からなくなるから。

O： そうそうそう。分からないでも、「はいはい、ありがとうございます」言って、なんだろうって探してみても、ガイドも買って読んでみる。なので自分で旅行して、あ、こんな感じ。それで、その後に帰れて私1人で旅行できるみたいな感じがすごく舞い上がって。

この体験を通して「1人で何とかできる」ということを強く実感した。

《留学中の学修》

日本での勉強でまず困ったのは、履修する授業を選択することだった。日本語の授業はプレイスメントテストの結果でレベルが決まり受ける授業が決まっていたが、専門の授業は自分で選ばなければならなかった。タイの大学ではないシステムだった。履修案内の冊子を見ても、何を勉強したらいいのか分からなかった。

O： だから、あ、どうしようって。あと、自分に、なんか興味のあるものなのか、勉強していったら自分に役に立つものなのか全然分からないので。いろんな人と友達のみなどと相談して、「受けてる、受けてない」とかって聞きながら。

交換留学生在が一人の授業は不安だったので、友人を誘って、交換留学生在がよくとる授業としてリ

ストップされた授業の中から選んだ。

また、指導教員に相談すると、Oさんがアニメが好きだということで、漫画をとりあげているポピュラー文化の授業を勧めてくれた。この授業と指導教員のゼミをとっている交換留学生はOさんだけだった。不安だったが、受けてみると楽しかった。

O： でも、入っていったら、あ、楽しいなって思って、マンガの研究しているのです。だから、マンガのこと最初はこうだなとか。あと、いろんな国のマンガとかも知れたので、だから、だんだん勉強していると、あ、楽しい。

日本人向けの授業は大変だった。必要な日本語レベルはもっと上だと感じた。特に漢字が弱いので、苦労した。

O： 言葉も、文法とか使い方が、全部日本人のレベルなので、受けているときにちょっと聞き取れない時もあったんですけど、「あ、こんな感じで」だったので。でも、面白いなと思って。

宿題はあまりなかったが、予習・復習をしないとついていくのが大変だった。その中でも苦労したのがレポートである。

O： 次に出るときに、この話になんだぞってみたいに。だから、復習しないと、なんの勉強していったのか、全然分からないんですね。あと、やっぱり、レポートとかもあるので、そこが、特に、日本人の授業だったので、レポートが大変です。

レポートを書く時には日本人の友人に相談し、チェックしてもらい、間違いや書き直したほうがいいところなどいろいろ教えてもらった。

O： 何回もチェックして、「これでいいんじゃないか」とかって言って、で、それでOKしてもらえたら、じゃあ先生に提出する。

*： はいはい、そうしてくれる学生はありがたいです。

O： 日本人の授業なので、間違った日本語を使ったら、絶対にあかん。絶対たくさん入っているんじゃないかと思ったので、だからできるだけ自分が全部渡して。それで日本人の友達に見せて、あ、これ駄目って言われたら、全部を書き直したりは。間違っている所を書き直して、また、見せて。

一方、留学生向けの日本語の授業はレポートはなかったが、宿題がけっこうあった。

O： でも、あの留学生だけだと、先生がゆっくりだったり。あと英語を挟んで、こういう意味だぞっていうみたいな感じが、一緒に入れてくれたので。ちょっと、勉強やすいみたいな感じなんですけれども、でもやっていったら、めちゃめちゃ難しい。

聞き取ることはだいたいできたが、N1レベルなので難しくて大変だった。

ゼミはタイの大学にはないので、よい経験だった。社会心理学のゼミだったが、留学生が多く、留学生のゼミ、学部生のゼミ、大学院生のゼミなどに分かれていた。留学生のゼミに最初出ていたが、日本人学部生のゼミにも参加した。

*： ゼミは、結構専門とは違うから、難しかったんじゃないですか。

- O： 難しかったんですけど、これも期待以上のもので、私も初めてゼミナール入ったので、タイの大学だとゼミがないので。だから、初めて行ったときに、最初は、「同じ留学のみんながゼミに入って、ちょっと面倒くさいな」とかって、みんなが言っていたんですけど、私も最初は「なんなんだろう、このゼミ」って言って、初めて行ってみたら、いろいろ話してあったり、その日本人のレポートとかも話していたりみたいなことをして。特に、指導教員のゼミは留学生のゼミと、研究生。
- *： 留学生多いですね。
- O： 留学生も多いので。だから、大学院生の授業が、ゼミとかあと日本人だけのゼミとかも、いろいろ分けていて。それで、最初は私もただ留学生だけのゼミに入って、最初も私も大変だなとか、難しいとか。留学生のみんなで新聞読んで理解して。だから最初に入ったときは、うん、ちょっと大変だな。授業とかもあって、ゼミも入らなきゃいけないのになって、ちょっと大変だったんですけど。でも、その後に私もちょっと日本人の授業。日本人のゼミのほうに。
- *： 日本人のほうなんだよね。
- O： はい、のほうに入って。入ってみたら、いろいろな話、して。あと、卒業生のレポートとかもお話だって聞いたり、ちょっと、これは面白そうなんじゃないかって。
- *： 日本人のほうでは、学部生だから話は簡単かもしれないですね。内容。
- O： はい。でも、いろいろ知らないこともたくさん入っているので。だから留学生だけのゼミだと、知らないことがもっとたくさんあるので。だから、それ（日本人のゼミ）に入っていった時に、先生が、「次も来ていいよ」って言われてたので。あと、「留学生の人もいたら、いい意見がもらえるかもしれない」と言ってたので。だからその誘いに乗って、私もその日本人のゼミに入って、皆さんの卒業レポートを手伝って、意見だったりしたりして。だから、その後に入って、とっても楽しみです。タイではそういうゼミの文化はないので。だから、入ってみていろいろ楽しみがあったので、留学生のゼミももっと楽しくなった気もしました。

日本人学生はわからないところを親切に教えてくれた。教えてもらうだけでなく、自分自身も意見を出したり、卒業レポートを手伝ったりした。

- O： あと、知らないことたくさんあるので。でも、皆さんも優しいので、「あ、知らないですか、じゃあ、教えます」みたいな。だからずっと私も分からないところがあったら、絶対に皆さんも教えていて、「あ、こんな意味だよ」とかって一緒になんか手伝って。私も、引っ掛かるところがあったら、意見を出して。

ゼミは知らない日本語を覚える機会にもなった。

- O： 特に、卒業生がやっているレポートは、そのアイデンティティーの話だったので、だから、アイデンティティーに関する話とかたくさんあったので、だから、全然、最初は全然分からなくて。こんな難しい言葉も使ったり、こうみたいなたくさんの漢字が並んで、ちょっと分からなかったんですけど。でも、私がちょっと分からないっていう顔したら、じゃあ、ちょっとここ止めて教えてくれて。
- *： ふーん。

O: だから、だんだん新しい日本語を覚えることができました。

ゼミへの参加を通して、多くの日本人学生とも友達になれた。ゼミは期待以上のものだった。

留学を通して、日本語が上達したと実感している。最初は全然慣れなくて、言葉選びをしながらゆっくり話していたが、だんだん慣れて自動的に話せるようになった。知らないうちに、漢字もたくさん書けるようになり、文法もうまくなっていると感じた。最初の頃書いたものを見て、「最初なんで私、こんなもの書いたんだろう」「下手だな」と思って、「書き直したいみたいな気持ちになったり」した。聞き取りも「日本人のレベルくらいに聞き取れるようになった」。留学生のいない授業で先生が「日本人レベル」で話すのが聞き取れるようになっていて、上達を実感した。

《人間関係》

指導教員からはいろいろなことを学び、大変お世話になった。

O: 先生はいろいろ教えてくれるので。あと、いろんな国も行って研究しているので。

*: そうですね。

O: だから、いろいろの、それを知って、本当に楽しくて。最初は大変だったんですが、だんだん慣れていくと、先生のゼミに入って、これ面白い面白いと思って。

*: そうですか。

O: 最初はなんか厳しいなって思ったんですけど、一緒にいると、そこまででもないし。一緒にお話ししたら、

*: 話好き。話好き。

O: 最初の印象は、優しいに見えて、ちょっと、怖いなと思ったんですけど。でも、だんだん一緒にいて、話していると。あ、先生優しいですし、いろいろ教えてくれるので、本当にいろいろもらいました。

*: そうですか。へえ。

O: ゼミに入って、本当によかったと思います。

ゼミの日本人学生にはわからないことを教えてもらったり、レポートを添削してもらったりして、仲良くなった。

O: 仲良くなっているので、たまには連絡して、それで、「じゃあ、私のレポート見てくれない」って頼んでたら、「いいよ」って言ってくれたので。あと、毎週会っているの。ゼミと一緒にいるので。だから、会っているときに「この後時間ありませんか」って聞いたら、「ああ、あるよ」って。だから一緒に見に行き、あ、これを書き直してみたいなこと、これ一緒にやってみて。

ゼミで毎週会うので仲良くなりやすかったと思う。自身のチューターや寮のチューターたちとも仲良くなった。

留学生で仲良かったのは、前述のインドネシア人2名と同じ大学から来たタイ人で、4人でいろいろな所に行った。他の留学生とは話す程度だった。

地域の人との交流は多くなかった。たまに行くお店で顔を覚えていてくれて世間話をして買い物をして帰る程度だった。地域の人との交流イベントにも参加したが、その日だけの交流になることが多かった。その中でホームステイは楽しい思い出だ。水族館や動物園、滝などいろいろな所に連

れて行ってもらった。一緒にスーパーに行って、「きょうの晩ご飯何食べる」と言って一緒に選んだり、「きょうは天ぷら食べる?」といういろいろ勧められたりして、一緒に料理を作ってみんなで食べた後に大きな地震があったので、印象に残っている。

O: 地震が起こっているの、揺れて。あ、きょう、私ふらふらしている。まさか、私ちょっと遊び過ぎたのかなって。みんなも、あ、地震だって。あ、地震かと思って。

印象深い体験がたくさんあった留学生活だった。

《留学後》

帰国後1年間出身大学で勉強して、卒業した。就職活動を少ししていたところ、父親の仕事の人手が足りず忙しいため、家にいて祖母の面倒をみてほしいと頼まれた。しばらく祖母の世話と家事をすることを優先させなければならぬと思った。家で家事と祖母の世話をしながら、日本語関係の仕事をしている兄の仕事を手伝ったり、親戚の会社の日本語に関する相談などに応じたりしている。日本語を忘れないようにと思って手伝っている。

O: でも、やっぱり、書くことは本当に、もうちょっと忘れちゃったりなっちゃう感じなんです。大体連絡している時は電話とか、あとやっぱりインターネットで使ってLINEとかだったので、だから、自分で書くんじゃなくて、これを押してそれで送るんです。だから、大体自分で書こうとしたら、全然できなくなってちょっとやばいなと思って。でも、頑張ってた書こうとしているんですけど、やっぱり毎日使わないとやっぱり忘れちゃうんです。

実は日本で声優になりたいという夢があった。

O: 本当は勉強している時に声優になろうって思ったんですけど、もちろんそれで、声優の学校専門のほうにも連絡して行ってたんですけど、でも、最初は「N2に合格しないとできないんですよ」って言ったので。

*: 日本で声優になる。

O: はい、日本の声優です。日本の声優になりたいので、だから、その専門学校に連絡して。お話をいろいろ聞いて。もちろん留学している時に、その専門学校も行っていてお話も聞きました。で、最初は「N2が欲しいです」って言ってたので、頑張ってN2取りました。でも、その後に。

*: 「N1」って。

O: そうです。そうしたら、もう一回連絡したら、「N1が欲しいです」って言われて、え、と思って。だから、そのときに頑張ってN1を取って。まあ、仕事も探しながら頑張ってた取れなかったの。じゃあ、もう、N1取るまでもう声優でやろうと思って頑張ってた勉強して。で、N1取って、そしてもう一回連絡したんですけど、そしたら話によると、年齢的にはこれを勉強して終わった後に、2年間は勉強しないといけないので、今の年齢だと入ると難しくなるので。だから、「勉強してもいいんですけど、ちょっと就職は大変ですよ」って言われてたので。あと、今、声優業界にとっても大変なので、ライバルが多いので。あと、「日本人たちもいますごく戦っているの、だから、外国人が入ったら、ちょっと難しいと思います」って言われてたので。だから、最初は悩んで行くか行かないかって思ったんですけど、諦めました。

*： ああ、諦めちゃったんだ。

O： はい。本当に悔しいっていう気持ちもあります。あの時も、ちょっと、泣きました。

声優はかつてと比べるとアイドルのようになっていて競争も激しい。外国人であること、年齢的に厳しいことなどを指摘され、諦めざるを得ないと思った。ずっと声優になりたいと思ってきたので、急に他の仕事をするにはまだ迷いがある。今は家事などを手伝いながら、今後のことを考えている

O： いろいろ勉強したんですし、それを生かそうと思って。今仕事も探して。でも、まだ行けないので。でも、まずはちょっと見てこの仕事でいいんじゃないかなって考えて、でノートして。で、その後まだ同じような仕事があったら、じゃあ、そこに連絡してみようかなって。余裕があったらそれをしようかなと思います。

*： そうですね。ゆっくり考えられる時間があるんだったら、それは、うまくそれを使ったほうがいい。慌てないほうがいいかもしれないですね。

O： はい。だから、今は精いっぱい自分ができることをやって、その後また考えればいいかなと思って。

《留学を振り返って》

帰国する時は少し悲しかった。「1年では足りない」という感じだった。全体としては、本当にいい経験だった。声優という夢を諦め、求職中の現在、留学の経験が今活かされていると思うことは多くある。

O： いろいろ生かしてると思います。行っていたおかげで、いろんな方から、認められたりお話も聞けたり。あと、次に日本に行く時は、自分たちも行けるようになっているので。だからツアーとかも使わず、自分たちで旅行をして。

*： ああ、そうですね。

O： だったり、帰っていったら、兄とか親戚のお姉さんとかも相談を受けたりして。あ、自分が行っていたことで、頼れる存在になったなって。頼ってくれる。

実は、日本留学について両親は賛成してくれたが、親戚の一部には反対もあった。特に、中国とのハーフの祖母は中国語を勉強させたかったようで、「日本語は要らないものだから」と反対された。その祖母が留学した成果を認めてくれたのは嬉しかった。

O： 昔から、ずっと否定されていて。マンガとかアニメとか、読んだり見たりしたらすぐ叱って。「こんなの見ちゃ駄目だよ」とかでよく言われてたので。だから、今自分がこんな日本語上達して留学もできて、帰ったら、皆さんが「もう、いいよ、勉強してもいいよ」って認めてくれて。

また、海外で一人暮らしができたということは自信になった。

O： やっぱり、留学できたのが本当に影響が大きいと思います。皆さんから認められて、留学もできたんだって、1人暮らしできたのみたいな。

祖母が留学したOさんのことを周りに自慢するのを見て、変な気持ちもするが嬉しい。「私が日本語勉強しているのは無駄じゃないってことは証明できて」、留学してよかったと思う。

留学中にできればよかったと思うことは、「もっといろんな方と話してみたい」ということだ。

O：一応、大学とかゼミの方とか、一緒に寮にいる日本人とか先生とかも話したんですけど。やっぱり、他のところに。

*：そうですね。地域の人とか、あまりね。

O：そう、そう、もっと話してみたいんですね。

*： α の人、優しいらしいですよ。

O：優しいですよ、本当に。行っていたら、いろんな話とかもしてくれて。でも、やっぱり、あんまり行ってないので、少ないなって思って。でも、いろんな所になんか東京とか行って、あと、大阪のほうにも行って。そこの地域の人たちも、ちょっと話したり。

*：はいはい、また違う感じですよ。

O：感じして。だから、まだもっといろんな所で話してみたい。あと、いろんなその地域の言葉とかももっと聞いてみたいなって思って。大阪に行ったときにも、関西弁とかも聞いて。

6.2. 考察

Oさんにとって日本留学はタイではできない様々な体験ができる場であった。履修する授業を選択するというのも戸惑ったが、自分が関心のある授業がとれたのはよかった。ゼミはタイにはない授業形式で、とても楽しかった。仲のよい3人の留学生はアルバイトをしていたが、ゼミに十分準備をして臨みたいという気持ちがあったので、アルバイトはせず授業重視の生活を選んだ。記事などを読んで意見交換するという形式だったが、タイにはないので珍しかった。知らないことを多く教えてもらった。また、大学院留学生の卒業レポートを手伝ったり、自分自身の意見を述べたりするのは楽しかった。毎週あるゼミを通して日本人の友人もできた。ゼミの日本人学生にはわからないことを教えてもらったり、レポートを添削してもらったりして仲良くなった。

非漢字圏学習者には難関のN1までとって頑張ったのにあきらめなければならなかった声優への夢は残念だった。夢を諦めて求職中の今、留学の経験が今活かされていると思うことは多くある。海外で一人暮らしができたことが何よりも自信となった。留学には両親は賛成してくれたが、祖母は中国語を習ってほしいという希望があったためか反対だった。しかし、1年間の留学をやり遂げて帰国すると、そのことを祖母の自慢しているのを見て、「私が日本語勉強しているのは無駄じゃないってことは証明できて」、留学してよかったと思った。反対していた祖母に認められたことがことのほか嬉しかった。

努力家で高い日本語能力を有するOさんがその能力を活かせる新たな夢を見出すことを期待したい。

7. タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価

7.1. インタビュー協力者Pさん(23)のライフストーリー

7.1.1. Pさんの略歴

Pさんは、高校の時日本語を勉強している友達とよく一緒に日本料理を食べに行き、メニューが読めるようになりたいと思い、高校2年生の時サマースクールで少し勉強した。大学ではマスコミ関係のことが勉強したかったが母親が反対したため、特に他に興味がある学科もなかったのでビジネス日本語学科に進学した。大学では既修者が多く、一緒に勉強するのは大変だった。2年生の時他学科への転学を考え、先生に相談したが、「もう少し頑張ってみたら」と助言され、勉強を続け

た。4年次のカリキュラム終了後J1大学に2学期間交換留学した。帰国後大学を卒業し、不動産関係の日系企業に営業アシスタントとして就職した。

2年後ビル管理の部署に配置換えがあり、日本語を使う機会が少なくなったため、現在の会社に転職した。現在勤めているのは日系の商社で、日本人の上司のサポートや接客などで日本語を使う機会が増えた。

7.1.2. Pさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

高校の時、日本語を学んでいた友人と日本料理をよく食べにいったが、メニューが読めないので勉強したいと思い、2年生の時サマーコースを受講した。大学では法律やマスコミ関係のことが勉強したかったが、母親が反対した。他に特に興味のある学科がなかったこともあり、ビジネス日本語学科に入学した。

入学時自分自身はひらがなと簡単な言葉ぐらいしかわからなかったが、漢字がわかり上手に話せる既修者が多く、一緒に勉強するのは大変だった。1年生の前期は授業内容が簡単だったが、後期はCやDの成績のものもあった。そのため、2年生の時他学科に移りたいと思い、先生に相談した。十分頑張っているものでこれ以上無理だと言ったが、先生に「もうちょっと頑張ってみようよ」と言われて、続けることにした。

将来日本企業で働きたいと思っていたので、日本語が上手になりたいと思い、4年生の時J1大学に2学期間交換留学することにした。J1大学を選んだのは他大学が約半年であるのに対して1年間留学できたからだ。留学は「半年だったら足りない」と思った。

留学前に一番心配だったのはコミュニケーションである。タイでは日本語を使うことがないので、日本で日本語が話せるかどうか不安だった。日本語の理解もあまりできないと思っていたので、最初に受けるプレイスメント・テストも心配だった。

楽しみだったのは、「新しい経験」ができることである。例えば、いろいろな国の友達と一緒に勉強することである。

《留学中の生活》

留学当初困ったのはやはりコミュニケーションだった。自分自身は聞いて分かっていても全然話せなかったため、空港から寮まで行く時タイから一緒に来た友人がバスのチケットを買うなど全部やってくれ、無事留学寮に到着した。その夜3時ごろ地震があり、初めての体験に驚いた。

初めての一人暮らしだったので、ホームシックになった。2週間ぐらい、自分自身も母親も毎日泣いた。寮の部屋が近いインドネシア人留学生と友達になり、毎日ラウンジで一緒にご飯を食べたりして、次第にホームシックは治った。日本での生活にも慣れていき、その後はあまり問題なく「普通に」生活できた。

授業も多くなかぬ暇だったので、来日1か月後に先輩の紹介で寮の近くの居酒屋の厨房でアルバイトを始めた。1日6時間、週4回働いた。方言で話す店長とのコミュニケーションは難しかったが、アルバイト仲間のインドネシア人学生が助けてくれた。料理については店長が丁寧に教えてくれ、アルバイトは楽しかった。店長と日本人スタッフ、アルバイトの留学生と一緒に釣りやブドウ狩りに行ったりした。

また、寮のチューターなどを中心に日本人学生の友達もでき、東京にも一緒に遊びに行った。学外活動として、日本人にタイ料理を作る活動にも参加し、グリーンカレーやソムタムを作ったりし

た。

一人暮らしで、いろいろ自分で決めて自分でやるのが楽しかった。両親からの仕送りは一回しかなかったの、自分でアルバイトのお金を管理した。留学中、勉強だけではなく、日本語ができるようになるだろうという自信ができたことが嬉しかった。

《留学生としての学修》

1学期目の日本語の授業は中級前半のクラスで、少人数の多国籍クラスだった。楽しかったが、作文関係はうまくできなかった。タイ語と語順が違うので難しかった。2学期目は中級後半のクラスに入った。心配していたが、タイの他大学から来た留学生がいたので、一緒に勉強し、留学中にN3に合格した。

英語での専門科目も履修したが、全体として授業数は多くなかったの、アルバイトと両立できた。

来日後3か月たった頃、インドネシアの友人に「Pさん日本語はよくなった」と言われた。話すのが単語から文になった。また、聞いたことがどんどん分かるようになった。

《人間関係》

来日当初は初めての一人暮らしで寂しく、ホームシックになったが、留学生寮で生活を共にするインドネシア人と仲良くなり、一緒にご飯を食べたりするようになった。日本語のクラスのクラスメートとの関係も良好だった。2学期目にはタイ人のクラスメートもいたので、よく相談でき、心強かった。

寮のチューターを中心に日本人の友達もでき、仲のいい留学生とともに東京へも遊びに行った。

アルバイトは大変だったが、人間関係はよかった。店長は仕事には厳しかったが、仕事以外では優しくかった。店長をはじめ日本人スタッフやアルバイト仲間の留学生たちと一緒に近くの滝に行っ釣りをしたり、ブドウ狩りに連れて行ってもらったりした。

《留学後》

留学終了後自国の大学を卒業し、不動産関係の日系企業に営業アシスタントとして就職した。2年後同じ会社のビル管理の部署に移った。移った部署はあまり日本語を使うことがなかったので、半年後現在の会社に転職した。商社なので日本語を使う機会は多い。取引先は日・タイ両方で、仕事内容は日本人の上司のサポートやオフィスワークである。しばらく日本語を使わなかったの、聞いて分かって話すのに自信がない状態だ。現在N2を取るために頑張っている。

留学終了後、前の会社の仕事で一度日本に出張したが、その時東京で元留学生と元チューターなどの集まりがあり30人くらい集まった。

日本留学が現在の仕事に役だっていると思うのは、アルバイトの時に日本人と一緒に働いた経験だ。店長は仕事には厳しかったが、分からないことがある時ステップを踏んで順を追って説明してくれたので、分かりやすかった。アルバイトの経験を通して、日本人の性格がわかったと思う。また、仕事で日本人と接する時日本語を使うことが多いが、日本語を話すのに慣れていて抵抗が少ないと思う。

《留学を振り返って》

留学してよかったと思うことは、日本語がわかるようになり、いろいろな友達ができ、友達のいろいろな考え方がわかったことだ。日本語があまりできない自分と英語ができない日本人学生の両方がいろいろな方法で一生懸命説明して分かり合えるようにしていた。留学中にやり残したことはないと思う。

7.2. 考察

Pさんはタイの大学のビジネス日本語学科の4年生の時にJ1大学に1年間留学した。大学では法律やマスコミ関係のことが勉強したかったが、母親の反対で特に理由もなく日本語学科に入学した。大学では高校から日本語を学んでいる学生も多く、夏期講習を受けた程度のPさんが授業についていくのは大変だった。1年目の成績は思わしくなく、学科を変えようと思ったが、先生に相談に行くと「もう少し頑張ろう」と言われ、思いとどまった。日系企業で働きたいという気持ちがあって、そのためには日本語を上達させなければならないと思い、4年次に交換留学することを決めた。

留学当初は初めての一人暮らしでホームシックになった。言われることはわかっても自分の言いたいことがほとんど話せない状況だったので、留学当初のコミュニケーションは最も不安だった。

同じ寮に住むインドネシア人留学生などと友達になり、一緒にご飯を食べるなどしながら日本の生活に慣れていった。先輩の紹介で始めた居酒屋のアルバイトは楽しかった。アルバイト仲間のインドネシア人学生や日本人スタッフに助けられ、料理については店長に教えてもらった。また、寮のチューターなどを中心に日本人学生の友達もでき、東京にも一緒に遊びに行くなどして、コミュニケーションにも徐々に自信が持てるようになった。

2学期目は中級後半のクラスは難しかったが、同じクラスにタイ人がいたので心強かった。Pさんはこのように、留学中に留学生、日本人学生、アルバイト先のスタッフなど多くの人とよい関係を築くことができた。多くの人に助けられながら、留学中にN3に合格できた。留学中にやりたいことはやり切ったという充実感があった。

卒業後は希望どおり日本企業に就職できた。数年後移った部署の仕事が日本語を使わない仕事だったので、現在の職場に転職した。今の仕事は日本語を使う機会も多いので満足している。

Pさんは最初転学科を考えるほど日本語ができなかったが、諦めずに勉強を続け、留学という機会を得て多くの人との交流を通して日本語がより使える環境に身を置く努力をしてきた。Pさんの同級生の留学経験者はN2を取得し通訳・翻訳業務に携わっているものも多い。大学から日本語を勉強し始めたというハンディを乗り越え、Pさんもより日本語が使える仕事を目指してN2取得のため努力をしているという。

8. 留学を中断せざるを得なかった元交換留学生の留学評価

8.1. インタビュー協力者Qさん(24)のライフストーリー

《留学のきっかけと日本語学習》

子供の時からずっと日本に住みたいという夢があり、「日本に入って仕事ができるように。日本に留学すれば日本で仕事ができるんじゃないか、簡単に日本の社会に入れるかな」と考えていた。

*： どうして日本語を勉強しようと思ったんですか。

Q： それはですね、多分わかんない。それは何でかな…運命？

11歳のころから日本語の勉強を独学で始める。

Q： 一番最初は一人で勉強して、漢字とかを何回も意味も分からずに何回も書いて書いて、そんな練習をして。私の町にある図書館で日本のCDとか言語・・・日本語の本、音楽じゃなくて日本語の勉強のCDを何回も聞いて繰り返して、そういう風に勉強していました。11歳の時から。

自分で図書館に行って、CDを借りて日本語の勉強を始める。日本の歌手の音楽もよく聞いたという。日本に興味を持つ友達もいなかったの、一人で勉強を続けていた。

*： どうして11歳の時に興味もったんですか。

Q： わかんないんですね、本当に。でもおばあさんがアジア出身で、おばあちゃんを見てアジア系の言語を学びたいなと思って。初めては八歳の時中国語を勉強しようかなと思って、でも発音がすごい難しくて無理無理と思って、韓国語も一応勉強しようかなと思ったんだけど漢字のない言語だから意味がないと思ったの。

*： 漢字に興味を持ったんですか。

Q： そう、漢字に興味を持ったの。漢字にすごい興味を持って、だから中国語から日本語に移りました。

*： よく日本のアニメとかゲームを見て興味持ったっていう人がいるんだけどそうじゃなかったんですね。

Q： あまりアニメには興味がなかったんですよ、子供の時は。今は興味を持つようになったんだけどほとんどJ popとかK popとか音楽に興味を持ってたんです。自分自身Jポップスターになりたかった。

大学に入学するまで独学で日本語の勉強を続け、大学に入学した際に初級を飛び級して中級のクラスに入ることができた。大学に入学してから日本語の先生に日本への留学を勧められる。

Q： 先生が「留学してみない？」って聞いて、それは留学するきっかけ。大学の前に思うことはあまりなかったですね。留学しようかなって。ただ日本に行きたいっていう夢はあったんだけど、留学をしてみたいっていう夢はなかったです。で留学は日本に行ける方法だからやってみようと思いました。

*： どうして留学大学を選んだんですか。

Q： 安かったです。東京の方は高かったんです本当に。その東京の大学はもっと高かったから行けなかったと思う。でも（この大学を選んで）とても良かったです。今から見ても良い選択だったと思います。

*： 留学する前って不安なこととかありましたか。

Q： えっと、たぶんお金かな。どれぐらい日本語が上手く使えると言うか。理解されるかどうか自分の日本語が。それぐらいだけです。友達はあまり・・・どこにいても簡単に作れるから友達を作るかどうかそんなに不安はなかったです。

*： じゃあ生活のこととかもそんなに不安じゃなかったですか。

《留学中の生活》

留学生活はスムーズだった。特に困ったこともなく、最初から楽しい生活をおくることができた。他の留学生もいて、みんないつも一緒だったので、助け合ったりする関係があったという。

*： 最初の日本の印象とかは？

Q： きれい。田舎きれいだと思った。田舎いいねって思うようになりました。趣があって、都会と違って、言葉にはできないけど comfortable というホームみたいなすごい感じがして、自分が一生都会だったのに、何かいいね、ここはという気がしました。

都会で生まれ育ったので、田舎がいいと思った。母国の大学では寂しいと思うこともあったが、留学先では家族のようないい仲間もできて充実していたという。

*： 家族みたいだと思ったのはどうしてですか

Q： すごいみんな助けてくれました。誰でも。寮の人だけじゃなくて、街に住んでいた人もすごい優しかったです。知らない人でも知り合いになった人も。それとホームステイやったんですよね。その家族と今までもまだまだ連絡とってるんですよ。ずっとずっと。で2年前来た時もその家に泊まったんですよ、ずっと。なんかアメリカの家族よりもこっちの方がなんかすごく support? 支援? 支援してくれます。

大学の授業に関しては、少人数授業であったため、質問しやすく良かったというが、あまり印象に残っておらず、友人と遊びにいったりしたことが印象に残っている。

*： 友達は作りやすかったですか。

Q： 作りやすかった。今も友達の人が結構います。

*： どうやって友達を作りましたか。日本人ってシャイだから結構友達を作りにくかったって話を聞くんですけど、そういうことはなかったですか。

Q： なかったですね。多分びっくりさせたから日本人を。えっなんでそんなに日本語を話すのって、それですごい僕に興味を持つようになったみたいで。そういう風に友達になりました。日本人はシャイだって何回も聞いてきましたけど。実際に、私にとってシャイじゃなかったと思います。えっシャイ? そうなんですか。

*： サークルとかはどうですか。

Q： サークルは入ってないんですよ。入りたかったけど時間がないと言うか時間はあったんですけど。人数少なかったから授業で知り合った人が多い。みんな日本語学生サークルみたいな感じで。

寮の生活も、お互いが助け合う関係性が築けていた。わからないことがあればバスと一緒に乗って案内してくれたり、チューターも困ったことがあったら一緒に来てくれてサポートしてくれたという。

《東日本大震災》

東日本大震災が起きたときは東京にいた。

Q： あの怖かったです。一番最初はそんなに強くなかったんだけど、揺れ続けたほどこれはやばいと思ったので、怖かったです。でもそれまで毎日小さいぐらいの地震はよくあったからそんなに怖くなかったんだけど、長かったからちょっとやばい死ぬかもと思った。

結局東京から大学の寮に戻ることはできず、母国の所属大学の支持で帰国を余儀なくされた。

Q： 私は日本にいたかったんだけど、大学はいよいよ you have to come home というメッセージがあってとても悲しかった。

*： アメリカに帰ったのはいつですか覚えていますか。地震が起きて福島で爆発があってすぐですか。

Q： 福島事故から二日後かな。

*： どう思っていましたか。

Q： 悲しかった。日本にいたかった。日本の人は残っているのに帰らなきゃいけない。私も頑張っただけなのにいたいって言う。

*： アメリカの家族も心配していましたか。

Q： そう、お母さんがすごい心配していた。泣いていましたよ。本当に。連絡しなかったからね。生きてるかどうかわからないかどうかわからないから、すごいなんか心配だった。何回もその話を聞いてお母さんから。

《帰国後》

帰国後、突然留学が中断することになり、精神的な落ち込みが激しく大学を退学したという。

Q： なんか自分の夢が崩れてゆく。で、自分自身何もできない。ここまで頑張っただけなのに、途中で・・・powerless. 何も何もできないという、頑張っても頑張っても何もできないという感じがすごかった。

今はアメリカのオーガニックを扱うスーパーでアルバイトをしている。日本に来て仕事をする夢はあり、数年前に来日した。仕事は見つけることができたが、大学を卒業していないためビザの取得が難しく、正式な雇用には至らなかった。ただ、今でも日本で働きたいという夢はもっている。

*： 将来日本で仕事をしたいというのは思っていますか。

Q： そうです。思ってます。日本に住みたい。その夢はまだ生きています。今はアルバイトをしてお金を貯めて、そういうプランがあります。

*： 全体として留学経験は今どう考えていますか。

Q： 一生で一番良かったことかなと思っています。一番楽しかった時期だと思います。今も思っています。今も感謝しています。経験ができたから。

*： 経験ができたことは今の生活に影響がありますか考え方とか生活とか。

Q： そうですね。日本だけじゃなくて色々な国に興味を持つようになって、旅行したい世界を。

ヨーロッパとかもいろんな人と出会って友達になりたいと言う。

*： 留学して考え方は変わりましたか。

Q： 考え方はあんまり変わらなかったけど、自分の思っていることがなんか何て言うか…証明しました。どこに行っても人間は人間、人は人という。前からも思っていたんだけど日本に行ってから確実に became human.

*： 留学を振り返って行ってよかったなっていうことありますか。

Q： 全部。あ、地震以外。

*： 地震の事は今どう思いますか。地震や福島のことは今。

Q： え〜と、ちょっと苦いけど苦くても、自分が夢を果たせるために何でもできる、頑張れば。何ていうか、諦めずに落ち込んで、立ち上がって、いきいきと人と。なんていうか。本当に言葉が出てこないけど、人は人生で何が起るか分からないから、ハッピーに笑っていた方がいい。もしハッピーで笑って、人に対して親切にしていたら、乗り越えることができる。どんな大変なことが起るか誰も分からないから。希望がある。そんな人にもつ

ともっと進化したい。どんなことがあっても前を向いて、元気な人でいたい。

3年間の気分が落ち込んだ時期を経験した。「私は家族がお金がないから・・・すごい貧乏。お金持ちの家族から来てないから自分の働きだけでそこまで行ったんだからそんなに早く全部が崩れてゆくのが、それを見るのがつらかったです」と述べた。しかし、困難な時期を乗り越えたからこそ、強くなったという。最後に「今は落ち込んでないです」と明るく答えてくれた。

8.2. 考察

Qさんの語りについて考察する。Qさんは幼いころから日本語や日本に対してあこがれを持っていた。経済的に苦しい状況であるにもかかわらず図書館に行って本やCDを借りるなど、独学で日本語を学び、日本で働くという夢に向かって努力してきた。その努力の甲斐があり、アメリカの大学では中級日本語の授業から始められるほどの日本語能力を有していた。交換留学生として日本の大学に留学後も、日本語学習も人間関係の構築も非常にうまくいっており、大学内外の日本人とも「家族のような」関係性を持つことができたと述べている。幼いころからの夢がかない、非常に満足した留學生活を送っていた。

しかしながら、留学1学期目が終わった時期に、東日本大震災が発生し強制的に帰国させられることとなる。順調で充実した留學生活を送っていただけに、Qさんは精神的に非常に大きなショックをうけた。地震を経験したこと、その後日本にいる友達と別れることを余儀なくされたこと、子供の時から夢に向かって努力してきたことがあと少しのところまで中断せざるを得なかったこと、また日本の大学で取得予定だった単位も取得できなかったこと、精神的にも経済的にも大きな影響を受けた。

Qさんは約3年間にわたり精神的な落ち込みがあり苦しんでいたが周囲のサポートもあり徐々に前向きになり現在は元気に働いている。Qさんにとって留學経験は夢がかなった経験であると同時に夢を奪われた経験でもあった。困難を乗り越えた今、Qさんは留學経験を自分を成長させてくれた貴重な経験として前向きにとらえていることが明らかとなった。

第四章 日本国内で活動する元正規留学生の留学評価

国の政策として外国人留学生の受け入れ拡大を目指すなかで、大学においても様々な留学プログラムが用意され、留学生の多様化が進んでいる。英語で学ぶプログラムも増えており、日本に留学していても必ずしも日本語能力向上が伴うわけではない。また、以前は留学期間が終了すれば母国に帰るケースが多かったが、近年では日本で就職し、長期間日本で就労し生活するケースも増加している。

少子化に伴い労働力人口が減少する日本において外国人は貴重な人材であり、その中でも日本の教育制度の中で学んだ経験を持つ「元留学生」に対する期待は大きく、今後ますます元留学生の活躍や参加の場は広がっていくことが予想される。

本章では、日本の大学院の英語プログラムで学び、博士号を取得後、現在は研究者として日本で生活するアジア出身の元留学生夫婦にライフストーリー・インタビューを行い、人生における留学の意義、留学生活における日本語学習と使用、留学終了後の日本との関係に焦点をあてて、分析と考察を行う。

1. インタビュー協力者 A さん (25) の留学評価

1.1. A さんの略歴

協力者の A さんはアジア出身の理系の研究者で、国費留学生として来日した。来日直後の 4 カ月間は地方国立大学で日本語を集中的に学び、その後同大学の博士課程で博士号を取得する。博士号取得後は母国の大学に勤務し、その後別のアジアの国で 1 年半在外研究を行った。インタビューの約 1 年半前に来日し、再び日本で研究者として生活している。

1.2. A さんの語り

《留学以前》

A さんは留学以前に母国の大学で修士号を取得し、母国の大学で研究者として教壇に立っていた。博士号を取得したいと思い、日本の様々な大学にメールをだして、受け入れ大学を探していた。その際、A さんの専門の分野で著名なある教員から返事をもらい、日本の地方国立大学（以下 J1 大学）に留学することを決めた。

*：日本に来ようと思ったのはどうしてですか。

A：日本のいろいろな大学にインタレストレターを出して、その時、J1 大学の先生から。その先生は（研究分野）の有名な先生です。先生にリサーチプランをだした。先生は OK。

*：それは世界中の先生に出したんですか。日本の先生に出したんですか。

A：日本の大学に。私の大学に多くの先生は、後期課程を日本でしています。日本には進んだ設備や実験施設もあり、いい研究がされています。最優先は日本です。

*：その時、日本語は勉強しましたか。

A：いいえ、全然。J1 大学に来て、初めて日本語を勉強しました。

* : 日本に来る前に、日本語はいるとっていましたか。

A : 英語で大丈夫だと思っていました。日本語は全然勉強しませんでした。

英語プログラムで学ぶため、特に日本語は必要ないと考えていた。また、留学前の日本のイメージについて聞いたところ、子供の時に見たドラマ「おしん」のイメージがあったという。まだみんな着物を着ていると思っていたという。

《留学中の日本語習得》

来日直後の4か月間、日本語を入門レベルから集中的に学んだ。その期間は月曜日から金曜日までは日本語を学び、週末は研究室のある別キャンパスに通って研究を行う生活を送った。日本語を学んでいるときの様子を以下のように振り返っている。

* : 日本にきて、「あいうえお」から勉強しましたね。どうでしたか。

A : 楽しかったです。・・・クラスで勉強して、後で部屋で勉強しました。私のチューターと時々話しました。

* : そこでの生活はどうでしたか。

A : とてもよかった。その時、リサーチのプレッシャーがない。毎日、日本語クラスの友達といっしょにいろいろなところに行きました。プレッシャーがないので楽しかった。でも土曜日と日曜日は研究室に行きました。

日本人学生との交流に関して、聞いたところ、「あまり」という回答だった。日本人チューターとの交流はあったが、ほかの学生とはほとんど交流がなかったようである。地域の人との交流に関しては、大学の行事として行っている週末ホームステイで知り合った家族との交流があり、衣類などを譲り受けたり、博物館に連れて行ってもらったりして、現在も交流があるという。

日本に来たばかりの時に、何か困ったことがあったか聞いたところ、自転車のパーキングのことで些細な問題があったぐらいで、後は no problem とのことだった。チューターや指導教員、同国人の留学生の助けをかりるなど、うまくサポートを得ていたようである。

《博士後期課程の生活》

4か月集中的に日本語を学んだあとは、日本語の授業は履修しておらず、クラスで日本語を学ぶことはなかった。日本語の使用に関して以下のように語っている。

* : いつ誰と日本語で話しましたか。

A : Lab members。日本語でときどき、たいてい英語。

* : 先生とは？

A : 英語。研究には日本語はいらない。クラスも全部英語の授業。これは英語のプログラムなので。

* : もっと日本語を勉強しようと思いましたが。それとも、もう日本語はいい？

A : Lab のプレッシャー。リサーチがターゲットだから。

* : 何かしましたか。日本語を維持するために。

A : 私は勉強したので、ひらがなカタカナは大丈夫でわかります。漢字は難しい。テレビを見ました。日本語のテレビを見ました。

* : Lab のクラスの人はどうでしたか。

A : 大丈夫でした。私の研究の始めの時、日本人が協力的に教えてくれた。英語でコミュニ

ケーション大丈夫です。今もコミュニケーション、ときどき(当時の学生が)大学に来ます。

*： 日本語ができなくて、大変だったことはあまりないですか。

A： 日本語ができるといいです。できないと少し、でも今は大丈夫です。少しだけ話します。

《留学後の日本との関わり》

Aさんは日本の大学で無事博士号を取得し、母国の大学に戻り、教える。日本との関わりについて聞いたところ以下のような回答であった。

A： 私の先生(日本の大学の指導教員)とメールでコンタクトしました。リサーチペーパーとか。日本の別の大学の post doctoral が私の国に来ました。一緒にリサーチしました。

帰国後も日本の指導教員と研究上のつながりがあり、連絡を取っていた。また、日本の他大学の研究者が来た際も合同研究をしている。これらの合同研究に関わる言語はすべて英語で、コミュニケーションについて聞いたところ、「英語で大丈夫。英語は上手です。」ということであった。また、妻であるBさんが日本に留学しているため、長期の休暇に日本を訪れている。アジアの別の国で約1年半博士研究員として研究した。

《現在の日本での生活》

インタビューを行った時点から約1年半前に日本の母校であるJ1大学に戻り、研究者として在籍している。Bさんも日本の大学で博士号を取得し、夫婦共にJ1大学で研究者として生活している。子供が生まれ、3人で大学近くのアパートで生活している。

A： 以前に比べて、家族と一緒に住んでいるのでそれはいいです。同じアパートに住む人ともいい交流があります。子供を見に来てくれたりする。アパートのそばに誰も利用していない土地があって、野菜を作っている。トマト、じゃがいも、それを近所の人にあげている。

近所の人もよく何かくれる。

*： それはいいですね。その時は日本語を話しますか。

A： はいはい。

*： お子さんは保育園ですか。

A： プライベート保育園。毎日保育園に行きます。朝と夜、9時から5時半ぐらい。その時、保育園の先生と日本語で話します。・・・今日は大丈夫ですか。何を食べましたか。飲みましたか。何時まで寝ました。

保育園の先生とは送迎時に話すだけでなく、毎日の様子に関する連絡なども日本語でノートに書いて行っているという。

《日本での留学を振り返って》

日本での勉強、研究、日本語の習得などに関して振り返ってもらった。

A： 博士課程の時は、目標があった。論文や研究を完成させなければならない。そのプレッシャーがありました。でも、研究はシステムチックで、問題なくそれができた。帰国後やポスドクでの研究も日本での経験を活かすことができたのでよかった。

*： 研究面では日本語はいらなくても、それはどうでしたか。

A： 日本語はできたほうがいい。新しい技術や分析方法を学びたい。日本人学生は日本語ではうまく説明できるけど、英語では情報が抜けることがある。

- * : Aさんは半年日本語を集中的に勉強したけれど、それはどうでしたか。
- A : とても役に立ちました。時々日本人の学生と日本語で話せたり、日常生活では、買い物に行ったり、どこかに行ったり、場所を見つけたりしたいとき、とても重要です。
- * : じゃあ半年の日本語集中は役に立ったんですね。
- A : はい、もちろんそうです。もしどこかに行きたかったら、「すみません。私は東京に行きます。どうやって行きますか。上野から京浜東北線……大丈夫です。」

Aさんの場合は、3年間のうちの最初の1学期分を日本語の勉強に充てている。その期間も土日は研究室に通い研究をしていたが、実質2年半で博士号取得のための研究や論文を仕上げるというスケジュールだった。日本の来日前から指導教員の先生と日本語学習を含めた研究計画を立て、無事3年で終了している。日本語学習について聞いた。

- A¹ : *日本語を勉強するいい点は日本語がどんな言語か理解できて、日常生活が送りがやすくなります。私が受けた日本語授業はすごく役に立ちました。日本人と会話することができます。必要なことや手伝ってほしいことが言えます。でも日本語を勉強していない人にとっては難しいです。悪い点は、日本語を勉強していると、研究に集中できないことです。*

2. インタビュー協力者 B さん (26) の留学評価

2.1. B さんの略歴

BさんもAさんと同じ国の南アジア出身で、同国の大学で修士号を取得したあと、Aさんに1年遅れて日本に留学する。Bさんが留学した大学(以下J7大学)は大規模な国立大学でグローバル化も進んでいる。Bさんは5年間一貫の博士課程で学び、理系分野で博士号を取得する。博士号取得後J7大学に研究者としてしばらく残りその後、母国に戻る。約半年後Aさんと共に来日し、J1大学で研究者として研究を行っている。

2.2. B さんの語り

《留学以前》

修士号を取得した後、海外の大学で勉強を続けたいと考え、自分の研究に合った大学を探していた。その際、Bさんの先輩や先生の多くが日本で博士号を取得していたことから、Bさんも日本への留学を考えるようになる。国の日本大使館の教育アドバイザーと話して、日本についての話を聞き、気持ちを強くする。

- * : *語学の心配のないアメリカの大学とかは考えなかったんですか。*
- B : *J7大学での授業は全て英語なので、自分に合っていると思いました。それに日本語にも興味がありました。*
- * : *日本に行く前に心配や不安はなかったですか。*
- B : *私の先輩や先生から、特に女性にとって日本は最も安全な国なので、心配しなくてもいいと聞きました。日本大使館の教育アドバイザーからも日本の文化やいろいろなことなど、何も心配いらないと聞きました。もしあなたがコミュニケーションを取りたいなら、日本人はいつでも手伝ってくれます。*

¹ 斜体部分は英語で話したものを調査者が翻訳した。

* : 日本に関するイメージがありましたか。

B : 着物を着ているイメージでした。着物は伝統的なものではなくて、普段着だと思っていました。私の国で毎日着る伝統服のように。私も着物を着ないといけないと思っていました。でも J7 大学のウェブサイトを見て、普通の服を着ていることを知りました。

B さんが日本を留学先として選んだのは夫である A さんがすでに来日しているということもあろうが、研究者として、特に女性研究者として最適な留学先であると判断し、自分の研究分野を学ぶのに適したプログラムがあることから J7 大学を選択した。B さんの留学に際し、A さんからは「結婚しているからといって、自分がしたいことができないということはない、自分の道を進めばいい、助けが必要な時は助けてあげられる」との助言があったという。

《留学中の日本語学習とコミュニケーション》

B さんは J7 大学の 5 年間一貫のプログラムで学生生活を始める。そのプログラムは英語によるプログラムで最初の 1 年間は週 1 コマの日本語の授業が必修科目となっていた。日本語クラスは同じプログラムで学ぶ留学生十数名が履修しており、最初の学期では日常生活に必要な日本語、ひらがな、カタカナを、2 学期目には文法を学んだという。

* : 日本語のクラスはどうでしたか。

B : 役に立ちました。日本に来た時、日本語を一言も知らなかったのです。

* : 大変でしたか。日本に来た時。

B : 1 か月と 2 か月は大変でした。スーパーマーケットに行ったとき、何もしゃべらない。でも Pick and pay は大丈夫。でも手紙をもらった時、わからなかった。

* : 誰が助けてくれましたか。手伝ってくれましたか。

B : 日本語の先生。チューター。研究室の中の人が手伝ってくれました。

B さんが 1 年次に履修した日本語のクラスは役に立ったという。もし機会があったらもっと日本語を勉強したかったか聞いたところ、勉強はしたかったが、研究室がとても厳しく忙しかったため、時間を割くことができなかったと述べている。また、指導教員から、他の研究室の学生が英語を話せるようになるように、英語を教えてほしいと頼まれ、英語でコミュニケーションをとっていた。

B さんがいた研究室は 35 名中、10 名が留学生で残りが日本人学生だったという。

* : 25 人日本人学生がいたんですね。

B : そうです。でも彼らは留学生とのコミュニケーションにとってもシャイでした。でもときどき、研究室の実験のために話さないといけない。

* : コミュニケーションをとるとき、英語で話しましたか。

B : 日本語で話し始めたけど、日本人学生は英語を話したがった。それと、スマホがあったから、日本人が日本語で言って、グーグル翻訳で翻訳して、「このことが言いたい」と言って、見せてくれた。

* : ある意味日本語は必要なかったんですね。

B : そうじゃないです。もちろん必要です。機械のマニュアルはほとんど日本語でわからないときは、英語でもう一度説明してくれます。

週に 1 コマの授業でできることは限られるが、日本語のクラスは役に立ったようである。しか

し、授業が英語であったこと、周りの日本人学生の英語力は比較的高く、英語を練習したいと考える学生や、英語を練習させたいと思う教員の意向があったことなど日本語を話す機会は多くなかったようである。またグーグル翻訳を使って意思の疎通を図るなどテクノロジーを上手く利用している。

それでもやはり日本語は必要と感じたようである。

《日本人や地域との交流》

交友関係に関して聞いたところ、特に問題はなかったという。大きな大学で留学生の数も多く、日本人学生も英語と日本語の両方でコミュニケーションをとることができたため、特に問題は感じなかった。J7大学の学生との交流に関しては、大学のイベントを通じて日本人学生と知り合ったようである。

*： どうやって日本人学生と友達になりましたか。

B： インターナショナル・スチューデントクラブや英語カフェで。英語カフェは月に2回ありました。大学のメールでそのプログラムを知りました。基本的には日本人学生がプログラムを企画して、留学生が参加します。もちろん無料で、お茶をしながら話しました。

そこで知り合った日本人学生と英語や日本語で会話したり、一緒に出掛けたりしたという。また、大学が地域の人をホストファミリーとして紹介する制度も利用して、日本人女性との交流があった。

B： ホストファミリーがいました。彼女は忙しかったけど、よく手伝ってくれました。私が別のアパートに引っ越さなければいけなかった時、手伝ってくれました。

*： ホストファミリーと何をしましたか。

B： まず、私と話に来てくれました。時々、私の家で料理を作ってあげたり、公園に座って話したり、日本料理を作ってきてくれたりしました。・・・すごくいいプログラムでした。茶道やひな祭りなどたくさんの日本文化を彼らを通じて学びました。

1年生の時に紹介されて、5年間交流が続き、今も連絡を取っているという。Aさんからホストファミリーとの関係について話を聞いていたため、大学からホストファミリー紹介の知らせがあったとき、迷うことなく申し込んだという。また、歯の診察の際に歯科医師の先生とも親しくなり、週に1回歯科医やそのスタッフに英語を教えるなど、多忙な中でも地域の人との交流も行っている。

《留学を振り返って》

BさんはJ7大学で大学院生として約5年間、J1大学で研究者として約2年間生活し、二つの大学の違いについても語っている。

B： J7大学ではもっと英語を使いました。でもJ1大学では日本人学生は日本語で話したがりです。だから日本人学生は私ができるようにやさしい日本語を話してくれます。J1大学では日本人の学生が多いです。

*： J1大学とJ7大学では学生は違いますか。

B： J1大学の学生たちはもっとやさしい。

また、J1大学では英語ができる事務職員が限られているため、他の事務の人ともやさしい日本語で話す必要がある。さらに、現在では子育てでも日本語が必要なため、日本語を話すことも多い。保育園の先生とのコミュニケーションは日本語で行い、LINEを使って連絡を取ることもあると

いう。また出産の際にお世話になった病院スタッフとも交流があり、研究以外の人間関係で日本語を話す機会が増えている。

現在は Aさんと子供と共に日本に暮らし、J1大学の研究者として研究に従事しているが、それまではお互いに研究者として別々の大学で学び研究を続けてきた。結婚と研究生活との両立について聞いたところ、結婚して長い間夫婦別々に暮らすのは Bさんの国では珍しいケースで、親や友人からの心配の声もあったという。研究を優先させる時期と家族での生活を優先させる時期とを考え、現在があると振り返っている。現在、Bさんは Aさんと日本に残る可能性も含めて検討しているが、日本での生活や仕事に関して以下のように述べている。

B： 日本のシステムや環境が好きです。とても快適です。日本語はあまり上手じゃないけれど、もし仕事や機会があれば日本にもっといきたいです。

最後に日本で研究がしたいという人がいたら、Bさんならどんなアドバイスをするか聞いたところ、「私がしてもらったアドバイスと同じアドバイスをします。何も心配しないで日本に行くといい。特に女性にとってとてもいい環境です」と語っていた。

3. 考察

2人は同じ出身国で同じ理系分野の研究者であり、博士号を取得するために日本の大学で学んだ。

2人に共通する点としては、自身の留学評価において博士号取得とその後の研究成果が大きな指標となっていることである。2人とも留学期間中は博士号の取得と研究の成功が最大の目標であり、その目標を達成するためにプレッシャーを感じていたと振り返っている。予定通り博士号を取得でき、大学院在学中に行った研究がその後の研究にも繋がっている点を高く評価している。

大学のカリキュラムの違いにより、Aさんは1学期の日本語集中授業を受け、Bさんは週1コマの日本語授業を1年間受講した。どちらの大学も英語プログラムであり、授業や研究は基本的には日本語を必要としない。しかしAさんが学んだJ1大学は留学生数も少なく、日本人学生も日本語で話そうとするなど、より日本語が必要な状況であったことが窺える。インタビューも大半は日本語での受け答えであった。一方でBさんは日本語の授業数も限られており、留学生も多く、日本人学生も英語と日本語の切り替えが容易にできる環境で過ごした。J1大学に移ってから日本語を話すことが増えたと述べていたが、「日本語はあまり上手じゃない」という自己評価であった。また、日本人学生と正確な情報共有が必要な際に、コミュニケーションツールとしてスマホで翻訳アプリを利用して相互の意思疎通を図っている。テクノロジーの発展とともに、日本語でのコミュニケーションの方法も変化しつつあることが明らかになった。しかし、アプリの助けがあっても日本語は様々な場面で必要であり、留学初期に日本語を学べたことは役に立ったと2人とも述べている。J7大学の場合は、1年間の日本語授業を必修としているが、近年英語によるプログラムが増え、日本語を全く学ばずに日本での留学生活を送るケースも増えている。特に理系の分野で博士号取得を目的として留学する場合は、AさんやBさんの語りにもあるように、研究が最重要であり、Aさんが「日本語を勉強していると、研究に集中できないこと」と述べているように、研究と日本語学習の両立は時間的にも困難である。だからこそ、カリキュラムとして比較的負担の軽い初年次に日本語授業を組み込むことは留学生生活全般のために重要ではないかと考える。Bさんに「誰が助けてくれたか」聞いたところ、「日本語の先生」が最初に挙げた回答であった。何か問題が生じたときや留学直後の困ったときに、指導教員以外にも留学生がより多くの大学との繋がりを持つ

ていることが重要であろう。日本人との交流に関して、日本語が話せることが日本人との交流に重要な役割を果たしたという報告も多いが（池田・八若 2016、2017、佐藤 2013、中山 2011、三代 2009）、B さんの場合、言語に関係なく日本語や英語をその場に応じて使い分けながら良好な交友関係を築いている。B さんが学んだ大学が大規模大学で、大都市にあり、英語ができる日本人が比較的多い環境であったことも影響していると推測されるが、さらに重要な点は、B さんのコミュニケーションを取りたいという姿勢であろう。B さんが留学前に「もしあなたがコミュニケーションを取りたいなら、日本人はいつでも手伝ってくれる」と言われたことを語っているが、積極的に日本人との交流の機会に参加し、時間的な制約のある中でも、交流を継続する努力をしている。中山（2007）は留学生と日本人の友人との社会的ネットワークは「互恵的」という特徴があると述べているが、B さんも英語を教えたり、国の料理を作ったりするなど、B さんが提供できることを積極的に提供しながら良好な関係を維持してきたと言えよう。

また、日本人学生や地域との交流に大学が提供したプログラムが重要な役割を果たしていることが明らかとなった。A さんも B さんも大学主催のホストファミリープログラムに参加し、その後も家族と一緒に出かけたり、料理を作ったりと、大切な地域との繋がりになっており、ホストファミリーを通じて日本文化を学んだと振り返っている。そして 10 年近くたった現在でも連絡を取り続けている。三代（2009）はコミュニティへの参加が留学生にとって非常に重要な役割を果たしていることに注目し、「国や言語の境界を越えたコミュニティをいかに築いていくかという視点からカリキュラムは見直されるべきだ」と主張している。今回の調査でもコミュニティ形成支援の重要性が再確認される結果となった。現在、A さんと B さんは協力しながら、子育てと研究の両立を図っている。家族で日本に住み、出産や子育てをしながら研究生活を継続するためには、さまざまな人のサポートが不可欠である。特に地方都市では、英語ができる病院や保育園を選ぶことは難しく、日本語でのコミュニケーションが不可欠となる。A さん B さん夫婦も、病院スタッフ、保育園の先生、近所の人など、日本語でコミュニケーションを取る機会が以前よりも増えているという。研究者にとって必要な言語は英語であるが、日本での研究生活を継続するためには、生活者として日本語でコミュニケーションを取ることもますます必要になる。留学期間終了後も日本で生活する留学生が増えるなか、日本社会との長期的な関係性構築も視野に入れながら、当事者の多様な声に耳を傾け、どのような日本語教育や留学生支援が求められるのか考えていく必要がある。

第五章 出身国の大学教員となった元正規留学生の留学評価

1. 修士・博士課程に留学したインドネシア人大学教員の留学評価

留学生受入拡大のため、前章の例のように博士課程を中心に英語で学位が取得できるコースや英語による授業の提供などが増え、日本語を学習しない留学生も増えてきている。しかし、修士課程の授業は日本語で行われる場合がまだ多い。本節では、修士課程の授業を日本語で受けた経験を持ち、博士の学位取得まで約5年半の留学生活をおくったインドネシアの大学教員4名の留学評価を研究成果と人的ネットワーク構築の視点から検討する。さらに、5年半の留学生活において日本語をどのように学び、日本語使用がどのような役割を果たしていたのかに焦点をあてて分析し、留学評価との関連を明らかにする。

1.1. インドネシアの元留学生に関する先行研究

インドネシアの元留学生の留学について近年の代表的な研究として、佐藤（2010）の量的研究と有川（2016）の長期的な質的研究が挙げられる。

佐藤は、20世紀後半の日本の留学生政策について「留学生送出国の人材養成」と「日本との友好促進」という目標の達成状況と留学生がもたらす経済便益について実証的分析を行った。その中で、インドネシアを取り上げ、1951年～1999年来日の元留学生を対象とした質問紙による追跡調査を行い、452名からの回答を米国留学者と非留学者と比較の上、分析している。その結果、人材養成については、日本留学者は留学中の教育環境に概ね満足し勉学意欲が高いが、日本語による講義や教材の理解が十分にできない者が存在しており、日本語能力が高いほど教育環境への満足度が高いという結果を得ている。友好促進については、日本語能力が高いほど留学への満足度が高く、学外の友人作りや帰国後の友人関係の継続も活発に行われる傾向があるとしている。このように、全体的な傾向として日本語能力が留学に対する満足度に少なからず影響することが示唆されている。

有川は、留学生教育研究では、留学中の留学生自身の勉学や生活の問題だけでなく、多角的、長期的観点から留学生の世界を捉えることが重要であるとし、留学中から留学後の20年にわたる調査によってインドネシア人留学生の文化修得プロセスの解明を試みた。有川によれば、インドネシアの大学教員の日本留学は奨学金なしでは難しく、現職教員の多くは国費の研究留学生として留学し、復職の義務が課せられており、博士号取得が重要な意味を持つ。留学中の調査では、指導教員をはじめとする研究室コミュニティ、諸手続き、家族、日常生活など、個々の留学生を取り巻く諸問題を描出した。留学後の追跡調査では、帰国直後はインドネシア不在だったことによるハンディを感じていたが、15年経過後は「自信の獲得」「教育研究システムの活用」など日本留学に感じる意義に変化が見られたことなどを明らかにした。しかし、日本語によるコミュニケーションの問題は留学生の研究についての研究体制や方法と密接に関わるとしながら、大きくは取り上げられていない。

1.2. インタビュー協力者の略歴

2019年11月に、インドネシアの大学教員で日本留学終了後7～9年経過した元留学生4名にライフストーリー・インタビューを行った。日本語以外で話された内容は第一著者・第二著者で翻訳した。また、個人や場所が特定されるような固有名詞は一般名詞や記号にした。

本研究のインタビュー協力者4名の略歴を表1にまとめた。

表1 インタビュー協力者の略歴及び日本語学習歴

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
留学前の経歴	I4 大学卒業後日本留学。	I3 大学卒業後、同大学の助手を経て講師。	I2 大学卒業後、一般企業に就職（1年）。研究所に転職（2年）。I2 大学の助手に転職。	I3 大学卒業後、日本留学
日本の留学先	J4 大学（工学）	J1 大学（農学）	J1 大学（農学）	J1 大学（農学）
留学後の経歴	中東の大学客員講師（3か月） J4 大学 JSPS 特別研究員（2年）同大学助教（1年）、I1 大学講師	I3 大学講師	I2 大学講師	I3 大学講師
日本語学習歴	来日後独学	来日前半年（週3回）、来日後日本語集中コース（1学期・週17コマ）、日本語補講、地域の日本語教室	来日前1か月、来日後日本語集中コース（1学期・週10コマ）	来日前1年間プライベート授業、来日後日本語集中コース（1学期・週6コマ程度）
インタビューの使用言語	日本語	英語（日本語を交えて）	英語（日本語を交えて）、インドネシア語（研究協力者が通訳）	英語（日本語を交えて）

1.3. インタビュー協力者のライフストーリー

1.3.1. Aさん（27）の語り

《留学のきっかけと日本語学習》

日本の大学で働いていた人から J4 大学の修士課程への留学を勧められ、大学から奨学金の支援もあると聞いて、研究生として同大学に留学した。

日本についてはほとんど何も知らず、日本語は全くできない状態で来日したが、3か月後に大学院の入学試験を受けなければならなかった。入学試験の問題は日本語で出題されるので日本語を学習する必要があった。指導教員は厳しく、入学試験に合格できなかったら母国の大学院に行くように言われた。

入学試験のためには漢字 800 字程度を 3 か月で覚える必要があると指導教育から言われた。学内で日本語教育を行っているセンターに相談したが、習熟度別コースで、A さんのようなニーズへの対応は無理だと断られた。

数日間どうやって日本語の勉強ができるか考えたが、周りも無理だということで、ストレスがたまり、帰りたいたいという思いで母親に連絡をとった。「帰ったらここで何をしますか」、「ここにもし仕事が無かったら、どうしますか」、「日本で頑張る」と言われ、頑張るしかないと思いなおした。

そこで、インドネシアの友人に聞いた「毎日漢字 5 字を 20 回くらい書いて覚える」という覚え方を試してみた。1 週間くらい続けてみたが、1 日目の漢字を忘れていたことがわかり、諦めた。

そして、再び自分で考えて「イマジネーション」を使って覚えることにし、この方法で短期間に漢字 800 字の意味がだいたい分かるようになった。

しかし、工学で使う言葉は日常で使われている言葉とは違うので、さらにどう勉強したらよいかを考えた。周りにインドネシア人はおらず、工学系の辞書もなかった。工学部にはマレーシアからの学部留学生在がいて、言語が似ていることから工学関係の専門用語についてはいろいろ教えてもらった。

試験問題を読む時は、日本語は文末に動詞があるので句点を探して文末から読んでいくという方法を使った。解答は主に数式なので、問題の指示がわかれば解答できると考えた。試験には無事合格できた。驚くことに受験者の中で上位の成績だったということで、指導教員が国費留学生に推薦してくれることとなった。

入学試験後、日常会話の上達のためアルバイトを始めた。昼間は研究が忙しかったため、週に 1 回コンビニ向けの弁当を作る工場で、弁当を詰めるアルバイトを約 2 か月した。そこで、食べ物の名前を始め生活に必要な日本語を学んだ。

工場の仕事は大変だったのでやめ、友達の紹介で国際協力機関の宿泊施設でハウスキーピングのアルバイトを始めた。大学院に入ってから国費留学生として奨学金を受けたが、日本語会話上達のため、このアルバイトを土曜日と日曜日に、大学院修了まで続けた。ほとんどがパートの人だったが、ここでの会話を通して生活全般についての日本語を身につけることができた。文法は自分で勉強したが、日本人に聞いて、教えてもらったこともある。

大学院では入学式の次の日から授業が始まった。授業は日本語で、全く分からなかった。次の日も同じだったが、聞かなければいけないと思い、一番前に座って頑張って聞いた。今のようにスマホを使って、言葉の意味を調べたり録音したりできなかった。電子辞書も高くて買えなかった。そこで、次の週からノートに先生のいうことをすべてローマ字で書きとった。漢字では時間がかかるが、インドネシア語はアルファベットなのでローマ字は速く書けたからだ。このようにして自分にしかわからないノートができ、次第に授業内容がわかるようになった。この方法を修士課程の 2 年間続けた。

指導教員はアメリカ留学経験があって英語は堪能であったが、A さんに対しては日本語で話した。

A : で、やっぱり先生がいつも日本語で話しますよね、前は。

* : はい、はい、はい。

A : なぜなら、「私、もし英語だったら、あなたの日本語はアップグレードはできないので。ですから私、全部、日本語」。

研究室では皆忙しく、あまり話す機会はなかった。A さんには、日本に留学したからには「日本語ができなかったら意味がない」、日本語はプラス α になる「お土産」という考えがあったので、日本語を身につけたかった。バイトは日本語を使って身につけるための手段でもあった。日本語を身につけるため、留学生寮には入らず、民間のアパートに住んだ。

A : (留学生寮では日本語を) 時々使わないです。ですから私も本当はですね、もしインターナショナルな人が一緒にいたら、日本の文化とか、日本のことは勉強することができない。ですから私、全部日本人と一緒に。

このように A さんが自分で工夫して日本語学習に取り組んだのは「プレッシャーから」で、大変だったが「今はもういい memory になった」。

《留学中の研究・学修》

修士課程では授業で先生が日本語で話すことをローマ字で書き留めるという方法で勉強し、授業内容が理解できるようになった。修士論文は英語で書いた。博士課程の入学試験を受けることになったが、英語も日本語もわかり、問題なく合格できた。「ですから no memory ですね。」と A さんは振り返った。卒業式で、ベストマスターとして賞を受けたのは、いい思い出だ。

博士課程に入った時、指導教員に「ドクターは何カ月間ぐらい卒業までありますか。」と聞かれ、「36 か月」と答えると、「引く 6 か月」と言われた。最後の半年は中間審査や最終審査、事務手続きなどがあるので、30 か月で博士論文を仕上げるようにとのことであった。30 か月ということは「30 本の論文が書ける」と言われたので、「どうやって私、やりますか」と聞いても「私に聞かないで」「自分で考えて」という答えが返って来た。

A： 「分からないよ」と、私も先生にいつも言ったんですけど、もし英語とか聞いたら、私の先生がいつも言うのは「私は日本人です。英語はできないので自分で考えて」。

*： 考えてって？ えー。

A： それで私も毎日、頑張って、3 年間で頑張りました。

A さんは卒業までに 13 本の論文を書き、発表も多数行った。

指導教員は研究姿勢についても厳しかった。

A： 病気、ごめんなさい、ちょっと今日は病気ですから、風邪とかだったら、家で少し寝るんで大丈夫ですかって（先生に聞くと）。

*： はい、はい、はい。

A： で、先生が、「もし休みだったら OK ですけど、でも目が痛いですか？」（A さんが）「痛くないです」と。そして（先生が）「手が痛いですか」（と聞いて、私が）「痛くないです」（と答えた）。（先生が）「ですから論文とか読むことができるんじゃないですか」。

指導教員の厳しさは今ではいい思い出となっており、今でも病気の時も頑張らないといけないという気持ちがある。

A さんが研究業績を増やすことに力を注いだのは指導教員の厳しさだけでなく、日本の大学院を修了したら「アメリカで研究する」という夢があったこともある。

A： ですからアメリカ渡るために、私は論文がいっぱい書かないといけないし、賞もいっぱいもらわないといけないし、私は上手に研究できないといけない。

*： はい。計画を立ててね。

A： もしこれができないんだったら、もう私何にもできない。インドネシアも帰ることができない。日本でも仕事も探せない。探しても無理です。

在学中に大阪の会社から賞を受けた。「無理かな」と思っていたが、指導教員に「頑張っておしえてください」と言われて受けた日本学術振興会（JSPS）の試験に合格し、卒業後特別研究員として J4 大学で働くことになった。

《人間関係》

指導教員は厳しかったが、関係は良好だった。

A：先生は私、いつもラストサムライと言ったんですけど。

*：ラストサムライですか。

A：なぜなら最後の学生ですから。で、留学生で私が最後ですから。でも次がいるんですけど、でも。

*：もう最後まで面倒、見れないという感じ。

A：で、あなたに特別しないといけないと言ったんです。

指導教員は退職したので共同研究などはできないが、時々Eメールで連絡を取り合っている。

研究室の友人も優しかった。皆忙しく、よく話したというわけではないが、今でも連絡を取り合う友人もいる。自分たちの世代は現在のようにSNSでの交流が盛んではなかった。研究生の頃お世話になったマレーシア人留学生と連絡が取りたいが、連絡手段がないのが残念だ。

アパートの大家さんには優しくしてもらった。また、アルバイト先の宿泊施設のパート従業員達との会話を通して日本での生活について学び、日本語の上達にもつながったので、感謝している。会いたいと思っている。

《大学院修了後》

博士課程修了後、オファーがあった中東の大学で客員講師として3か月働いた。その後JSPSの特別研究員として2年間J4大学で研究した後、同大学の助教となった。1年後現在所属している大学の公募に応募し、就職することになった。アメリカへ行きたいという夢があったので戻りたくない気持ちもあったが、大学院修了後に結婚した妻の「帰国したい」という意志を尊重した。

現在も年間10～20本論文を書いており、周りから「信じられない」と言われるほどだ。日本やアメリカからも賞を受けた。

現在の仕事は楽しい。副学長のスタッフとして所属大学の研究をアップグレードし、World Class Universityにするための戦略を立てている。

アメリカで研究したいという夢は前年フルブライトの奨学金を得てかなえた。3か月アメリカで研究し、その成果を論文にした。

J4大学での指導教員が定年退職し、後任の教授の研究は近くないので、共同研究などの交流は今はない。共同研究だけならできるかもしれないが、「心から」の交流は難しいと思う。新しい関係を作るプロセスは難しいと感じている。

《留学を振り返って》

研究はもちろんであるが、日本留学を通して身についたと思うのは「頑張る」ことや「責任感」である。今でもその姿勢は変わらず、数年前デング熱になった時も論文を書いていて、妻が「何考えてるの」と本気で怒ったというエピソードを語った。

日本の教育はとてもよかった。日本に留学したからこそ、「頑張れる人」になったと思う。その点で日本の大学を卒業した人は他の国に留学した人と違うと思う。9年間も日本にいたので、日本の文化が自然に身につき、インドネシア人から「変だ」と言われることもある。しかし、頑張ったからこそ「いい花」が咲かせられたと思う。今は大変なほうがいいと思う。頑張らなければ何も得られない、「no pain, no gain」だと思う。自分の学生たちにも伝わっているのか、みんな頑張っている。

数年前J4大学を訪れたが、町や駅や大学が変わっていて「自分の街じゃない」という感じがし

た。疲れた時やストレスがたまったら休んだり昼寝をした池のほとりの東屋もなくなっていて、すごく寂しかった。

日本語は妻と時々話す程度だ。他の人に聞かれない話をする時の夫婦の「秘密の言葉」にもなっている。

1.3.2. Bさん (28) の語り

《留学のきっかけと日本語学習》

Bさんは大学卒業後助手になり講師になった後、研究を続けるのは必須であると思っていたので、博士の学位をとることに関心があった。修士課程、博士課程に進学しなければならないと思っていた。最初は水産経済学に関心があった。勤務先では日本の大学を卒業した教員が多く、自分も日本で勉強したいと思った。当時勤務先の大学と日本のJ1大学には大学間協定があり、J1大学から教員が来ており、同分野でBさんの受入ができるかどうか検討された。その教員を通じて指導教員となる教員を紹介された。同教員の専門は農業経済だったが、経済なのであまりかわらないと思いい、約1年間研究計画などについてやり取りをして、奨学金を得てJ1大学に留学することになった。

日本に行く前に勤務先の近くの日本語学校で約半年間週3回程度日本語を勉強した。指導教員の勧めで、来日後半年間別のキャンパスで開講されている日本語集中コースを履修した。

来日当初不安だったのは言葉だった。日本留学経験者から「日本語、勉強してください。日本語ができなければ、日本での生活を楽しめません」と言われていたからだ。また、研究のためだけに日本に来たのではないという思いもあった。実際に、日本語の授業をとらなかった友人は、アパートと大学の往復だけで日本での生活を楽しんでいるようには見えなかった。

半年間の日本語集中コースは午前8時半から午後4時まで授業で毎日アパートと大学の往復だった。毎日宿題も多かった。休みの日は同キャンパスにいるインドネシア人2名が住んでいる留学生寮によく遊びに行った。

半年後日本語集中コースを終え、所属研究科のキャンパスに移ると同時に、妻と子どもを呼び寄せた。留学前授業や研究は英語でできると思っていたが、修士課程では授業は全部日本語だった。資料やレポートは英語だったが、ゼミもインドネシア人、ミャンマー人の発表以外は指導教員の話もディスカッションも日本語だった。日本語集中コースを受けて本当によかったと思った。しかし、日本語集中コースは生活のためや先生の簡単な指示の理解には十分だったが、授業は難しかった。

農学部キャンパスでも日本語補講を取ったり、地域の日本語講座にも参加して、日本語の勉強を続けた。

大学職員や子どもの保育園の先生との連絡、地域住民との交流で日本語を使う機会は多かった。また、研究でも調査で漁師に直接話が聞けるなど日本語が話せることが寄与することも多かった。

授業では勉強しなかったが、個人的には漢字が面白いと思いい、勉強した。漢字の形の原理を覚え、語彙として覚えると覚えやすかった。留学当時はやっていた宇多田ヒカルやコブクロの歌は今でもよく覚えている。

《留学中の生活》

最初大変だったのは、言葉の他に様々な手続きの書類だった。チューターが手伝ってくれたので助かった。来日直後の思い出は不動産屋とのトラブルだ。不動産屋に行ってキャンパスのすぐそばのアパートを契約した。アパート契約の時家賃を不動産屋に払うのではなく銀行口座に振り込んだ

が、不動産屋から家賃が払われていないと言われ、確かめてみると自分の口座が間違っていた。幸い契約手続きをやり直すことができ、払いなおすことができた。

6か月の日本語集中コースが終わり、研究科のあるΣ町に移った。来日前の日本のイメージは「東京」だったので、何の情報もなく行ったΣ町には最初びっくりした。散歩しても人を全く見かけなかったからだ。家はあるのに、町には人がいなかった。インドネシアでは、家の前で座って話している人をいっぱい見かけるので、いったい人はどこにいるのだろうかときえ思った。

所属研究科キャンパスに移ると同時に家族を呼び寄せた。アパートが大学から近かったので、昼休みに昼食を食べに帰ることもできた。アパートの隣の部屋には偶然チューターが住んでいたのも、必要がある場合はいつでも頼め、特に生活には問題はなかった。Σ町は小さい町だったが、ほしいものは何でも手に入り、自転車で散歩をするのも楽しかった。近くにある湖の周りには田園が広がり、夏には蓮の花が咲いていた。Σ町での生活は楽しく、特別なものだった。

B: Σ町は大好きだと思いますね。I really love staying in Σ town.

娘が保育園に入ると、生活はより楽になった。妻も公民館で日本語を習い、日本語が少しわかるようになってからは、娘が保育園に行っている間「野菜をつめる」アルバイトをした。オーナーはとても親切で、妻は「ママ」と呼んでいた。

保育園の先生もいい先生方だった。毎日Bさんがノートに日本語で娘の様子を書いて連絡をとった。そのノートは思い出としてインドネシアに全部持ち帰った。

《留学中の研究・学修》

Σ町は勉強にも最適の町だと思う。キャンパスは大きくないが、便利だった。研究に必要な本は手に入ったし、英語の小説なども図書館が手配してくれ、借りることができた。

修士課程では、授業は全部日本語だった。資料やレポートは英語だったが、ゼミも発表以外はディスカッションも日本語だった。研究室はその他に日本人3人、中国人3人いたが、関係はよく、毎日頑張って日本語で話した。近隣の村で田植えをするプログラムにも参加し、そこに集まる日本人学生とも日本語で交流した。

指導教員に他大学のプログラムを紹介され、毎年開講される水産関係の集中講座に参加した。そのプログラムを通じて、地元の漁師と直接交流することができた。漁師は英語ができないので、日本語で話した。彼らがどのように働き、どのような文化を持っているか直接聞くことができたことはとても嬉しかった。座学では十分でないことを実感した。

また、博士課程の時、海外協定校との研究交流プログラムに応募し、選ばれてアメリカの大学で3か月勉強できる機会を得た。日本にいる間にいろいろな経験ができ、よかったと思う。

社会科学だったためか指導教員は友達の指導教員と比べると厳しくないと思った。最終的に論文を完成させることが目標だから、それができれば問題はないと言われた。論文は英語で書き、proof readingもあったので問題はなかった。

留学中やりたかったができなかったのは、国際的な学術誌に論文発表できなかったことだ。難しくはないと思っていたが、日本では学会誌に発表するほうが簡単だということで、指導教員も学会誌での発表を勧めた。システムの違いだと思うが、インドネシアに帰れば、国際学術誌のほうがキャリアを得るためには評価される。日本の学会誌での発表も当時の自分にとって簡単ではないと感じたが、インドネシアではカウントされない。国際学術誌での論文が大学でのキャリアでは非常に重要だと思うので、帰国後国際学術誌にも論文を発表した。

《人間関係》

指導教員との関係は良好だった。研究だけでなく生活面でもいろいろとサポートしてくれた。

事務職員の中にもいい関係が築けた人がいて、一番仲がいい友人とも言える。Bさんの博士課程の研究テーマがバリの research management だったため、何回かバリに行ったが、その事務職員もバリの大学に一月間派遣されていたので、よく話した。その後、Bさんの家族や妻の両親が日本に来た時はドライブに連れて行ってくれたりした。時々カラオケにも一緒に行った。また、インドネシア語ができる大学の図書館員とも親しくなり、よく話した。

地域の人ともよく交流をもった。インドネシアに関心のある日本人が集まるグループがあり、インドネシアの独立記念日などいろいろな活動をしていた。かつてインドネシアやマレーシアに住んでいた人が、インドネシア人とインドネシアで働き退職した様々な専門家を繋ぐ会を作り、日本にいるインドネシア人留学生や労働者を支援していた。町のお祭りなどに一緒に参加した。帰国後も連絡を取り合い、二度インドネシアにも来てくれたが、残念なことに昨年亡くなった。

Σ町の活動にもいろいろ参加した。毎年のお花見にはいろいろな国からの留学生たちも大勢参加した。Σ町にいる時は生活全体が日本人になっているような気持ちになった。Σ町は勉強しただけの場所ではなく、ふるさとのように感じる。

《留学を振り返って》

留学後は元の勤務先の大学に戻った。日本に留学して本当によかったと思う。すべてが特別な経験だったように思う。その中でも大学だけでなく多くの地域の人とも友達になれたことがよかったと思う。日本で友人を作るのが難しいという留学生が多い中、なぜ多くの友人が得られたかという問いに、Bさんは「相手がどう思ったかわからないが、わからないことはいつも聞いたのがよかった」のではないかと答えた。

帰国してから10年近く経つが、今でも連絡を取り合う友人は多い。特にアパートの隣に住んでいた元チューターとはよく連絡をする。また、去年指導教員の学生と共同研究のプロジェクトがあり、レポートと一緒に発表した。その際皆の電話番号を聞いた。

さらに、日本留学で得たことで大事だと思うのは教育ネットワークである。自分自身も参加した他大学のプログラムとの大学間の交流が続いており、毎年行う遠隔授業には台湾や中国、アフリカの大学も加わり、グローバルな展開がされている。その他にも日本の大学とのサマープログラムやAIMSプログラムなどの既存のプログラムもある。

現在日本語を使うことはあまりないが、勤務先の日本留学経験者や日本から来た先生方と時々話すこともある。日本人の先生ともプログラムなどフォーマルなことは英語で話し、個人的なことは日本語で話していると思う。

1.3.3. Cさん(29)の語り

《留学のきっかけと日本語学習》

周囲に多くの日本留学経験者はいたが、Cさんはもともと日本留学に関心があったわけではなかった。日本での指導教員となる教員が勤務先の大学に来たことをきっかけに、文部科学省の奨学金に応募し、合格したので、日本に留学することになった。「偶然」といってもいい感じだった。

日本に関心があったわけではないので、来日前日本についての印象は特になかった。日本語も来日前に1か月間ひらがなやカタカナを勉強した程度だった。来日後所属大学で1学期間の日本語集中コースを受け、日本語や日本の習慣、生活スタイルなどを学んだ。

日本語の勉強自体は難しくなかったが、もともと初対面の人とのコミュニケーションは苦手で、日本語集中コースのクラスメートとは授業外での交流はなかった。日本語は教科書の問題には答えられるが、実際に使えずマスターできなかつたように感じる。

《留学中の生活》

来日から約5か月は日本語集中コースのあるキャンパスで生活した。自分自身の性格だが、最初のコミュニケーションは難しいが仲良くなればよく話せた。アパートの隣に住んでいた同国人をはじめ、数人の同国人留学生とは仲よくなり、自転車でいろいろなところに行った。日本語の授業は午前中だけだったことや家族もまだ呼び寄せていなかったのも、この期間は自分自身の人生において「vacation time」のように思える。

1学期間の日本語研修の後、所属研究科のあるキャンパスに移った。妻と子どもを呼び寄せ、アパートに引っ越した。1年後、同国人の先輩が住む県営住宅に移り、そこで残りの4年間を過ごした。妻は地域の日本語教室で日本語を勉強した。妻は自分と違って誰とも仲よくなり、今でも日本の多くの友人たちとの関係を維持している。子どもたちは保育園に入った。保育園とのコミュニケーションはいくつかの言葉がわかるだけで、内容を「guess」していた。自分自身の日本語は今もそういう感じだと思う。また保育園に出す書類などは大変で、インターネットから多くの情報を得て対応した。それでもわからない漢字や文法はチューターや友人に翻訳してもらったりして助けてもらった。

車を買って、週末は家族と県内のいろいろなところに行った。土日は家族のために使えたが、日本にいる間にもっといろいろな所に行ってみたかった。

日本について何も知らず、日本語もあまりできなかったのも、できるだけ日本のよい面を見ようと心掛けた。よい面は多くあると思った。例えば、お店などで分からないことがあって困った時もお店の人がちゃんと助けてくれることなどである。日本人は何でも「心をこめて」最善をつくすという印象だった。指導教員からもまじめに取り組む日本人の姿勢や精神を学んだと思う。

ジャワの文化との共通点も感じた。宗教が違うためゴールは違うと思うが、見返りを期待しない気持ちなど、ゴールに向かう過程は同じだと感じた。

《人間関係》

指導教員は初めて来日した時空港まで迎えに来てくれた。家族が来た時も同様に迎えに行ってくれた。その後の関係も良好で、TAなどのアルバイトを紹介してくれるなど経済的な面でもいろいろ配慮してくれた。いつか恩返しをしたいという気持ちがある。博士課程では指導教員が代わったが、同様にやさしく接してくれた。研究室はインドネシア人2名、スリランカ人1名で日本人は1名だけだった。大学院修了後元の勤務先の大学に戻ったが、J1大学とはMOUがあり、様々な共同プロジェクトがあるため、留学修了後もお互いに行き来することが多い。

インドネシアの大学の先輩留学生の紹介で、学外でも日本人の友人ができた。留学修了後も毎年のように色々なプロジェクトで来日する度に会っている。

《留学中の研究・学修》

修士課程の授業は日本語で行われ、実際のところ少ししかわからず、話の内容を推測するしかなかった。指導教員が示したキーワードをインターネットで調べて、多くを学んだ。

日本ではインドネシアと比べていろいろなことが簡単だった。修士課程では試験はあまりなく、レポートも1～2ページ程度だった。インドネシアのレポート・プロジェクトは大変で、「A」を取るのには難しいが、日本では1ページ程度のレポートで「A」が取れることもあった。

日本の修士・博士の制度では、研究は自分自身によるところが大きい。そのため、日本で学んだことは、研究そのものよりも精神的なことが多いと思う。

自分自身の研究は、インドネシアでのケーススタディだった。J1 大学にはインドネシアの大学数校と共同のサマーコースプログラムがあり、そのプログラムに参加する機会を利用して、インドネシアで調査をすることができた。

博士論文のテーマは指導教員の研究テーマではなかったためか、指導は厳しくなかったが自立的に研究を行わなければならなかった。最終段階で論文提出の締め切りを間違え、口頭試問の日程の関係で1年間修了を遅らせることになった。奨学金支給期間が終了したので一旦帰国し、再来日して口頭試問を受け、博士の学位を得た。

《留学を振り返って》

調査時の1年後も客員講師として、日本の大学との共同サマーコースを担当する予定だった。自分自身の日本語はこれまで話したような感じだが、なんとなくかなった。学生たちも言語に関わらず仲良くなれると思う。仲良くなれるかどうかは言語ではなく「心」からのホスピタリティが鍵だと思う。

これまでのサマーコースでも、インドネシアに日本の学生が来た時はインドネシアの学生が空港まで迎えに行き、日本にインドネシアの学生が行った時には日本の学生が空港まで迎えに行っている。これは、留学時に指導教員が自分自身にしてくれたことと同じだと思う。

このコースでは、寮で一緒に生活し、お互いがコース参加者やチューターになり、通訳したり教え合ったりしている。言語によるコミュニケーションはもちろん大切だが、経験から多くを学んでいる。「心」で学んだことは、世界の他の場所でも通用し、永遠に続くものだと思う。

日本には多くの良い点がある。物事には長短があるが、悪い点は捨てて、日本の良い点とインドネシアの良い点を結び付ければ良いと思っている。

1.3.4. Dさん(30)の語り

本節は、Dさんがインタビューで日本語を交えながら英語で話したことを一人称の語りとしてまとめた。

《留学のきっかけと日本語学習》

知識を得たかった。学術的なこととそうでないことと。どうして日本かと言うと、日本に留学した先輩がインドネシアに戻って成功していた。アメリカやヨーロッパに留学していた人と比べると、(日本留学生)は話しやすいし、インドネシアの環境に再適合しやすかった。

インドネシアは発展途上国で、時には規則に従うことが難しいこともある。ヨーロッパにはすでにいいルールがあって、日本もそうだが、私たち(日本留学生)はヨーロッパ留学生に比べてもっと寛容だと思う。たぶん日本人は私たちに寛容だったから、私たちがここに戻って来た時に、人々がルールを守らなくても寛容でいられる。それと農学部長をはじめ、農学の先輩たちはほとんど日本で勉強したから。

日本語に関しては、日本に来る前に日本語のクラスを取った。あまり役に立たなかったけど I3 大学にも日本語のクラスがあり、そこでプライベートの授業が取れる。1年プライベートの授業を取った。

《留学中の生活》

修士と博士で5年間日本にいた。日本語はあまり勉強しなかった。研究室の人と英語で話した。

時々日本語だった。予備教育で日本語を学んだが、大学院に入学してからはボランティアの日本語教室に通った。地元の人英語が話せないの、日本語を話す必要があった。地元の人から日本語を学んだ。

授業はとても難しかった。先生たちは支援してくれて、読む本のリストをくれたりしたので、役に立った。テストやレポートは日本語じゃなくて英語で書いてもよく配慮してくれた。わからないことは先輩に聞いたり、ゼミの人に手伝ってもらったりした。でも講義は日本語で、時々先生はPowerPointを英語で書いてくれたが、ガイダンスの本も日本語だったので大変だった。

1年目か2年目の時、階段で転んで足の骨を折った。大変だったが、保健センターも手伝ってくれて、日本人は優しいと思った。

《東日本大震災》

予備教育が終わってまだ研究室に所属していないときに東日本大震災が起きた。地震の時は寮で一人だけで怖かった。地震が止まってから外に出て、2時間ぐらい外で待っていたが一人だった。予備教育の時、地震に関する本をもらったからそれを読んで、地震の時はどうするか覚えていた。本のように地震が起きたら机の下に入って外に出て外で待っていた。友達に電話しようとしたが繋がらず、家族に連絡しようと思ったがそれもできなかった。それから近くのホールに行き二日間ぐらいみんなで寝た。

原発事故の後は、あまり外に出ないようにして、出る時はマスクして手を洗った。停電は1日か2日だけだったので、テレビを見て情報を得た。

原発事故の後もインドネシアに帰国しなかった。ほかの国の学生は政府が避難指示を出して帰国させたが、インドネシアは違った。隣の中国人は両親がここに戻ってくるのを許さなかったため、1年ぐらい帰ってこなかった。私も私の友達もずっとここにいたので、家族は心配した。家族とは毎日電話した。私自身も心配だったが、インドネシアの友達がたくさんいたから、一緒に買い物行ったり野菜を選んだり野菜の産地を見たり、震災から1年ぐらいは中国産や他の国野菜を食べた。

私の最初の学期だったので、それも心配だった。中国人の学生が帰国したから修士の学生は私だけになった。研究室は先生と学部生と博士の学生が一緒だから、学部生と私と博士課程のネパール人だけだった。1年間は中国人の学生は帰ってこなかった。

インドネシアで地震を経験していたので、落ち着いていた。友達はパニックになっていたが、私は地震に慣れていた。ここは日本だから建物も大丈夫。地震の時は部屋から離れて、日本で学んだのは地震の時は階段を使わないこと。友達は地震の時、階段を通して転んだ人もいる。建物の性能が良いから違う。インドネシアでも地震があったので、地震の時どうするかわかっている。

《人間関係》

予備教育の時ホームステイをして、その関係が続いており、家に招待してもらったり、盆踊り、花見、花火など地域の活動やイベントにも友達も含めて招待してもらったりした。それはとても嬉しかった。他の留学生にも助けてもらった。

でもあまり日本人の友達はいなかった。研究室で日本人がいなかったの、あまり日本人の友達ができなかった。指導教員がお茶会に招待してくれたり、年に1度旅行に連れて行ってくれたりした。チューターとは仲良くなった。携帯電話購入の手続きや買い物、在留カードの手続きなどを手伝ってもらった。共通の友だちと遊びに行ったこともある。今も連絡を取っている。

近隣大学のインドネシアコミュニティのメンバーになり、そこで日本人に会った。

《留学を振り返って》

留学を経験して、もっと自立できたと思う。インドネシアの中でもいろんな地域の人に出会ったので、もっと寛容になった。インドネシアコミュニティの中でも考え方が違う人がいるし、外では中国人やいろいろな人と会ってオープンマインドになった。何か欲しい時は行動したり活動したりする。日本の先進国の生活が分かった。どれだけオーガナイズされているか、時間を守るか、日本人の性格もわかった。日本人は勤勉だと思う。日本から帰ってきてから、仕事をするのが楽しいと思うようになった。ワークホリック？少しワークホリック。今は家のこともあるので、難しいが、日本でどうやってよく仕事をし、規則を守って、時間を有効に使うかを学んだ。

住んでいる町の静かな雰囲気がとても好きだった。インドネシアはとても賑やか。日本人は挨拶が好きでインドネシア人はフレンドリーだけど挨拶をしない。日本で住んでいたのは小さい町だったのでよく挨拶をした。知らない人にも挨拶をする。多分日本でも東京ではしないかもしれないが、小さい町だったのでみんな挨拶をしていた。困っている時には聞いてくれる人もいた。

1.4. 考察

本節では、「留学中の研究成果とその活用」と「日本での人間関係の構築と継続」という視点から4名の語りから読み取れる留学成果を検討する。その上で、日本語学習や日本語使用が留学評価にどう関連するかを考察する。

まず、留学中の勉学・研究については、第1の目標である「博士号取得」を達成した。Aさんは指導教員の厳しい指導を通して多くの研究業績を発表し、Bさん、Cさんは大学が提供するプロジェクトやプログラムを積極的に活用して研究を進めていた。また、研究成果そのものだけでなく、自ら考え自律的に行動する研究姿勢や日本人の物事に対する真摯な態度、責任感など「精神的」な面で得たものは多い。Dさんもまた成果だけでなく、日本での生活から正確さや規律正しさなど多くのことを学んだという。さらに、日本留学で得たことを大学教員として仕事に活用し、学生にも伝えている。Aさんは日本留学を通して「頑張れる人」になったと述べ、その姿勢は学生にも伝わっていると感じている。Cさんは経験から多くを学べることや「心から」の交流姿勢を学生たちに伝えている。大学教員の場合、留学中の肯定的評価の体験を自身の教育、指導などに取り入れようと努めるなど留学後のキャリアへも影響が大きいという有川（2016）の指摘とも共通する。

日本での人間関係では、最も大きい存在である指導教員については4名ともに良好な関係を築いており、研究以外の面でも様々な支援を得、敬意と感謝の念を抱いていた。研究室内の人間関係もよく、留学後も連絡を取り合う友人もいる。Bさんが留学成果の1つとして挙げたのは教育ネットワークの拡大である。留学後、日本で参加したプログラムがきっかけで日本だけでなく他の国々も加えた教育プログラムが構築できた。また、大学教員だったBさん、Cさんは復職後既存の日本との共同プロジェクトやプログラムの担い手として研究・教育交流を継続している。Aさんは指導教員の退職後研究上の交流はないが、個人的には連絡を取り合っている。

さらに、4名は学外で日本人の友人を得ることができた。Bさんは積極的に学内外の国際交流事業に参加して幅広い人間関係を築き、帰国後も関係を維持し、留学先の町を「ふるさと」のように感じていた。Cさんもコミュニケーションが苦手と言いながら、先輩留学生から紹介で得た友人との交流が帰国後も続いている。Dさんはチューターや近隣大学のインドネシアコミュニティのメンバーとの交流がある。

以上のように、4名は留学中の勉学・研究成果に満足し、帰国後留学から得たことを自らの教

育・研究活動に取り入れ、日本で築いた人的ネットワークを教育・研究面及び個人的に維持しており、日本留学経験を肯定的に評価していた。

では、4名の肯定的な留学評価に日本語はどのように関わっていたのだろうか。修士課程の授業の使用言語は、資料やレポート、修士論文は英語で、講義や討論などは日本語であるという状況は4名ともに共通している。しかし、日本語をどう学び、どう使うかについては専門分野、指導教員の意向、研究室の状況、本人の意識、本人の性格などによって大きく異なっていた。Aさんは指導教員の方針と本人の意向により、日本語環境に積極的に身を置きながら独学で講義の内容が理解できるようになった。アルバイトなどを通して学外の日本人との交流もあった。Bさんは留学前から日本語の必要性を感じ学習を開始し、予備教育終了後も地域の日本語教室などで学習を継続した。研究室でも中国人や日本人とのコミュニケーションは積極的に日本語を使い、日本での調査でも日本語が役立った。Bさんの場合学外でのネットワーク構築にも日本語は活用され留学生生活を豊かにするのに一役をかった。一方、Cさんは1学期間の予備教育後日本語学習を継続せず、コミュニケーションが苦手という性格から実生活では日本語をあまり使いこなせなかった。日本語で行われる授業はよくわからなかったが、知っている言葉から推測したり、授業後キーワードを頼りにインターネットで調べたりして修士課程の授業を乗り切った。Cさん自身の日本語に対する評価は低い、日本人の友人とも今も続く関係を構築しており、留学全体に対する評価は肯定的であった。Dさんも授業での苦労は多かったが、研究室では日本人学生とも英語で話すことが多かった。地域では英語が通じないため、日本語で話した。日本語学習や使用状況は4人4様で、それぞれが置かれた環境の中で、自分自身で考え、自分自身が実行可能で納得できる方法で対応したと言える。

日本語学習1つをとっても、留学生が置かれた状況は個別的で多様である。Aさんのように非漢字圏の学生が独学で講義を理解するレベルまで到達するのは誰にでもできることではない。留学生個々人が抱える問題を留学生自身の努力のみに委ねておくわけにはいかないだろう。

有川が指摘しているように、留学生は指導教員、研究室やクラス、その他で出会った教職員や学生、また学内外の人々との日々の関わりを通して多くのことを学んでいる。多様化が進む留学生の留学生生活を実りあるものにするためには、個々の留学生の個性にも目を向け、研究や生活に関わる諸問題の把握に努め、そこから得たことを共有・活用して、多彩な人々が関わり、柔軟で多層的に助言や支援ができる環境を整えていくことが必要であろう。

2. 博士後期課程留学のインドネシア人大学教員の留学評価

本節では、博士の学位取得のため日本に留学したインドネシアの理系大学教員4名のライフストーリーから留学評価と日本語習得の関連を探った。全員が研究では英語を使用し、日本の教育機関での日本語学習経験は全員なかった。

2.1. インタビュー協力者Eさん(31)のライフストーリー

2.1.1. Eさんの略歴

Eさんはインドネシアの大学で教鞭をとっていたが、先進国で学びたいという思いを持っており、母校の教員から日本の指導教員を紹介されたJ4大学の博士後期課程に留学した。学位取得後勤務先に戻ることが条件の国費留学プログラムだった。1年後妻と子どもも来日し、3年で学位を取得した。調査時は元の勤務先で教えていた。

2.1.2. Eさんの語り

《留学のきっかけと日本語学習》

留学の動機は途上国ではなく先進国で高等教育を受けたいと思ったからだ。先進国の知識や科学技術にならば、挑戦したいと思っていた。そこで当時トップの科学技術と労働文化を持つ日本を留学先として選んだ。J4 大学を選んだのは、母校の教員から指導教員を紹介されたからで、J4 大学がどこにあるかさえ知らなかった。日本の大学は標準化されているのでどこでも問題ないと思い、J4 大学に国費留学生として留学した。学位をとった後元勤めていた大学に戻って教鞭をとることが条件の留学プログラムである。

日本語をクラスで学ぼうと思っていたが、指導教員に日本語を勉強しなくてもいいと言われた。英語が使用言語の International department では、日本人も英語で話す。研究発表では英語で書いたり話したりしなければならぬため、日本語は「additional language」でしかなく英語を習得したほうがよいと指導教員から助言された。助言に従い、日本で日本語を学習することはなかった。

《留学中の生活》

留学当初は日本について何も知らなかったし、言葉の不安もあったが、やる気が不安を上回っていた。

最初食べ物のことで困った。イスラム教徒なのでハラールフードを見つけなければならなかった。野菜や魚は大丈夫だが、肉を食べる場合パキスタンなどイスラム圏からの肉を買い、自分で料理する必要があった。そのため家族が来る前の1年間は主として野菜と魚ばかり食べていた。原材料の表示がわからないのにも困った。

日常生活では、「いくらですか」「これは何ですか」など、簡単な日本語は習っていたので、日本語で言った後英語で言えば何がほしいのかわかってもらえた。決まったところで決まったことを言えばよいので、数か月後にはあまり問題ではなくなった。

家族はインドネシアで「おしん」のような日本の番組をよく見ていたので、日本に行くことを夢見ていた。家族にとっても不安より「夢」のほうが大きかった。妻と小学生と幼稚園児の子どもは1年後来日し、小さなアパートでの生活が始まった。

家族は新しい環境を喜んだ。まず、日本は安全で、子どもは犯罪などの心配なく公園などで遊べた。インドネシアでは公園が少ないのに対し、日本では多くの公園があり、子どもたちだけで遊んで帰ることもできた。また、空気がきれいで、インドネシアでアレルギーがあった息子は日本では症状がでなくなった。

J4 大学がある町は地方の大都市で、インドネシアからの留学生も多く、インドネシア人コミュニティの中で生活できた。インドネシアには新参者を助けるという文化があり、住民登録や小学校入学などの手続きを手伝ってくれた。日常生活については、したいことや必要なものがあればこのコミュニティの協力を得て解決できたので、困ることはあまりなかった。このコミュニティは主に日本語ができない人で構成されていて、日本語ができるインドネシア人はイベントに参加する程度だった。日本語ができるインドネシア人は様々なコミュニティに自由に出入りしているようだった。

日本での生活で印象に残っているエピソードがいくつかある。一つは、来日直後の深夜タクシーで友人宅に行った時のことだ。住所が見つけれなかった時運転手はメーターを止めて探し、住所がわかった時点で再びメーターを入れたのを見て、安全さを感じたことだ。

もう一つは、スーパーで買い物をした後買ったものを駐車場に置き忘れた時のことだ。アパートに着いてから自転車のかごにないのに気づき、駐車場に戻ったらそのままの状態であった。インド

ネシアでは考えられないことなので、とても感動した。

《留学中の研究・学修》

毎日研究室に行って研究した。インドネシア人はいなかったが、留学生が多くいる研究室で、会話は英語であった。J4 大学では新入留学生に英語のできる日本人チューターを1年間つけてくれ、銀行口座開設など日常生活に関することもサポートしてくれた。

留学中、指導教員には二つのタイプがあると思った。一つは「conventional supervisor」で、日本の大学で学び、日本の研究文化を受け継いでいる。もう一つは、海外で学んだ経験のある「global supervisor」である。前者は比較的若く、後者の多くは年齢が高い。

Eさんの指導教員は、海外での就業経験があり英語が堪能であるが、伝統的なタイプである。月曜日から土曜日まで研究室に行かなければならず、土曜日に休める友人たちがうらやましかった。のちに大学から注意を受けたらしいが、指導教員が帰る9時頃まで学生は帰れないことが多かった。他と差異化をはかり、他より高みに到達するためには、他より多く時間的な犠牲をはらわなければならないと指導教員はいう。土曜日にも研究室に行って研究したことを通して、多くのことを学んだし、論文発表も多数でき、限られた時間の中ではよかったと思う。しかし、J4 大学では教員が研究室の運営に権限を持っていて、研究室のルールに従わなければ研究室で研究できないとも感じた。

J4 大学での生活は月曜日から土曜日まで研究室とアパートの往復であった。家族が来てからもその生活は変わらず日曜日のみが家族と過ごす時間だったので、なかなか家族の理解が得られなかった。日本での「時間は限られているから」と説明して何とか納得してもらえた。

《人間関係》

指導教員の厳しさのおかげで順調に研究成果をあげ、予定どおり学位も取得できたが、指導教員との関係は難しかった。何度か叱られたり罰を与えられたりした。自分にとっては問題ではないことが指導教員にとっては問題だということを感じた。例えば、指導教員からメールするよう言われたのでメールしたが、指導教員から2日間返事がなく受け取ったかどうかわからないので確認のメールを送った。決めなければならないことがあって指導教員の返事が必要だったからだ。すると、「すべきことはわかっているの待つように」という怒りの返事が返って来た。さらにこのメールのせいか、その後1か月間研究会に呼ばれないということがあった。インドネシアではリマインドするのは普通に親切な行為なので、日本の文化との違いに戸惑いと悲しさを感じた。指導教員との関係には気を遣った。

しかし、指導教員の研究対象が東南アジアで、Eさん以外の同地域のネットワークがないこともあって帰国後も毎年共同研究を行っている。インドネシアでの研究には現地の協力が必要なため、よく連絡を受ける。

地域の人との交流は日本語ができないこともあってほとんどなかった。アパートの住民は英語ができず交流はなかったが、大家さんは留学生を受け入れることに慣れていたので、よくコミュニケーションがとれた。

《留学を振り返って》

博士課程修了後インドネシアの大学での仕事に戻った。J4 大学で月曜日から土曜日、7時から9時まで研究室で研究するという生活を送っていたおかげで、インドネシアでの仕事は楽に感じる。

日本留学が現在の仕事に役立っていると感じるのは、日本の大学で論文作成に慣れたので大学が求める論文発表について問題がないことだ。

もう一つは、日本の文化から規律や他者への心遣いを学んだことだ。例えば、日本人は学生を決

して蔑まないと感じた。最初の頃日本語が話せず、友達もできなかった娘に対して、先生がうちに来て日本語の先生と別のところで勉強しようと聞いてくれ、娘もそれに従った。娘の尊厳と心身の健全を守ってくれたと思う。また、娘の小学校では自転車で通学してはいけないことになっていたが、歩きたくない娘は通学路の交差点ごとに先生がいることを知らずに自転車で学校に行ったことがあった。先生は叱る前に家族に知らせて同意を得てから叱ってくれた。Eさんの指導教員も課題ができなかった日本人学生に対して、決して見下さず、いつもやる気を与えるようにしていた。

全体として、日本での生活は貴重な経験で、すばらしい時間だったと思う。博士の学位を得ただけでなく、日本から多くことを学んだ。日本の労働文化、清潔さ、規律、日常生活、ビジョン、そして、日本人が「夢」の追求にどのように時間を犠牲にするかを学んだ。インドネシアで適用・応用できることがあると思う。

しかし、日本でしたかったができなかったことは2つある。一つは運転免許だ。3回挑戦したが、不合格で諦め、ずっと自転車だった。

もう一つは日本人の友人をたくさん作りたかったことだ。日本語ができなかったので、友達を作るのは難しく、長い関係には結びつかなかった。研究室の友人は主に研究に関するつながりなので、それ以外の友人が欲しかった。

自分の学生にも留学を勧めるが、まだ日本に留学した者はいない。試験に受かる能力にもよるだろうが、奨学金を得るのが難しくなっているからだ。奨学金がなければ留学するのは難しいのが現状だ。

日本に留学するなら「global supervisor」を選ぶべきだと助言したい。自分自身の経験から、自分に合う指導教員だったら、知識やテクノロジーだけでなく、日本文化も学べたと思う。地域住民とつながるために日本語も勉強できるだろう。日本留学はおそらく一生に一度の経験だから、機会を有効に使ってほしい。

今、日本語を勉強している。先生の都合によるが、週2回の授業を受けている。少しずつだがいつか日本語をマスターしたいと思っている。日本で生活し、日本語をいつも聞いていた経験があるので、自分にとって日本語を話すことに違和感はない。多くの日本語の知識のピースをはめ込んで、大きな日本語の絵が描ける。日本を離れてから、日本語を勉強するのはいいことだと思う。

2.2. インタビュー協力者Fさん(32)のライフストーリー

2.2.1. Fさんの略歴

Fさんはインドネシアの大学で講師として教鞭をとっていたが、知識を増やしたいと思い当時交流のあった日本のJ1大学で学ぶことを決める。研究生として半年、博士課程で3年間日本の大学院で学び、博士の学位を取得した。調査時は元の勤務先で教えていた。

2.2.2. Fさんの語り

《留学のきっかけと日本語学習》

日本を選んだきっかけは、日本は近代的な国で、特に農業の分野では先進国であることが理由だった。研究分野から考えて、J1大学の農学部は適していると考えた。当時インドネシアの大学とJ1大学は連携しており、講師として2大学が連携していることはいい機会だった。私のスーパーバイザーで、当時の農学部長は、研究を続けたいならJ1大学がいいと薦めてくれた。2001年に必要書類をJ1大学に送った。

留学する前に2か月間の日本語の授業を履修した。ひらがなとカタカナを少し勉強した。

《留学中の生活》

最初に日本に来た時は、別の星に来たように感じた。日本は近代的だったが、果物の名前も読めなかった。インドネシアで少し日本語を勉強したが、日本に来て、道路標識などが漢字で書かれているので、ひらがなやカタカナが読めても漢字が難しかった。東京の税関に行くときも漢字が読めなくて、たくさんの人に助けってもらってたどり着くことができた。

また、イスラム教徒なので食べ物に関しては苦労した。20年前はハラルの食糧を手に入れることは難しかった。今は簡単に手に入るが、当時は手に入らず、毎日魚を食べていた。寿司と刺身をたべた。イスラム教徒として豚肉も食べられない。友達が豚肉の漢字を書いてくれて、それをもってスーパーに行った。それからお祈りをする時間を確保することは難しかった。一日に5回、お祈りをするから、その時は実験室を確保してくれた。豚肉やお酒が飲めなかったが、飲み会でも一つをシーフードにしてくれるなど、他の学生が配慮してくれた。

もう一つの問題は気候だった。特に冬はとても寒かった。

住んでいる町は東京と違い、田舎で居心地がよかった。

《留学中の研究・学修》

当時は2、3人のインドネシア人がいた。指導教員の先生たちはとても親切だった。当初研究したいことと研究室で研究していることが異なったため、別の教員から指導を受けた。自分がもともと研究したかったこととは違ったが、妥協した。指導教員にはインドネシアでの研究を続けるのであれば支援ができないが、研究を変えるのであれば全面的に支援できると言われた。結果的には農作物の品質を上げることを研究して、それはインドネシアでも応用できることで、分析方法も同じだからよかったと思う。

週に1回ゼミがあり、指導教員は日本人学生の英語がうまくなるからという理由で英語で話していいと言ってくれた。研究室に博士の学生はFさんだけで、遺伝子実験室で学んだ。他にポストクの日本人研究者が二人いて、方法について議論したり協力したりして学んだ。

2年目に、国際学術誌の論文が掲載されて、指導教員もとても喜んでくれた。

《人間関係》

指導教員と良好な人間関係を築くことができた。日本に来る前は日本の先生は厳しいと聞いたが、実際はとてもフレンドリーだった。「私はここではあなたのお父さんです」と先生が言ってくれた。家に招待してくれて、おせち料理を食べたり、中国人学生と一緒に特別な中国料理やインドネシアの料理を食べたりした。指導教員におばあさんがいて、よくしてもらった。105歳でインドネシアに帰った時、おばあさんがFさんといっしょにインドネシアに行きたいと言ってくれた。帰国する前に、指導教員が「インドネシアに帰国する前にどこに行きたい」と聞いてくれて、「本当の雪が見たい」と言ったら、指導教員と奥さんと3人でスキー場に行って温泉にも連れて行ってくれた。

地域で野球をしたり、研究室の人と公民館でバドミントンをしたり、ボーリング行ったり、楽しかった。1年に1回の温泉旅行もあった。景色もきれいで、文化を理解するのによかったと思う。最後の2年半インドネシアに帰らず、夏に夫が日本に来た時、友だちが大阪、京都にいっしょに行ってくれた。今も連絡をとっている。

《留学を振り返って》

博士課程修了後インドネシアの大学での仕事に戻った。

研究内容は違ったけれど、日本で学んだことを今の研究に応用することができる。他にもJ1大

学インドネシアの大学は今も学生交流や研究はコラボレーションを行っている。2005年にインドネシアに戻ったが、10年後また日本を訪れたがあまり変わっていなかった。この10年でインドネシアはすごく変化したが、日本はバスの値段もほぼ同じだった。全体を振り返って日本の生活はよかった。

2.3. インタビュー協力者 G さん (33) のライフストーリー

2.3.1. G さんの略歴

G さんはインドネシアで修士を取得後、インドネシアの大学で教鞭をとっていたが、海外の大学で勉強を続けたいという想いがあった。日本の大学からインドネシアに学生交流の引率で来ていた教員と知り合い、研究分野が近く、また日本の教員が受入れに積極的であったため、J1 大学の博士課程に留学することを決める。2年目に夫が来日し、日本で出産する。出産の1か月後に東日本大震災がおき、家族で一時インドネシアに帰国、その後 G さんだけ日本に戻り、3年で学位を取得した。調査時は元の勤務先で教えていた。

2.3.2. G さんの語り

《留学のきっかけと日本語学習》

留学の動機は当時修士号を取得後教えていたインドネシアの大学で仕事を続けるためには研究を続ける必要があると感じていた。海外に出たいという気持ちが強く、英語を学んで準備していたがきっかけがつかめずにいた。そんな折、日本の J1 大学からインドネシアの大学に学生交流の引率として来ていた J1 大学の教員と知り合い、研究分野が近いことを知る。翌年再度その教員に会った時に、J1 教員の研究室の博士課程で勉強したい旨を告げる。現在はヨーロッパなど多くの国の研究者がインドネシアの大学を訪れるが、当時は唯一の国際的な連携だったと振り返っている。来日前1か月間だけ日本語を学んだが、ひらがなカタカナは学んでおらず、ほぼ何もわからない状態だった。日本は進んだ国だということは知っていたがそれぐらいだった。心配な気持ちもあったけれどエキサイティングな気持ちが強かった。当時から結婚していたが夫も協力的だった。

《留学中の生活》

受入教員の研究の補助として、身一つで来日した。航空券を買うお金はあったが、それ以外は何もなく、1月の来日から3か月間は受入れ教員の家庭にホームステイをして、研究補助のアルバイトをして生活する。当時日本語もできず、急な来日だったため何もわからなかった。しかし指導教員の「なんとかなる」という言葉を覚えている。留学当初は日本について何も知らなかったし、言葉の不安もあったが、やる気が不安を上回っていた。当時は意味もわからなかったが多分ポジティブな意味なんだろうと思った。指導教員とは英語で話したがその家族とは日本語で話した。絵本でひらがなやカタカナを一緒に勉強した。また指導教員の家からカトリック教会に通いみんな日本人だったがそこで週一回日本語を教えてもらった地域の国際交流協会でも毎週日本語のレッスンを受けた。チューターとも日本語で話して、6か月後ぐらいには大体わかるようになった。ホームステイを出てからも他のカトリック教会に通いそこでも日本語を教えてくれる人がいた。

少しずつ慣れてはきたが周りに留学生も少なく、留学生がいても家族で来ている学生が多く孤独を感じるようになる。夫にそのことを相談したところ2年目に夫が来日する決断をする。その年に妊娠していることが分かる。当時妊娠している学生は多くなかったため指導教員にどう説明しようか悩んだが教員はサポートしてくれて問題ないと言ってくれた。妊娠中、言葉の問題があるため英

語を話せるお医者さんを探した。日本語をうまく話せることはできなかったが、マタニティクラスで何を言ってるかぐらいは分かった。参加したことはとても良かった。お風呂の入れ方や世話の仕方などを教えてくれた。病院のマタニティクラスだけでなく地域のマタニティクラスにも参加して、落ち着いて準備することができた。

《東日本大震災の影響》

子どもが生まれて1ヶ月後に東日本大震災が起きた。地震が起きた時家にいて息子は寝ていた。夫は大学で研究の手伝いをしていた。全然連絡が取れず不安だったが子供を毛布で包んで「大丈夫、大丈夫」と言っていた。もし子どもがいなかったらもっとパニックになっていたと思う。子どもが大丈夫だったら大丈夫と言う母の気持ちだった。地震は初めてではなかったが、余震も多く情報が全部日本語だったため不安だった。今でも建物に入ったら出口を確認する習慣になっている。震災の混乱で研究を続けることもできなかったためインドネシアに家族で戻ることにした。3か月後日本に戻った。しかし、放射線量も依然高く子どものことが心配だったので、10月に再度家族でインドネシアに戻り、夫と子どもを残して、Gさんだけ日本に戻ることにした。幼い子供がインドネシアにいて会えないのはつらかった。インドネシアの人から、また母親が子供を置いて一人で外国で勉強していて、夫が面倒を見ていることを批判的な目で見られることもあった。上の世代からの社会的なプレッシャーも感じた。

《留学中の研究・学修》

留学当時は外国人留学生も少なく、英語を話す人も少なかった。ゼミでは学部生や修士の学生もいたので全部日本語で行われた。特に当時はパワーポイントもなくみんな読み上げるだけなので理解できなかった。毎週ゼミの発表があったが最後の方では英語のアブストラクトを出してくれるようになった。またGさんの発表の時、当時誰も使っていなかったパワーポイントを使って発表したのがわかりやすく、指導教員の先生が私の発表を見習うように言ってくれた。また英語のプレゼンをする前には私と練習するようにと言ってくれたので、自分も貢献できて信頼されていることが感じられて嬉しかった。自信を持つことができた。

博士の学生はすぐに論文を発表することを期待されているので大変だった。日本の研究スタイルにも慣れていなかった。また指導教員はよくしてくれたが日本語もできず英語も母語ではないために意思の疎通ができなかったことがつらかった。もっと議論を深めたいのに言葉が障害になりできない、もっと自分ができるのにそれを示すことができないことにストレスを感じた。そのせいで体調を崩したこともあった。博士2年目の終わりに震災もあり、同時に博士論文を出すためには論文も発表しなければならず大変だった。指導教員からは論文を2本発表することを求められていたが最終的には3本の研究を発表することができて、3年間で博士の学位が取れたことに満足している。

《人間関係》

教会に通ったり地域の国際交流協会やコミュニティの集まりに参加したり積極的に日本人と関わってきた。わからないといえば教えてくれて助けてくれた。指導教員も親切でチューターにも色々手伝ってもらった。でも日本人の友達を作るのは容易ではなかった。日本人の性格はインドネシア人と違う。インドネシア人は暖かいし友達を作るのは簡単そしてお互い人に頼ることをする。でも日本人はそうじゃない。日本人はとてもインディペンデント。Gさんから見ると日本人は自分で何でもする誰の助けも借りない。だから日本人と交流するのは難しかった。仕事では大丈夫だが、家族や友達としてずっと付き合える、心が通じ合える友達は今でもいない。震災の時に助けてくれた友達は今でも友達だ。でも彼はパラグアイでボランティアの経験がある人で異国の地で外国人で

あることの気持ちが分かる人だと思う。

《留学を振り返って》

今はインドネシアの大学に戻ってこの仕事に復帰した。日本での経験は今の仕事に役立っている。研究や教育面で、今でも日本と深いつながりを持って、連携ができています。自分自身の経験は大変だったけど学生にそれを伝えることができる。今の学生は海外に行ってどうやって生活していくかすごく心配するけれど、当時自分自身が何もないまま留学して何とかあった経験を伝えられるのが嬉しい。日本人を尊敬するし、日本人の考え方に影響を受けた。どうやって他の人とコミュニケーションをとるか上司や同僚や学生とどう接するか、そして自分の外国人学生としての経験を学生に伝えることができる。自身の学生の中には日本の大学で勉強している学生もいる。若いインドネシア人の学生に海外へ留学することを勧められる。若い学生を励ますことはインドネシアに貢献できることだと思う。もし勉強を続けたかったら外に出なさいと言っている。国の外に出ればもっと心が広くなるし自分の国に何ができるだろうということも考えるようになる。奨学金を得ることもできるだろうし奨学金が得られなくても別の方法もあるかもしれない。

それから日本の考え方や生活スタイルにも影響を受けた。Gさん一人で日本に戻った時、批判もあったけど、夫も日本に来てくれていたので、「私たち夫婦のやり方だ」というスタイルを貫くこともできた。昨年1年間研究のために日本に行った時も家族と行った。震災の直前に生まれた息子は、その時は小学校へ行った。いろいろな地区の行事やママ友、先生ともコミュニケーションをしないといけなかったのが楽しかった。子供も最初日本語が分からなかったけどすぐに友達できて楽しんでた。今でも日本語でドラえもんとか読んでいる。家族で日本に住んでいたから家族全員が日本のスタイルに馴染むことができてインドネシアに帰ってそれが続けられるのがよかった。食べ物も時々味噌汁を作ったりするし、食事中は甘くないお茶を飲むなど日本の生活スタイルにも影響を受けた。

やっておけばよかったことは日本文化を学ぶこと。日本文化が大好きだ。Gさん自身はインドネシアの伝統的な踊りを踊るがそれを日本で披露したこともあった。日本文化に関することを勉強したかった。習字や壊れたものを修復する金継ぎもすごくきれいだと思う。いろいろやりたいけど時間がなかった。

2.4. インタビュー協力者Hさん(34)のライフストーリー

2.4.1. Hさんの略歴

Hさんはインドネシアの大学に勤務しており、建築分野で有名な日本で勉強したいと思い、大学教員が日本の大学で学位をとる奨学金プログラムに応募するつもりだった。指導教員となる予定だった教員が、応募直前に地方都市の大学から東京に移ってしまったため、留学先を新たに探した。日本留学経験者の話から家族を連れて東京で研究をするのは難しいと思ったからだ。たまたま勤務先の大学に来ていたJ8大学の教員が指導教員になってくれることになり、日本留学が実現した。半年遅れて家族も来日した。半年間の研究生を経て、博士課程に進学し3年で学位を取得した。調査時は元の勤務先で教鞭をとっていた。

2.4.2. Hさんの語り

《留学のきっかけと日本語学習》

建築が専門のHさんは、日本の建築は有名で学生時代から授業でもよく取り上げられていたの

で、日本で勉強したいという気持ちを持っていた。そのため、インドネシアの大学教員が日本の大学で博士の学位をとる奨学金プログラムに応募するつもりだった。地方の大都市にある大学の教員が指導教員となる予定だったが応募直前に東京の大学に移ってしまった。留学先を東京にするという選択肢もあったが、子どもを連れて行かなければならなかったため、勤務先の日本留学経験者の話から判断して東京での研究生生活は難しいと考えた。その頃、留学予定だった都市の近くにある J8 大学から 3 名の教員が出身大学に来ており、出身大学での研究会に誘われたため、その場で指導教員になってほしいと頼んだ。数か月後に奨学金の申請書を提出しなければならなかったからだ。3 名の教員が話し合って指導教員が決まり、申請書にサインをもらって提出し、無事採択されて J8 大学に留学することになった。

留学前、出身大学で 6 か月間日本語の授業をとって、ひらがなとカタカナ、挨拶や簡単な会話を勉強した。当然十分とは言えず、来日時には授業と実際の日本語の違いに直面した。習ったことはほとんど役に立たなかった。しかし、J8 大学がある θ 市は小さい町なので、日本語を話さざるを得ないことが多かった。英語で話しても通じず、相手の英語がわからないということもよくあった。そのため、最初の半年は google translate をいつも使っていた。今のように進化していなかったもので、翻訳されたものを見せるという方法でコミュニケーションをとった。

指導教員はカナダの大学を卒業していて英語が堪能だったので、研究に関しては日本語で話すとはあまりなかった。日本語で話そうとしても、難しそうになると英語で話してくれた。研究室の日本人学生は英語が話せなかったので、日本語で話した。

日常生活では、日本語を話さざるを得なかった。隣人や子どもの学校の先生などとは、単語を並べて意思疎通をはかったり、日本語と英語を混ぜて話すなどしてコミュニケーションをとった。J8 大学で初めてのインドネシア留学生だったこともあり、地域住民にも親切にしてもらい、現在も交流が続く人間関係ができた。クラスで日本語を勉強することはなかったが、帰る頃には日常的なことなら、相手の言うことはかなりわかるようになった。

《留学中の日常生活と人間関係》

勤務していた大学には日本留学経験者が多くいて、留学前に、日本での留學生活の大変さについての多くのことを聞いたため、心の準備をした。留学先を東京にしなかったのはこれらの情報があったためである。

多くは聞いたとおりであったが、J8 大学のある θ 市に来てみて予想とは大きく違って驚いたことは、人がとてもオープンだったことである。 θ 市は小さくて新しい町で、未来的なエコシティを目指す都市の 1 つだった。テクノロジーや未来的なものは整っていたが、人はまだどこか伝統的でいい人たちだった。

一人で来日し、6 か月後夫と小学生 1 年と幼稚園の子どもが来日した。博士課程入学前の 6 か月間は奨学金が支給されなかったので生活は苦しく、持ってきたインドネシアコーヒーを買ってもらって生活費のたしにしたこともある。

家族が来る前に、ある家族を紹介され、よく家に行ったり、パーティに招待されたり、一緒に食事をしたりし、言葉や研究のことなどいろいろ聞いてもらった。日本語で話すしかなかった。単語だけを並べて話したが、なんとか分かり合えた。

自分自身の研究がインドネシアの「団地」だったこともあって、家族が来日後しばらくして団地に移った。安いことも魅力だった。新しい町なので団地もそれほど古くなかった。団地に入る時に市役所の職員にお世話になった。英語が少しできたので、部屋を見せてもらったり日本人が 4、9

のつく部屋に入りたいがらないことなどを教えてもらったりした。

団地では棟の自治会役員になった。月に1回会合に出席した。とてもいい人たちなので、少なくともこのコミュニティーに加わりたいたいと思った。団地の住民はHさんに自分の娘のように接してくれた。家族のような関係はこれまで経験したことがなかった。よく息子にも「いらっしゃい、飴があるよ」と声をかけてくれた。

ある時、インドネシアの料理の作り方を教えてほしいと頼まれ、初めて日本のテレビに出演した。当時θ市には留学生は少なく、HさんがJ8大学で初めてのインドネシア人だったから頼まれたのだと思う。

子どもの小学校の先生ともよい関係が築けた。先生は会議などでは全部日本語で話したが、個人的には英語でも話してくれた。

J8大学のある町でハラルフードを手に入れるのは難しかったが、車で30分ほどのところに売っている店やレストランもあり、毎週出かけた。子どもたちのお弁当は毎日作った。先生に最初どんな食べ物が食べられないか聞かれ、送られてきた献立表に食べられないものに○をつけていたが、お弁当を持っていくほうが簡単だということになった。子どもたちは給食時間に一緒にお弁当を食べるので、給食のメニューを見て、同じような内容の弁当を作った。おかげで、お金も節約できた。

ヒジャブを被っている女性は町にはいなかったためか、市の職員がなぜかHさんのことを知っていて、文化の違いやイスラム教などについての授業を頼まれたことがあった。ちょうどISの問題があった頃で、学外でもイスラム教について聞かれることが多く、よい経験になった。

冬寒かったので子どもはスカーフをつけて学校に行くと、それが気に入ったのか取らなくなった。イスラム教徒の女性は普通ヒジャブという布を被るが子どもは義務ではない。Hさんは小学校に招かれ、一緒に給食を食べた。小学生がヒジャブを見て「帽子、ちょっとだめだよ」というので、「これ、髪。同じだよ」と答えると、子どもたちは髪がないから被っていると思ったらしく、髪を見せると納得した。面白い経験だった。団地から学校に行く途中で、1年生の子どもを連れた母親に会った。他の友人も欲しかったので、1年生の父母会にも参加し、よくおしゃべりをした。

《留学中の研究・学修》

Hさんは大学では最初のインドネシア人留学生だった。半年遅れて夫もJ8大学の博士課程に入学し、2人目となった。

留学中困ったことはあまりなかったが、留学当初は言葉のほか、住民登録、口座開設、携帯電話契約などの手続きに関する書類にも苦労した。大学には留学生支援の部署はあったが、留学生のほとんどが中国人だったため、英語を話せる職員がおらず、自分で探さなければならなかった。数か月後、英語ができるチューターをつけてもらえて、助かった。

指導教員との関係は良好だった。研究に関しては英語で話したが、研究室では日本語と英語を混ぜて話すこともあった。研究室は博士課程が日本人、中国人、Hさんの3名で、修士、学部生を入れて計15名だった。修士と学部生は全員日本人だった。指導教員は研究室の日本人学生に英語で話させようとしていたが、日本人学生は話したがらなかった。特に、学部生は間違いを恐れて英語で話すことをためらっているようだった。

日本人学生の英語のレポートを手伝った時、感謝の手紙とチョコレートをくれた。「手紙なんて書かなくてもいいよ、『ありがとう』っていうだけでいい」と返事した。手伝ってあげたいと思っているのに、日本人はよく助けてもらうことを遠慮すると思った。

θ市は日本で5つあるエコシティの1つで、いろいろな海外プログラムを多く持っていた。指

導教員は日本人学生を海外に行かせたかったが、Hさんが一緒に行こうと誘っても日本人学生は「日本だけで充分」と断った。そのため、Hさんはいろいろなプログラムに参加する機会を得た。他の大学ならおそらく参加できる機会は少なかっただろうが、J8大学では希望者が少ないので希望すればほぼ行けた。

研究室に建築関係の会社経営をしながら博士課程で研究している50代の男性がいて、中国で3か月研究する奨学金プログラムと一緒にいくことになった。面識もなかったので、驚いた。来日1年目だったので、Hさんは日本語がほとんどできず、男性は英語があまり上手ではなかった。片言の英語と日本語でコミュニケーションをとりながら中国を旅した。最初は違う都市での研究だった。お互いに連絡を取り合い、Hさんが行きたかった万里の長城にも冬の寒い時期にも関わらず男性は付き合ってくれた。春節に大学が休みとなり、電気やヒーターも止められたため、一緒に上海に旅行することになった。Cさんはお金がなかったので、バックパーカー向けの安いホテルに泊まった。男性も同じホテルで大丈夫というので泊まったが、病気になり、Hさんが看病することになった。このプログラムがきっかけで男性の論文を手伝うなどした。

研究が大変だったので、よく子どもたちを研究室に連れて行った。子どもたちもおとなしく建築モデルなどで遊んでいた。修士課程の学生たちとはHさんもおしゃべりすることが多く、子どもたちともおりがみをして遊んでくれたり、お菓子をくれたりした。子どもたちは日本の学校に行っていたので、Hさんより日本語が話せたこともあったが、パーティなどがある時「Hさん、子どもたち」といっていつも誘ってくれた。日本では子どもを研究室に連れて行くことが難しいところも多い中、研究室に連れて行くことを認めてもらえたことには本当に感謝している。

《留学を振り返って》

日本留学の経験は、今の仕事のすべての点に役立っている。日本は第二の故郷のようだ。共同研究や交換留学のプログラムで現在も交流が続いている。

エコシティであるθ市との共同研究のプログラムもある。また、奨学金が支給される半年と2週間の交換留学プログラムで学生をJ8大学に送っている。J8大学からはHさんに一緒に来るようにという申し入れがあり、受入準備をして待っていてくれる。2年ほど忙しくて行けなかったら、「日本のことを忘れたのか」とさえ言われる。

J8大学の学生が希望すればインドネシアの大学のプログラムに参加することもできる。前年は山間部にある電気がない村での共同プログラムに日本からの参加もあった。

現在教えている学生たちから「どうしたら先生のように日本に留学できますか」と時々質問される。Hさんが話すほうが簡単だろうが、学生たちは建築分野においては日本留学経験者が他に比べて「hard worker」であることに気付いている。

東京ではなくてJ8大学留学してよかったと思う。知識だけでなく、多くの経験を得た。指導教員との関係や今学生が日本に行けることにも感謝している。

子どもの先生ともFacebookで連絡を取り合っている。先生とは日本語でコミュニケーションをとっている。先生は「いつ子どもたちと一緒に日本に来ますか」と聞き、子どもたちも「来年日本に行ける?」と聞くが、まだ実現していない。

子どもたちが最初に勉強した言語は日本語なので、今でも時々日本語で話す。なかなか条件が合う教室が見つからないが、子どもたちのために日本語教室を探している。

2.5. 考察

以上示してきたように、4名の語りから個々の環境や体験は個別的だが「研究・学修面」では全員が学位取得ができ、留学中の研究成果に満足していることがわかった。また、留学終了後も共同研究や学生交流で留学先との交流を継続していた。さらに、留学を通して知識だけでなく、日本人の考え方、労働文化・姿勢、規律など多くのことを学び、学んだことを現在の仕事に活用していることがわかった。しかし、博士後期課程の留学では指導教員との関係や方針が留学評価に大きく影響していることもわかった。

日本語学習・日本語使用、人的交流と留学評価との関係については、以下のことが判明した。

- (1) 同国人コミュニティや意思疎通のできる日本人の協力があれば、日本語ができなくても日常生活はあまり問題はなく、評価に影響はない。研究面でも、研究室内に英語でコミュニケーションがとれるなどの環境があれば問題はない。
- (2) 英語が通じない状況など必要に迫られた場合、日本語でコミュニケーションをとるための努力をする。
- (3) 日本語を使ったほうが研究外での人間関係の広がりは大きく、人間関係での満足度が高まる。学外での人的交流が帰国後も継続する可能性も高い。
- (4) 研究以外に日本、日本人、日本文化を知りたい、楽しみたいという欲求があり、満たされるか否かが研究外での満足度に影響する。

研究で忙しい博士後期課程留学生にとって日本語は必須ではないが、日本語が留学生生活を豊かにする要素の1つであると言えよう。本人が日本語学習の意志があれば学習できる環境の整備が必要であろう。

3. 1990年代の留学経験者の留学評価

3.1. インビュー協力者Iさん(35)のライフストーリー

3.1.1. Iさんの略歴

インドネシアのI1大学の教員だったIさんは1990年代初頭に国費留学生としてJ9大学大学院修士課程に留学した。国内での日本語留学前研修に加えて来日後大阪外国語大学で日本語・日本文化の予備教育を6か月受けて、J9大学に入学した。専門は障害児教育である。修士論文は日本語で執筆した。留学終了後はI1大学に戻り教鞭をとっている。日本留学の成果と人的ネットワークを活用し、日本の大学との共同研究、国際共同プロジェクト、インドネシア国内でのワークショップなど、積極的に教育研究活動を行っている。

3.1.2. Iさんの語り

《留学のきっかけと日本語学習》

留学前に現在勤めている大学(旧体制)の教員になったが、修士の学位を取得することが条件づけられていた。日本政府奨学金のプログラムに応募する機会を得、試験を受けた。学内での選抜後書類選考を経、インドネシア教育省での面接、日本・インドネシア政府の最終試験へと進み、留学が決まった。大使館推薦のプログラムだったので、留学先は自分で選べなかった。

3～4か月、インドネシアの大学で同プログラム参加者向けの留学前研修を受け、日本語、日本文化や専攻別に研究関連のことについて学んだ。

同プログラムでは、来日後6か月間大阪外国語大学で日本語・日本文化を勉強することになっていた。宿舎などは日本政府によって準備されていた。日本文化の授業では生け花を選択し、生け花の先生とは来阪時には泊まるなど、家族のような関係が続いている。

大阪外大での研修後、受入先であるJ9大学に移った。J9大学は単科大学で留学生は少なく、ほとんどが中国人と韓国人でインドネシア人は1人だった。大学としても2人目のインドネシア人留学生だった。1人目のインドネシア人留学生には大阪外大の研修中に何度かJ9大学に見学に行った時話を聞いたが、IさんがJ9大学に移った時には既に卒業していた。

J9大学の留学生の中で自分が一番日本語が下手だと感じた。大学院入試の前の約3か月間近隣の総合大学で夜間7時～9時に行われていた日本語授業に週5日通った。と同時に、指導教員の奥さんが指導教員から指定された論文などを使って専門用語などを週1回教えてくれたのは一番効果的だったと思う。また、社交的な性格なので、寮の管理人などとも積極的に話した。

《留学中の生活》

大阪外大での6か月の研修後、J9大学に移った。寮に住むことは利点が多いと思いJ9大学でも寮を選んだ。寮では夜でも友達とディスカッションなどができる。日本語の練習もできる。次に、アパートは高い。奨学金は本を買うなど大切に使いたかった。お金がかかるので、夏休みや冬休みにもインドネシアに帰らず節約した。

留学当初困ったのは勉強のことではなく、生活に関することだった。

まず、最初に困ったのはお風呂だった。大阪の寮は午後8時～12時まで使える個室のシャワー室があったが、J9大学の寮では共同浴場だった。人前で裸になることに抵抗があり、タオルをつけて入って友人に注意された。「It's ok, we are the same. We are friends.」と言われたが、自分にとってはショックな問題だった。神様に「私には他のやり方がありませんから」と謝り、1年ぐらいで慣れた。

イスラム教には礼拝の前に体の部位を清めるウドゥという習慣があるが、寮の規則では朝共同浴場で水を使うことができなかった。ある朝浴場の湯舟に足を入れて洗っていると、友人に注意され、湯舟の使い方を教えてもらったが、悲しい気持ちが残った。共同浴場を掃除する管理人の「おばあさん」と「おじいさん」に話すと、規則が守れないなら寮を出るように言われた。

幸いなことに、指導教員の奥さんは「日本のお母さん」のようにいろいろ悩みを聞いてくれた。相談すると、指導教員に話してくれ、指導教員が大学の寮の管理部署にイスラム教の習慣などを話してくれ、ボイラーをつけないという条件で朝浴場で水が使えることになった。冬は冷たかったが、朝水が使えることが重要だったのでよかったと思う。イスラム教徒の友人にも同じ問題があったからだ。大学院修了まで寮に住み、最後には管理人とも仲良くなった。

I： わかることができますね。私の宗教のために。その前はそれはあなたの文化でしょ。だから、日本にいる間必ず日本のやり方とかとることできませんと言いました。しかし、私は少し、おばあさんもおじいさんも説明して、宗教がインドネシアの文化でなくて、本当に自分の、心のこととか。しかし、直接説明できません。少し少し、おばあさんとおじいさん、宿舎のオフィスの人に説明して、だんだん、だんだん理解とかできます。

友達を作るのが好きなので、学外でも多くのいい友人を得た。大学近くのお好み焼き屋さんとは家族のような付き合いで、病気の時病院につれて行ってもらうなどいろいろお世話になった。公民館などの様々な活動に参加し、自国のことや文化について紹介したり、一緒に料理を作ったりした。

お祭りの踊りを習い、お祭りにも参加した。これらの活動が地方の新聞にとりあげられたこともある。生け花や茶道など様々な体験ができた。

小さな誤解から「変な外人」と思われたこともよくあり、その例としてあるバレンタインデーのエピソードを語った。インドネシアにはバレンタインデーの習慣はない。

I： 私は全然わかりません。だからみんなが先生のところ、チョコレート持ってきてしょ。私は何かいいものを先生にあげたいね。ハンバーガーをあげました。だから、その時昼ご飯時間でしょ、だからみんながチョコレート持ってきて、先生のところ。私は何にも持ってません。私は先生に、何かあげたいと。だから私はマクドナルドのバーガー、バーガーを買いました。先生にあげます。「何よ、Iさん、これ、何」「今はそろそろ昼ご飯だから、先生、もしチョコレート、歯がこんなになる、ハンバーガーがもっとおなかのために、いい食べ物。」私は変な外人の友達。日本人の友達、みんなは笑いました。私、どうしてみんな笑つてのよね。何、まちがいで、私のことね。「Iさん、バレンタインはダメよ。チョコレート・・・」

いい人たちに巡り合えて、自分は「ラッキーだった」と思う。また、痴漢などの話を聞いたことはあったが、夜間の日本語授業に自転車で通った時も危ない思いをしたことはなかった。

《留学中の学修・研究》

専門は障害児教育だが、その中でも「学習障害」のような新しいことがやりたかったので、留学前に指導教官がインドネシアに来た時、学長とも相談し、「学習障害」を研究することにした。日本では、学習障害を勉強しながら、時間が許す限り知的障害の養護学校の見学をした。学習障害と知的障害の二つを専攻しているような感じだった。

研究テーマは当時インドネシアでは研究されていなかった「多動学習障害」にした。大学院の授業は日本語だったので、授業は録音して寮で何度も聞いた。指導教官に「勉強しなさい」と本を渡され、毎週2～3回指導教官に個人的に指導を受ける時間があつた。他の授業でわからないことがあつた場合もそこで質問した。他の学生の指導の時間でも「welcome」と言われ、一緒に聞いた。このようにして、専門分野の研究の方法論やビデオ分析などを知ることができた。

発表は英語か日本語のどちらかだったが、修士論文は日本語で書いた。論文作成にあたっては多くの人が助けてくれた。アンケート調査では、県内の校長先生や隣県の校長先生がアンケートを配布してくれ、指導教官もびっくりするほど収集できた。アメリカ留学の経験がある幼児教育の先生には、英語や幼児教育、心理学などに関することで助けてもらった。執筆に際しては、自分自身のチューターのほか、アルゼンチン留学生のチューターが手伝ってくれた。アルゼンチン留学生が自由にしたいということでチューター制度を活用していなかったからだ。英語専攻だったそのチューターはIさんのチューターと同様に論文の書き方などいろいろ教えてくれたが、1年後卒業した。その後そのチューターの友人が寮の近くに住んでいるということで、論文執筆を手伝ってくれた。

I： たくさん、他の留学生は「Iは人気がありますね」。「Iがなんとか、なんとか。そのこと、手伝ってあげました。」私は「ありがとう、あれはね、神様から私になにかお土産、もらいますから」。

多くの人に支えられた留学生活で、本当にラッキーだったと思う。

J9 大学在学中に週末子どもたちに紙芝居をする活動をした。紙芝居をインドネシアの養護学校など多くの学校に送り、コーチングしている。

アパートではなく寮に住むことによって節約したお金で、本を買った。日本語の文献は読めない
ので英語の本を買ったが、高かった。また、大阪まで買いに行かなければならなかった。最終的に
は約 300 冊をインドネシアに持ち帰ることができた。

《人間関係》

前述のように、多くの親切な人々に支えられた。留学中悪い人に出会った記憶はない。

まず、指導教官は親身に指導してくれた。留学当初から奥さんが専門に関する日本語を教えてく
れるなど、母親のようにサポートしてくれた。息子さんやお孫さんとも仲良くなった。指導教官は
2年前になくなったが、その家族とは年賀状のやりとりをしたり、日本に行く友人にお土産を預け
たりして今でも家族ぐるみの関係が続いている。

他の講座の先生方にもお世話になった。指導してもらっただけでなく、多くの資料をコピーさせて
もらったりした。チューターをはじめ、多くの日本人の友人たちにも研究や論文執筆をサポートし
てもらった。

地域の人たちともよい関係を築くことができた。大阪の研修を受けている時には知り合った生け
花の先生の家には大阪に行った時に泊まったりしている。大阪での研修中のプログラムでホームス
テイしたホストファミリーとも今でも連絡をとっている。

J9 大学の近くのお好み焼き屋さんとも家族のような付き合いが続いている。ほんとうに親切な
人達ばかりだった。

I : 私、本当によかった。日本にいる間、いつもたくさんいい日本人に会えました。家族とか、
家族だけじゃなくて、先生たちもみんなが親切。だから、大きな問題が持ってません。だ
から、みんなが本当に。私、ラッキーです。

留学中日本人に手伝ってもらわなければいろいろなことができなかつた。だから、今、研修など
で J9 大学に来る日本人大学院生がいれば家に泊めたりしている。

《留学後》

留学終了後元の勤務先に戻り教鞭をとって二十数年がたった。

日本で買った多くの専門書のほかに、「授業研究」の理論と方法もインドネシアに持ち込んだ。
これは勤務校だけでなく、教育省にとっても日本からの「贈り物」になったと思う。ジャカルタの
教育省と話し合い、インドネシアの全国レベルで授業研究を行うようになった。日本の大学から
スーパーバイザーとして招いた先生が教育省に授業研究を紹介し、教育省が特殊教育学科を持つ大学
に声をかけて、一緒に勉強した。スマトラ、ジャワ、セレベス、ボルネオなど多くの島から参加が
あった。さらに、スーパーバイザーがインドネシア教育省と覚書を交わし、今では教育省によって、
10 以上の地域が参加して夏休みにワークショップを行っている。スーパーバイザーが日本の大学
の先生などと一緒に来て授業研究の理論面をサポートしてくれている。特殊教育学校だけでなく、
各地方の教育課と情報を共有し、研究の実施方法などについての共同プログラムの開発を約 10 年
間続けている。スーパーバイザーは大学を定年退職し今は直接活動には参加していないが、教材の提
供など今も連絡を取り合っている。現在大学の付属養護学校の校長をしているが、養護学校の他の
先生に授業研究について紹介している。多くの人が日本から学んだことを共有するとよりよいと思
う。

帰国後、日本で学んだこと、見たことをインドネシアで応用したいと思った。帰国時に勤務校に
は障害児教育の大学院がなかったため、前述のスーパーバイザーのサポートのもと、学部に大学院

レベルの教育と大学周辺の障害者やその家族へのサポートのために障害児教育研究室を作ることを提案し、実現させた。

I : 私、両親とか呼んで、養護学校の先生たちも呼んで、we have schedule, 例えば1か月二回とか集まって、みんなが勉強します。私も勉強、他の人も勉強になります。あれも日本の先生、support しました。

* : 日本のやり方をインドネシアでやるっていうのは、難しくはないんですか。わりと受け入れやすい。

I : 初めにはもちろん難しい。そして、インドネシアが障害児教育はあまり進まないけど、私は大きな motivation が持っていなければならない、自分だけじゃなくて、国のことのために。もちろん私の力とか、能力とか足りないだから、日本の先生方をお願いします。

今までスーパーバイザーの大学が中心になってこれらの活動を支えてくれたが、スーパーバイザー退職後他の大学との交流も模索中だ。

他の国との教育交流でも日本で学んだやり方を応用している。何年前か日本の先生が企画したJICAの障害児教育研修で、アフガニスタンから20名を約3か月受け入れたこともある。

東京の養護学校とも2年前から交流があり、先生方のI1大学への訪問があった。お互いの現場から学ぶものがあると思う。

《留学を振り返って》

日本の集団意識はいいと思う。多くの友達がアメリカに留学したが、インドネシアに帰った時自分だけが向上したという感じだった。日本ではゼミには大学院生、学部生などがいたが、「みんなと一緒に上手になりなさい」と先生が言ったことを覚えている。この考え方は他の国にはないもので一番いいと思い、インドネシアでも応用している。

後輩、先輩のシステムもいいと思った。

I : 先輩とか後輩とかあるから、必ず、私は後輩にこれは教えてしなければならない。そして後輩も私の先輩はここで何かあげたいと思う。これは他の国にないと思う。

日本はサポートがいいと思うし、安全だ。アジアなのでアメリカやオランダほど文化や考え方の違いも大きくない。奨学金などチャンスがあれば学生たちにも留学してほしい。Iさんの講座を卒業した4名が日本に留学した。

3.2. 考察

1990年代初頭は留学生数も少なく、国費留学生への予備教育などは手厚かったが、留学先の大学での受入体制は十分とは言えない状態だった。Iさんの場合も寮などの設備は伝統的な日本式であったり、ムスリムへの配慮などは全くない状況だった。そのため、日常生活での困難は現在よりも数多くあったことが推察される。

反面、留学生教育に関わる指導教員や周辺の人々が個人的な努力で留学生を手厚くサポートすることが見られた。Iさんの場合も指導教員やその家族から研究・学修面、日常生活面で多くの支援を受けており、留学中・留学後の絆も強い。

J9大学のある地方都市では、同国人はおらずIさんは自ら頼れる友人や支援者を見つけなければならなかった。明るく積極的なIさんは自ら積極的に話しかけることによって、チューター、チュー

ターの友人、寮の職員、ホストファミリー、小学校の校長と、様々な人々を巻き込み、サポートしてもらっていた。「私はラッキー」というIさんの言葉は「ラッキー」にできるIさんの実力を示すものともいえるだろう。

多くの人の支援を受けながらIさんは日本語で修士論文を仕上げ、大学院を無事修了した。帰国後、様々な共同プロジェクトなどを行っているが、留学時とは逆に日本からの来訪者に対してIさんは手厚い支援と協力を行っている。

また、Iさんは留学で得たことに留まらず、新しい研究から得た知見をワークショップ開催などを通してインドネシア国内に広めている。Iさんのライフストーリーは長期にわたる留学成果の結果を見るような内容であった。

第六章 日本語習得と留学評価との関連

第2章から第5章では、「対話的構築主義アプローチ」によって、国内外に在住する元留学生 35名のライフストーリーを「日本留学を経て今ある自分のアイデンティティワーク」として記述し、留学環境や体験は個別的であるものの、日本留学が視野の拡大や自信獲得、専門性の深化など、日本留学が肯定的に評価されていることを示してきた。また、個々のライフストーリーの語りから、日本語習熟度、日本語の学習状況、使用状況、留学後の日本語保持状態への言及に焦点をあて留学評価との関連を考察した結果、海外在住の元留学生の場合、交換留学生と学位取得を目的とする正規留学生とでは、留学評価は質的に大きく異なっていることが判明した。元交換留学生はその多くが日本語専攻で、卒業後日本関連企業に就職するなど日本語能力を活かした職業に就く場合が多く、日本語の上達は日本留学の成果の1つとしてあげられた。それに対し、元大学院留学生は帰国後大学教員として働いており、留学で得たことを自分自身の研究・教育の実践に活用し、学生に伝達している点や、指導教員や研究室内で良好な人間関係を築き、帰国後も教育・研究ネットワークを維持している点が評価されていた。日本語習得に関する評価は専門分野、留学中・留学後の日本語使用状況、日本のコミュニティとの関係などによって多様であった。

そこで、本章では、日本語レベルや留学後の日本語使用環境の観点から、母国の日系企業などで通

訳・翻訳業務に携わる日本語上級レベルの元交換留学生と、研究での使用言語が英語で日本語学習歴が少ない理系博士課程の元留学生の2群に分け、「解釈的客観主義アプローチ」によって、肯定的留学評価の要因と日本語学習及び人的ネットワークとの関連を概念図にし、可視化した。

収集された語りの中から肯定的留学評価の要因と日本語学習及び人的交流との関連に焦点をあて、M-GTA (木下 2003) を用いて分析した。M-GTA は特定の社会現象の相互作用とそのプロセスを分析するのに適しており、現場の状況に合わせた理論を形成できる分析法として近年幅広い分野の研究で用いられている。収集された語りの共通性に着目し、留学後の日本語使用環境の観点から日本語上級レベル (日本語専攻交換留学生) 9名と日本語非保持/入門レベル (大学院博士課程修了者) 4名に分けて、公的留学評価と日本語学習及び人的交流との関連を概念図化した。

分析は木下 (2003) の手順に従って行った。まず、文字化されたインタビューデータから、一つの具体例から他の類似具体例も説明できると考えられる説明概念を生成し、分析ワークシートを作成した。生成された各概念を比較・検討し、概念を精緻化させた。次に、概念と概念の関係を検討し、複数の概念の関係からなるサブカテゴリー、いくつかのサブカテゴリーを包括するカテゴリーを作成した。最後に概念、サブカテゴリー、カテゴリーの相互の関係から分析結果をまとめ、結果図を作成した。

1. 日本語専攻で卒業後日本関連企業で働く元交換留学生の場合

本節では、日本語専攻で大学卒業後母国の日本関連企業で通訳・翻訳業務に携わる元交換留学生 9名を対象とした。出身はタイ 4名、インドネシア 3名、ベトナム 2名 (No.11～19) で、調査時

に JLPT N2 以上を取得済みで、日本関連企業で通訳・翻訳業務に携わっていた。専門の日本語を活かし、高度な日本語能力が求められる職業についている群である。

前章までに示したように、全員の留学評価が肯定的であったため、肯定的評価の要因となる概念を9名のインタビューデータから抽出し、留学中、就職後に分けて概念図にした。

1.1. 分析結果

1.1.1. 結果図の概要

分析の結果、表1のように37の概念が生成され、サブカテゴリリー2つ、カテゴリリー7つに分類された。1サブカテゴリリーのみで形成されるカテゴリリーは「サブカテゴリリー」とせず「カテゴリリー」とした。

表1 生成された概念

肯定的留学評価と日本語習得・人的交流の関連			
	概 念	サブカテゴリリー	カテゴリリー
a1	日本生活への適応	留学当初の困難克服	
a2	留学生向け授業の履修	留学プログラム内の人的交流	人的ネットワークの拡大・深化
a3	日本人向け授業の履修		
a4	教員との良好な関係		
a5	大学等提供の地域交流参加		
a6	留学生の友人		
a7	日本人学生との交友関係の拡大	自発的コミュニティー参加	
a8	地域住民との交流		
a9	地域イベントへの自発的参加		
a10	友人たちとの活動		
a11	サークル活動		
a12	ボランティア活動への参加		
a13	在日同国人の存在	実体験からの学び	
a14	アルバイト先の間人関係		
a15	アルバイトからの学び		
a16	アルバイトでの苦勞		
a17	体験に基づく日本・日本人への好印象		
a18	来日したからこそできた経験	主体的行動・努力	
a19	留学中の学習、努力		
a20	自己評価による上達の実感		
a21	他者評価による上達の実感	日本語上達の実感の拡大	
a22	日本語能力試験による上達の実感		
a23	日本語能力の向上	認識された留学成果	
a24	暗黙の規範の理解・受容		
a25	自信獲得		
a26	視野の拡大		
a27	自己成長		
a28	留学に対する社会的評価		
a29	留学したこと自体の達成感	留学と現在との関連	
a30	留学成果の活用		
a31	人的ネットワークの継続		
a32	日本語学習の継続		
a33	仕事上の苦勞		
a34	仕事上の評価（自己・他者）		
a35	現職への満足		
a36	大学院進学への意欲	新たな挑戦への意欲と努力	
a37	キャリアアップへの努力		

生成された概念は図1のように結果図にまとめた。カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは []、主な概念は () で示した。矢印はカテゴリー、サブカテゴリー、概念間の関係を示している。

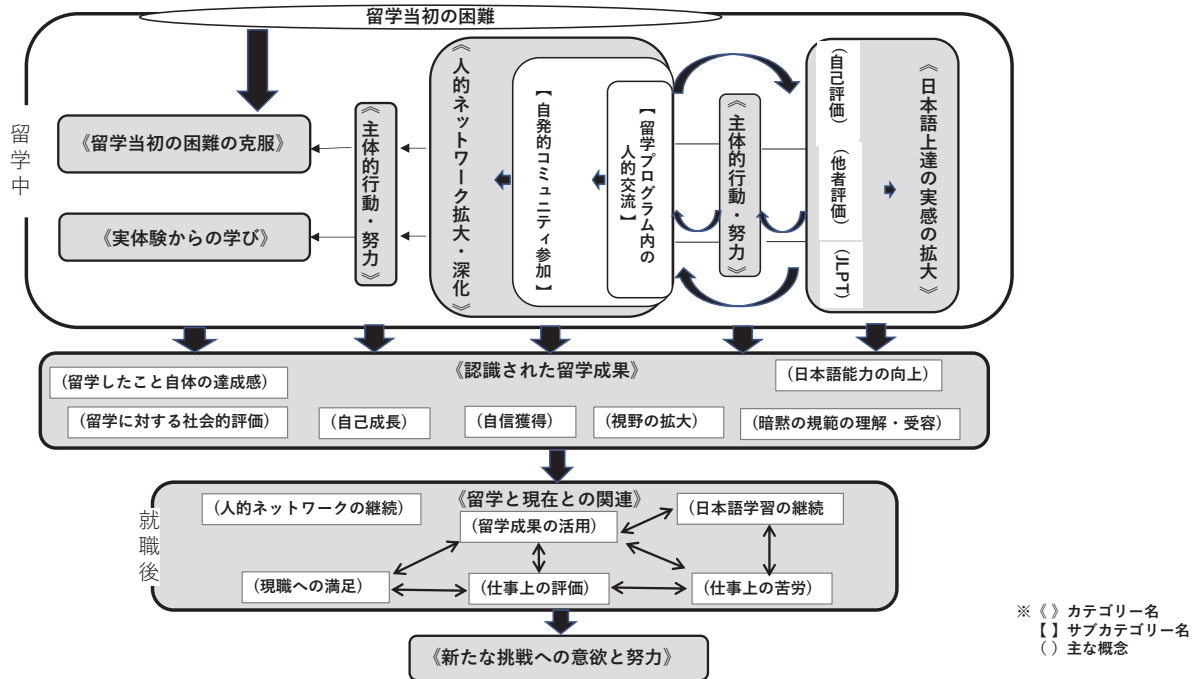


図1 結果図： 肯定的留学評価と日本語習得・人的交流の関連

1.1.2. 結果図の説明

結果図の詳細をカテゴリー、サブカテゴリー内の特徴的な概念や具体例などを示しながら説明する。

(1) 留学中のカテゴリーと認識された留学成果の関係

留学中の肯定的評価に関連するカテゴリーは《留学当初の困難の克服》、《実体験からの学び》、《主体的行動・努力》、《人的ネットワークの拡大・深化》、《日本語上達の実感の拡大》の5つである。留学後その成果として（留学したこと自体への達成感）、（留学に対する社会的評価）、（自己成長）、（自信獲得）、（視野の拡大）、（日本語能力の向上）、（暗黙の規範の理解・受容）の7概念が認識されていた。

留学当初は、全員が日本での生活に様々な困難を感じていた。受入体制の不備に起因する困難、初めての一人暮らしによるホームシック、母国との教育システムの違いへの戸惑い、経済的な苦しさなどに直面した。留学前は日本語で話す機会が少なく、留学当初は日本語でのコミュニケーションでも苦勞も多かった。特に、日本人の対人姿勢が冷たく感じられ、日本人の友人がなかなかできなかったことを全員が指摘していた。

しかし、アルバイトが見つかる、日本語でのコミュニケーションに慣れるなど時間とともに日本の生活への適応が進み、2学期目に入る頃には寮でのイベント、授業でのグループワーク、サークル活動、アルバイトなどを通じて友人も増えてきて、チューターなどの周囲のサポートを得ながら留学当初の困難の多くは解消されていく。その過程においては、自身の学習方法の工夫や「頑張る

しかない」という意識など《主体的行動・努力》、人的ネットワークの拡大を支える日本語の上達が困難克服に寄与していた。

また、日本に来たからこそできた《実体験からの学び》は、(留学自体への達成感)、(暗黙の規範の理解・受容)という成果に大きく関わっている。日本語専攻の9名にとっては目標言語の使われている場所での生活は言語はもとよりそれに付随する文化や考え方などを直接感じ取れる機会として受け止められていた。さらに、日本の暗黙の社会規範や慣習などについて座学では学びにくい多くの気づきを得る場でもあった。特に、アルバイトの経験は、苦労はあったものの学外の人々と直接関わりを持つ機会であり、日本人の就業姿勢や接客態度を理解し、現在の職業に有用な体験として高く評価されていた。また、偶発的な困難についても自力で、もしくは他者のサポートを受けながら克服できたことによる(自信の獲得)(自己成長)も成果の1つとして捉えられていた。全体として留学をやり遂げたこと自体に満足感、達成感を感じ、留学成果として評価されていた。

前述のように、《日本語上達の実感の拡大》と《人的ネットワークの拡大・深化》は困難克服や《実体験からの学び》に関与する重要なカテゴリーである。人的ネットワークは、留学当初は授業や寮のイベント、ホームステイなど留学プログラムが提供する交流に留まっていた。まず授業や寮で行動を共にすることが多い留学生との友人関係が築かれ、次に国際交流イベントなどへの参加によって留学生支援に関心を持つ地域住民へと広がりを見せるが、日本人学生の友人を得るには時間を要していた。アルバイト、日本人向けの授業でのグループ活動などを通じて日本人学生の友人も徐々にできるが、サークル活動やボランティア活動など自発的なコミュニティ参加によって趣味や関心などに共通点を持つ友人を得るには一定の時間が必要であることがわかった。留学中に形成された人的ネットワークは留学終了後もSNSなどによって継続され、お互いに訪問し合うケースも多くみられた。

日本語は日本人とはもとより留学生同士を結ぶ言語として機能していた。次第に、友人の言うことが理解できる、うまく答えられなかったことが答えられる、友人たちの会話に参加していることに気づくといった経験から、日本語の上達を実感していった。また、友人から「上手になった」と評価されたり、チューターによる添削箇所が減ったことから、上達を認識することもあった。留学中のJLPT合格で上達を確認した者もいた。このように自己評価、他者からの評価、JLPTなどの客観的評価を経て、自身の日本語に自信を得、次なる行動へと踏み出して人的ネットワークを拡大していることがわかった。留学期間が留学評価に与える影響を検討した八若(2020)で指摘された「他者との関わりやその評価によって自身の日本語の上達を確認し、日本語の上達が他者との関わりを促進するという経験を繰り返して人的交流が拡大・深化していく循環的過程」が本節の9名にも観察された。(日本語能力の向上)は日本語専攻の者にとって大きな成果とみなされていた。

留学は人生や考え方を変えるようなインパクトのある体験だったとの指摘もあった。教えられたことをうのみにするのではなく「自分で考える」ことの重要性、「世界はインドネシアだけじゃない」など(視野の拡大)も成果として意識されていた。

留学中の体験ではないが、就職活動などで日本に留学したということが高く評価され、有利に働いたという社会的な評価も成果の1つと認識されている。

(2) 就職後：留学と現在との関連

通訳・翻訳業務という高い日本語能力を要求される仕事に就く日本語専攻の元留学生は、仕事で留学を通して得た日本語能力を十二分に活用しており、日本語の上達は留学の成果としては大きな

位置をしめている。また、日本人を顧客とする業務の場合、日本での生活を通して身につけたマナーや就業姿勢は業務上役にたっている。暗黙の社会規範などは留学をしなければ分からなかったと指摘している。「日本事情」などの授業で得た知識や留学自体が接客時の話題となることも多い。専門用語などは難しく、仕事上苦勞も多いが、業務が順調に遂行できるよう継続して日本語学習を続け、日本語能力の維持・向上に努めている。上司から褒められたり、毎日使うことによってより自身の日本語に自信が持てるようになり、全員が現在の仕事につけたことに満足していた。

このように、日本語能力、社会規範への理解、自信など「留学成果」を活用することや社会的評価によって、社会人として働く元留学生の留学に対する「肯定的評価」は留学終了後数年を経て留学時/終了時よりさらに強化されたと考えられる。

留学時の（人的ネットワークの継続）は直接仕事と関係があるという指摘はなかったが、留学中に会った学内外の人々との関係は「日本はふるさと」「もう一つの家族」のようだというように日本への愛着などを強めていると言えるだろう。

以上のように、日本語専攻の元交換留学生は就職後も（日本語能力の向上）をはじめ、暗黙の社会規範を知る、自信獲得などの《認識された留学成果》を十分に活用しており、このことが肯定的な留学評価に繋がったと考えられる。

さらに、多くが現状に満足せず、次のステップに向けて行動していることが判明した。働きながらMBAを取得した者、日本の大学院を目指す者、日本での就職を考えている者などキャリアアップを目指す者が多く、全員が日本語能力の向上のため日本語学習を何等かの形で行っていた。「留学成果」としての認識されてはいなかったが、常に目標を定め挑戦しようと姿勢は留学経験と関連があることが推察される。

日本語専攻の元交換留学生にとっては「日本語」は留学中、就職後ともに生活の根幹をなす重要な存在であることがわかった。

2. 博士課程修了で大学教員となった元留学生の場合

本節では、日本の理系大学院で博士号を取得し母国で教鞭をとるインドネシア人大学教員4名（No.31～34）を対象とする。研究での使用言語は英語で、来日前に入門レベルの日本語学習をしたが、来日後はいずれも正規の授業として日本語学習はせず、補講、ボランティア日本語教室などで勉強したもの、必要に迫られて独学で学習したもの、指導教員の意向で学習しなかったものである。

全員がインドネシアの大学教員で奨学金を得て留学し博士号を取得して元の勤務校で教鞭をとっている。前章までに述べたように全員が留学の成果に満足していた。本節では、肯定的評価に繋がる日本語学習・日本語使用、人的ネットワークに関わる概念を4名のインタビューデータから抽出し、留学中、留学後に分けて概念図にした。

2.1. 分析結果

2.1.1. 結果図の概要

分析の結果、表2のように42の概念が生成され、サブカテゴリリー16つ、カテゴリリー3つに分類された。

表2 生成された概念

	概念	サブ カテゴリー	カテ ゴリー		概念	サブ カテゴリー	カテ ゴリー
a1	奨学金支給までの苦勞	留学当初の 困難	留学中の 日常生活	a23	留学当初のストレス	学修・研究 上の困難	留学中の 学修・研 究
a2	留学当初のコミュニケーション			a24	授業での言語の問題		
a3	日常生活の困難			a25	研究上の困難		
a4	同国人コミュニティあり	a26		指導教員との良好な関係	指導教員と の関係		
a5	同国人コミュニティ (小)	a27		指導教員への不満 (拘束時間)			
a6	同国人コミュニティなし	a28		指導教員への不満 (無理解)			
a7	家族のサポート	家族のサ ポート		a29	英語使用の期待	研究室の状 況	
a8	快適な生活	日本での生 活の良い面		a30	良好な研究室の状況		
a9	日本の安全さ			a31	厳しい研究室の規範		
a10	地域住民のオープンさ	地域住民と の交流		a32	研究成果	留学成果	
a11	地域住民との交流		a33	留学で学んだ精神、姿勢			
a12	子どもの学校との関係		a34	肯定的総合評価			
a13	地域住民との交流なし / 少		a35	留学成果の活用	成果の活用		
a14	日本人の友人作りの難しさ		a36	学生への助言			
a15	日本での出産	想定外ので きごと	a37	留学後の研究交流	人的ネット ワークの継 続		
a16	東日本大震災		a38	留学後の学生交流			
a17	チューター制度などあり	留学生支援 制度	a39	地域ネットワークの継続		留学後	
a18	意思疎通のできる日本人の存在		a40	家族の絆の強化	家族の絆		
a19	英語ができるスタッフ不在			a41	やり残したこと	やりたかつ たこと	
a20	指導教員の意向 (日本語学習不要)	留学中の日 本語学習・ 日本語使用	a42	留学後の日本語学習			
a21	留学中の日本語学習 (ボランティア・補講)						
a22	留学中の日本語使用 (独学、決まったフレーズ)						

生成された概念は図2のように結果図にまとめた。カテゴリーは《》、サブカテゴリーは【】、主な概念は () で示した。矢印はカテゴリー、サブカテゴリー、概念間の関係を示している。

各協力者の置かれた状況は四者四様で個別的であったため、全体としての結果図にはまとめられなかった。各協力者の結果図を示す。

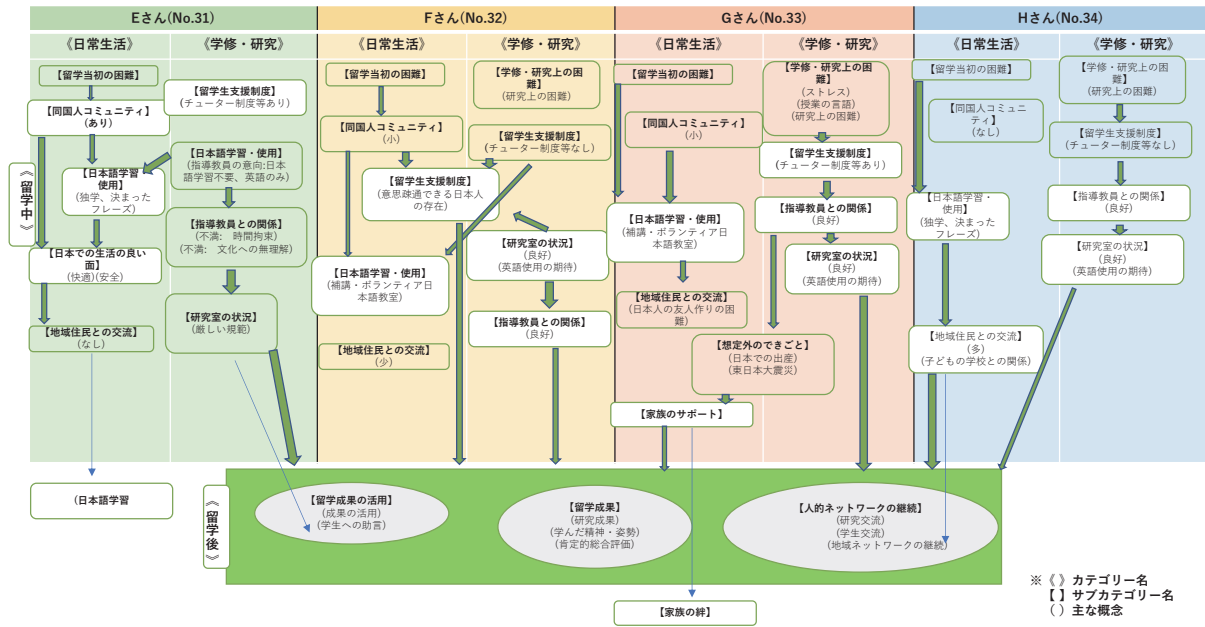


図2 結果図： 肯定的留学評価と日本語学習/使用・人的交流の関係

2.1.2. 結果図の説明

(1) Eさん (No.31) の結果図

Eさんの留学先は International department であったため、研究は英語のみで行われた。研究室では日本人学生も英語でのコミュニケーションが可能であった。【指導教員の意向】として、研究発表は英語で行うので日本語より英語の習得するよう言われ、Eさんとしては日本語を学習したいという気持ちはあったが、断念した。研究については日本語ができなくても支障はなく、順調に研究が進められた。

留学先は地方の大都市で大学の規模も大きく【同国人コミュニティー】があった。銀行口座開設、子どもの学校の手続きなど留学当初の諸手続きはこのコミュニティーが助けてくれた。インドネシアには新参者を助けるという習慣があるためだ。このようにしてEさん自身・家族も日本での生活を円滑に始められた。忘れ物をしても戻ってくるなど（日本人への信頼感）や子どもが公園で遊べる（安全さ）があり、生活は快適であった。《日常生活》で使う日本語も決まった場所で決まったフレーズを使えば問題はなかった。

留学生活を通して大きな問題はなかったが、気を遣ったのは【指導教員との関係】だった。非常に厳しい先生で月曜日から土曜日まで7時から9時まで研究室で研究するのが日常だった。他の研究室が土曜日が休みなのがうらやましかった。家族との時間が少ないことに家族の理解を得るのにも苦労した。指導教員は留学経験がなく日本で教育を受けた「conventional supervisor」だと思う。指導教員が管理する研究室の暗黙の規律について意見をいうのは難しいと感じた。また、母国ですることを同様にして叱責されることもあった。文化の違いへの理解がないように思った。

しかし、その厳しさのおかげで博士号取得も順調にでき、論文発表もするなど満足できる研究成果を収めることができた。インドネシアでの仕事が楽に思えるほどである。また、日本留学を通じて、日本人の労働文化、清潔さ、規律など研究以外でも多くのことを学んだ。（研究成果）だけでなく、これら学んだことを自身の学生に伝えている。指導教員の研究姿勢やピジョンなど尊敬しているが、

自分の学生に留学時の指導教員を選ぶ時は慎重にすること、留学経験のある「global supervisor」を選ぶよう、助言している。指導教員は東南アジアが研究テーマなので、共同研究もしている。学生交流は大学間のプログラムはないので行っていない。

もう一つ残念に思うのは、日本語の勉強ができず話せなかったため、研究室以外の日本人の友人がいないことである。日本での生活はアパートと研究室の往復で学外の人と接する時間さえなかった。(留学後日本語学習)を開始した。日本人の友人ができることを期待している。

(2) Fさん (No.32) の結果図

Fさんが留学した2000年代初頭は地方の中規模大学の留学生支援制度はまだ整っていないと言えなかった。研究室で博士の学生は一人で、大学にはインドネシア人が数人いる程度だった。来日前日本語を少し勉強してきたが、漢字が読めず道の名前や道路標識などがわからなかった。幸い、研究室全体で教員やポスドク、大学院生などがFさんをサポートしてくれた。友達が買い物と一緒に来て漢字を読んだり書いたりしてくれた。授業も英語ができる日本人学生が助けてくれた。ポスドクと研究について議論するのも楽しかった。ゼミは日本人の学生が英語を使うよう、英語で話すことが求められた。

研究は英語で問題なかったが、日常生活には日本語が必要だった。補講や公民館で開かれるボランティア日本語教室で日本語を勉強した。地域住民との接触はこの日本語教室、花見程度であった。

【指導教員との関係】は良好であった。「ここではあなたのお父さん」と言われ、研究だけでなく、うちに招待してもらったり、スキーや旅行に連れて行ってもらったり、指導教員の家族にもよくしてもらった。

研究上では、研究テーマが指導教員と違うことがわかり、研究テーマを変えることを迫られた。妥協して変えると全面的にサポートしてくれた。結果的にはインドネシアでの研究に応用でき、満足している。2年目に国際学術雑誌に論文が掲載され、指導教員に褒められた時はうれしかった。

留学先の大学と出身大学は(学生交流)も盛んである。共同研究も行っている。研究室の友人とも今も連絡を取り合っている。10年ぶりに訪れた日本では変わらぬ風景に感激した。

(3) Gさん (No.33) の結果図

Gさんは奨学金支給を待たずに大学院受験のために来日した。来日から大学院入学までの間指導教員のうちにホームステイした。大学にはインドネシア人留学生は数人いた。

日本語は留学前に少し勉強した程度だった。ホームステイの間は家族と日本語で話したり、通っていた教会に頼んで日本語を教してもらったりした。大学院入学後はボランティア日本語教室や補講で勉強したが、十分とは言えなかった。学部生のいるゼミはほとんど日本語が話され、よくわからなかった。英語の発表abstractをもらうなど配慮してもらった。

【指導教員との関係】は良好だった。よくしてもらっているので期待に答えなければという気持ちがストレスとなった。指導教員や日本人学生と英語で話すことを期待されていたが、母語ではないので、意志疎通がうまくいかないことや議論が深められないこともストレスだった。ゼミで「Gさんの発表を見習うように」と指導教員が学生に指導しているのを聞いて、「自分が貢献できている」と思って、自信がついた。

日本人は親切でいろいろ助けてくれるが、心が通じ合えるような友人をつくることは難しかった。地域住民との交流は少なかった。

Gさんには留学計画の変更を余儀なくされる出来事が2つ起こった。一つは日本での出産である。さらに出産直後に東日本大震災が起これ、帰国するかどうかの選択を迫られた。一旦家族で帰国し

たが、Gさん一人が日本に戻り博士論文を仕上げるという選択をした。母親が子どもと離れることへの回りからの批判もあったが、夫婦のスタイルを貫き、3年間で博士の学位が取得できた。求められていた3本の論文発表ができたことにも満足している。家族の協力があってこそその結果で、家族の絆が深まったと思う。また、研究だけではなく、日本人の考え方や生活スタイルに影響をうけたと思う。

自身の学生たちに留学経験を伝え、留学することを勧めている。所属大学との学生交流や共同研究プロジェクトが多くあり、留学後も交流が続いている。調査の前年にも1年間研究のため日本に滞在した。子どもの小学校でのママ友や先生とのコミュニケーションが楽しかった。調査時も日本語を交えて話すことができた。

(4) Hさん (No.34) の結果図

Hさんが留学したのは地方の中規模の都市だった。大学には中国人留学生はいたが、インドネシア人はHさんが最初だった。(英語が話せる職員)もおらず、留学当初の手続きなどに苦労した。途中から英語ができるチューターをつけてもらえたので、助かった。来日前に習った日本語はあまり役に立たなかった。日本語を習う機関もなく、頼る同国人もいなかった。地域では英語もあまり通じなかった。自分で何とかしなければと思い、google translateなどを使ってコミュニケーションを取りながら、必要な言葉を覚えていった。

幸いなことに、地域の人々は予想外にオープンで、Hさんに関心を示し、サポートしてくれた。団地に住み、住民との接触も多かった。単語を並べて英語を混ぜながらコミニケーションを取っていたが、帰国する頃には日常的な日本語はかなりわかるようになった。

子どもの小学校の先生ともいい関係が築けた。ハラルフードに配慮して給食の代わりにお弁当を持って行くことにしたり、イスラム教徒についての授業をする機会をもらったりした。帰国後も子どもたちとともにFacebookなどで連絡を取り合っている。帰国後も子どもたちと日本語を話したりする。また、子どもたちが日本語を習える機関を探している。

【指導教員との関係】は良好だった。研究用のソフトやコンピューターなどにも配慮してくれ、海外プログラムなどにも参加させてもらった。研究室に子どもを連れて行くことを許可してくれたのも助かった。修士や学部の日本人学生が中心の研究室で、英語で話してほしいという指導教員の意向とはうらはらに日本語で話すことが多かった。日本人学生は子どもたちの面倒もよく見てくれた。

留学を通して得た【留学成果】として、今の仕事のすべてに役立っていると思う。学生たちにも留学の素晴らしさを伝えている。所属大学と留学先の大学には交換留学プログラムや共同研究プロジェクトがあり、毎年のように日本を訪れている。

2.2. まとめ

2.2.1. 学修・研究面での評価

本節の4名の結果図から学修・研究面での肯定的評価の要因について以下のことが判明した。

- (1) 博士課程留学者にとって博士の学位取得及び研究成果が重視され、その結果に満足している。
- (2) 博士課程留学者にとって、研究成果を左右する指導教員との関係が大きな位置を占める。

本節の3名は非常に良い関係を築けているが、1名は指導教員を尊敬しつつもその関係には気を遣っている。

- (3) 研究室の構成員との関係、使用言語、規範などが留学評価に影響を与える。

例えば、Fさんの場合留学生支援制度は整っておらず、同国人も少なく、日本語も十分ではなかったが、研究室の教員、大学院生、ポスドクなどがサポートしており、留学後も続く良い関係が築けている。研究室内で意思疎通が可能な言語があればよい。

- (4) 博士課程修了者は帰国後引き続き共同研究を行う、学生交流を行うなどして交流を継続している。
- (5) 研究成果だけでなく、留学を通して研究姿勢、日本人の考え方、労働文化、規律なども学んだ。その成果は、授業などで活かす、学生に助言するなどして活用されている。

2.2.2. 日本語学習、日本語使用、人的交流と肯定的評価の関係

英語で研究を行う理系の博士課程留学生にとって、「日本語」は主として日常生活で必要とされた。4名の結果図から留学生活において「日本語」が果たす役割を検討した。

- (1) 同国人コミュニティや意思疎通ができる日本人の協力があれば、日本語ができなくても日常生活にはあまり支障はない。
Eさんのように指導教員だけでなく研究室内でも英語で研究ができる環境が整っていて、日常生活では同国人コミュニティからのサポートが得られるという場合は日本語ができなくても問題なく生活がおくれる。
- (2) 日本語が学習したいという意志があるのに学習する機会が与えられない場合は不満となる。日本語を使ったほうが研究以外での人的ネットワークの広がりが大きく、人間関係での満足度が高い。
- (3) 英語が通じない状況など、必要に迫られた場合、日本語でコミュニケーションをとる努力をする。Hさんの場合大学で初めてのインドネシア人留学生で、受入体制が整っておらず、周囲も英語ができなかったため、様々な工夫をしながら日本語でコミュニケーションをとる努力をしている。その結果地域との繋がりは強くなり、帰国後も継続されている。
- (4) 研究以外に日本、日本文化を知りたい、楽しみたいという欲求があり、満たされない場合は研究外での満足度に影響する。

以上のように、理系博士課程留学生にとって、日本語学習・使用は必須ではないが、日本語はホスト国日本での研究以外の生活を豊かにし、人的交流を広げる役割を担っていると見えよう。

おわりに

本報告書の2章から5章では、インタビュー協力者である元留学生を非正規生と正規生に分け、さらにそれぞれ日本在住者、海外在住者に分けて再構成して各協力者のライフストーリーを提示した。さらに、留学後の職業などでゆるやかにグループ化し、考察を加えた。また、未発表のインタビュー協力者5名のライフストーリーを加えた。顕在化しにくい個々の協力者の個別的体験や抱える問題の提示に努めた。

第6章では、日本語専攻で大学卒業後出身国の日本関連企業で通訳・翻訳業務に携わる元交換留学生9名をとりあげ、留学評価と日本語学習との関連を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下2003、以下M-GTA）を用いて概念図化した。さらに、留学中の使用言語が英語で日本語学習歴がほとんどない博士後期課程の元留学生4名についても同様に概念図化を試みた。これらの2群では、留学中・留学後の日本語学習・日本語使用が果たす役割に大きな違いがあることが判明した。

これらの結果に基づき、最後に日本語教育、留学生教育に対するいくつかの提案をし、今後の課題を述べたい。

- (1) 以上見てきたように留学生が抱える問題は個別的で多様であるため、支援体制は多層的である必要がある。しかし、その窓口はアクセスが簡単であることが求められる。支援窓口となる機関は多層的なネットワークを持ち、そこを起点として適切な人・機関に繋ぐ役割を果たさなければならない。
- (2) 留学生日本語教育は教室内に留まらず、学習者が多様なコミュニティに自発的に参加できるきっかけを提供する工夫をする必要がある。
- (3) 研究・学修面で日本語を必要としない留学生に対しても、本人が希望するならば日本語学習ができる環境と指導教員などの理解が必要である。
- (4) 日本人の対人姿勢が冷たい、日本人の友人ができないという声が多く聞かれた。母国での「友人感」とのギャップがあることも考えられるが、多様な背景を持つ他者とどう接するか、「国民性」などの言葉に留めずホスト国日本側の姿勢を問い直す必要がある。

本研究では、35名の元留学生のライフストーリーを提示し、留学の意義と日本語習得の関連を探り、肯定的な評価が得られた。しかし、インタビュー協力者を卒業生や知り合いのネットワークを通じて募ったが、インタビューに応じてくれる協力者は「語ってもいい」もしくは「語りたい」という意志の持ち主で、否定的な評価をするものはインタビューに通常応じないということが考えられる。肯定的評価に安堵せず、否定的評価の持ち主の声にも耳を傾けなければならないだろう。

また、本研究の協力者は、主として東南アジア・西アジアなど非漢字圏の元交換留学生、奨学金を得て大学院留学したインドネシアの大学教員であった。留学生の大半を占める中国の留学生、私費留学生、学部留学生についても同様に調査する必要があると考える。今後の課題としたい。

引用文献

- 有川友子 (2016) 『日本留学のエスノグラフィー—インドネシア人留学生の20年』 大阪大学出版.
- 池田庸子 (2011) 「海外留学の意義とメリットを考える—海外留学によって何が得られるか」 ウェブマガジン 留学交流 7月号.
- 池田庸子 (2014) 「海外留学に対するイメージ及び意識の変化—韓国語学研修参加者の場合—」 茨城大学留学生センター紀要 12号, 15-28.
- 池田庸子 (2015a) 「海外留学に関する意識の変化—2004年度から2014年度までのアンケート調査の結果から—」 茨城大学留学生センター紀要 13号, 15-30.
- 池田庸子 (2015b) 「短期英語研修参加者の海外留学に対するイメージ及び意識の変化」 茨城大学留学生センター紀要 13号, 47-60.
- 池田庸子・八若壽美子 (2016) 「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」 茨城大学留学生センター紀要 14号, 49-66.
- 池田庸子・八若壽美子 (2017) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—出身国の大学教員の場合—」 茨城大学留学生センター紀要 15号, 13-28.
- 池田庸子 (2018) 「元留学生のライフストーリーにみる留学評価—研究者夫婦の場合—」 茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 1, 45-55.
- 池田庸子 (2019) 「元日本留学生のライフストーリーにみる留学評価—交換留学から英語教育の道へ—」 茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 2, 47-58.
- 大河原尚 (2008) 「短期交換留学生生活アンケート調査報告」 別科日本語教育: 大東文化大学別科論集 9, 142-156.
- 奥山和子 (2017) 「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス—質的研究法を使って—」 神戸大学 大学教育推進機構大学教育研究 25, 83-101.
- 川上郁雄他 (2011) 「『移動するこどもたち』は大学で日本語をどのように学んでいるのか—複数言語環境で成長した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに—」 早稲田教育評論第 25 巻 1 号, 57-69.
- 川上郁雄 (2014) 「あなたはライフストーリーで何を語るのか—日本語教育におけるライフストーリー研究の意味」 『リテラシー』 14, 11-27.
- 川上尚恵・齊藤美穂・朴秀娟・高梨信乃 (2021) 「海外の大学で教える非母語話者日本語教師が必要とするもの: 非母語話者の特性を考慮した日本語教師養成プログラムの構築に向けて」 神戸大学留学生教育研究 5, 1-21.
- 河路由佳 (2014) 「学習者・教師の〈語り〉を聞くということ」 『リテラシー』 14, 29-44.
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』 弘文堂.
- 久野弓枝 (2017) 「中国人編入留学生のキャリア形成に関するライフストーリー研究 (3) —トランジションと agency に着目して—」 札幌大学総合論叢 44, 61-7.
- 国際交流基金 (2020) 『海外の日本語教育の現状 2018 年度 日本語教育機関調査より』 国際交流基金小山晶子 (2016) 「留学先としての日本の可能性拡大に向けて—交換留学の経験が帰国後の学業と就業へ及ぼす影響について—」 名古屋大学国際教育交流センター紀要第 2 号, 19-23.
- 近藤裕美子・村中雅子 (2010) 「日本のポップカルチャー・ファンは潜在的日本語学習者といえるか」 『国際交流基金日本語教育紀要』 6, 7-21.
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』 弘文堂.
- 桜井厚・小林多寿子 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー質的研究入門』 せりか書房.
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察—元留学生のライフストーリーから—」 早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会 11, 318-327.
- 佐藤由利子 (2010) 『日本の留学生政策の評価—人材養成, 友好促進, 経済効果の視点から』, 東信堂.
- 佐藤由利子 (2019) 「人材ニーズの高度化と日本留学生の役割と変化—タイを事例として—」 『広島大学高等教育研究開発センター大学論集』 第 51 集, 95-109.
- 島津百代 (2016) 「日本語「ノンネイティブ」教師の専門性とアイデンティティに関する—考察—」 関西大学外国語学部紀要 14, 33-46.
- 杉村佳彦 (2019) 「外国人日本語教師のライフストーリー, 日本への留学経験がもたらす恩恵を語る」 九州地区大学教育研究協議会発表論文集 68, 207-214.
- 総務省 (2017) 「グローバル人材育成の推進に関する政策評価<結果に基づく勧告参考資料>」 https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/107317_00009.html
- 嶽肩志江・坪根由香里・小澤伊久美・八田直美 (2012) 「PAC 分析と質問紙調査併用によるビリーフ研究: あるタイ人日本語教師の事例より」 横浜国立大学留学生センター教育研究論集 20, 93-114.
- 田中京子 (2014) 「日本留学の長期的成果—第三国に住むラテンアメリカ出身者の場合—」 名古屋大学国際教育交流センター紀要創刊号, 5-11.
- 中山亜紀子 (2007) 「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴: 『自分らしさ』という視点から」 『阪大日本語研究』 19, 97-127.
- 中山亜紀子 (2011) 「学部留学生対象の日本語教育を考える—中国人男子学生のライフストーリーを通して—」 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 3, 78-85.

- 八若壽美子・藤原智栄美 (2013) 「留学生支援としての新入学部留学生個人面談—4年間の面談結果の分析—」茨城大学留学生センター紀要 11号, 63-79.
- 八若壽美子 (2014) 「多層的ピア・サポートシステムの構築—留学生支援の枠を超えて—」茨城大学留学生センター紀要 12号, 41-53.
- 八若壽美子 (2015) 「留学交流室チューターの活動自己評価」茨城大学留学生センター紀要 13号, 31-46.
- 八若壽美子 (2018) 「インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る留学評価」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 1, 29-45.
- 八若壽美子 (2019) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—家族と日本で生活する元留学生の場合—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 2, 29-46.
- 八若壽美子 (2020) 「再来日した元交換留学生のライフストーリー—支援される側から支援する側へ—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 3, 29-43.
- 八若壽美子 「タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価—留学期間による比較」2020年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 364-369.
- 八若壽美子・小林英弘 (2021) 「タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価—翻訳・通訳業務従事者の場合—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 4, 119-136.
- 八若壽美子・Susi Widianti (2021) 「元留学生の日本留学評価—インドネシアの大学教員の場合—」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 4, 137-153.
- 八若壽美子 (2022) 「ベトナムの企業で働く元交換留学生の留学評価」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 5.
- 八若壽美子 (2022) 「ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生の留学評価」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 5.
- 堀井恵子 (2011) 「留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育のシラバス構築のための調査研究：ベトナム ハノイの日系企業などへのインタビューからの考察」武蔵野大学文学部紀要 12, 74-61.
- 三代順平 (2009) 「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から」早稲田日本語教育学 6, 1-14.
- 三代純平 (2011) 「日本語能力から『場』の議論へ—留学生のライフストーリー研究から—」『早稲田日本語教育学』第9号 67-72
- 三代順平 (2015) 「日本語教育学としてのライフストーリーを問う」『日本語教育学としてのライフストーリー』くろしお出版, 1-22.
- 吉野文 (2017) 「短期交換留学プログラム参加者に対するフォローアップ調査—日本語を専攻する中国の元交換留学生へのインタビュー調査—」国際教育, 第10号, 49-63.
- Dwyer, M. M. (2004) . More Is Better: The Impact of Study Abroad Program Duration. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10(1), 151-164.
- Engle, L. & Engle, J. (2004) Assessing language acquisition and intercultural sensitivity development in relation to study abroad program design. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10 (1), 219-236.

■ポスター発表：ポスター

1. ヴェネチア 2018 年日本語教育国際研究大会 (2018.8.4)

元交換留学生のライフストーリーに見る 日本留学の意義

八若壽美子・池田庸子 (茨城大学)

研究概要

目的: 元交換留学生のライフストーリーから、交換留学の意義とその後の人生への影響を日本語学習と人的交流に焦点をあてて探る。

対象: 元交換留学生

- ・約1年間日本に交換留学
- ・帰国後2~4年経過
- ・インドネシア人3名とアメリカ人2名
- ・日本語専攻または副専攻

アメリカ人元留学生

調査対象者A

略歴: 大学を卒業後、日本の民間英会話学校の英語教師となる

きっかけ: 日本との出会いは中学の時のゲーム。アメリカのゲームとは違うことに気付き、日本のアニメにも興味を持つようになる。

留学前: 日本語は「趣味として」独学で始め、大学でも授業を取り始める。ほかのアメリカ人にとっては全く未知の言語であること、知らない人に新しい情報を伝えることの面白さに気付く。

留学中: 日本語に自信がなかったが、サークル活動(吹奏楽)に参加して多くの日本人学生と話すようになり、日本語が上達したと感じる。

帰国後: アメリカに住む日本人駐在員の子供に英語を教え、教えることが楽しいと感じ、日本で英語教師としての就職を志す。

振り返って: 結果的に日本留学がきっかけとなって、自分が以前から好きだった音楽活動を再開でき、教えることに出会えたことができた。

調査対象者B

略歴: 大学を卒業後、日本の公立中学でITとして勤務

きっかけ: 子供の時から日本のアニメを見て日本の文化に興味を持つ。大学に入りネット等の独学から始め、日本語の授業を履修

留学中: アメリカのキャンパス生活はつまらなかったが、日本では韓国・ドイツ・日本など様々な国の人と出会い、楽しかった。一方で、多くの留学生はもっと日本語ができたため、留学中はずっと自信がもてなかった。

帰国後: アメリカに住む日本人駐在員の子供に英語を教えていた際、家族と日本語で話すことで、日本語に自信をつける。日本での就職を志す。

振り返って: 「本当によかった。ラッキー。留学したからたくさんチャンスがみつかりました。」

AとBのまとめ

- ・日本語に自信も持ったきっかけは家庭教師や吹奏楽などの授業外の部分
- ・留学経験で視野や人間関係が広がり、人生の大きな転機になったと評価しており、留学のよさを周囲の友人や生徒たちに伝えようとしている。
- ・現在、日本語ができることで積極的に職場や地域等の日本人コミュニティとの交流を持つようになり、良好な人間関係を築いている。
- ・友人関係では、英語が話せるからという理由で友達になりたいと思う日本人学生がいる。友人ができてよかった反面、共通の趣味(音楽)でつながれる友人ができたことに満足感を覚えている。

全体のまとめ

◎交換留学の意義

約1年間の留学でも大きな影響:

- ・日本理解、日本語力の向上など → 仕事での活用へ
- ・自己成長(自信、視野の拡大など)
- ・人脈の拡大
- ・次のステップへのきっかけ

◎留学時の課題点

- ・日本人の対人姿勢(友人作り等)
- ・経済的支援等の受入体制

◎今後の課題

- ・履修対象の拡大(留学期間、専攻、日本語力の異なる対象)

インドネシア人元留学生

調査対象者C

略歴: 大学卒業後、自国の日系企業に勤務。

きっかけ: 中学の時日本の音楽に関心をもち、高校で日本語選択。高校の先生の勧めで日本語学科に進学。3年修了時に交換留学。

留学中: 奨学金を受けられなかったため、複数のアルバイトを経験。アルバイトを優先して取れなかった授業があること、期待に反して日本人の友人があまりできなかったことを残念に思う。

帰国後: 会話スキルの上達を実感。就職時にも日本語や留学経験が評価され、現在の仕事にも活かされている。使う日本語が限定されているので、日本語力の低下を懸念している。

振り返って: 留学中何でも自分でやったことが自信につながった。学べるのは日本語だけではなく、生活のことも多く学んだ。世界はインドネシアだけではないという感じがあった。

調査対象者D

略歴: 大学卒業後、自国の日系企業に勤務

きっかけ: 高校の時日本の漫画やドラマを通して日本語に興味を持つ。大学入試で合格した日本語学科に入学。奨学金を得て4年次に留学。

留学前: 自分の日本語能力と人見知りの性格が不安

留学中: 多くはないが、チューターや日本人学生、留学生の友人などと良好な関係を築く。カフェでアルバイトを経験。周りに流されず、自分の意思を通して勉強し日本ではできないことをもつとすべかったという後悔が残った。

帰国後: 就職した日系企業で日本人スタッフとの日常会話などで日本語力が活かされている。奨学金を得て日本の大学院への留学が決定したため、退職する予定。日本語教師を目指す。

振り返って: 日本語を教えるうえで、日本という環境に身を置いた経験は説得力を持つと思う。

調査対象者E

略歴: 大学卒業後、自国で通訳、日本語教師を経て、大学院に進学。フリーランスで通訳・翻訳も。

きっかけ: 高校の時日本のお笑い番組を通して日本語に関心を持つ。通学の利便性や学費を考えて出身地の大学の日本語学科に進学。2年次修了時交換留学。

留学前: 留学への期待の大きさを不安はまったくなかった。

留学中: 授業ではコミュニケーションの練習に重点を置き、素で能力試験の問題集などをじっくり勉強した。80%の力を勉強に注いだ。奨学金を得たが、社会体験としてアルバイトを経験。一般的に日本人の対人姿勢に冷たさを感じた。

振り返って: 印象深いのはチューター、日本人学生、地域の人、世界中からの留学生など広い人脈に出会えたこと。日本に新しい家族ができたような感じで、今も交流が続く。

日本語は自分の強み。留学で自国では学べない自然さやニュアンスが学べた。留学経験を最大限に活かしたい。

C,D,Eのまとめ

- ・留学評価は、自身の性格、経済状況、出会った人々、大学の受入体制など環境の影響を受けて、3人3様に展開している。
- ・留学経験は、日本語の上達だけでなく、自信を得、視野を広げる経験として高く評価され、現在の仕事にも活かされている。
- ・日本人学生の友人作りに難しさを感じた。
- ・日本の大学院を目指すきっかけになった。

【付記】

本研究は平成29年~平成32年富岡科学研究奨励金助成研究(C)(研究番号:17K02829) 研究代表者:八若壽美子による研究成果の一部である。

【参考文献】

- 池田庸子・八若壽美子, (2016)「日本から元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター』14号, 49-66.
- 池田庸子・八若壽美子, (2017)「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—出立国・大学専攻・帰国後の進路—」『茨城大学留学生センター』15号, 13-28.
- 池田庸子, (2015)「留学先としての日本の可能性を探る—交換留学の経験が帰国後の学業・就職・生活に与える影響について—」『茨城大学国際教育交流センター』研究報告, 19-23.
- 付野, (2012)『ライフストーリー—語学・文化・生活—』(2013)「留学経験の継続と自己実現についての考察—元留学生のライフストーリーから—」『茨城大学国際教育交流センター』12号, 5-11.
- 田中宗子, (2014)「日本留学の異文化体験—第三国(韓国)出身者からの視点—」『茨城大学国際教育交流センター』12号, 5-11.
- 高野文, (2017)「帰国交換留学プログラムの効果に対するメタ分析調査—日本語を専攻する中国の元交換留学生へのインタビュー調査—」『国際教育』10号, 49-63.

2. JALT Study Abroad SIG Online Conference 2020 (2020.9.26 オンライン開催)

インドネシアの理系大学教員のライフストーリーに見る日本留学評価

八苺美子(茨城大学) 池田庸子(茨城大学) Widianti Susi(インドネシア教育大学)

- ◎研究の目的 ①個々の元留学生が日本留学をどのように評価しているかを明らかにする。
- ②研究での使用言語が英語の場合、日本語学習及び日本語使用状況がどのように留学評価に関連するかを明らかにする。
- ◎研究方法
 - ・ライフストーリー・インタビュー(使用言語:主として英語)を日本語学習、コミュニケーション、人間関係を中心に分析
 - ・調査対象: インドネシア人理系大学教員4名
 - インドネシアの大学教員⇒博士の学位取得のため日本留学(約3年半・奨学金支給3年/3年半)⇒元の勤務校に復帰(5~14年経過)

※ □:元留学生のコメント、▭:協定のコメント、🗨️:指導教員の言葉、👤:キーワード

	Aさん (X大学)	Bさん (Y大学)	Cさん (Y大学)	Dさん (Z大学)
日常生活・人間関係	◎単身 妻・子供2人 【半年】 【3年】 同国人コミュニティの協力で困ることはあまりなかった。日本語ができるインドネシア人は別のコミュニティに。 ◎インドネシア人コミュニティあり	◎単身 【3年半】 ◎地域の人と野球をしたり、研究室の友人をバドミントンやボーリングをしたりした。 ◎夫が日本に来た時、友人が大阪や京都と一緒に連れてくれた。	◎単身 夫+出産 【1年3か月】 【1年】 東日本大震災⇒帰国 【3か月】 夫・子供と再来日 【3か月】 【半年】 日本人は親切でいろいろ助けてくれたが、心が通じる友人をつくるのは難しかった。 ◎インドネシア人留学生は少ない	◎単身 夫・子供2人 【半年】 【3年】 英語が話せる職員がおらず、手続等に苦労した。英語ができるチューターをつけてもらって助かった。 予想に反して、人々がとてもオープンなことに驚いた。
日本語学習・使用	◎来日前: ひらがな・カタカナ、簡単な会話を学習 日常生活では、決まった所で決まったことを言えばよいので、来日後数か月で問題なくなった。 研究の発表は英語。日本語を勉強するより英語の習得を。	◎来日前: ひらがな・カタカナ、簡単な会話を学習 道路標識など漢字が読めなくて困った。友人や多くの人に助けてもらった。 日本人学生の英語がうまくなるから英語で話してもいい。	◎来日前:約1か月学習 ◎大学院入試~入学まで指導教員宅にホームステイ:家族とは日本語で話す。ひらがな・カタカナは絵本等で学習。 ◎教会で日本語学習(自分で読む) ◎国際交流協会の日本語教室、活動に積極的に参加。 ◎マタニティクラスの日本語はほぼ理解できた。	◎来日前:ひらがな・カタカナ、簡単な会話を学習 習った日本語は全然役に立たない。 ◎地域で英語が通じない。Google translateでコミュニケーション ◎隣人、子供の学校の先生とは単語を並べたり、日・英混ぜて話す。 帰る頃には日常的な日本語はわかるようになった。
指導教員	◎指導教員との関係に気を遣った。 指導教員には"conventional"と"global"の2タイプがあると思う。自分の指導教員は日本で教育を受けた伝統的なタイプ。研究室の運営に権限を持っていて、従わなければならないと感じた。	◎指導教員とは良好な関係。 私はここではあなたのお父さんです。 ◎うちに招待してもらったり、指導教員の家族にもよくしてもらった。	◎指導教員は親切でよくしてくれた。 なんとかなる。 日本語ができず英語も母語でないので意思疎通がうまくできないことが辛かった。議論が深めるのに言葉が障害。自分ができていることを示せないのにストレスを感じた。	◎指導教員との関係は良好。 ◎研究用のソフトやコンピュータ等にも配慮してくれた。 ◎カナダ留学経験者で英語が堪能。 指導教員は日本人学生に英語を話させようとしたが、日本人学生は話したがいなかった。
研究・学修	◎International departmentなので、研究室では日本人学生も英語。 ◎月~土曜7時~9時ごろまで研究室で研究。研究室とアパートの往復の生活。 土曜日が休みの友人がうらやましい。日曜日だけが家族との時間。 ◎留学中に論文発表多数	◎研究したいことと研究室での研究内容が異なっていた。 研究内容を変えれば全面的に支援。 妥協した。分析法は同じでよかった。結果的にはインドネシアでも応用。	◎Cさんの発表を見習うように。英語の発表の前はCさんと練習するように。 自分が貢献できて信頼されていると感じて嬉しかった。自信がわいた。 論文発表を期待されていた大変だった。最終年は震災の影響で、大変だった。 ◎求められていた3本の論文発表	◎研究室の修士・学部生は全員日本人で、日本語で話す。 ◎研究室に子供を連れて行くと、日本人学生が遊んでくれた。 研究室に子供を連れて行くことを認めてもらえたことに感謝している。
留学後	◎論文発表に問題なし ◎指導教員と共同研究	◎Y大学とは学生交流や共同研究	◎研究・教育面で日本と強いつながりを持って連携している。	◎Z市と共同研究プログラム ◎2週間と半年の交換留学プログラムで学生をZ大学に送っている。
評価	日本の文化から規律や他者への心遣いを学んだ。 日本での生活は貴重な経験で、素晴らしい時間だった。日本の労働文化、清潔さ、規律、ビジョン、日本人が「夢」の追求にどのように時間を犠牲にするかを学んだ。 学生への助言:"global supervisor"を選ぶべき。	全体を振り返って日本での生活はよかった。日本で学んだことを今の研究に活用できる。	3年間で博士の学位がとれたことに満足している。「なんとかなった。」 日本人を尊敬するし、その考え方や生活スタイルに影響を受けた。 学生に留学経験を伝えられる。海外に留学することを勧められる。	留学経験は、今の仕事のすべてに役立っている。日本は第二の故郷。 東京の大学でなく、Z大学でよかった。知識だけでなく、多くの経験を得た。 学生に「どうしたら日本に留学できるか」聞かれる。学生は日本留学経験者が他と比べて"hard worker"であることを知っている。
交流・心残り等	やりたかったけどできなかったことの1つは「運転免許」。車で家族といういるなところに行きたかった。もう一つは研究以外の日本人の友人をたくさん作りたいかった。 ⇒今日本語を勉強している。	◎日本の友人とは今も連絡をとっている。 ◎10年後に再来日。 10年間でインドネシアはずごく変わったが、日本はあまり変わっていなかった。	一人で日本に戻った時(母国で)批判もあったが、私たちが夫婦のスタイルを貫くことができた。 日本文化に関することも勉強したが、時間がなかった。 ◎前年1年間研究のため日本に滞在。 子供は日本の小学校に。ママ友や先生とコミュニケーションが楽しかった。	◎子供の先生ともFacebookで連絡を取り合っている。 ◎子供たちと時々日本語で話す。 ⇒子供の日本語教室を探している。

- 【研究・学修の評価】
- 留学中の研究成果に満足している。
 - 博士課程の留学では指導教員との関係が重要な位置を占めている。
 - 留学終了後も共同研究や学生交流で留学先との交流が続いている。
 - 知識だけでなく、経験を通して、日本人の考え方、労働文化・姿勢、規律等、多くのことを学んだ。

- 【日本語学習・使用、人間関係と評価との関連】
- 同国人コミュニティや意思疎通のできる日本人の協力があれば、日本語ができなくても日常生活はあまり問題はなく、評価に影響はない。
 - 英語が通じない状況等必要に迫られた場合、日本語でコミュニケーションをとるための努力をする。
 - 日本語を使ったほうが研究外での人間関係の広がりは大きく、人間関係での満足度が高まる。
 - 研究以外に日本、日本人、日本文化を知りたい、楽しみたいという欲求があり、満たされるか否かが研究外での満足度に影響する。

※1.本研究は平成29年~令和2年度科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号17K02839研究代表者:八苺美子)による研究成果の一部である。
2.本研究の調査は令和元年東日本茨城大学サティカル制度の支援を受けて行われた。
JALT Study Abroad SIG Online Conference 2020 Saturday, September 26, 2020

3. 日本語教育学会秋季大会 (2020.11.29 オンライン開催)

タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価 — 留学期間による比較 —

発表者 八若壽美子 茨城大学 共同研究者 小林英弘 チュラロンコン大学

◆ 研究の背景 ◆

- 多様化する大学間交流協定に **基準未満の短期留学**
⇒ 短期間であっても人生に大きな影響を与える経験として評価
- 留学期間の影響に関する先行研究
・日本人学生の留学総務省(2017)
企業への割が「グローバル人材」として求められる能力の涵養という面で **6か月以上の留学期間が必要**と回答
- アメリカの大学からフランスの大学留学(Engle & Engle 2004)
1学期間より **年間留学者のほうが外国語運用能力が向上**
- Institute for the International Education of Stud 組織の留学参加者(Dwyer 2004)
1年間の留学のほうが持続性のあるインパルスを与える

日本留学の場合

◆ 研究目的 ◆

- 1学期間と学期間留学経験者の留学評価を比較することによって **留学期間が留学成果と自己評価に与える影響**を検証する。

◆ 研究方法 ◆

- 調査概要
- 対象 日本語専攻でタイの日系企業で働く元交換留学生(1学期留学者名、2学期留学者名) 留学終了後半年~8年経過
- 方法 ライフストーリー・インタビュー
- 分析方法
- 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(英GTA)

表1 調査協力者の概要

調査協力者	A群(1学期間留学)			B群(2学期間留学)				
	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん
大学での日本語学習	X大学ビジネス日本語科(タイ)							
交換留学(日本語学習)	Y大学(中級前半)			Y大学(中級前半→中級後半)※Eさんは2学期間中級前半				
卒業直後の進路	外資企業	日系企業	日系企業	日系企業	日系企業	家業手伝	日系企業	日系企業
転職	日系2回	日系2回	無	日系1回	日系2回	日系1回	日系2回	日系2回
現職場での日本語使用	低	低	高	高	主として通訳・翻訳業務			
日本語能力試験	無	N3	N3	N3	N2	N2	N2	N2

● B群のほうが調査時点での日本語能力及び日本使用頻度が高い傾向 違いの要因は

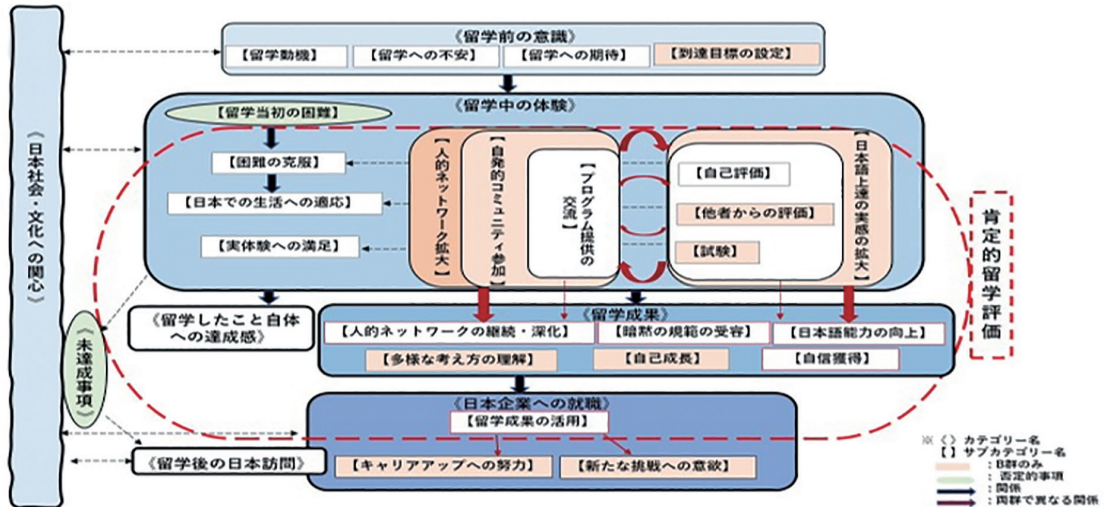


図1 結果図 留学評価と日本語習得・人的交流の関連

◆ 分析結果 ◆

- 結果図 89の概念、24のサブカテゴリー、8つのカテゴリー
- 両群ともに肯定的な留学評価
 - 留学当初の困難、未達成事項以外は肯定的発言。
 - 留学したこと自体に満足感・達成感を感じている。
 - 人的ネットワークの継続・暗黙の社会規範の受容 日本語能力の向上 自信獲得を留学成果としてあげている。
 - 留学終了後、留学で身に着けた日本語能力やマナー・就業態度などの社会規範など留学成果を活用している。
- 2群の違い
 - 《留学中の体験》 人的ネットワークと【日本語上達の実感の拡大】の循環的過程
A群: チューターやホストファミリーなどプログラム提供の人的ネットワークに留まる。帰国後SNSで一部関係を継続。
B群: アルバイトやサークル活動など自発的コミュニティ参加によるネットワークの拡大。帰国後双方が訪問し合うなど関係の継続と深化。
 - 《日本企業への就職》
B群: 就職後も同様の循環的過程が見られる。(専門用語習得、通訳技術等キャリアアップの努力や挑戦)受験、MBA取得等
 - 《人的ネットワークの拡大》【日本語上達の実感の拡大】の循環的過程に留学期間が関与
 - 教育的示唆 自発的コミュニティ参加の促す機会提供等の必要性

【参考文献】

(1) 木下康仁(2003)『グラウンデッドセオリーアプローチの実用』文堂
 (2) 総務省(2017)「グローバル人材育成の推進に関する政策評価」結果に基づく勧告 https://www.soumu.go.jp/menu_news/news_0731700009.html
 (3) Dwyer, M. M. (2004) More Is Better: The Impact of Study Abroad Program Duration Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad, 10(1), 151-164
 (4) Engle, L. & Engle, J. (2004) Assessing language acquisition and intercultural sensitivity development in relation to study abroad program design Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad, 10(1), 219-236

2020年度日本語教育学会秋季大会 (オンライン開催, 2020.11.29) ポスター発表④

※本研究は平成29年~令和2年度科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号17K02839 研究代表者:八若壽美子)による研究成果の一部である。調査は茨城大学リハビリテーション学部(2019年度)の支援を受けて行われた。

■インタビュー項目：

・留学前：

留学したいと思った動機やきっかけ/どうやって日本語を学んだか/〇〇大学を選んだ理由/
留学前の不安・期待していたこと

・留学中：

来日時の様子/期待していたこととの違い/留学生としての生活（勉学・日常生活・友人関係）/
印象に残っているエピソード/先生・クラスメートとの関係/地域の人との交流/日本語学習
について（授業中・授業外）/自身の日本語に対する意識/日本語上達の実感

・帰国後：

国で就職することを決めた理由/仕事について/日本語に対する意識/仕事で留学経験が役に
立ったこと

・全体：

自身の日本留学経験をどう評価するか/やってよかったこと、やればよかったこと/現在の生
活との関連

※インタビュー協力者の属性などによってインタビュー項目は一部異なる。

(研究協力者：小林英弘 Widiанти Susi)